

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 7

上ノ台館跡（2次調査）
中室内遺跡（1・2次調査）
日照田遺跡
館ノ前遺跡

2019年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財團
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 7

かみ の だいたてあと
上ノ台館跡（2次調査）

なかむろうち
中室内遺跡（1・2次調査）

ひ でり だ
日照田遺跡

たて の まち
館ノ前遺跡

序 文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めております。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、東日本大震災からの被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた相馬山上IC～靈山IC間を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、新発見のものを含む埋蔵文化財包蔵地が数多くあり、先人の貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認された埋蔵文化財の保護・保存について開発機関と協議を重ね、遺跡の範囲や性格を確かめるための分布調査を行った結果をもとに、現状保存の困難な埋蔵文化財については記録として保存することとし、平成25年度から本発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(靈山～福島)の建設に伴い、平成29年度に行つた伊達市靈山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(2次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(1次調査)、桑折町松原地区に所在する日照田遺跡・館ノ前遺跡、平成30年度に行つた伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(2次調査)の本発掘調査の成果をまとめたものです。この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、本発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、桑折町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(靈山～福島)の建設に伴い、平成29年度に本発掘調査を行った伊達市靈山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(2次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(1次調査)、桑折町松原地区に所在する日照田遺跡・館ノ前遺跡、平成30年度に本発掘調査を行った伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(2次調査)の調査成果をまとめたものです。

上ノ台館跡(2次調査)では、中世の建物跡及び柵列や堀の跡を確認しました。

中室内遺跡(1・2次調査)では、古墳時代前期の集落跡、堀跡で区画された中世の屋敷跡が確認され、当該地域にとって貴重な成果を得ることが出来ました。

日照田遺跡では、縄文時代の落し穴や中世の建物跡が見つかり、流路跡からは平安時代の土師器・須恵器が多く出土しました。

館ノ前遺跡では、縄文時代の落し穴が見つかり、縄文時代の狩猟の場であったことがわかりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査に御協力いただきました国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市、桑折町ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団
理事長 杉 昭 重

緒 言

- 1 本書は、平成29・30年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(靈山～福島)遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

上ノ台館跡	福島県伊達市靈山町下小国字上ノ台	埋蔵文化財番号	0721300654
中室内遺跡	福島県伊達市保原町上保原字中室内	埋蔵文化財番号	0721300329
日照田遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田	埋蔵文化財番号	0730100107
館ノ前遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字館ノ前	埋蔵文化財番号	0730100106
- 3 本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

平成29年度					
専門文化財主査	丹治 篤嘉	文化財主査	渡邊 春喜	文化財主査	廣川 紀子
文化財主査	草野 潤平(公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向)				
文化財主事	鶴見 謙平	主 事	枝松 雄一郎		
平成30年度					
専門文化財主査	丹治 篤嘉				
文化財主査	初山 孝行(公益財団法人とちぎ未来づくり財団より出向)				
文化財副主査	鶴見 謙平	主 事	枝松 雄一郎		
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺1/50,000の地形図(関、桑折、福島、保原)、縮尺1/200,000の地勢図(福島)を複製したもの、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が製作した工事用地図を基としたものである。
- 8 本書に掲載した自然科学分析、上ノ台館跡の地形測量は、次の機関に委託して実施し、その結果を掲載している。

出土加工材・炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
上ノ台館跡の地形測量	株式会社 ふたば
- 9 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関等から協力・助言を頂いた。

伊達市教育委員会	桑折町教育委員会
----------	----------

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。座標は、国
土座標第IX系に基づき、数値はその座標値である。また、表記がない遺構
図はすべて本書の天を北とした。
- (2) 標 高 高度は、標高で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (4) ケ バ 遺構内の傾斜部は「↑↑」、相対的に緩傾斜の部分には「↑」、後世の擾
乱部や人為的な削土部は「↓」の記号で表現した。
- (5) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと
算用数字で表記した。
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (6) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水
産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。
- (7) 網 点 各挿図中に用例を示した。
- (8) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 土器断面 積須器の断面は黒塗り、灰釉陶器はグレーとした。粘土積み上げ痕を一点
鎖線で示した。
- (3) 網 点 ■は黒色処理を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。
- (4) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。
(例) 図1の2番の遺物…図1-2
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
(例) 1-2…図1-2
- (5) 遺物計測値 ()内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。

3 本書で使用した略号は、以下のとおりである。

伊達市………D T	桑折町………Q R	上ノ台館跡…K N T	中室内遺跡…N M U
日照田遺跡…H D D	館ノ前遺跡…T N M	グリッド………G	遺構外堆積土……L
遺構内堆積土……ℓ	堅穴住居跡……S I	掘立柱建物跡…S B	柱列跡………S A
土坑………S K	溝跡・堀跡……S D	井戸跡………S E	特殊遺構……S X
小穴………P			

4 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各編末に掲載した。

目 次

序章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	7
第3節 歴史的環境	11
第4節 調査方法	20

第1編 上ノ台館跡(2次調査)

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	23
--------------	----

第2節 調査経過	23
----------	----

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	25
------------------	----

調査成果の概要(25) 基本土層(28)

第2節 堅穴住居跡	28
-----------	----

1号住居跡(28)

第3節 掘立柱建物跡	30
------------	----

1号建物跡(30) 2号建物跡(32)

第4節 土坑	34
--------	----

4号土坑(34) 5号土坑(34) 6号土坑(34)

7号土坑(35)

8号土坑(35) 9号土坑(35)

第5節 溝跡	36
--------	----

3号溝跡(36) 4号溝跡(38)

第6節 柱列跡	38
---------	----

1・2号柱列跡(38) 3号柱列跡(40) 4号柱列跡(41) 5号柱列跡(42)

6号柱列跡(43) 7号柱列跡(45)

第7節 特殊遺構	46
----------	----

1号特殊遺構(46) 2号特殊遺構(47) 3号特殊遺構(48)

第8節 小穴	50
--------	----

第3章 総括	52
--------	----

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	55
--------------	----

第2節 調査経過	55
----------	----

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	58
調査成果の概要(58) 基本土層(58)	
第2節 壁穴住居跡	61
1号住居跡(61) 2号住居跡(62) 3号住居跡(63) 4・6号住居跡(65)	
5号住居跡(69) 7号住居跡(73) 8号住居跡(77)	
第3節 掘立柱建物跡	78
1号建物跡(80) 2号建物跡(80) 3号建物跡(83) 4号建物跡(84)	
5号建物跡(86) 6号建物跡(88)	
第4節 土坑	89
1号土坑(89) 2号土坑(89) 3号土坑(89) 4号土坑(90)	
5号土坑(90) 6号土坑(90) 7号土坑(92) 8号土坑(92)	
9号土坑(92) 10号土坑(93) 11号土坑(93) 12号土坑(93)	
13号土坑(93) 14号土坑(95) 15号土坑(95) 16号土坑(96)	
17号土坑(96) 18号土坑(96) 19号土坑(96) 20号土坑(98)	
21号土坑(98) 22号土坑(98) 23号土坑(98) 24号土坑(100)	
25号土坑(100) 26号土坑(100) 27号土坑(102)	
第5節 堀跡・溝跡	102
1号堀跡(102) 2号溝跡(108) 3号溝跡(111)	
4・8・9・13号溝跡(113) 5号溝跡(115) 6号溝跡(115)	
7号溝跡(116) 10号溝跡(117) 11号溝跡(117) 12号溝跡(117)	
14号溝跡(119) 15号溝跡(121) 16号溝跡(122) 17号溝跡(122)	
第6節 井戸跡	124
1号井戸跡(124) 2号井戸跡(125)	
第7節 特殊遺構	126
1号特殊遺構(126)	
第8節 小穴群	127
第9節 遺構外出土遺物	138
第3章 総括	139

第3編 日照田遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	145
第2節 調査経過	145

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	148
調査成果の概要(148) 基本土層(148)	
第2節 掘立柱建物跡	150
1号建物跡(150)	

第3節 土 坑	152		
1号土坑(152)	2号土坑(152)	3号土坑(153)	4号土坑(153)
5号土坑(153)	6号土坑(155)	7号土坑(155)	8号土坑(156)
9号土坑(156)	10号土坑(156)	11号土坑(158)	12号土坑(158)
13号土坑(160)			
第4節 溝 跡	160		
1号溝跡(160)			
第5節 特 殊 遺 構	162		
1号特殊遺構(162)	2号特殊遺構(164)	3号特殊遺構(166)	
第6節 小 穴 群	168		
第7節 流 路 跡	171		
第3章 総 括	191		

第4編 館ノ前遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	197
第2節 調査経過	198

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	199
調査成果の概要(199) 基本土層(199)	
第2節 土 坑	199
1号土坑(199) 2号土坑(201) 3号土坑(202) 4号土坑(203)	
第3節 溝 跡	203
1号溝跡(203) 2号溝跡(205)	
第4節 特 殊 遺 構	205
1号特殊遺構(205)	
第5節 流 路 跡	206
第6節 遺構外出土遺物	209
第3章 総 括	210

付 編 自然科学分析

第1章 日照田遺跡出土炭化材の自然科学分析

第1節 樹種同定	213
第2節 放射性炭素年代(AMS測定)	218

第2章 館ノ前遺跡出土炭化材の自然化学分析

第1節 樹種同定	223
第2節 放射性炭素年代(AMS測定)	224

挿図・表目次

序章 遺跡の環境と調査経過

[挿図]

図1 一般国道115号相馬福島道路位置図	1	図5 上ノ台館跡周辺の遺跡位置図	12
図2 道路工事計画図	2	図6 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺の	
図3 上ノ台館跡周辺地形分類図	8	遺跡位置図	15
図4 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺			
		地形分類図	10

[表]

表1-1 上ノ台館跡周辺の遺跡一覧	13	表2-2 中室内・日照田・館ノ前遺跡	
表1-2 上ノ台館跡周辺の遺跡一覧	14	周辺の遺跡一覧	18
表2-1 中室内・日照田・館ノ前遺跡		表2-3 中室内・日照田・館ノ前遺跡	
		周辺の遺跡一覧	19
	周辺の遺跡一覧	17	

第1編 上ノ台館跡(2次調査)

[挿図]

図1 調査区位置図	24	図10 3・4号柱列跡	41
図2 遺構配置図・基本土層	26	図11 5号柱列跡	43
図3 上ノ台館跡1・2次調査区全体図	27	図12 6号柱列跡	44
図4 1号住居跡・出土遺物	29	図13 7号柱列跡	45
図5 1号建物跡	31	図14 1号特殊遺構	47
図6 2号建物跡	33	図15 2号特殊遺構	48
図7 4～9号土坑・出土遺物	36	図16 3号特殊遺構・出土遺物	49
図8 3・4号溝跡	37	図17 小穴・出土遺物	51
図9 1・2号柱列跡	39		

[表]

表1 小穴一覧	50
---------	----

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

[挿図]

図1 調査区位置図	56	図4 1号住居跡・出土遺物	61
図2 遺構配置図	59	図5 2号住居跡	63
図3 基本土層	60	図6 3号住居跡	64

図7	4・6号住居跡(1).....	65	図33	1号掘跡(4).....	106
図8	4・6号住居跡(2).....	66	図34	1号掘跡出土遺物.....	107
図9	4・6号住居跡(3).....	67	図35	2・3・5・14~17号溝跡全体図.....	109
図10	5号住居跡(1).....	70	図36	2号溝跡.....	110
図11	5号住居跡(2).....	71	図37	2号溝跡出土遺物.....	111
図12	5号住居跡出土遺物状況.....	72	図38	3号溝跡.....	112
図13	5号住居跡出土遺物.....	73	図39	4・8・9・13号溝跡.....	114
図14	7号住居跡(1).....	74	図40	5号溝跡.....	116
図15	7号住居跡(2).....	75	図41	6・7・10号溝跡、6号溝跡出土遺物.....	118
図16	7号住居跡(3)、出土遺物.....	76	図42	11・12号溝跡.....	119
図17	8号住居跡(1).....	78	図43	14号溝跡(1).....	120
図18	8号住居跡(2).....	79	図44	14号溝跡(2).....	121
図19	1号建物跡.....	81	図45	15~17号溝跡、15号溝跡出土遺物.....	123
図20	2号建物跡.....	82	図46	1・2号井戸跡、1号井戸跡出土遺物.....	124
図21	3号建物跡.....	83	図47	1号特殊遺構.....	126
図22	4号建物跡.....	85	図48	小穴群全体図.....	128
図23	5号建物跡.....	87	図49	小穴群①.....	129
図24	6号建物跡.....	88	図50	小穴群②.....	130
図25	1~7号土坑.....	91	図51	小穴群③.....	131
図26	8~13・15・16号土坑.....	94	図52	小穴群④.....	132
図27	14・17・18号土坑.....	97	図53	小穴群⑤.....	133
図28	19~24号土坑.....	99	図54	小穴群⑥.....	134
図29	25~27号土坑、土坑出土遺物.....	101	図55	小穴群⑦、G 2 P 2 出土遺物.....	135
図30	1号掘跡(1).....	103	図56	遺構外出土遺物.....	138
図31	1号掘跡(2).....	104	図57	中室内遺跡周辺の地籍図.....	140
図32	1号掘跡(3).....	105	図58	掘跡推定図.....	141

[表]

表1	小穴一覧(西部).....	136	表2	小穴一覧(東部).....	137
----	---------------	-----	----	---------------	-----

第3編 日 照 田 遺 跡

[挿図]

図1	調査区位置図.....	146	図7	11~13号土坑、土坑出土遺物.....	159
図2	基本土層.....	148	図8	1号溝跡・出土遺物.....	161
図3	遺構配置図.....	149	図9	1号特殊遺構.....	162
図4	1号建物跡・出土遺物.....	151	図10	1号特殊遺構出土遺物.....	163
図5	1~6号土坑.....	154	図11	2号特殊遺構・出土遺物.....	165
図6	7~10号土坑.....	157	図12	3号特殊遺構・出土遺物.....	167

図13 小穴群・出土遺物	169	図22 流路跡出土遺物(5)	182
図14 流路跡(1)	172	図23 流路跡出土遺物(6)	183
図15 流路跡(2)	173	図24 流路跡出土遺物(7)	185
図16 流路跡(3)	174	図25 流路跡出土遺物(8)	186
図17 流路跡(4)	175	図26 流路跡出土遺物(9)	188
図18 流路跡出土遺物(1)	177	図27 流路跡出土遺物(10)	189
図19 流路跡出土遺物(2)	178	図28 流路跡出土遺物(11)	190
図20 流路跡出土遺物(3)	180	図29 日照田遺跡周辺の須恵器窯跡・社寺跡	193
図21 流路跡出土遺物(4)	181		

[表]

表1 小穴一覧	170
---------	-----

第4編 館ノ前遺跡

[挿図]

図1 調査区位置図	197	図6 1号特殊遺構・出土遺物	206
図2 I区遺構配置図・基本土層	200	図7 流路跡(1)	207
図3 II区遺構配置図・基本土層	201	図8 流路跡(2)・出土遺物	208
図4 1~4号土坑	202	図9 遺構外出土遺物	209
図5 1・2号溝跡	204		

付編 自然科学分析

[挿図]

図1 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)	214	図7 历年較正年代グラフ (マルチプロット図、参考)	222
図2 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)	215		
図3 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)	216	図8 館ノ前遺跡出土木材の顕微鏡写真	224
図4 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)	217	図9 历年較正年代グラフ	226
図5 历年較正年代グラフ(1)	221	図10 历年較正年代グラフ (マルチプロット図、参考)	226
図6 历年較正年代グラフ(2)	222		

[表]

表1 日照田遺跡出土炭化材・木材の樹種	214	表4 館ノ前遺跡出土木材の樹種	223
表2 放射性炭素年代測定結果(1)	220	表5 放射性炭素年代測定結果(1)	226
表3 放射性炭素年代測定結果(2)	220	表6 放射性炭素年代測定結果(2)	226

写真目次

第1編 上ノ台館跡(2次調査)

1 調査区全景	229	9 3号溝跡検出	235
2 調査区全景	230	10 1号特殊遺構	235
3 調査区遠景	230	11 2号特殊遺構全景	236
4 1号住居跡全景	231	12 3号特殊遺構全景	236
5 1号住居跡	231	13 1・2号柱列跡	237
6 1号建物跡	232	14 4号柱列跡全景	238
7 2号建物跡	233	15 1号住居跡、8号土坑、3号特殊遺構、 小穴出土遺物	238
8 4～9号土坑	234		

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

1 調査区遠景	241	26 7号住居跡掘形全景	253
2 調査区遠景	241	27 7・8号住居跡	254
3 調査区全景	242	28 8号住居跡掘形全景	254
4 基本土層	242	29 1号建物跡全景	255
5 調査区西部全景	243	30 1号建物跡	255
6 調査区西部竪穴住居跡集中箇所	243	31 2号建物跡全景	256
7 調査区東部	244	32 2号建物跡	256
8 調査区東部1号堀跡	244	33 3号建物跡全景	257
9 1号住居跡全景	245	34 3号建物跡	257
10 2号住居跡全景	245	35 4・5号建物跡全景	258
11 2号住居跡	246	36 4号建物跡	258
12 3号住居跡	246	37 5号建物跡	259
13 4号住居跡全景	247	38 6号建物跡全景	260
14 4号住居跡	247	39 6号建物跡	260
15 4～6号住居跡掘形	248	40 1・2・4・9～11・22号土坑	261
16 4・6号住居跡掘形	248	41 12～14号土坑	262
17 4～6号住居跡	249	42 15～19・21・23号土坑	263
18 4・6号住居跡掘形	249	43 24～26号土坑	264
19 4・6号住居跡柱穴	250	44 1号堀跡検出	264
20 5号住居跡全景	250	45 1号堀跡北西部	265
21 5号住居跡P1遺物出土状況	251	46 1号堀跡南西部	265
22 5号住居跡	251	47 1号堀跡南部	266
23 5号住居跡柱穴	252	48 1号堀跡南部	266
24 5号住居跡掘形全景	252	49 1号堀跡	267
25 7号住居跡	253	50 2号溝跡	267

51	2号溝跡	268	63	調査区西部南端小穴群全景	274
52	3号溝跡	268	64	調査区東部小穴群全景	274
53	4・8・9号溝跡全景	269	65	調査区東部小穴群全景	275
54	4・8・9・13号溝跡全景	269	66	小穴群断面(1)	275
55	4・8・9・13号溝跡	270	67	小穴群断面(2)	276
56	6・7号溝跡	270	68	1・5・7号住居跡出土遺物	277
57	10・11号溝跡	271	69	1・9・14号土坑出土遺物	278
58	14号溝跡全景	271	70	1号堀跡出土遺物	278
59	15~17号溝跡全景	272	71	2・6・15号溝跡、1号井戸跡、 小穴出土遺物	279
60	1・2号井戸跡	272	72	遺構外出土遺物	280
61	1号特殊遺構全景	273			
62	1号特殊遺構、1号堀跡、3号溝跡断面	273			

第3編 日 照 田 遺 跡

1	I区全景	283	18	作業風景	294
2	II区北部全景	283	19	1号建物跡出土遺物	295
3	II区南部全景	284	20	3・12・13号土坑・1号溝跡出土遺物	295
4	III区全景	284	21	1号特殊遺構出土遺物	296
5	1号建物跡(1)	285	22	2・3号特殊遺構出土遺物	297
6	1号建物跡(2)	286	23	小穴群出土遺物	298
7	1~8号土坑	287	24	流路跡(II区南部)出土遺物(1)	298
8	9~13号土坑	288	25	流路跡(II区南部)出土遺物(2)	299
9	1号溝跡全景	289	26	流路跡(II区南部)出土遺物(3)	300
10	1号特殊遺構	289	27	流路跡(II区南部)出土遺物(4)	301
11	2号特殊遺構	289	28	流路跡(II区南部)出土遺物(5)	302
12	3号特殊遺構	289	29	流路跡(III区)出土遺物(1)	303
13	II区小穴群検出	290	30	流路跡(III区)出土遺物(2)	304
14	II区小穴群全景	290	31	流路跡(III区)出土遺物(3)	305
15	小穴群	291	32	流路跡(III区)出土遺物(4)	306
16	流路跡(1)	292	33	流路跡(III区)出土遺物(5)	307
17	流路跡(2)	293	34	流路跡(III区)出土遺物(6)	308

第4編 館ノ前 遺 跡

1	I区全景	311	5	1~4号土坑	312
2	II区全景	311	6	1・2号溝跡、1号特殊遺構	313
3	I区基本土層A-A'断面	312	7	1号特殊遺構、流路跡、 遺構外出土遺物	314
4	II区基本土層C-C'断面	312			

序章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全5区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の2区間は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と靈山道路と靈山～福島の3区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成16年度から公益財団法人(平成24年10月以前は財団法人)福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成29年度は伊達市靈山町下小国地区、同市保原町上保原地区、桑折町松原地区に所在する以下の4遺跡の本発掘調査を実施し、上保原地区の中室内遺跡のみ平成30年度当初に2次調査を実施した。

○伊達市靈山町下小国地区 灵山～福島…上ノ台館跡(2次調査)

○伊達市保原町上保原地区 灵山～福島…中室内遺跡(1・2次調査)

○桑折町松原地区 灵山～福島…日照田遺跡・館ノ前遺跡

公益財団法人福島県文化振興財団では、平成29年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員6名を配置して本発掘調査を実施した。4月当初は、上ノ台館跡、日照田遺跡、館ノ前遺跡の本発掘調査が確定していた。その調査面積は、日照田遺跡2,800m²、館ノ前遺跡1,600m²が確定していたものの、上ノ台館跡は条件整備が整っていなかったことから調査面積

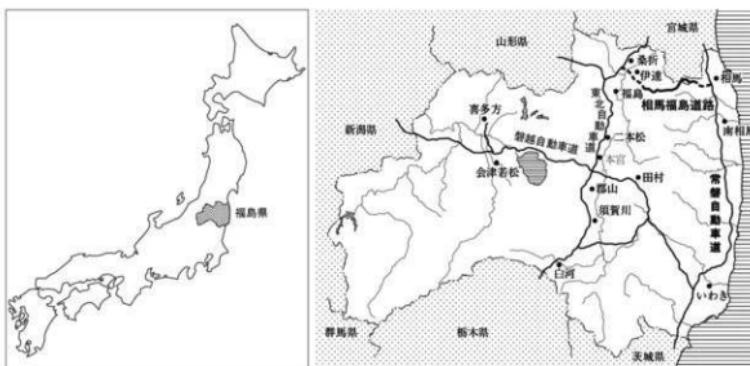


図1 一般国道115号相馬福島道路位置図

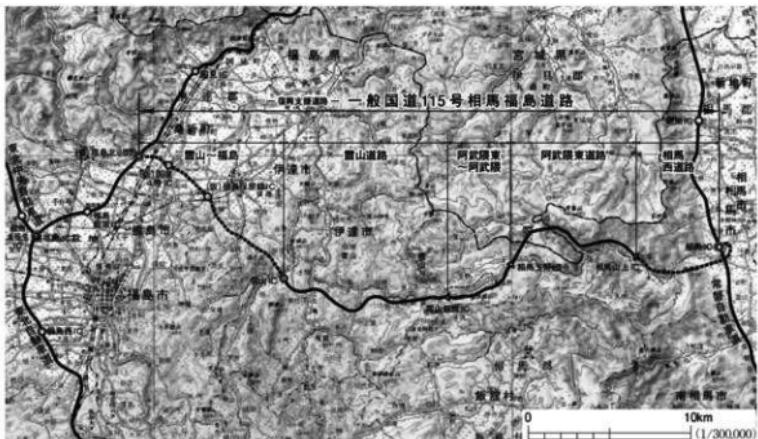


図2 道路工事計画図

は確定していなかった。中室内遺跡は、平成29年度に実施した試掘・確認調査で要保存面積が確定した遺跡で、平成29年度途中で追加となった。

以下では、伊達市靈山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、桑折町松原地区に分け、調査経過を記述する。なお、中室内遺跡に関しては平成30年度当初に実施した2次調査の経過も併せて報告する。

伊達市靈山町下小国地区

上ノ台館跡は、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600m²の要保存範囲が確定していた。このうち、平成28年度に8,700m²の1次調査を実施した。このため、平成29年度当初で、本発掘調査が必要な残りの範囲は6,900m²であった。

この6,900m²の発掘調査範囲は、丘陵の急傾斜地を含むため、一度に表土除去を実施すると、土砂等が流出する危険性が極めて高く、調査にあたり排土撤出路が確保できない等の問題があった。4月中に調査範囲の一部を除いて伐採が終了したため、5月の連休明けに現地確認を行った。その結果、一度に表土除去を実施するのではなく、段階を踏んで調査を実施する必要があることを確認し、その旨を5月26日の第2回連絡調整会議で国交省側に伝えた。その後、6月28日の第3回連絡調整会議で、条件整備に進展があったため、8月後半の調査開始を目標とすること、段階を踏んだ調査を実施する必要があることから、丘陵上部の1,500m²から調査を着手することが決まった。

7月5日付で福島県教育委員会から1,500m²の本発掘調査の指示が出された。7月中は調査に向けた事務手続き等の準備を行い、8月21日から現地での作業を開始した。

8月23日からは重機による表土除去を開始した。表土除去作業は起伏の激しい丘陵上での作業の

ため、事故や土砂の流出等に備えながら実施し、9月5日には終了した。

9月7日にはプレハブ・仮設トイレを設置し、8日には発掘器材をプレハブに搬入して調査の準備を行った。9月11日から、作業員の雇用を開始するとともに、国交省側で急傾斜地に設置した仮設階段の確認を、県文化財課・国交省・財團の三者で行った。プレハブから調査箇所である丘陵上までのルートは、この仮設階段を利用することとなったが、毎日の段階の昇り降りに気を配りながらの調査となった。また、遺構の検出に入る前に、調査区周辺の草刈りや、調査区までの通路の整備等、安全に調査ができる環境を整える作業を行った。

本格的な遺構の検出を9月19日から開始した。調査は尾根上の平らな場所から着手し、複数の小穴や土坑、竪穴住居跡等を確認した。26日からは遺構の検出作業と並行して、土坑の調査を開始した。尾根上の遺構の検出は順調に進み、小穴や溝跡を検出した。小穴は、掘立柱建物跡や柱列跡等の柱穴であることが判明し、遺跡の内容が明らかになってきた。

10月4日からは、斜面部の遺構の検出作業を開始した。尾根上に比べ遺構は少なかったが、柱列跡を検出した。11日には遺構の検出が終了し、その後は遺構の精査に重点を移した。

11月1日からは、小穴以外の遺構の精査が終了したため、遺構の記録作業と小穴の調査を中心に行つた。小穴の調査は順調に進み、17日には終了した。

11月20日以降は、調査区全体の清掃及び写真撮影と、調査区からプレハブへの発掘器材撤収及びプレハブ内の整理を行い、30日には作業員の雇用を終了した。

残る作業は航空写真測量とプレハブからの発掘器材の撤収となったが、器材の撤収は、航空写真測量の日程に併せて後日行うこととした。

12月13日には仮設トイレの汲み取りとプレハブからの発掘器材の撤収を行つた。12月15日には、航空写真測量を実施するとともに、残っていた発掘器材を撤収し、プレハブ・仮設トイレも撤去した。

現地の引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、年が明けた1月22日に行つた。

伊達市保原町上保原地区

当該地区では、6月上旬に実施した遺跡推定地であるDT-B29の試掘調査を受け、DT-B29の一部が新たに田向遺跡として登録された。1300m²が要保存範囲とされたが、盛土工法による工事範囲内にあるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されることとなった。田向遺跡の要保存範囲1300m²は、盛土を行つた場合の圧密沈下の計算の結果、本発掘調査を要しないこととなった。

その後、6月中旬～下旬及び8月下旬には中室内遺跡の試掘・確認調査の結果、4500m²の要保存範囲が確定した。この試掘・確認調査の結果を受け、7月24日の第4回連絡調整会議では、すでに要保存範囲が確定していた伊達市伏黒地区の荒屋敷遺跡よりも中室内遺跡の方が調査の優先順位が高いことが示された。また、8月29日の第5回連絡調整会議では、中室内遺跡に関して、10

月中旬の調査開始を目標とすること、調査区内に生えている竹の伐採は国交省側で9月中に行うこと、調査区西部の一部は10月下旬まで工事用道路として使用するため、その部分の表土は工事用道路の使用が終了してから行うこと等が決まった。

中室内遺跡の要保存範囲4,500m²の一部は、盛土工法の工事範囲内であるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用された。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10mのマージンを取ることが了解された。この結果を受け、福島県教育委員会より9月5日付で2,400m²、10月24日付で300m²、計2,700m²の本発掘調査の指示が出された。

10月中旬からの表土除去に向けて事務手続き等の調査準備を進め、10月5日にプレハブ・仮設トイレを設置し、発掘器材の搬入を行った。10日には重機によるプレハブ前の作業員駐車場の整備を行った。11日からは先行して6名の作業員を雇用し、調査区周辺の環境整備を行った。12日からは調査区の縄張りと表土除去を開始した。表土除去は調査区東部から実施し、作業が進むと、先の試掘・確認調査で検出された1号土坑や1号堀跡の一部が確認された。

翌週の17日から新規作業員27名の雇用を開始し、本格的な遺構検出作業に取り掛かろうとした。しかし、翌々日から天候が暗転し、10月後半は度重なる降雨による調査区内への浸水が著しく、その排水作業が進まなかったことから作業日がほとんど確保できなかった。その間、重機による表土除去は可能な限り継続し、19日には調査区東部1,300m²分を終了し、24日には調査区西部に移り、25日には工事用道路部分を除いて終了した。

11月に入ると快晴が続き、遅延していた調査は大きく進展した。遺構検出が進むと、調査区東部では1号堀跡がL字形に巡り、その内側には多数の柱穴とみられる小穴群や、1号堀跡に平行して延びる数条の溝跡が認められた。1日より1号堀跡、2号溝跡の掘り下げを行い、適宜断面図を作成した。それらの掘り下げの見通しが立つと、6日より一部作業員を割いて調査区東端から小穴群等の遺構精査の準備に取りかかった。

一方、調査区西部は11月7・8日に工事用道路部分の表土除去を行って、9・10日には調査区全体の遺構検出を行った。その結果、数軒が重複した大小の竪穴住居跡、柱穴とみられる複数の小穴が一部竪穴住居跡を掘り込んでいる様子が認められた。重複する遺構の調査に相応の時間が見込まれることから、翌週14日から順次、小穴や竪穴住居跡の精査に入った。小穴の位置関係から1～3号建物跡を確認し、小穴群の半裁及び断面図の作成を行った。

11月後半になると日の入りも早くなり作業時間が制限されたが、作業員の出勤率も高く、調査は順調に推移した。しかしながら、当初の想定よりも検出された遺構数が多かったため、年内での収束に向けてより一層効率的な調査を心掛けた。22日には追加で指示のあった調査区東部の北端部300m²の表土除去を行い、1号堀跡がさらに北方向に延び、小穴群が広がることが確認された。11月末までには、それらを含めたほとんどの遺構の精査に着手し、12月からは掘り上げた遺構の記録と、重複した竪穴住居跡の掘り下げと柱穴の確認が主な作業となる見通しとなった。

12月に入ると気温が下がり、小雪が舞い、時雨れる等、厳しい調査環境の日々が続いたが、職

員及び作業員の体調管理に努め、作業を実施した。また、氣査は堅穴住居跡の重複関係の把握に苦慮したが、作図を効率的に進め、予定通り氣査を進めることができた。14・15日に氣査区全体の清掃を行い、15日に氣査区の全景、遺景等の空中写真撮影を実施した。18日からの氣査を実施する最終週には、地形測量、堅穴住居跡等の図面作成を行い、並行して氣査区からプレハブへ発掘器材を運び入れ、22日に氣査を終了した。

年が明けた1月9日よりプレハブからの発掘器材の撤収を行い、19日にはプレハブ・仮設トイレを撤去し、翌週の22日に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

平成30年度は、氣査区を東西に分断する市道中室内大師堂線及び氣査区の南側に隣接する市道保原箱崎線範囲について、平成30年4月3日に県文化財課による工事立会がなされた。その結果、100mの本発掘調査が必要とされ、平成30年4月9日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示が出された。氣査は4月11日に開始し、溝跡を中心とした遺構の精査・作図・写真撮影、氣査区の地形測量を適宜行い、13日には終了した。また、13日には県文化財課及び国交省の立会いの下、現地引渡しを行った。

桑折町松原地区

平成29年度に本発掘調査を実施した伊達郡桑折町松原地区に所在する遺跡は、日照田遺跡、館ノ前遺跡の2遺跡である。平成28年度の試掘調査の結果、日照田遺跡は3,900m²、館ノ前遺跡は3,600m²の要保存範囲が確定していたが、両遺跡とも、要保存範囲の一部が盛土工法による工事範囲内であるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の彈力的運用が適応されることとなった。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10mのマージンを取ることが了解され、本発掘調査が必要な範囲は、日照田遺跡が2,800m²、館ノ前遺跡が1,600m²と整理されていた。

平成29年度に入り、福島県教育委員会より4月3日付で日照田遺跡2,800m²、館ノ前遺跡1,600m²の本発掘調査の指示が出された。氣査は、工事計画上優先度の高い箇所から、日照田遺跡I区(100m²)、館ノ前遺跡I区(900m²)、日照田遺跡II・III区(2,700m²)、館ノ前遺跡II区(700m²)の順に行うこととなった。

日照田遺跡I区は、4月17日から氣査を開始し、作業員駐車場脇に仮設トイレを設置した。翌18日には作業員の雇用を開始し、並行して館ノ前遺跡I区の氣査区の縄張り等を開始した。21日には2遺跡共用となるプレハブを設置した。

日照田遺跡I区の遺構検出作業は、4月19日から開始し、1号溝跡を検出した。春先の強風により仮設トイレが倒れるなどのアクシデントもあったが、翌週中には1号溝跡を完掘した。26日に基本土層図の作成、27日に地形測量を行い、28日には日照田遺跡I区の氣査を終了した。

その後、作業員は5月1日から館ノ前遺跡I区の氣査に移り、遺構検出作業を行った。9日からは検出した土坑の精査を開始するとともに、並行して地形測量を行った。11日には基本土層図を

作成した。調査前半は時折吹く強風に悩まされたものの後半は天候が安定し、土坑の精査や地形測量等の記録作成は順調に進んだ。23日に調査区全体の写真撮影を行い、翌24日には館ノ前遺跡Ⅰ区の調査を終了した。

5月29日には、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅰ区(100m²)と館ノ前遺跡Ⅰ区(900m²)について現地引き渡しを行った。また、同日、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区の調査に入り、Ⅱ区北部より表土除去を開始した。Ⅱ区北部の表土除去を終えた後、6月8日から作業員の雇用を再開した。遺構検出が始まると、Ⅱ区北部に小穴群が集中することが確認された。14日からⅢ区の表土除去に入ったため、遺構検出作業はⅡ区南部に移った。Ⅱ区南部では、検出された流路跡から土師器・須恵器が出土し、16日からは流路跡の掘り下げを開始した。Ⅲ区は、20日までに表土除去が終了し、23日から作業員の一部が遺構検出作業に入った。Ⅲ区では、縄文時代の落し穴と考えられる土坑群が検出され、この段階で、調査区全体のおおよその遺構数を把握することができた。

7月初めは降雨が続いたことから、調査区内の排水作業にかなりの労力が割かれることとなつた。このため、比較的排水作業が短時間で実施できるⅢ区の調査を集中して行うこととした。Ⅲ区では縄文時代の落し穴以外に、多くの土師器片が折り重なって出土した1号特殊遺構や、羽口や鉄滓が出土した2号特殊遺構等が検出された。Ⅲ区の調査を銳意進め、見通しが立った段階で、Ⅱ区北部の遺構精査、Ⅱ区南部の流路跡の調査へと展開したが、例年ない猛暑となり、高温多湿の環境下での厳しい作業となった。7月後半に入り、Ⅱ区北部では集中する小穴群、1号建物跡、土坑の精査・記録、Ⅱ区南部では流路跡の掘り下げ及び断面図作成を行った。Ⅲ区は検出遺構の精査・記録が完了し、21日には全体写真撮影を行った。

8月になるとやや気温は低下したが、連日の猛暑の中での作業による疲労が蓄積していたため、作業員の体調管理に気を配るとともに、引き続き熱中症の注意喚起に努めた。8月第1週には、Ⅱ区北部の遺構精査の目途が立ち、4日にはⅡ区北部の全体写真撮影を行った。7日以降はⅡ区南部の調査に集約し、10日には流路跡から検出された杭列の取り上げを行った。お盆休み明けの21日からⅡ区南部の全体写真撮影のための清掃に着手し、23日に撮影を行った。その間、並行して地形測量、基本土層図作成等を行った。24日には発掘器材をプレハブに移動し、日照田遺跡の全調査を終了した。日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、9月4日に行った。

館ノ前遺跡Ⅱ区の調査は、翌週の8月28日から作業員を雇用した。遺構検出を行うと、蛇行する流路跡と流路跡に沿う溝跡が確認された。それらの掘り下げを行うのと並行して地形測量の作業を進めた。9月に入ても天候が大きく崩れることはなく、11日には検出した1・2号溝跡、1号特殊遺構の全景写真撮影まで終了した。13日には流路跡の断面図作成、14日には調査区全体の写真撮影を行い、15日には調査を終了した。館ノ前遺跡Ⅱ区の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、10月2日に行った。

(丹治)

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南東端に位置している。面積は13,782m²で、北海道、岩手県に次ぐ全国3番目の広さを有するが、南北に併行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地等、約8割は山地で占められている。県土は、奥羽山脈と阿武隈高地により3地方に区分されていて、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。

相馬福島道路は浜通りと中通りとを結ぶ道路として計画されていて、平成29年度に調査を実施した4遺跡は、中通り北部の伊達市と伊達郡桑折町に所在している。以下、伊達市霊山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、伊達郡桑折町松原地区的地区ごとに記述する。

伊達市霊山町下小国地区

伊達市は、平成18年に伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月館町が合併して成立した市で、伊達市霊山町は現在の市域のおおよそ中央付近を占める。大半が阿武隈高地の山中にあり、四方を山に囲まれている。地形は、町域東部にある標高825mの霊山山塊を最高峰として、標高200m～500mクラスの山々が連なり、その谷間には東北第2位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流(大石川、戸川、石田川、小国川等)が開削した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約1,100mmである。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の上ノ台館跡が所在する下小国地区は、標高532mの天井山北西麓から流れ出る小国川流域にある。福島市と相馬市を結ぶ国道115号(中村街道)に面し、隣接の掛田地区は国道115号と国道349号が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考え上で、重要なと思われる。

地質の面では、下小国地区を含む霊山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山碎屑堆積物(霊山層、月館層等)が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物(岩石化していない疊・砂・泥等)が堆積し、斜面部等には、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物(火山灰を母材とする黄褐色土壤)層が散在するところもある。

伊達市保原町上保原地区

伊達市保原町は市域のおおよそ西部にあたり、北半部と南半部で地形・地質の特徴が異なる。北半部は、福島盆地内部の低地で、盆地内部を北東に流れる阿武隈川東岸の沖積地となっている。標高は45～55m前後で、平坦な土地が広がるが、阿武隈川の蛇行によって削り残された自然堤防、



図3 上ノ台館跡周辺地形分類図

阿武隈川やその支流の旧河道や浸食崖、それらに伴う後背湿地といった微地形も発達している。自然堤防等の微高地上を中心に居住域が形成されていて、果樹園としても利用されている。それに対し、旧河道等の低地部は水田として利用されている。地質面では、礫・砂・泥等の氾濫堆積物や完新世の低位段丘堆積物等で広く覆われている。調査対象の中室内遺跡は、この伊達市保原町北半部に位置し、阿武隈川の旧河道に挟まれた自然堤防上に立地している。

南半部は阿武隈高地から伸びる丘陵性山地と段丘面で構成されている。丘陵性山地は伊達市保原町域南縁の標高350m前後の地点を最高として、北に向かい低くなっていく。丘陵性山地の標高80~120mの山麓には、南北約1km、東西約6kmにわたる段丘面が帶状に連なっている。丘陵性山地の谷間には、伝桶川・東根川・古川等の小河川によって開拓された狭い平坦部が形成されていて、谷間の平坦地は水田として、その周辺や段丘面は畑地として利用されている。南半部の地質を見ると、丘陵性山地や段丘面は新第三紀中新世の凝灰岩や凝灰角砾岩といった火山破屑性堆積物(雲山層上部層)が堆積している。

伊達郡桑折町松原地区

伊達郡桑折町は、福島盆地の北東部に位置し、南から東は伊達市に、北は国見町に、西は福島市に、北西は宮城県白石市に接している。年間平均気温は13℃、年間降水量は1,166mmである。

地形は、町域西部に奥羽山脈の支脈である山地が連なり、町域南東辺には阿武隈川が北東に向かって沿うように流れる。また、町域北部の大字北半田にある丘から国見町厚櫻山にかけては、丘陵が断続的かつ一列に並び、国見丘陵列と呼称されている。

町域西部の標高が130~180mと、他地域より60~80m高く、おおむね北西から南東に向かって傾斜している。町域最高点は北西部に位置する標高863.1mの半田山であり、最低点は阿武隈川が伊達市梁川町に流れ込む地点である。

町域全域は、全て阿武隈川水系に属する。町域を流れる阿武隈川の主な支流としては、産ヶ沢川、佐久間川、普蔵川、新堀川等があり、山地から土砂を運んで現桑折市街地が形成されている藤田面を堆積させたと考えられる。

藤田面の縁辺部は、阿武隈川等の浸食により急な段丘崖を成している。段丘崖には、小規模な開析谷が数多く発達しており、この段丘崖より下位が低位段丘面であり、調査対象の日照田遺跡・館ノ前遺跡は低位段丘面上に立地している。低位段丘面には、自然堤防が多数形成され、古来より繰り返されてきた阿武隈川の蛇行・氾濫の跡をうかがわせる。

次に、地質を概観する。町域西部の山地は、新生代第三紀の堆積岩を基盤としている。半田山周辺では、中期中新世～後期中新世の非アルカリ珪長質火山岩類が分布している。山地の縁辺部には、第四紀後期更新世の堆積段丘面である田中面、梅津面がある。

町域東部の低地は、山地側に分布している後期更新世の低位段丘堆積物層と阿武隈川沿いの後期更新世～完新世の海成または非海成堆積岩類が堆積する地層に、おおまかに分けられる。(枝 松)

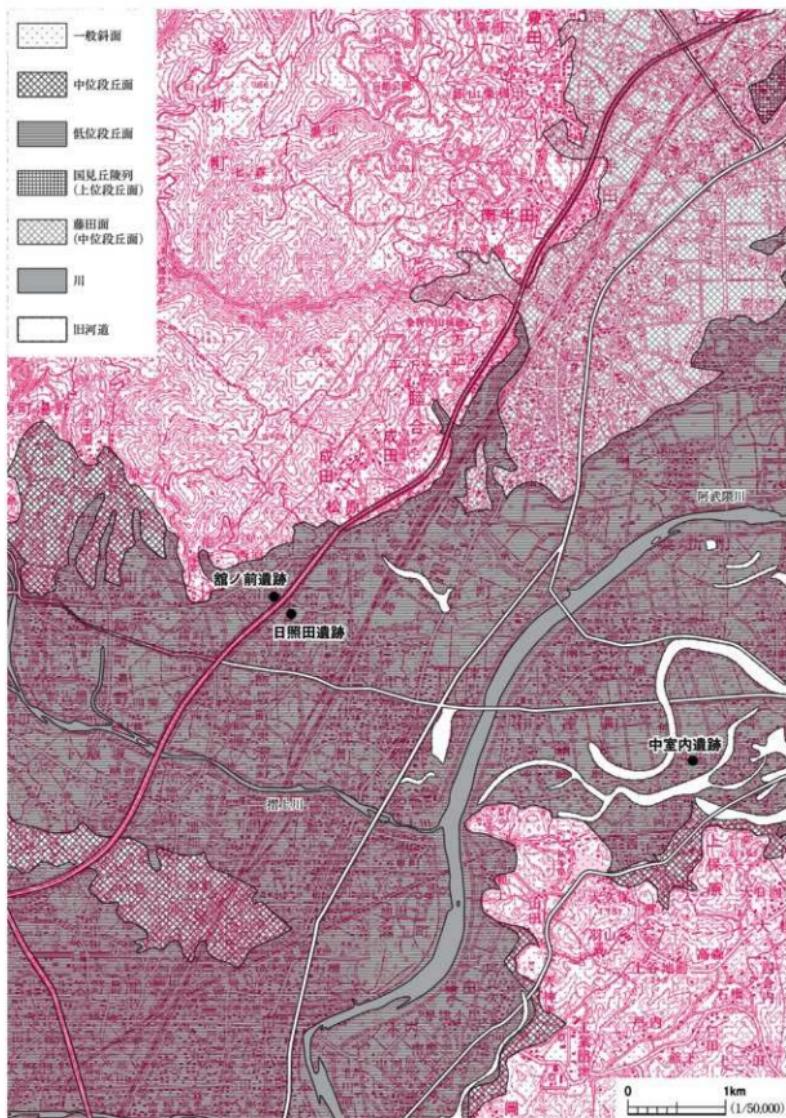


図4 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺地形分類図

第3節 歴史的環境

伊達市靈山地区

伊達市靈山町域では、旧石器時代から中世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、靈山地区の代表的遺跡については、図5に示した範囲外についても記載している。

旧石器時代 万田川遺跡(18)では、細石刃の出現以前のものとみられている時期の石刃と剥片が採取されている。

縄文時代 縄文時代は、早期～前期では、早期後半の土器が靈山寺跡(8)から、前期前葉の土器が川向遺跡、行人田遺跡(78)から少量出土しているのみである。中期～後期になると遺跡数が増加し、橋本遺跡(34)、倉波入遺跡、松ヶ倉遺跡(42)、古谷地遺跡、篠ノ内遺跡、久保田遺跡、武ノ内遺跡等が知られている。このうち、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の竪穴住居跡、配石構造、屋外埋設土器、土坑が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕、土坑が検出されている。続く晩期はさらに遺跡数が増加する。川向遺跡、熊屋敷A遺跡(15)、熊屋敷B遺跡(16)、千石平遺跡、岩平B遺跡(24)、家ノ入遺跡(28)、小坂遺跡、塗方遺跡(41)、大石台遺跡(43)、根古屋遺跡(87)、三斗戸遺跡、武ノ内遺跡等が知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代 弥生時代では、根古屋遺跡(87)と武ノ内遺跡で再葬墓が見つかっている。根古屋遺跡の再葬墓は弥生時代前期後半～中期前半における県内の代表的な資料の1つと評価されている。

古墳時代 集落遺跡・古墳とともに確認されていないが、行合道B遺跡(13)では、中期後葉～後期前葉の土師器が1点出土している。

古代 急峻な靈山山塊に営まれた靈山寺跡(8～10)は、貞觀元年(859年)に慈覺大師円仁が開基したと伝えられる(「靈山寺縁起」)。山頂ではいくつかの伽藍群が確認されていて、古代には靈山寺玉野川上流伽藍群(9)が寺院の主要機能を担い、出土遺物から9世紀後半から10世紀中葉には成立していたと考えられている。集落遺跡は、行合道B遺跡(13)で、9世紀末～10世紀初頭の竪穴住居跡1軒が確認されているが、他に集落遺跡が調査された事例はなく、様相は不明である。

中世 精山寺跡(8～10)は中世まで継続していく、山頂伽藍群から中国龍泉窯の青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖等の遺物が発見されていることから、13世紀～14世紀中葉が最盛期と考えられている。また、南北朝期の建武四年(1337年)には、北畠顕家が、陸奥国府を多賀城から靈山寺に一時的に移し、山頂伽藍群に国司館を設置したこと、城郭としての機能が整備される。靈山城跡は、貞和三年(1347年)には落城したと推定されており、その後に靈山寺跡も廃絶したと考えられるが、落城時に廃絶したかは定かではない。国指定史跡の宮脇遺跡(39)は、伊達氏が再興した靈山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様は京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。

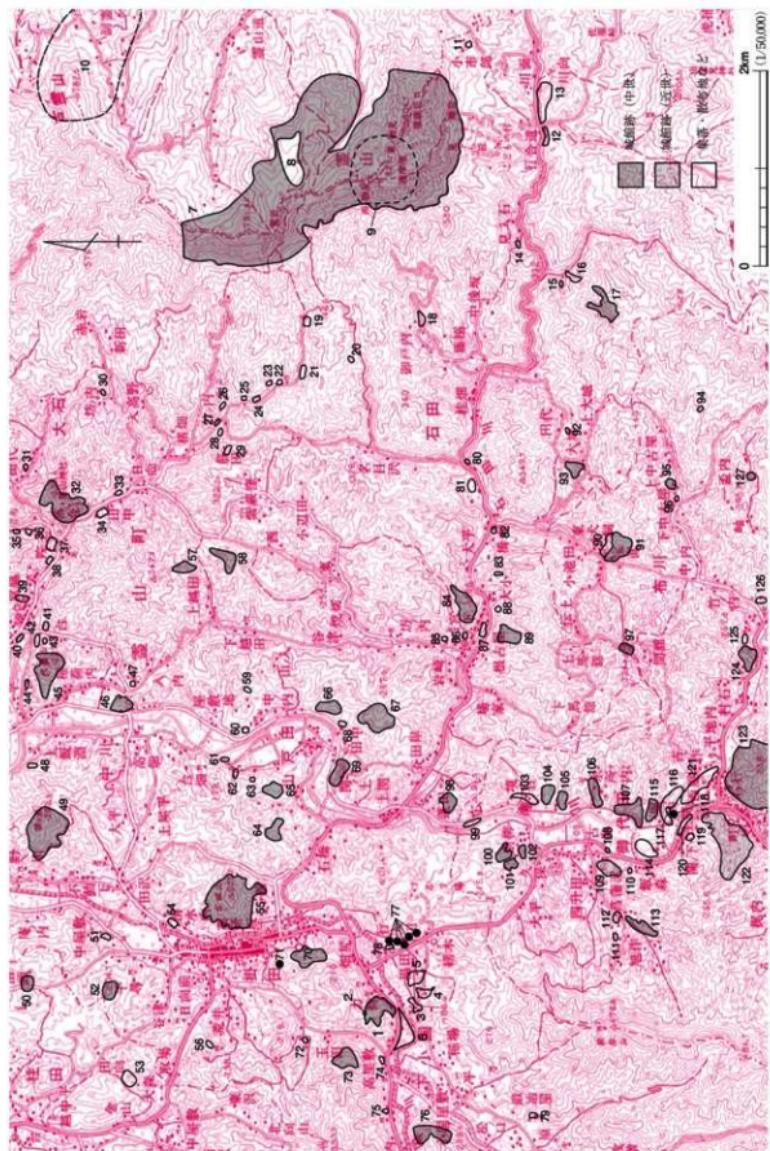


表1-1 上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時期	No	遺跡名	所在地	種別	時期
1	上ノ台館跡	靈山町下小国	城館跡	中世	46	高畠田船跡	靈山町中川	城館跡	中世
2	上ノ台道跡	靈山町下小国	道路包含層	縄文・中世以降	47	中川道跡	靈山町中川	散布地	縄文
3	下小国荒原敷遺跡	靈山町下小国	散布地	縄文	48	下飯田道跡	靈山町中川	散布地	古墳
4	沼ヶ入道跡	靈山町下小国	集落跡・城館跡	中世	49	鳴ヶ森船跡	靈山町山野	城館跡	中世
5	福田道跡	靈山町下小国	集落跡・城館跡	中世	50	小原船跡	保原町金原	城館跡	中世
6	山岸道跡	靈山町下小国	散布地	縄文・平安	51	千尋道跡	靈山町掛田	散布地	平安
7	靈山城跡	靈山町石田	城館跡	中世	52	愛宕船跡	靈山町掛田	城館跡	中世
8	靈山城跡 (山城跡・古墳跡)	靈山町石田 相馬市玉野	社寺跡	古代～中世	53	芳沼入道跡	保原町柱田	散布地	平安
9	「玉野川上流古墳群」	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世	54	古山道跡	靈山町掛田	散布地	奈良
10	靈山城跡 (古墳山御城跡)	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世	55	歷田城跡	靈山町掛田	城館跡	中世
11	小市船道跡	靈山町石田	散布地	縄文	56	荒井道跡	靈山町掛田	散布地	平安
12	行合通A道跡	靈山町石田	散布地	縄文	57	よし船跡	靈山町石田	城館跡	中世
13	行合通B道跡	靈山町石田	本郷通	平安・中世	58	冠原船跡	靈山町石田	城館跡	中世
14	見入石道跡	靈山町石田	散布地	縄文・古墳	59	五郎内道跡	靈山町山戸田	散布地	奈良
15	鷹屋敷A道跡	靈山町石田	散布地	縄文	60	花水道跡	靈山町山戸田	散布地	平安
16	鷹屋敷B道跡	靈山町石田	集落跡	縄文・中世	61	道作A道跡	靈山町山戸田	散布地	奈良
17	鷹屋敷船跡	靈山町石田	城館跡	中世	62	道作B道跡	靈山町山戸田	散布地	縄文
18	万田川道跡	靈山町石田	散布地	旧石器	63	北田道跡	靈山町山戸田	散布地	平安
19	靈山閣道跡	靈山町石田	散布地	縄文	64	愛宕船跡	靈山町山戸田	城館跡	中世
20	蛇冠道跡	靈山町石田	製鐵跡	中世	65	八島船跡	靈山町山戸田	城館跡	中世
21	千石井道跡	靈山町大石	散布地	縄文	66	西井船跡	靈山町山戸田	城館跡	中世
22	舟天入道跡	靈山町大石	散布地	奈良	67	大桜船跡	靈山町山戸田	城館跡	中世
23	岩平A道跡	靈山町大石	散布地	縄文	68	堀ノ内道跡	靈山町山戸田	散布地	平安
24	岩平B道跡	靈山町大石	散布地	縄文	69	本郷跡	靈山町山戸田	城館跡	中世
25	岩平C道跡	靈山町大石	散布地	縄文	70	明正寺船跡	靈山町掛田	城館跡	中世
26	竹ノ内A道跡	靈山町大石	散布地	縄文・奈良	71	明正寺板碑	靈山町掛田	石造物	中世
27	竹ノ内B道跡	靈山町大石	散布地	縄文	72	内宮道跡	靈山町掛田	散布地	縄文
28	家ノ入道跡	靈山町大石	散布地	縄文	73	愛宕大船跡	靈山町下小国	城館跡	中世
29	葛田道跡	靈山町大石	散布地	縄文	74	高梨敷道跡	靈山町下小国	散布地	縄文・奈良
30	坊ノ内道跡	靈山町大石	散布地	縄文	75	沢川道跡	靈山町下小国	散布地	縄文
31	田代道跡	靈山町大石	散布地	縄文	76	小国城跡	靈山町下小国	城館跡	中世
32	小原船跡	靈山町大石	城館跡	中世	77	行人田塚	靈山町下小国	塚	中世
33	小坂道跡	靈山町大石	散布地	縄文	78	行丁田道跡	靈山町下小国	散布地	縄文
34	横木道跡	靈山町大石	散布地	縄文	79	宮道跡	靈山町下小国	散布地	平安
35	藤本A道跡	靈山町大石	散布地	縄文・奈良	80	水溝道跡	靈山町石田	散布地	縄文
36	藤本B道跡	靈山町大石	散布地	縄文	81	孫老内道跡	靈山町石田	散布地	縄文・弥生
37	魔王道跡	靈山町大石	散布地	縄文	82	横木道跡	靈山町石田	散布地	縄文
38	近江原敷道跡	靈山町大石	散布地	弥生・奈良	83	大小道跡	靈山町石田	散布地	奈良・平安
39	宮協道跡	靈山町大石	寺院跡	中世～近世	84	大船跡	靈山町石田	城館跡	中世
40	西船道跡	靈山町大石	散布地	弥生	85	北船道跡	靈山町石田	散布地	縄文・古墳
41	津方道跡	靈山町大石	散布地	縄文	86	中川道跡	靈山町石田	散布地	縄文
42	松ヶ倉道跡	靈山町大石	散布地	縄文	87	根古原道跡	靈山町石田	散布地	縄文・弥生
43	大石台道跡	靈山町大石	散布地	縄文・奈良・平安	88	神明前道跡	靈山町石田	散布地	縄文
44	平道跡	靈山町大石	散布地	縄文	89	小船跡	靈山町石田	城館跡	中世
45	代草山船跡	靈山町大石	城館跡	中世	90	宝直道跡	月見町布川	散布地	

表1-2 上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時期	No	遺跡名	所在地	種別	時期
91	宝直館跡	月齢町布川	城館跡	中世	110	飯森遺跡	月齢町御代田	散布地	古墳～平安
92	田代道跡	靈山町石田	散布地	縄文	111	旭作道跡	月齢町御代田	散布地・製鉄跡	不明
93	大城館跡	靈山町石田	城館跡	中世	112	昌吉沢遺跡	月齢町御代田	散布地	縄文
94	金子坂遺跡	月齢町布川	製鉄跡	中世・近世	113	花賀跡	月齢町御代田	城館跡	中世
95	五郎兵衛前跡	月齢町布川	城館跡	中世	114	川原遺跡	月齢町御代田	散布地	縄文
96	上中吉原道跡	月齢町布川	散布地	縄文	115	楓／内入山館跡	月齢町御代田	城館跡	中世
97	間道跡	月齢町御代田	城館跡	中世	116	楓／内山道跡	月齢町布川	散布地	不明
98	中城館跡	靈山町石田	城館跡	中世	117	楓／内道跡	月齢町布川	集落跡	縄文
99	蛇王ノ道跡	月齢町御代田	散布地	縄文	118	椎原古墳	月齢町布川	古墳	
100	渋谷館跡	月齢町御代田	城館跡	中世	119	岡ノ下A道跡	月齢町御代田	散布地	奈良・平安
101	前柳館跡	月齢町御代田	城館跡	中世	120	岡ノ下B道跡	月齢町御代田	散布地	奈良・平安
102	殿城館跡	月齢町御代田	城館跡	中世	121	西遺跡	月齢町布川	散布地	縄文
103	澤田遺跡	月齢町御代田	散布地	古墳～平安	122	殿上前跡	月齢町月館	城館跡	近世
104	岡ノ沢館跡	月齢町御代田	城館跡	中世	123	月見館跡	月齢町月館	城館跡	中世
105	澤田上船跡	月齢町御代田	城館跡	中世	124	三郎内船跡	月齢町布川	城館跡	中世
106	女鹿ノ船跡	月齢町御代田	城館跡	中世	125	竹ノ内遺跡	月齢町布川	散布地	縄文
107	白山船跡	月齢町御代田	城館跡	中世	126	小林内遺跡	月齢町布川	散布地	縄文
108	西遺跡	月齢町御代田	散布地	奈良・平安	127	袖館跡	月齢町布川	城館跡	中世
109	春山船跡	月齢町御代田	城館跡	近世					

広瀬川とその支流域には南北朝期～戦国期の城館跡が多い。調査を実施した上ノ台館跡(1)の他、大館跡(84)、小館跡(89)、懸田城跡(55)、愛宕大館跡(73)、小国城跡(76)等、多くの中世城館跡が確認されている。上ノ台館跡の南には、15世紀から16世紀頃の屋敷跡が確認された沼ヶ入遺跡(4)や福田遺跡(5)があり、密接な関係を有していた可能性が考えられる。

伊達市保原地区

伊達市保原町では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、代表的遺跡については、図6の範囲外についても記載した。

旧石器時代 積典B遺跡で、旧石器時代の可能性がある剥片が採取されている。

縄文時代 全時期を通じて確認されている遺跡が少なく、保原町域内の縄文時代については不明な点が多い。大鳥城跡(167)では、早期の土器が出土している。舟橋遺跡(199)では、早期～前期の可能性が高い石器製作跡と考えられる石器集中地点が確認された。中期は遺跡数が少なく、我宜遺跡で土器が採集されているだけである。後期以降は、北前遺跡(239)・一本杉B遺跡(221)で後期の埋設土器が見つかっているが、晚期は確認されていない。

弥生時代 弥生時代では、前期の遺跡は確認されていない。また、大半の遺跡では土器が出土しているののみだが、中期の土器が出土した大鳥城跡(167)、一本杉B遺跡(221)、楓内遺跡(151)、平遺跡(205)、後期の土器が出土した大泉みずほ遺跡(232)、舟橋遺跡(199)等がある。大泉みずほ遺跡では、土坑等の遺構も確認されていて、付近に集落跡が存在する可能性がある。

古墳時代 伊達市保原町周辺は福島盆地北部の中でも古墳が集中する地域である。前期では、大



図6 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺の遺跡位置図

泉みずほ遺跡(232)で10基の方形周溝墓が確認された。菖蒲沢A遺跡(196)では墳丘等があったのかは不明だが、埋葬施設だけが見つかっている。中期は、大泉みずほ遺跡で円墳が見つかっている。また、粘土櫛を埋葬施設として持つ高野古墳(240)も中期と推定されている。

後期から終末期にかけては、大泉みずほ遺跡で後期末頃と推定される前方後円墳が、大塚古墳群(237)では横穴式石室を持つ円墳が確認されている。愛宕山古墳では単龍環頭大刀が、内山古墳(165)では麻手刀と勾玉が出土している。

集落遺跡では、今回報告する中室内遺跡(1)を初め、大鳥城跡(167)、大泉みずほ遺跡(232)等で前期の堅穴住居跡が確認されている。中期は、保原城跡(189)で堅穴住居跡を検出している。また、栄町C遺跡、宮下遺跡(191)では溝跡から多量の土器が出土していて、付近に集落跡がある可能性が高い。後期から終末期では、桐ノ木遺跡(216)、牡丹原遺跡(217)、宮下遺跡で堅穴住居跡や溝跡が確認されている。

古代 古代の遺跡は多数確認されているが、奈良時代は、牡丹原遺跡(217)と五斗蒔B遺跡(223)で遺構・遺物が確認されている程度で、多くが平安時代の遺跡である。平安時代の遺跡は、保原城跡(189)、一本杉B遺跡(221)、桐ノ木遺跡(216)、五斗蒔B遺跡(223)等が調査されている。五斗蒔B遺跡では、井戸跡から「漆原」と書かれた墨書き土器が出土しているが、近隣には現在でも「漆内」、「前原」といった地名が見られ、平安時代における地名を示している可能性がある。

中世 保原町域では、城館に関わる遺跡が多い。中室内遺跡(1)から南東に600m程の場所には、伊達氏初代伊達朝宗が居城としたと伝わる高子館跡(149)がある。城館跡としては、保原城跡(189)、大鳥城跡(167)、富沢城跡等で調査が実施されている。保原城跡は、14~16世紀頃には在地領主の館または宗教関連施設として機能し、16世紀中葉頃に戦国期の城館として機能が変化すると推定されている。この他、舟橋遺跡(199)では城館跡または寺院跡と推定される区画施設が見つかっている。大地内A遺跡(197)でも屋敷や寺院地と考えられる区画溝があり、井戸跡内からは板碑や板碑の未完成品が出土している。これ以外にも、大河内館跡(174)、大立目館跡、高成田館跡、中島館跡(161)、平館跡(204)等が存在する。城主が明らかなものは少ないが、伊達氏の家臣やその配下との関連が考えられている。

近世 近世初期には、信夫郡・伊達郡は蒲生領、上杉領、幕府領、本多領、幕府領と移り変わり安定しない。そして、寛保2年(1742年)に、松平定賢が白河藩主となった後に、保原地方の17村が白河藩の飛地領とされ、出張所である保原陣屋(189)が保原城跡に置かれた。

伊達郡桑折町

桑折町では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要なものを概観してみたい。

旧石器時代 平林遺跡(7)からは、県内最古級の後期旧石器時代前半期の石器が出土している。

縄文時代 川原田遺跡(5)では、早期・前期・後期・晩期の土器が少量出土し、落し穴を確認し

表2-1 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	中室内遺跡	保原町上保原	集落	古墳・古代・中世	51	松原下船跡	桑折町松原	城郭跡	中世
2	中室内船跡	保原町上保原	城館跡	中世	52	松原船跡	桑折町松原	集落跡・城郭跡・平安・中世	
3	日照田遺跡	桑折町松原	集落・狩場	縄文・平安・中世	53	成田西船跡	桑折町成田	城郭跡	中世
4	館ノ前遺跡	桑折町松原	狩場	縄文・平安	54	成田古船跡	桑折町成田	城郭跡	中世
5	川原山遺跡	桑折町松原	集落	縄文・平安	55	寺山遺跡	桑折町平沢	散布地・社寺跡	縄文・中世
6	輪王寺跡	桑折町半田	社寺跡	中世・戦国	56	坊ノ内船跡	桑折町成田	城郭跡	中世
7	平林寺跡	桑折町南半田	散布地	旧石器	57	坊ノ内道路	桑折町成田	散布地	平安・中世
8	古矢船跡	桑折町南半田	城館跡・散布地	旧石器・中世	58	万正寺中敷造跡	桑折町万正寺	城郭跡・社寺跡	中世
9	古矢船跡	桑折町南半田	散布地	旧石器	59	官本船跡	桑折町万正寺	城郭跡	中世
10	大梅ノ前船跡	桑折町南半田	城館跡	中世	60	つじヶ岡遺跡	桑折町万正寺	社寺跡	中世・近世
11	明元寺遺跡	桑折町南半田	散布地・社寺跡	縄文・中世	61	田植地遺跡	桑折町成田	石造物	中世・近世
12	八幡神社跡	桑折町南半田	城館跡	中世	62	大五輪道跡	桑折町万正寺	墓	中世
13	八幡神社跡	桑折町南半田	城館跡・社寺跡	中世	63	下万正寺道路	桑折町万正寺	社寺跡	中世
14	御堂内屋敷跡	桑折町谷地	城館跡	中世	64	上ノ台道路	桑折町万正寺	散布地	平安
15	上り船跡	桑折町谷地	城館跡	中世	65	土ノ井内道路	桑折町成田	集落跡	中世
16	後堤ノ馬場道路	桑折町伊達崎	散布地	縄文・奈良・平安	66	成田窯跡	桑折町成田	窯跡	平安
17	猪ノ馬場道路	桑折町伊達崎	城館跡	中世	67	成田前窯跡	桑折町松原	窯跡	平安
18	台道路	桑折町伊達崎	散布地	異文・古墳～平安	68	馬場道路	桑折町成田	集落跡	中世・近世
19	桑折町山城跡	桑折町万正寺地	城館跡	中世	69	新宿道路	桑折町成田	集落跡	奈良・中世・近世
20	鍵音寺境内	桑折町万正寺	社寺跡・散布地	中世・近世	70	赤坂窯跡	桑折町赤坂	窯跡	近世
21	万正寺道路	桑折町万正寺	散布地	縄文	71	光福寺跡	桑折町興福寺	社寺跡	中世
22	大瀬戸跡	桑折町万正寺	集落跡	平安・中世	72	桑折台道路	桑折町台	散布地・路跡	平安・近世
23	鶴河船跡	桑折町南半田	城館跡		73	法円寺船跡	桑折町北町	城郭跡	中世
24	庵草原跡	桑折町南半田	散布地	縄文・弥生	74	勝磨船跡	桑折町車場	城郭跡	中世・近世
25	二木本道路	桑折町南半田	散布地	縄文・中世	75	委代所官邸	本町道跡・桑折町障垣・本町	城郭跡・集落跡	中世・近世
26	大瀬戸跡	桑折町西大瀬戸	城館跡	中世	76	神十郎船跡	桑折町船	城郭跡	中世
27	朝ノ雲船跡	桑折町南半田	城館跡	中世	77	左衛門船跡	桑折町上郡	城郭跡	中世
28	暁上古城跡	桑折町上郡	城館跡	中世	78	林泉寺前道路	桑折町上郡	散布地	縄文
29	日暮船跡	桑折町下郡	散布地	縄文	79	吉吉船跡	桑折町上郡	城郭跡	中世
30	下郡道路	桑折町下郡	散布地	縄文	80	舟形船跡	桑折町上郡	城郭跡	中世
31	中久船跡	桑折町下郡	城館跡	中世	81	佐野道路	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
32	船ノ下郡船道路・桑折町下郡	桑折町下郡	散布地・城館跡	縄文・中世	82	細町塙田遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
33	下郡古船跡	桑折町下郡	城館跡	中世	83	中郡道路	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
34	下郡小船跡	桑折町下郡	城館跡	中世	84	官前道路	桑折町上郡	城郭跡・散布地	古墳～中世
35	下丙船跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世	85	官前船跡	桑折町上郡	城郭跡	古墳～中世
36	伊達崎城跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世	86	沖沢田遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
37	櫻舟跡	桑折町下郡	散布地	古墳～平安	87	沖船跡道路	桑折町上郡	集落跡	古墳～平安
38	中畠載跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世	88	長者船跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
39	垂鳥道路	桑折町万正寺	散布地	縄文・平安	89	吉沼道路	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
40	通場内道路	桑折町通場前	城館跡	中世	90	柳ノ目道路	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
41	町営道路	桑折町町営・上郡	散布地	縄文・弥生	91	大畠道路	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
42	朱浦・大久保道路	桑折町松原	散布地	縄文	92	草野目古墳群	見附町草野目・桑折町伊達崎	古墳	古墳
43	花水寺跡	桑折町平沢・成田	社寺跡	平安	93	高寺魔寺跡	福島市飯坂町	社寺跡	平安
44	平沢寺跡	桑折町平沢	社寺跡・塚	平安	94	柳沢道路	福島市飯坂町	散布地	平安
45	上城跡	桑折町平沢	城館跡	中世	95	平林道路	福島市飯坂町	散布地	縄文
46	伴城跡	桑折町平沢	城館跡	中世	96	菅表道路	福島市飯坂町	散布地	縄文
47	平沢道路	桑折町平沢	散布地	旧石器	97	小姓寺西造跡	福島市飯坂町	散布地	古墳～平安
48	本根載船跡	桑折町平沢	城館跡		98	塙野目船跡	福島市飯坂町	城郭跡	中世
49	常陸船跡	桑折町万正寺	城館跡	中世	99	堀庭道路	福島市飯坂町	散布地	縄文
50	柳沢道路	桑折町松原	散布地	縄文	100	外屋敷道路	福島市飯坂町	散布地	平安

表2-2 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
101	上岡道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文～平安	152	岩谷道跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
102	上岡館跡	福島市飯坂町	城館跡	昭和～戰・中世	153	田向道跡	保原町上保原	散布地	中世・近世
103	反町道跡	福島市飯坂町	散布地	平安	154	京口道跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
104	暁ノ上道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安	155	上ノ原館跡	保原町上保原	城館跡	中世
105	増田山城跡	福島市飯坂町	塚	中世	156	下ノ台道跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
106	久保道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文	157	大割道跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
107	増田道跡	福島市飯坂町	城館跡	中世	158	高畠道跡	保原町上保原	散布地	奈良
108	暁ノ前道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安	159	名場ノ内道路	保原町上保原	散布地	古墳～平安
109	尾原道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安	160	津呂内道跡	保原町上保原	散布地	古墳
110	平野幾寺跡	福島市飯坂町	社寺跡	平安	161	中島館跡	保原町上保原	城館跡	中世
111	八景櫻巻道跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安	162	星の宮道跡	保原町上保原	散布地	縄文～古墳
112	船越敷跡	福島市下飯坂	城館跡	中世	163	神明町道跡	保原町上保原	散布地	奈良・平安
113	鳥ノ目道跡	福島市官代	散布地	奈良・平安	164	正地内道跡	保原町上保原	散布地	縄文～中世
115	甚六郷道跡	福島市官代	散布地	平安・近世	165	内山古墳	保原町上保原	古墳	古墳
116	大原敷道跡	福島市官代	散布地	奈良・平安	166	百塚	保原町上保原	塚	中世
117	宮代町跡	福島市官代	城館跡	平安	167	大鳥城跡	保原町大拂	城館跡	縄文・古墳～中世
118	前田道跡	前田	散布地	奈良・平安	168	太日向道路	保原町大拂	散布地	古墳～平安
119	瀬戸川堂塲跡群	瀬戸場	塲跡	奈良・平安・近世	169	生町A道跡	保原町生町	散布地	古墳～平安
120	側田館跡	側田	城館跡	中世	170	絶音塚古墳	保原町五丁目	古墳	古墳
121	一本木道跡	一本木	散布地	平安	171	五丁目道跡	保原町五丁目	散布地	古墳
122	東本場道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	172	牛生町B道跡	保原町牛生町	散布地	古墳～平安
123	長倉道跡	籠ノ内	城館跡	中世	173	実町道跡	保原町実町	散布地	古墳～平安
124	館ノ内古墳	館ノ内	古墳	古墳	174	大河内道跡	保原町前田町	城館跡	中世
125	金秀寺道跡	広前	散布地	縄文・平安	175	前田町道跡	保原町前田町	散布地	縄文・古墳・奈良
126	修驗伊達家棲業院田跡・中畑	社寺跡	中世・近世	176	市柳道跡	保原町牛一柳	散布地	古墳～平安	
127	三島屋敷跡	北島	城館跡	中世	177	野崎鶴音塚古墳	保原町下野崎	古墳	古墳
128	中畑道跡	中畑	散布地	平安・中世	178	青森館跡	保原町東宮下	城館跡	中世
129	中志和道跡	中志和田	散布地	縄文	179	京門道跡	保原町京門	散布地	縄文～平安
130	越川道跡	越川	散布地	奈良・平安	180	早稲田道跡	保原町早稲田	散布地	古墳～平安
131	新町B道跡	川原町	散布地	平安	181	小壹B道跡	保原町小壹	散布地	平安・中世
132	川原町道跡	川原町	散布地	奈良・平安	182	東小壹道跡	保原町東小壹	散布地	中世
133	草道跡	箱崎	散布地	奈良・平安	183	古川雁道跡	保原町古川瀬	散布地	中世
134	宝玄道跡	箱崎	散布地	奈良・平安	184	郡山道跡	保原町郡沢	散布地	奈良
135	前崎大藍拍跡	前崎	城館跡	中世	185	久保道跡	保原町所沢	散布地	古墳～平安
136	大館道跡	前崎	散布地	平安	186	八光内道跡	保原町所沢	散布地	奈良・平安
137	川岸道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	187	久保道跡	保原町久保	散布地	古墳
138	荒見敷道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	188	室町B道跡	保原町室町	散布地	平安・中世
139	笠ノ内道跡	伏黒	鬼塚跡・散布地	奈良・平安・近世	189	原城跡・佐原陣附郭	保原町宮下	城館跡・その他	中世・近世
140	北堀敷道跡	伏黒	散布地	古墳・奈良	190	道場塲跡	保原町大泉	散布地	古墳
141	南原敷道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	191	宮下道跡	保原町宮下	散布地	古墳～中世
142	伏黒館跡	伏黒	城館跡	中世	192	岡代道跡	保原町岡代	散布地	古墳～平安
143	宮本道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	193	村岡館跡	保原町村岡	城館跡	中世
144	宮本街道跡	伏黒	散布地	平安	194	村岡道跡	保原町村岡	散布地	古墳～平安
145	津々道跡	箱崎	散布地	奈良・平安	195	大船道跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
146	津ノ原道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	196	昌蒲沢A道跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
147	岩ノ下道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	197	大地内A道跡	保原町大泉	集落跡・散布地	縄文～中世
148	楽郎舟道跡	伏黒	散布地	奈良・平安	198	大地内C道跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
149	高子船跡	保原町上保原	城館跡	縄文・中世	199	舟橋道跡	保原町舟橋	集落跡・散布地	縄文～中世
150	高子金山跡	保原町上保原	その他の	中世・近世	200	大地内B道跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
151	櫻内道跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安	201	大田中道跡	保原町大田中	散布地	古墳
					202	愛宕塚古墳群	保原町大泉	古墳	古墳

表2-3 中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
203	荒瀬川B道路	保原町大泉	古墳	古墳	231	前原船跡	保原町二井田	城船跡	中世
204	平船跡	保原町柱田	城船跡	中世	232	大泉みづば遺跡	保原町大泉	古墳・散布地	弥生～近世
205	平道路	保原町柱田	散布地	弥生～平安	233	高野B道路	保原町大泉	散布地	古墳～平安
206	宮ノ内C道路	保原町柱田	散布地	弥生・古墳・平安	234	北原船跡	保原町金原田	城船跡	中世
207	宮ノ内C道路	保原町柱田	散布地	古墳	235	大塚A古墳	保原町大泉	古墳	古墳
208	宮ノ内A道路	保原町柱田	散布地	古墳～平安	236	大塚B古墳	保原町大泉	古墳	古墳
209	宮ノ内B道路	保原町柱田	散布地	平安	237	大塚古墳群	保原町大泉	古墳	古墳
210	兜山遺跡	保原町柱田	散布地	古墳～平安	238	寄居船跡	保原町金原田	城船跡	中世
211	六万坊道路	保原町六万坊	散布地	古墳～平安	239	北坂道路	保原町金原田	散布地	古墳～中世
212	大安寺跡	保原町大立目	寺社跡	中世	240	高野古墳群	保原町金原田	古墳	古墳
213	北の船跡	保原町大立目	城船跡	中世	241	矢別伝道跡	梁川町栗野	古墳	古墳
214	加古内A道路	保原町二井田	散布地	奈良・平安	242	並柳遺跡	梁川町柳田	散布地	中世
215	加古内B道路	保原町二井田	集落跡	古墳～平安	243	壹賀船跡	梁川町柳田	城船跡	中世
216	朝ノ木遺跡 朝ノ木古墳群	保原町二井田	古墳	古墳	244	東郷内道路	梁川町柳田	散布地	奈良～中世
217	牡丹原遺跡	保原町二井田	集落跡	古墳～平安	245	町道道路	梁川町柳田	散布地	純文～平安
218	五小路A道路	保原町二井田	散布地	古墳～平安	246	太字屋戲跡	梁川町栗野	城船跡	中世
219	小作原道路	保原町大泉	散布地	古墳～平安	247	大船遺跡	梁川町大船	城船跡・散布地	平安・中世
220	一本杉C道路	保原町二井田	散布地	純文～平安	248	東土橋道路	梁川町東土橋	集落跡・散布地	平安～近世
221	一本杉B道路	保原町二井田	散布地	純文～近世	249	新田台道路	梁川町新田	城船跡・散布地	純文～奈良～中世
222	一本杉A道路	保原町二井田	散布地	古墳～中世	250	花立道路	梁川町細谷	散布地	純文・平安・中世
223	五井B道路	保原町二井田	集落跡	奈良・平安	251	北沢道路	梁川町細谷	城船跡	中世・近世
224	仁井田船跡	保原町二井田	城船跡	中世	252	草野日城跡	国見町塙野日	城船跡	中世
225	小島A道路	保原町二井田	散布地	奈良・平安	253	正法寺船跡	国見町塙野日	城船跡	中世
226	大釜道路	保原町二井田	散布地	古墳～平安	254	反町祭祀	国見町施江	散布地	古墳
227	正監道路	保原町二井田	散布地	古墳～平安	255	反船跡	国見町施江	城船跡	中世
228	正監船跡	保原町二井田	城船跡	中世	256	東原船跡	国見町施江	城船跡	中世
229	山守道路	保原町二井田	散布地	純文・古墳～中世	257	船江庵寺跡	国見町施江	古寺跡	平安
230	南道路	保原町二井田	散布地	古墳	258	西船跡	国見町施江	城船跡	中世

た。林泉寺前遺跡(78)では、中期の土器・土偶・石器等が出土した。薩摩遺跡(24)では、晚期の土器・土偶・石器が出土し、27基の配石遺構が確認された。

弥生時代 確認されている弥生時代の遺跡は少なく、集落の様相等は明らかではない。現状では、薩摩遺跡(24)と隣接する二本木遺跡(25)及び川原田遺跡(5)から中期の土器が出土している。

古墳時代 町域北東の大字伊達崎から国見町塙野目にかけて、塙野目古墳群(92)が5世紀から7世紀初頭の間に造営される。また、沖船場遺跡(87)や長者畠遺跡(88)等、後期から終末期にかけての遺跡が阿武隈川の自然堤防上の伊達崎地区を中心に分布する。

古代 奈良・平安時代に入ると、新宿遺跡(69)、大櫃遺跡(22)、坊ノ内遺跡(57)、松原館跡(52)等で集落の一部が確認されている。川原田遺跡(5)では、2棟の掘立柱建物跡が確認されていて、1棟には廂が伴う可能性がある。また、縄釉陶器、灰釉陶器、耳皿、土鈴等、一般集落ではあまり見られない遺物が出土していて、有力者の屋敷の可能性がある。

生産遺跡では、町域南端の伊達市との境に、奈良・平安時代の須恵器窯跡である成田前窯跡(67)等があり、伊達市伊達窯跡群(118)等とともに窯跡群を形成している。

中世 中世の遺跡は、城館跡が多い。代表的な桑折西山城跡(19)は、戦国時代の天文元年

(1532年)、伊達氏14代稙宗が居城として築城した山城である。平場・堀切・土塁等の遺構がよく残っており、国の史跡に指定されている。また、この頃新たに、西山城麗の大槻遺跡(22)や二本木遺跡(25)に屋敷遺構が現れ、本町遺跡(75)に町屋状の建物がつくられるようになる。

その他にも、寺院跡と考えられる下万正寺遺跡(63)、中世前期の屋敷跡とみられる土井ノ内遺跡(65)、坊ノ内遺跡(57)等が存在する。新宿遺跡(69)では、堀跡、道跡が見つかっていて、道跡は近世に奥州街道が整備される以前の主要街道の可能性が高い。

近世 近世になると、本町遺跡(75)の南に隣接する地には、幕領代官所である桑折代官所(75)が置かれた。また、町域北部には、かつては佐渡金山、石見銀山とともに日本三大鉱山といわれた半田銀山があり、昭和25年まで探掘が行われていた。
(鶴見)

第4節 調査方法

上ノ台館跡、中室内遺跡、日照田遺跡、館ノ前遺跡の発掘調査では、原則的に公益財団法人福島県文化振興財團で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標IX系の座標で示している。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10m単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に1・2・3…と算用数字、西から東にA・B・C…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA 1・B 2・C 3…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土及び遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行った。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意して進めた。具体的には、竪穴住居跡・特殊遺構の一部は4分割法、その他の遺構は2分割法を採用した。掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用し、部分的に簡易造方で測量し、現場で結線した。断面図は、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化は、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。また、上ノ台館跡では、等高線の入った遺構配置図や丘陵地形の横断面図の作成等を航空写真測量で実施した。

遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真は35mm判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラを使用し、同一被写体の撮影を行った。また、中室内遺跡では、無人航空機搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録及び出土遺物については、報告書刊行後に公益財団法人福島県文化振興財團の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。
(丹治)

第1編 上ノ台館跡 (2次調査)

遺跡記号 DT-KNT2
所在地 伊達市霊山町下小国字上ノ台
時代・種類 中世の城館跡
調査期間 平成29年8月21日～12月15日
調査員 鶴見諒平・枝松雄一郎

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

上ノ台館跡は、福島県伊達市靈山町下小国字上ノ台に所在する。小国川北岸の丘陵部に位置する城館跡で、平成24年度に実施した分布調査で新たに発見された(福島県教育委員会2014)。上ノ台館跡は、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600m²の要保存範囲が確定していた(福島県教育委員会2016・2017)。このうち、8,700m²は平成28年度に1次調査を実施し、報告書が刊行されている(福島県教育委員会2018)。

今回の調査は、平成28年度に続く2次調査で、南北に延びる尾根上及び東側斜面の一部が調査区にあたり、1次調査区の南側に位置する。開始前の状況は山林である。

遺跡周辺の地形は、小国川よりも南側は傾斜が緩やかで比較的平坦な土地が広がっている。それに対し、小国川より北側は平坦な場所が少なく、急傾斜の丘陵が迫っている。

周辺には中世城館やその関連遺跡が多く分布している。上ノ台館跡のすぐ北側には遺跡範囲が一部重複する上ノ台遺跡、小国川を挟んで南側には沼ヶ入遺跡、福田遺跡等が所在する。(鶴見)

第2節 調査経過

上ノ台館跡の2次調査は、7月5日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示を受け、1,500m²を対象に平成29年8月21日～12月15日まで、延べ58日間実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

- 8月第4週：21日(月)から調査区の草刈りや縄張りを実施する。23日(水)から重機による表土除去を開始する。
- 8月第5週～：重機による表土除去を継続する。表土除去が軌道に乗り始め、遺構とみられる輪
- 9月第1週 郭が見えてきた。
- 9月第2週：5日(火)で表土除去が終了する。7日(木)にプレハブ・仮設トイレを設置し、8日(金)にはプレハブに器材を搬入する。
- 9月第3週：11日(月)から作業員の雇用を開始し、調査区までの通路の整備等を実施する。
- 9月第4週：19日(火)から尾根上の遺構検出作業を開始する。複数の小穴や土坑、竪穴住居跡を検出する。
- 9月第5週：26日(火)から土坑の調査を開始する。遺構検出作業では、小穴が掘立柱建物跡や柱列跡の柱穴であることが判明する。
- 10月第1週：4日(水)から斜面部の遺構検出作業を開始し、柱列跡を検出する。

第1図 上ノ台跡 (2次調査)

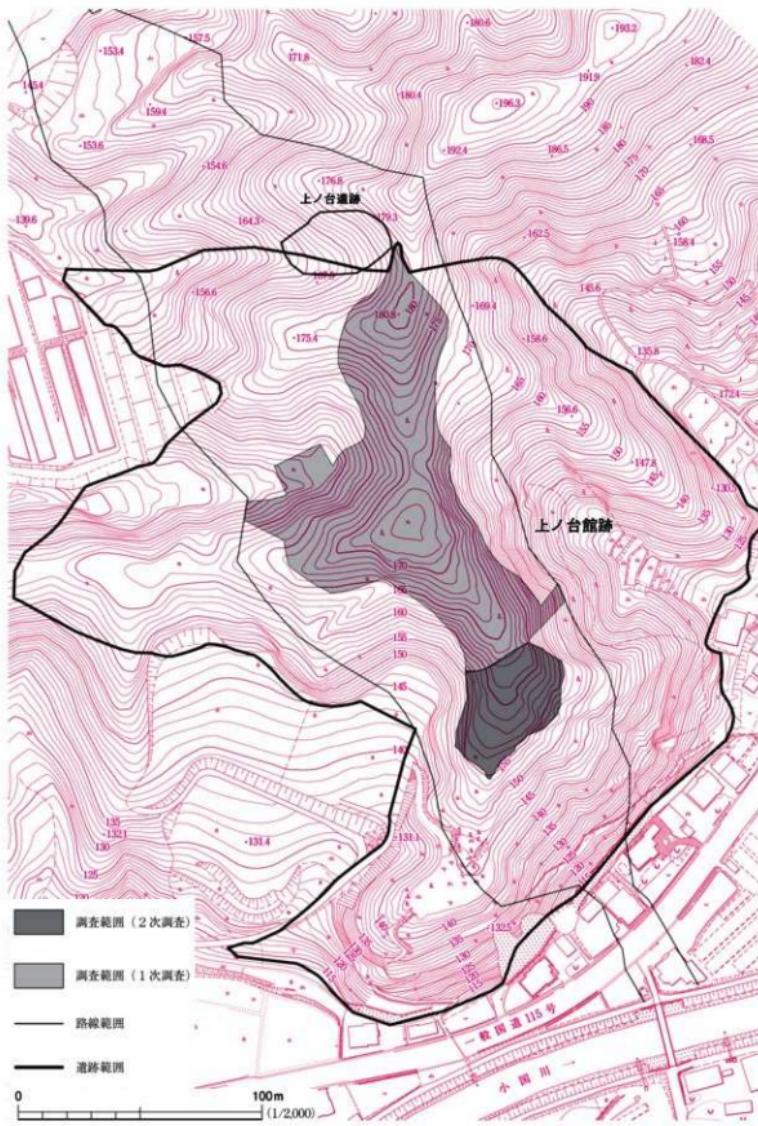


図1 調査区位置図

- 10月第2～5週：11日(水)に遺構検出作業が終了する。以後は、遺構の精査と記録作業を行う。
- 11月第1・2週：1日(水)に小穴以外の遺構の精査が終了する。遺構の記録作業と、小穴の調査を中心に行う。
- 11月第3週　　：17日(金)に小穴の調査が終わり、全ての検出遺構の調査が終了する。
- 11月第4・5週：調査区の写真撮影、現場からプレハブへの器材の撤収を行う。30日(木)で作業員の雇用を終了する。
- 12月第3週　　：13日(水)に仮設トイレの汲み取り、プレハブからの器材の撤収を行う。15日(金)には、航空写真測量を実施するとともに、プレハブ・仮設トイレを撤去する。
- 1月第4週　　：22日(月)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

(鶴見)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の2次調査区は、城館跡として登録されている範囲全体の中では南部にあたり、1次調査区の南側に隣接する箇所である。調査開始前の観察では、尾根上に複数の平場と思われる箇所が確認され、城館跡の本体部と推定されていた。

調査区内は、尾根上の比較的平坦な箇所と、東向きの斜面部とに分けられる。調査区は、北端が最高点、東端付近が最低点で、最高点と最低点との比高は7m程である。尾根筋は、傾斜はあるが比較的緩やかで、平坦部が階段状に続いている。遺構は、多くが尾根上に分布しているが、斜面部にも少数認められる。

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝跡2条、柱列跡7列、特殊遺構3基、小穴13基である。遺物がほとんど出土しなかったため、各遺構の時期や城館が機能していた時期については判断できなかった。また、測量調査時の観察で平場とされていた平坦部では、図2の横断面に示すように、明確な切岸や平場の造成は確認できなかった。一部に手を加えて利用している可能性はあるが、1次調査で確認された1号平場とした箇所以外では、もともとの地形に近い状態であると判断した。

なお、今回の調査で確認した遺構の番号は、1次調査からの連番としている。グリッドも、1次調査時に設定したグリッドから連続する番号を付している。

第1編 上ノ台跡（2次調査）

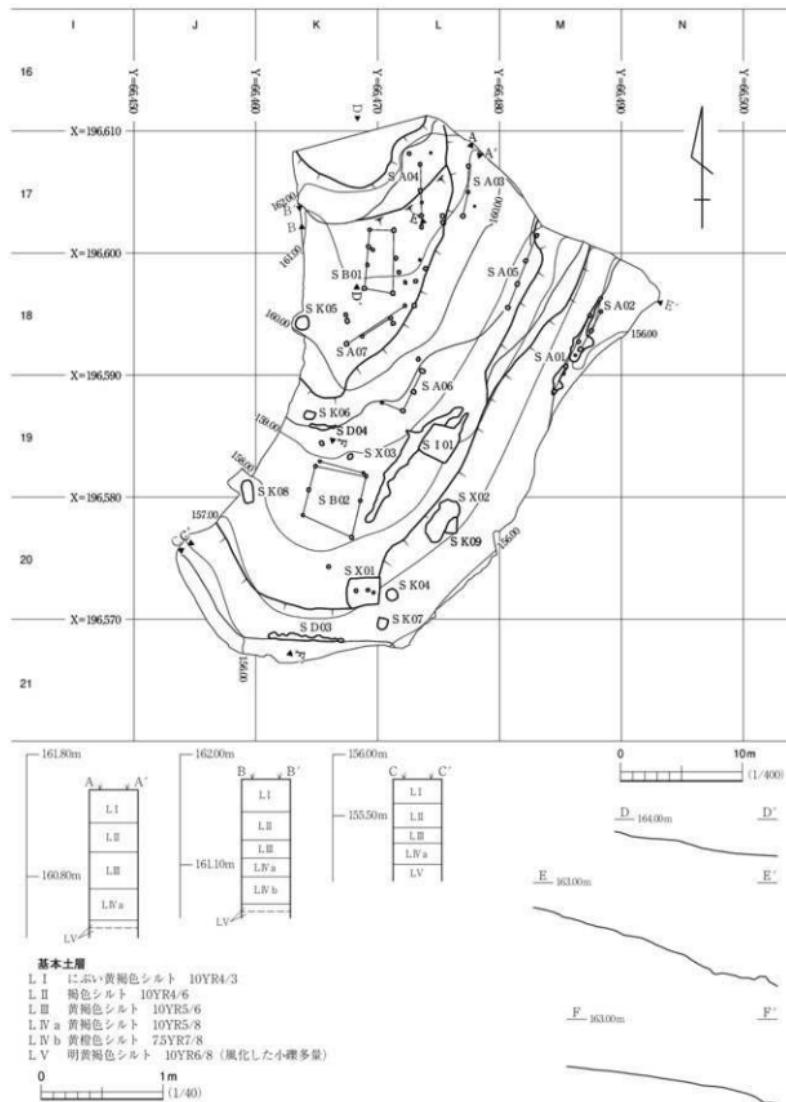


図2 遺構配置図・基本土層

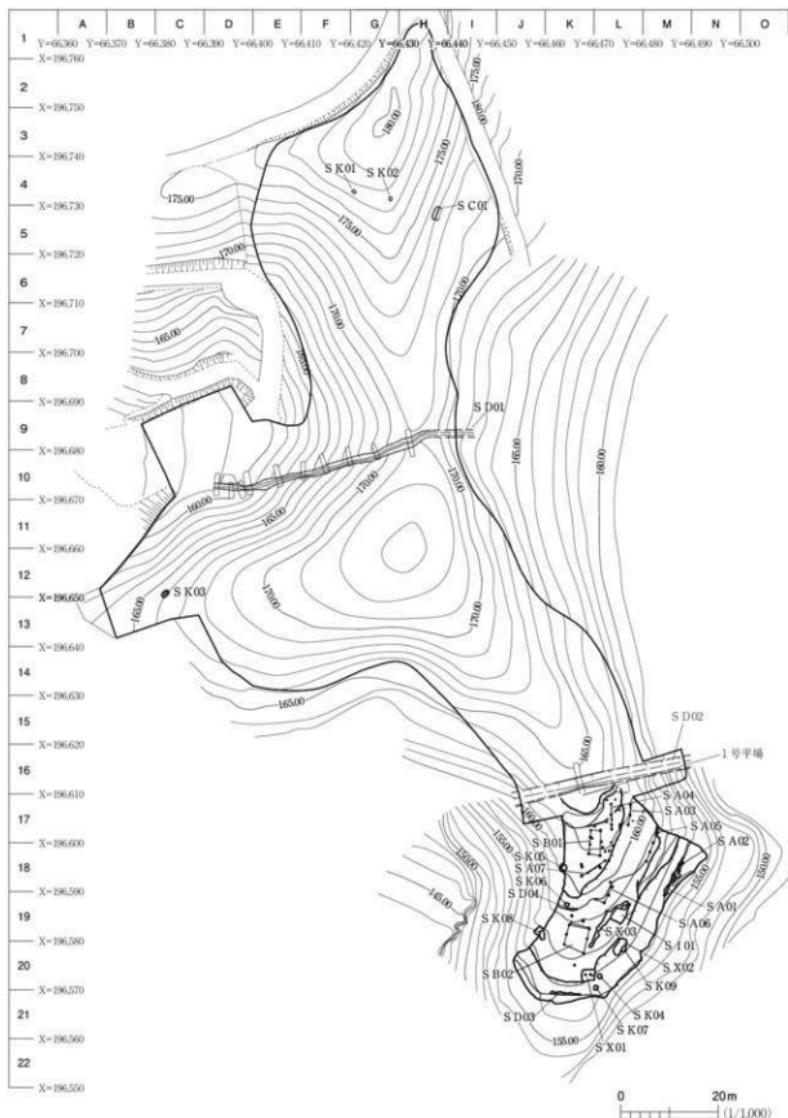


図3 上ノ台館跡1・2次調査区全体図

基本土層（図2）

基本土層は、調査区内の3地点(A-A'、B-B'、C-C')で土層を確認し、色調・土質の諸特徴からL I～Vの5層に分層した。

L Iは、表土とその直下の腐植土を一括した。

L IIは、褐色シルト層で、層厚は20～25cmである。L IIIへの漸移的な層で、一部の遺構内部にはこのL IIに起因する土が堆積している状況が確認できた。

L IIIは、黄褐色シルト層で、層厚はB-B'・C-C'地点では約13cmであるが、A-A'地点では約30cmと厚く堆積する。一部の遺構は、この層の上面で検出できた。

L IVは、2層に細分した。その内、L IV aとした黄褐色シルト層が、今回の調査で確認した大半の遺構の検出面である。層厚は15～25cmである。L IV bは、調査区内の一部でのみ確認できる黄橙色シルト層である。L IV aに比べ、風化が進行している。層厚は、約22cmである。

L Vは、遺跡が立地する丘陵の基盤層である。

（鶴見）

第2節 壺穴住居跡

今回の調査区では、壺穴住居跡を1軒検出した。出土遺物は僅かだが、その年代観から古代のもので、丘陵が城館として利用される以前の遺構と判断している。

1号住居跡 S I 01

遺構（図4、写真4・5）

調査区中央付近のL 19グリッドで検出した壺穴住居跡である。遺構検出面はL IV a上面で、尾根上の平坦部と斜面部との境付近に位置している。3号特殊遺構と重複していて、本遺構の方が古い。南に3mには2号特殊遺構、南西に5mには2号建物跡、北西に25mには6号柱列跡がある。

平面形は方形を基調とするが、カマド付近で僅かに外側に膨らむ。南東部は壁の立ち上がりを確認することができなかった。規模は、北辺で251m、西辺で236m、検出面からの深さは最大で42cmである。

住居内の堆積土は2層で、いずれも自然堆積土と判断した。傾斜地に立地しているため、斜面下位の東に行くほど堆積土が薄くなっている。特に、住居跡南東部では非常に薄いか確認できない状況で、検出段階での輪郭は不明瞭であった。住居跡の東～南東壁の大半は、後世に土砂の流出で失われたと考えられるが、城館跡として利用された際に削平を受けた可能性もある。

床面では、カマドの前面で小穴を1基検出した。P 1の平面形は隅がやや丸い方形で、一辺約27cm、床面からの深さは18cmである。堆積土は褐色シルトの単層である。P 1が柱穴だったとすると、その位置関係からカマドでの作業時に邪魔になるとみられる。柱痕も確認できなかつたた



図4 1号住居跡・出土遺物

め、P1の具体的な性格は不明である。この他、床面から周溝等は確認できなかった。

カマドは住居跡の北東角につくられていた。燃焼部が住居跡の壁面よりも外側にある点が特徴的大だが、底面付近が遺存するのみで、上部の大半が失われているため、詳しい構造は不明である。燃焼部は被熱により赤色化しており、特に中央付近が強く火を受けたことにより硬化していた。燃焼部の長さは58cm、幅は最大で61cmである。また、燃焼部の前面では、長軸60cm、短軸38cm、深さ12cmの楕円形の窪みを確認した。作業場とするには狭すぎるため、燃焼部から灰をかき出して集める箇所としてつくられたのであろうか。煙道部は、長さが106cm、煙道幅は最大で32cmで、煙出部の方に向かって底面標高が高くなっている。

カマド内の堆積土は、4層に分層した。 ℓ_1 が燃焼部、 $\ell_2 \sim \ell_4$ が燃焼部前面の窪み、 ℓ_3 が煙道部に堆積した土である。いずれの層も具体的な堆積要因は判然としない。なお、 ℓ_3 について

は、住居跡内堆積土の ℓ 1と近似した暗褐色シルトであるため、煙出部からの流入土の可能性がある。

遺物（図4、写真15）

遺物は土器器が1点出土した。図4-1はロクロ成形の杯の口縁部で、内面に黒色処理が施されている。小片だが、9世紀代のものと考えられる。

まとめ

本遺構は平安時代の住居跡である。規模が小さく、周辺で他に竪穴住居跡を確認できないことや、丘陵上に立地すること等から、日常的に利用するものではなく、何らかの作業小屋的な性格が想定される。

（鶴見）

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟確認した。所属時期は明確ではないが、城館跡に関わる建物跡の可能性が高いと考えている。

1号建物跡 S B 01

遺構（図5、写真6）

本遺構は、調査区北部のK 17・18、L 17・18グリッド、尾根上の比較的平坦な箇所で検出した掘立柱建物跡である。検出面はL IV a上面で、重複する遺構はない。東に2mには4号柱列跡、南に2mには7号柱列跡がある。

建物跡は、南北3間×東西1間で南北に長く、西側の柱列を主軸とするとN 5° Eを指す。東側の柱列のP 5～8が直線的に並んでいないため、やや不整な長方形となっている。

桁行は、東西ともに4個の柱穴で構成されていて、東側のP 5～8までの長さは5.18m(約17.1尺)、西側のP 1～4までの長さは4.86m(約16.0尺)となっている。

各柱穴の柱間の寸法は、西側では、P 1・2間が1.42m(約4.7尺)、P 2・3間が1.49m(約4.9尺)、P 3・4間が1.95m(約6.4尺)となり、P 3・4間が他に比して長い。東側では、P 5・6間が2.30m(約7.6尺)、P 6・7間が1.18m(約3.9尺)、P 7・8間が1.81m(約6.0尺)で、間隔が一定しない。梁行は南北とも柱穴は2本で、長さは北側で2.00m(約6.6尺)、南側で2.44m(約8.1尺)である。なお、P 2に隣接して確認したP 9は、P 6・P 7と同様の規模であり、関連する柱穴と推測されることから本遺構に含めて報告する。

各柱穴の平面形は、方形または隅が丸い方形で、一辺22～30cmである。検出面からの深さは、P 6・7・9は12～20cmであるのに対し、それ以外の柱穴では40～62cmと深く掘り込まれたものが多い。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はP 5だけである。P 5は、 ℓ 1が柱痕で太さ

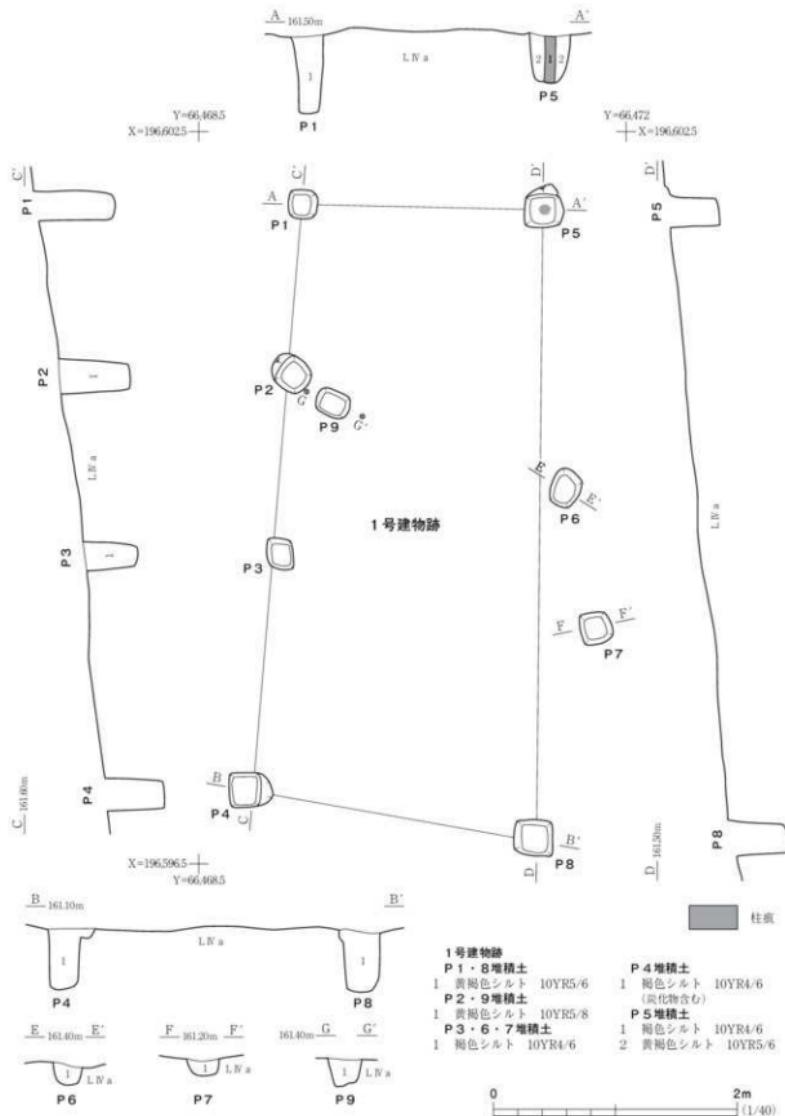


図5 1号建物跡

は約10cm、その周囲には ℓ 2とした黄褐色シルトを充填している。P5以外の柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、南北方向に桁行をもつ南北3間×東西1間の掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、2号建物跡や周囲の柱列跡とともに城館跡を構成する建物跡と推測される。

(鶴見)

2号建物跡 S B 02

遺構（図6、写真7）

本遺構は、調査区南部のK19・20グリッドで検出した掘立柱建物跡である。尾根上の平坦部に立地し、検出面はLIVaである。重複する遺構はないが、北に3mには4号溝跡、東に1mには3号特殊遺構、南西に3mには1号特殊遺構、西に4mには8号土坑がある。

建物跡は、南北2間×東西1間で南北に長く、東側の柱列を主軸とするとN13°Eを指す。桁行は東西ともに3個の柱穴で構成される。東側のP1～3までの長さは5.14m（約17.0尺）、西側のP4～6までの長さは4.16m（約13.7尺）と東側がやや長い。そのため、全体的にはやや歪んだ長方形を呈する。

各柱穴の柱間の寸法は、東側ではP4・5間が2.06m（約6.8尺）、P5・6間が3.08m（約10.2尺）、西側ではP1・2間が2.02m（約6.7尺）、P2・3間が2.14m（約7.1尺）となっており、P5・6間が他に比して長い。梁行は、北側のP1・4間が4.27m（約14.1尺）、南側のP3・6間が4.43m（約14.6尺）となっている。

各柱穴の平面形は、概ね歪んだ円形ないし隅が丸い方形で、規模は直径や一辺が24～30cmである。検出面からの深さは、P1・4は35cm前後であるのに対し、P2・3・5・6は10～20cmと浅い。

各柱穴の堆積土をみると、いずれの柱穴でも柱痕は確認できなかった。柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

本遺構の北側で確認したK19P3・4は、その位置関係から本建物跡と関連する可能性があることから、本建物跡で報告する。K19P3とP4との柱間は3.70m(12.2尺)で、本建物跡の梁行よりもやや狭い。平面形は円形を基調とし、直径が20cm前後で、本建物跡の柱穴よりもやや小さい。検出面からの深さは、K19P3が30cm、K19P4が12cmである。遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、南北方向に桁行をもつ南北2間×東西1間の掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、1号建物跡や周囲の柱列跡とともに城館跡を構成する建物跡と推測される。

(鶴見)

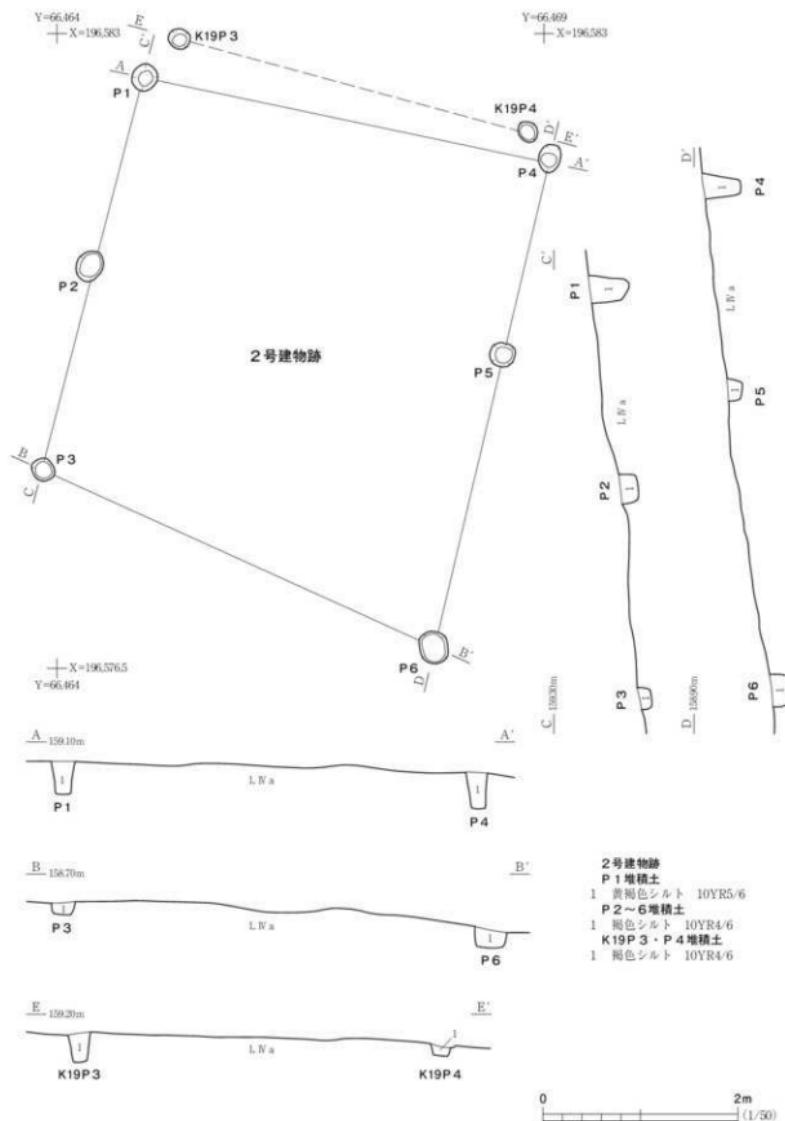


図6 2号建物跡

第4節 土 坑

今回の調査では、6基の土坑を確認した。8号土坑は平安時代以降と考えられるが、その他の土坑は、明確な所属時期や性格等を判断できる所見は得られなかった。

4号土坑 SK 04 (図7、写真8)

本遺構は、調査区南端付近のL 20グリッド、緩斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、西には1号特殊遺構が隣接し、南に1mには7号土坑がある。検出面はL IV a上面である。平面形は円形で、規模は東西96cm、南北98cm、検出面からの深さは10cmである。底面は、ほぼ平坦である。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構の所属時期や性格については不明だが、隣接する1号特殊遺構と関連する可能性がある。

(鶴 見)

5号土坑 SK 05 (図7、写真8)

本遺構は、調査区中央付近のK 18グリッド、尾根上の平坦部で検出した土坑である。重複する遺構はないが、北東に4.5mには1号建物跡、東に3mでは7号柱列跡がある。検出面はL III上面である。

平面形は歪んだ円形で、規模は東西109cm、南北110cmである。底面は二段になっていて、北部は掘り込みが浅い。検出面からの深さは南部で30cmであるが、北部では8~14cmである。

堆積土は2層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ 2にはL IVに起因する明黄褐色シルト塊が認められるため、壁の崩落土も含まれると考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。

(鶴 見)

6号土坑 SK 06 (図7、写真8)

本遺構は、調査区中央付近のK 19グリッド、尾根上の緩斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、南に隣接して4号溝跡がある。検出面はL IV a上面である。

平面形は歪んだ長方形で、規模は東西91cm、南北68cm、検出面からの深さは33cmである。断面形は擂鉢状になっている。

堆積土は2層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ 2は黄褐色シルトで、壁の崩落土を主体とした層と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。

(鶴 見)

7号土坑 SK 07 (図7、写真8)

本遺構は、調査区南端のL 20・21グリッド、南向きに傾斜する斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、北に隣接して2号特殊遺構と4号土坑がある。検出面はL IV a上面である。

平面形は、歪んだ長方形である。規模は、東西78cm、南北92cm、検出面からの深さは36cmである。底面は、若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

堆積土は3層に分層した。いずれも自然堆積土で、斜面上位から遺構内部に流入した状況が観察された。遺物は出土していない。

本遺構の所属時期や性格については不明である。

(鶴 見)

8号土坑 SK 08 (図7、写真8・15)

本遺構は、調査区南部の西端のJ 19・20グリッドで検出した土坑である。重複する遺構はないが、東に5mには2号建物跡がある。検出面はL III上面である。

平面形は長方形で、主軸方向はN 8°Wである。規模は、南北183cm、東西90cm、検出面からの深さは15cmである。底面は、若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

本遺構からは ℓ 1より古銭が1枚出土した。図7-1は、半分が欠けているが、宋銭の政和通宝または宣和通宝である。前者が1111年、後者が1119年の初鑄とされている。

古銭の示す年代からすれば、本遺構の所属時期は平安時代以降と考えられる。ただし、この古銭が伝世された可能性を考慮すると、本遺跡が城館跡として利用されていた時期の遺構の可能性もある。

(鶴 見)

9号土坑 SK 09 (図7、写真8)

本遺構は調査区南部のL 20グリッドに位置し、東向きの斜面に立地する土坑である。2号特殊遺構と重複していて、本遺構の方が古い。検出面はL IV a上面である。

平面形は不整形で、南北の長さは132cmである。東西の長さは、南辺では98cmだが、北辺では38cmと狭くなっている。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、重複関係から2号特殊遺構より古いと判断されるが、詳細な所属時期や性格等については不明である。

(鶴 見)

第1編 上ノ台跡（2次調査）

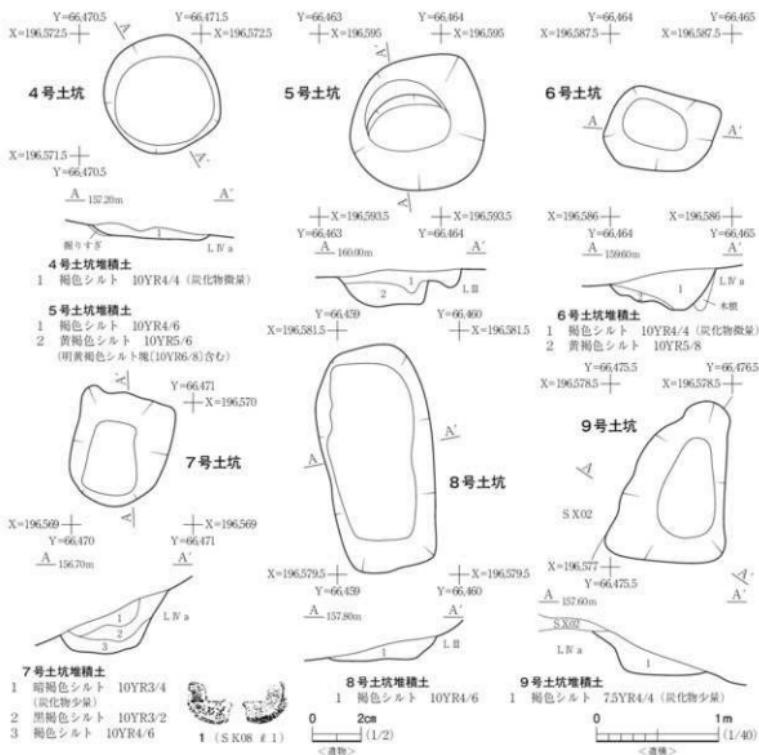


図7 4～9号土坑、出土遺物

第5節 溝 跡

溝跡は、2条検出した。いずれの溝跡も、斜面上位からの流水を排水する目的でつくられたと考えられ、掘立柱建物跡とともに城館跡に伴う遺構と推測される。

3号溝跡 S D 03 (図8、写真9)

本遺構は、調査区南端のK 21グリッド、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地する溝跡である。検出面はL IV a上面である。重複する遺構はないが、北東に2.5mには1号特殊遺構、東に3mには7号土坑がある。

溝跡は傾斜変換線に沿うように東西に延びていて、確認できた長さは6.18mである。南壁は直線

的だが、北壁は崩落のためか一定しない。構築時の状況を保っていると判断できる場所での幅は、14~30cmである。検出面からの深さは、最大で10cm程と浅い。

堆積土は2層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。 $\ell 2$ はLVに近似した明黄褐色砂質シルトで、壁の崩落土を主体とした層と考えられる。 $\ell 1$ は斜面上位から流入した状況が観察された。

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地すること、そして、この傾斜変換線に沿うようにつくられていることから、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、同様の特徴を持った4号溝跡と同時期と考えられる。そして、4号溝跡が2号建物跡と関連を持っていたと考えられることから、城館跡が機能していた時期のものと推測される。

(鶴見)

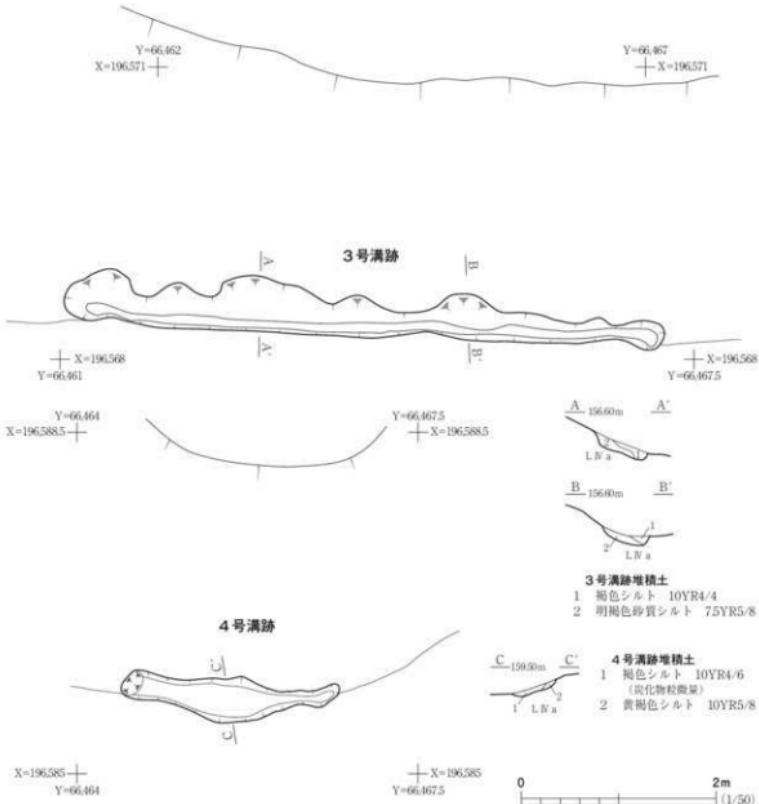


図8 3・4号溝跡

4号溝跡 S D 04 (図8)

本遺構は、調査区中央部付近のK 19グリッド、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地する溝跡である。検出面はL IV a上面である。重複する遺構はないが、北に6号土坑が隣接し、南に3mには2号建物跡がある。

溝跡は傾斜変換線に沿うように東西に延びていて、確認できた長さは221mである。幅は16～43cmで、中央付近が広い。検出面からの深さは6cm前後と非常に浅い。

堆積土は2層に分層した。いずれも自然堆積土で、斜面上位から遺構内部に流入した状況が観察された。

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地すること、そして、この傾斜変換線に沿うようにつくられていることから、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。排水の目的は、本遺構の下方にある2号建物跡へ直接水が流れで行かないようにするためと思われる。ただ、排水の機能を考えると、もう少し長くかつ深い方が望ましい。このため、後世の土砂の流出あるいは表土除去の際に一部を掘り下げ過ぎて部分的に失われた可能性も考えられる。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、同様の特徴を持った3号溝跡と同時期と考えられる。そして、2号建物跡と関連を持った遺構と考えられることから、城館跡が機能していた時期のもと推測される。

(鶴見)

第6節 柱列跡

柱列跡は、7列検出した。いずれも柵または塀等として機能していたと考えられる。年代を示す遺物は出土していないが、掘立柱建物跡とともに城館跡に伴う遺構と推測される。

1・2号柱列跡 S A 01・02

遺構 (図9、写真13)

1・2号柱列跡は、調査区東端のM18・19グリッドで検出した柱列跡である。これらの遺構は、東向きの斜面の途中、標高156m付近の僅かな平坦部とそれより下位の斜面部との傾斜変換線にあたる箇所に立地している。検出面はL IV a上面である。柱穴同士は重複していないが、1号柱列跡に伴う布掘りと2号柱列跡の一部が重複している。

1号柱列跡は4個の柱穴から構成され、南から北にP 1～4と呼称した。P 1～4の総長は7.16m(約23.6尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P 1・2間が2.26m(約7.5尺)、P 2・3間が2.26m(約7.5尺)、P 3・4間が2.33m(約7.7尺)とほぼ揃っている。

各柱穴の平面形は、方形ないし歪んだ円形で、規模は直径や一辺が26～28cmである。検出面からの深さは、49～59cmで、底面の標高は155.6m前後と揃っている。

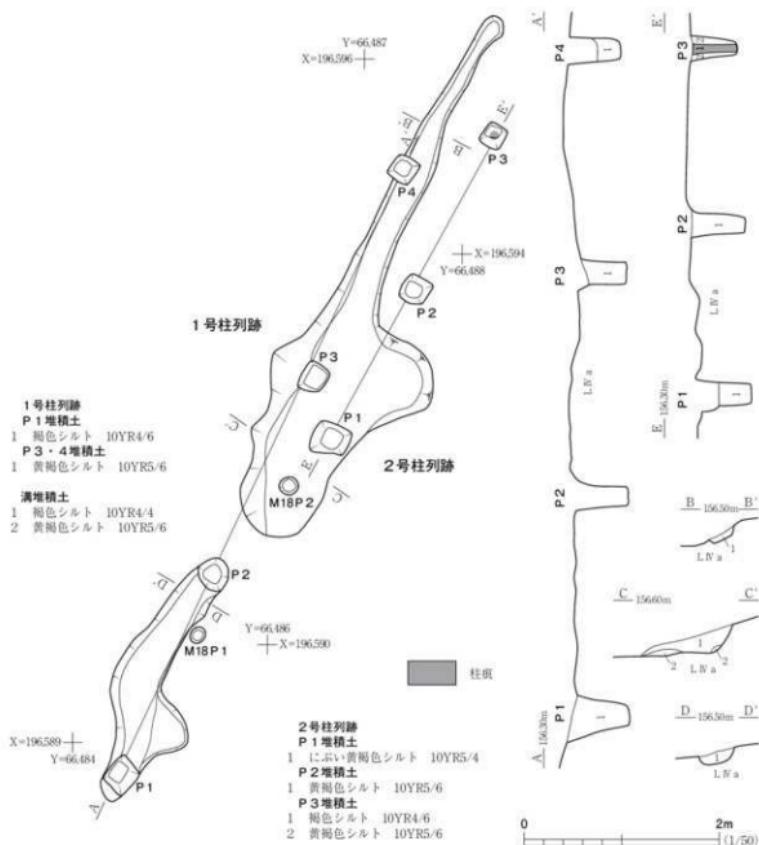


図9 1・2号柱列跡

各柱穴の堆積土は、P1・3・4は褐色シルトないし黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。P2は、調査時に崩落したため土層の記録を行うことができなかったことから、不明である。

なお、1号柱列跡には長さ8.56mの布掘り状の溝跡が伴う。中央部付近と南端部付近には木の根による攪乱があり、構築時の状態を留めていない。それ以外の箇所の計測値は最小15cm、最大47cm、検出面からの深さは最大で28cmである。底面は東に向かって僅かに傾斜している。堆積土は2層に分層した。P1～4に伴う布掘りの溝だとすれば、人为的に埋め戻した状況が観察されると予想していたが、明瞭な人為堆積であるという所見は得られなかった。そのため、機能時は埋

められずに埋んだ状況であった可能性もある。

2号柱列跡は3個の柱穴から構成され、南から北にP 1～3と呼称した。P 1～3の総長は3.83m(約12.6尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P 1・2間が1.76m(約5.8尺)、P 2・3間が1.80m(約5.9尺)とほぼ揃っている。

各柱穴の平面形は、方形を基調とし、P 1が1辺35cm前後、P 2が1辺28cm前後、P 3が1辺23cm前後とばらつきがある。検出面からの深さは、P 1・2が55cm前後、P 3が47cmで、底面の標高は151.3m前後と揃っている。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はP 3だけである。P 3は、 ℓ 1が柱痕で太さは約10cm、その周囲には ℓ 2とした黄褐色シルトを充填している。P 3以外の柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。

なお、1・2号柱列跡からは、遺物は出土していない。

M18 P 1・2は、円形の小穴で、周辺には他に遺構が認められないことから、1号柱列跡または2号柱列跡に関係する可能性がある。規模は、M18 P 1は直径14cm、検出面からの深さ36cm、M18 P 2は直径18cm、検出面からの深さ24cmである。堆積土はどちらも単層の自然堆積土で、柱痕は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

ま と め

1・2号柱列跡は並列する柱列跡で、東向き斜面中腹の僅かな平坦部に構築されている。1・2号柱列跡は他の柱列跡と同様、樋または塀等の機能が想定される。1号柱列跡は、布掘状の溝跡を伴うが、機能時に埋められていたかどうかは判然としなかった。ただ、底面標高が抑えられていること、布掘り状の溝跡が伴うことから、他の柱列跡よりも丁寧につくられていると推測される。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、掘立柱建物跡や他の柱列跡とともに城館跡が機能していた時期のものと推測される。

(鶴 見)

3号柱列跡 S A 03

遺 構 (図10)

本遺構は、調査区北部のL 17グリッド、尾根上の平坦部から僅かに斜面を下った場所で検出した柱列跡である。検出面はL IV a上面である。重複する遺構はないが、西に3mには4号柱列跡がある。

3号柱列跡は3個の柱穴から構成され、南から北にP 1～3と呼称した。P 1～3の総長は4.44m(約14.7尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P 1・2間が2.02m(約6.6尺)、P 2・3間が2.12m(約7.0尺)である。

各柱穴の平面形は隅丸方形で、P 2がやや小さく一辺20cm前後、P 1・3は25cm前後となっている。検出面からの深さは、P 1が38cm、P 2・3が20cm前後である。柱穴の底面標高はP 2・3が160.8m前後なのに対し、P 1は160.4m前後と低くなっている。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はP 1だけである。P 1の柱痕は、掘形の中心

からは少し東にずれている。柱痕の太さは約10cmで、周囲には黄褐色シルトを充填している。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、3個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、西側に隣接する4号柱列跡とともに柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。

(鶴見)

4号柱列跡 S A 04

遺構 (図10、写真14)

本遺構は、調査区北部のL 17・18グリッド、尾根上の平坦部とそれより下位の斜面部との傾斜変換線付近で検出した柱列跡である。検出面はL IV a上面である。重複する遺構はないが、東に

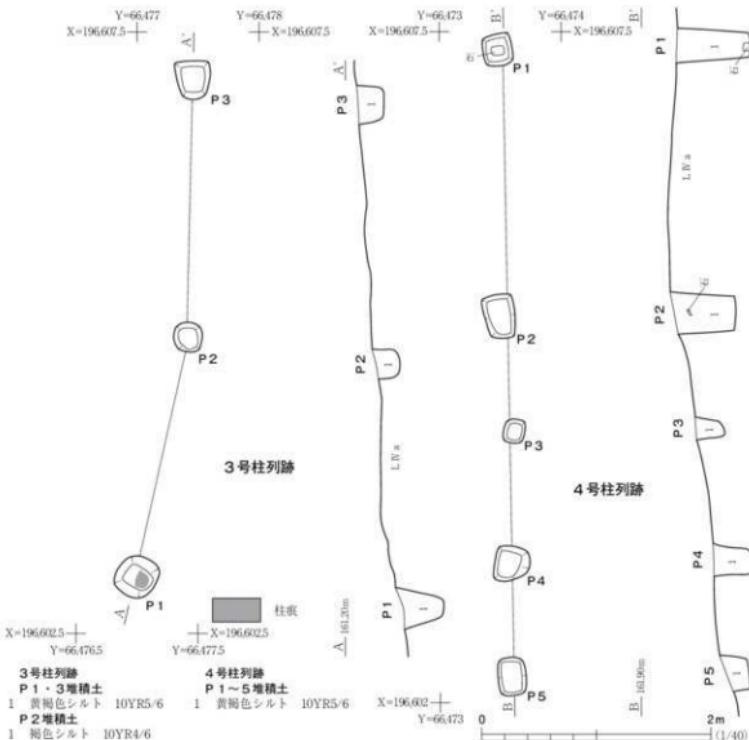


図10 3・4号柱列跡

4mには3号柱列跡、西に2mには1号建物跡がある。

4号柱列跡は5個の柱穴から構成され、北から南にP1～5と呼称している。P1～5の総長は5.44m(約18.0尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P2・3間が0.96m(約3.2尺)、P3・4間が1.1m(約3.6尺)、P4・5間が0.95m(約3.1尺)とほぼ揃っているのに対し、P1・2間は2.2m(約7.3尺)と他に比べ長い。

各柱穴の平面形は、方形または隅丸方形を基調とするが、P4はやや不整形である。規模は、P3がやや小さく一辺18cm前後、他は25～33cm前後となっている。検出面からの深さは、22～60cmとばらつきがあるが、斜面上位のP1・2が深く、斜面下位のP3～5が浅い傾向にある。柱穴の底面標高は、161.0～161.4mでばらつきがある。

各柱穴の堆積土は、いずれも黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は、柱が抜き取られた後に自然に埋没したものと推定される。また、P1の底面には、長さ10cm前後の根石とみられる石が置かれていた。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、尾根上の平坦部と斜面部との傾斜変換線付近に位置する5個の柱穴で構成される柱列跡である。その位置関係から、尾根上の平坦部及び1号建物跡を囲む柵または塀等の機能を有していたと考えられる。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、1号建物跡とともに城館跡が機能していた時期のものと推測される。

(鶴見)

5号柱列跡

遺構(図11)

本遺構は、M7・18グリッドで検出した柱列跡である。調査区東部の東向き斜面の中腹、標高159m付近で傾斜が僅かに緩くなる箇所があり、本遺構はそこに立地している。重複する遺構はないが、北西に5mには3号柱列跡、南西に6mには1・2号柱列跡がある。

5号柱列跡は4個の柱穴から構成され、南から北にP1～4と呼称した。P1～4の総長は6.47m(約21.4尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P1・2間が2.11m(約7.0尺)、P2・3間が2.03m(約6.7尺)、P3・4間が2.31m(約7.6尺)となっている。

各柱穴の平面形は、隅丸方形を基調とする。規模は一辺26～36cmである。検出面からの深さは、P1～3は30～42cmであるが、P4は他に比べて15cmと浅い。底面の標高は、P1～3が158.4～158.5mとほぼ揃っているのに対し、P4は掘り込みが浅いため、他より高く158.7mである。

各柱穴の堆積土は、褐色シルトないし黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、4個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明

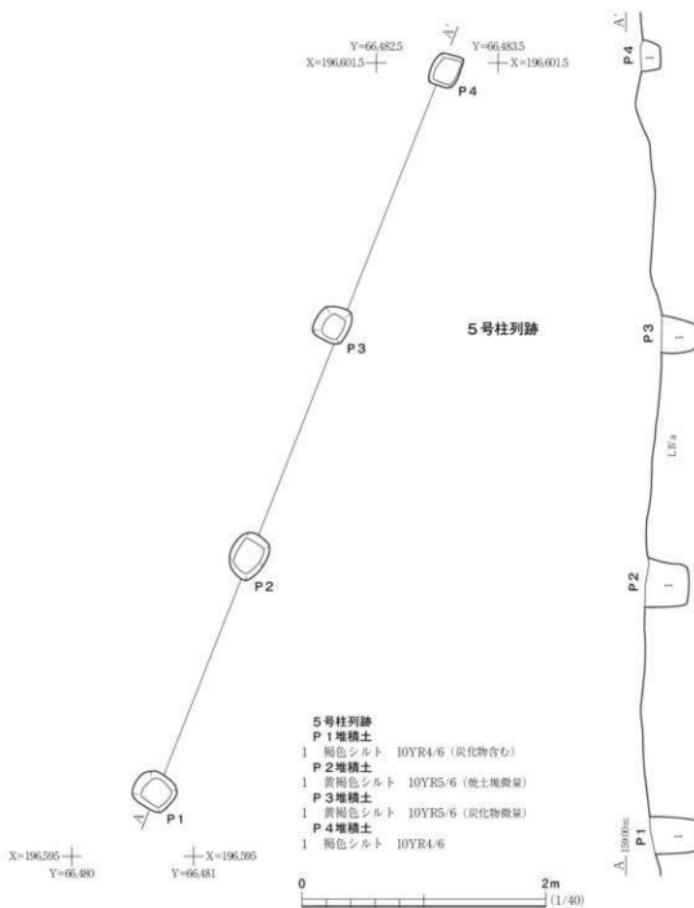


図11 5号柱列跡

だが、柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。(鶴見)

6号柱列跡 S A 06

遺構 (図12)

本遺構は、調査区中央付近のL 18・19グリッドで検出した柱列跡である。重複する遺構はないが、北西に5mには7号柱列跡、南東に2mには3号特殊遺構と1号住居跡がある。検出面はL IV

a 上面である。

6号柱列跡は3個の柱穴から構成され、北から南にP 1～3と呼称した。P 1～3の総長は3.66m(約12.1尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P 1・2間が1.86m(約6.2尺)、P 2・3間が1.80m(約5.9尺)である。

各柱穴の平面形は、隅丸方形で、規模は一辺26～44cmである。検出面からの深さは18～26cmで、底面の標高は159.2～159.3m前後とほぼ揃っている。

各柱穴の堆積土は、褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

P 3より西にあるL 19 P 1は、P 3との間は1.85m(6.1尺)で、本柱列跡の柱間とほぼ同じ間隔となっている。柱列跡に直行する位置にあるため、関連が想定されるが、L 19 P 1は一辺が18～20cmで、P 1～3と比べてやや規模が小さく本柱列に伴うものかは断定はできない。

まとめ

本遺構は、3個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、他の柱列跡とともに柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。また、L 19 P 1とともに、L字形を呈する遺構であった可能性もある。（鶴見）

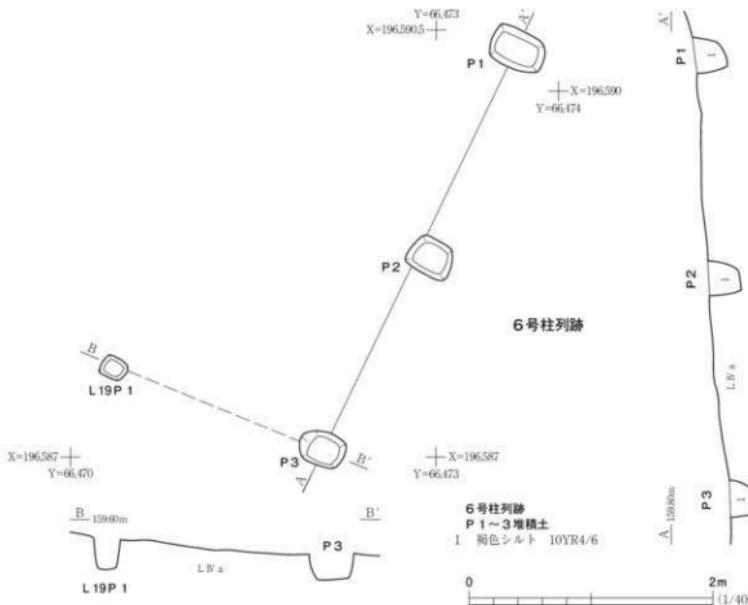


図12 6号柱列跡

7号柱列跡 S A 07

遺構 (図13)

本遺構は、調査区中央付近のK 18・L 18グリッドで検出した柱列跡である。重複する遺構はないが、北に2mには1号建物跡、北東に3mには4号柱列跡、南に5mには6号柱列跡、西に3mには5号土坑がある。検出面はL IV a上面である。

7号柱列跡は4個の柱穴から構成され、東から西にP 1～4と呼称した。P 1～4の総長は5.72m(約18.9尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、P 1・2間が1.55m(約5.1尺)、P 2・3間が

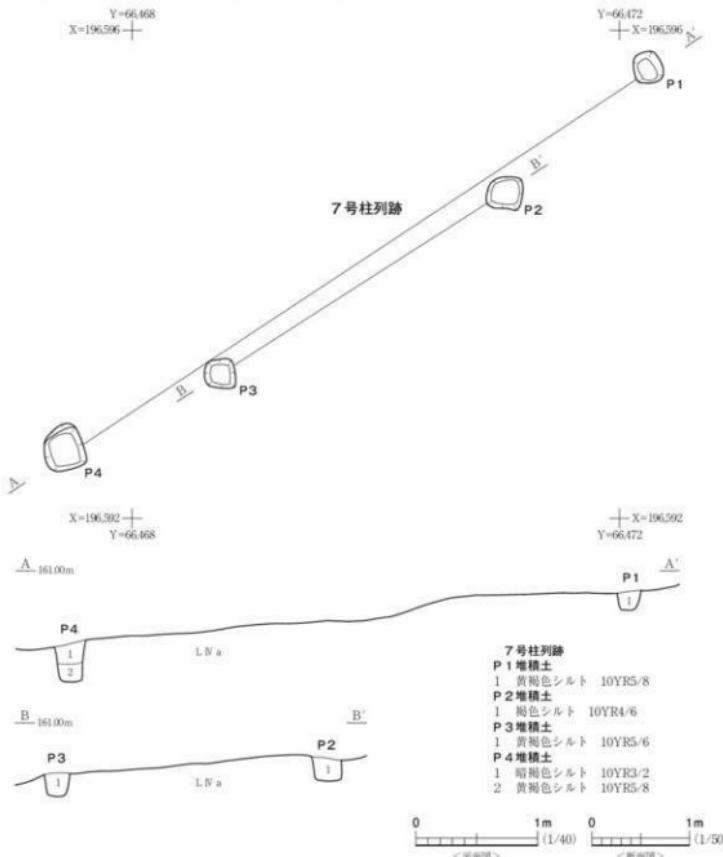


図13 7号柱列跡

2.78m(約9.1尺)、P3・4間が1.39m(約4.6尺)である。

各柱穴の平面形は、隅丸方形を基調とし、規模は一辺20~30cmである。検出面からの深さは22~44cmで、底面の標高は159.2~159.3m前後とはば揃っている。

各柱穴の堆積土は、P1~P3は、いずれも黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。P4は、2層に分けたが、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、4個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、他の柱列跡とともに柵または塀等の機能を考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。

(鶴見)

第7節 特殊遺構

特殊遺構は3基確認した。1号特殊遺構は性格を特定することはできなかったが、2号特殊遺構は木炭焼成遺構、3号特殊遺構は踏跡または字限溝等の性格が想定される。

1号特殊遺構 SX01

遺構(図14、写真10)

本遺構は、調査区南端のK20グリッド、尾根上の平坦部の突端で検出した遺構である。小穴が3基重複していて、本遺構の方が古い。また、東に1mには4号土坑、南東に1mには7号土坑が、南西に3mには3号溝跡がある。検出面はLIVa上面である。

遺構の平面形は方形を基調とし、規模は南北2.44m、東西2.71m、検出面からの深さは最大で12cmである。遺構の東・南辺は斜面の下方に位置するため、遺存状態が悪く、壁の立ち上がりをほとんど確認できなかった。また、南辺は斜面下方に向かって開口していた可能性もある。底面はほぼ平坦だが、東と南に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は2層に分層した。 ℓ 1には焼土塊、 ℓ 2には炭化物が含まれているが、遺構の底面や壁に被熱の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

まとめ

本遺構の所属時期や性格については不明であるが、尾根上の平坦部の突端にあることから、中世の城館跡を構成する何らかの施設の可能性が想定される。あるいは、平面形や規模が1号住居跡に近似するため、平安時代に機能していた堅穴住居跡等の施設の可能性も考えられる。

(鶴見)

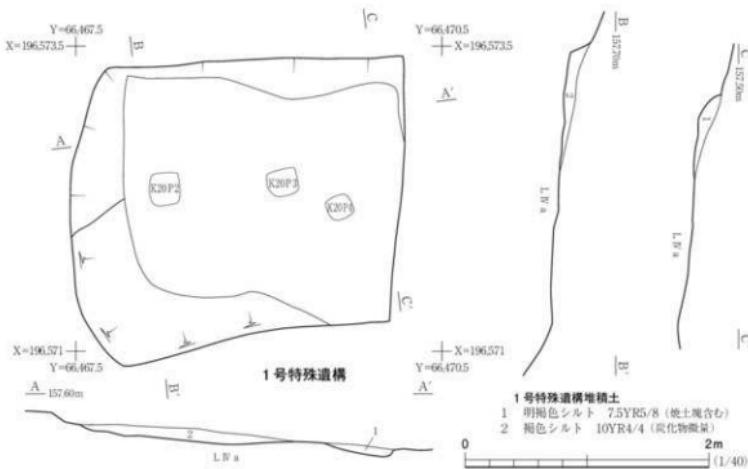


図14 1号特殊遺構

2号特殊遺構 S X 02

遺構 (図15、写真11)

本遺構は、調査区南部のL20グリッド、平坦部から斜面部への落ち際付近で検出した遺構である。検出面はLIV a上面である。9号土坑と重複していて、本遺構の方が新しい。また、北に3mには1号住居跡がある。

遺構の平面形は、隅丸長方形を基調としている。規模は、長軸で3.92m、短軸で1.60m、検出面からの深さは最大で26cmである。遺構は斜面の一部を浅く掘り込んで、平坦な箇所を作り出している。北壁の遺存状態がよく、壁の立ち上がりは垂直に近い。斜面の下方にあたる東部では、壁の立ち上がりは見られないが、土砂が流出したためか、もともと開放状態であったのかは判断できない。底面は平坦で、被熱により赤色化した箇所も確認できる。

堆積土は3層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。各層から炭化物が出土しているが、特に②の下層、遺構の底面付近からの出土が多い。平面的には、南東部を中心に分布する。なお、遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、底面に被熱の痕跡が認められ、底面付近からは多くの炭化物が検出された。以上のような状況から、木炭を焼成した遺構と考えられる。土器等が出土していないため、遺構の所属時期は不明である。なお、1次調査区で確認した1号木炭窯跡は、底面から平安時代の土器が検出され、出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、13世紀前半という測定結果が出ている。ただ、

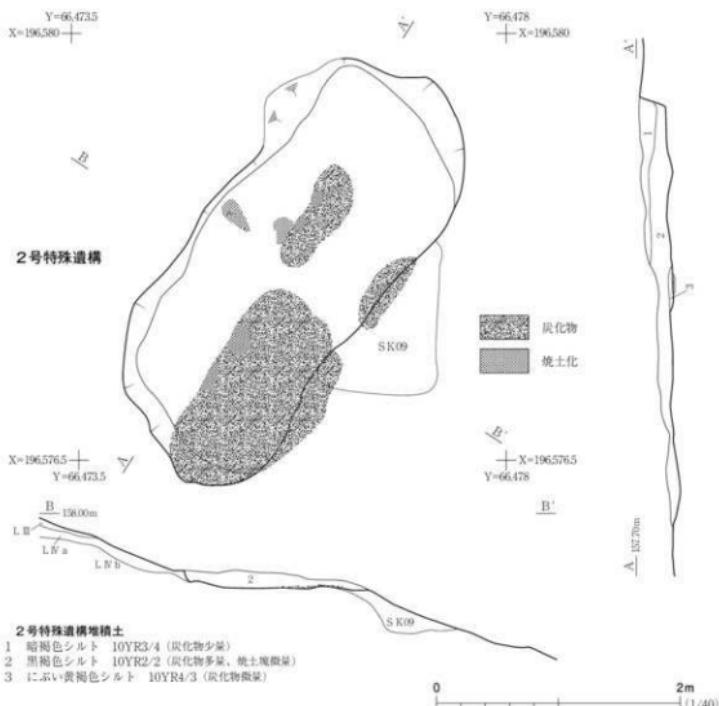


図15 2号特殊遺構

1号木炭窯跡と本遺構とでは平面形等の特徴が異なる。遺構の機能が同様であることを踏まえると、本遺構は古代以降のものと推定される。
(鶴見)

3号特殊遺構 S X03

遺構 (図16、写真12)

本遺構は、調査区南部の尾根上から斜面部のK 19・20、L 19・20グリッドで検出した遺構である。遺構の南部は比較的傾斜が緩やかな場所に立地するが、北部は南部よりも傾斜がきつい。1号住居跡と重複していて、本遺構の方が新しい。検出面はL IV a上面である。

平面形は直線的ではなく、緩やかに屈曲している。遺構の長さは12.25m、幅は0.4～1mで、一定ではない。検出面からの深さもばらつきがあり、南東部では10cm、中央部では18cm、北部では20cm前後である。底面は平坦ではなく、凹凸が多く見られる。

堆積土は褐色シルトの単層で、斜面上方からの自然流入土と判断した。

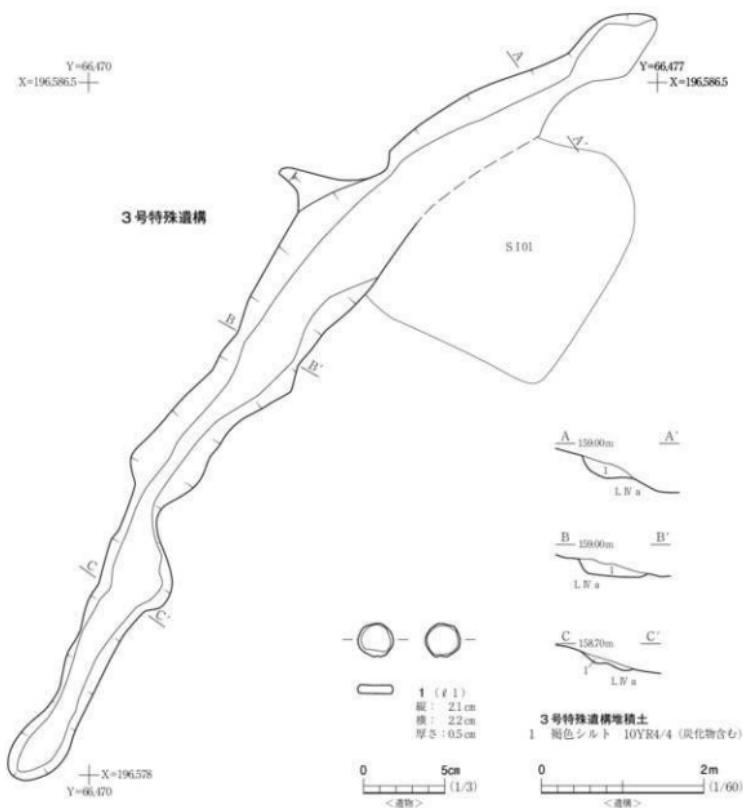


図16 3号特殊遺構・出土遺物

遺 物 (図16、写真15)

遺物は1点出土した。図16-1は泥面子と考えられる。土製で、円形を呈する。

ま と め

本遺構は、尾根上で検出した溝状の遺構である。溝状の遺構ではあるが、3・4号溝跡とは立地が異なっており、排水溝のような機能は想定されない。また、調査開始前には、尾根上に踏跡や字限を示すと推定される溝状の地形が確認されていた。このことから、本遺構は、踏跡や字限に掘られた溝等の可能性がある。所属時期は、遺構の重複関係から平安時代の1号住居跡よりも新しいこと、泥面子が出土していることから、近世以降と推定される。

(鶴 見)

第8節 小 穴（図17、写真15）

小穴は、尾根上の平坦部を中心に検出した。小穴は、掘立柱建物跡や柱列跡との関連が想定されるものを除き20基検出した。小穴同士に重複は認められなかった。

これらの小穴は、平面形は方形を基調とし、大きさは一辺20~30cm前後のものが多い。検出面からの深さは最小で5cm、最大で60cmだが、大半は20~40cmの間に収まる。

堆積土は、ほとんどが単層で、明瞭な柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、L18P6から、鉄製刀子が1点出土したのみである。図17-1は、2つに分かれているが、形状や厚さから同一個体と判断した。

これらの小穴は、掘立柱建物跡や、柱列跡等の柱穴と考えられるが、組み合わせは不明である。年代を明瞭に示す遺物は出土しなかったが、1・2号建物跡、1~7号柱列跡と同様に城館跡に伴う遺構の可能性が高い。

（鶴見）

表1 小穴一覧

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
K18	1	31	25	21	10YR4/6 褐色シルト	
	2	31	30	21	10YR4/6 褐色シルト	
K19	1	38	35	60	10YR4/6 褐色シルト	
	2	47	37	44	10YR4/6 褐色シルト	
	3	22	20	29	10YR4/6 褐色シルト	
	4	20	19	12	10YR4/6 褐色シルト	
L17	1	25	22	35	10YR4/6 褐色シルト	
	1	13	13	24	10YR4/6 褐色シルト	
	2	36	30	9	10YR5/6 黄褐色シルト	
	3	33	28	21	10YR5/6 黄褐色シルト	
	4	30	26	12	欠	
	5	16	14	11	10YR5/8 黄褐色シルト	
L18	1	19	15	23	10YR4/6 褐色シルト	
	2	28	20	33	10YR4/6 褐色シルト	
	3	32	28	25	ℓ 1 10YR3/2 暗褐色シルト ℓ 2 10YR5/8 黄褐色シルト	
	4	29	25	45	10YR5/6 黄褐色シルト	
	5	28	26	14	10YR5/6 黄褐色シルト	
	6	34	33	34	10YR4/6 褐色シルト	刀子出土
	7	29	25	26	10YR4/6 褐色シルト	
L19	1	28	19	27	10YR4/6 褐色シルト	
M18	1	18	14	37	10YR5/6 黄褐色シルト	
	2	18	17	25	10YR5/6 黄褐色シルト	

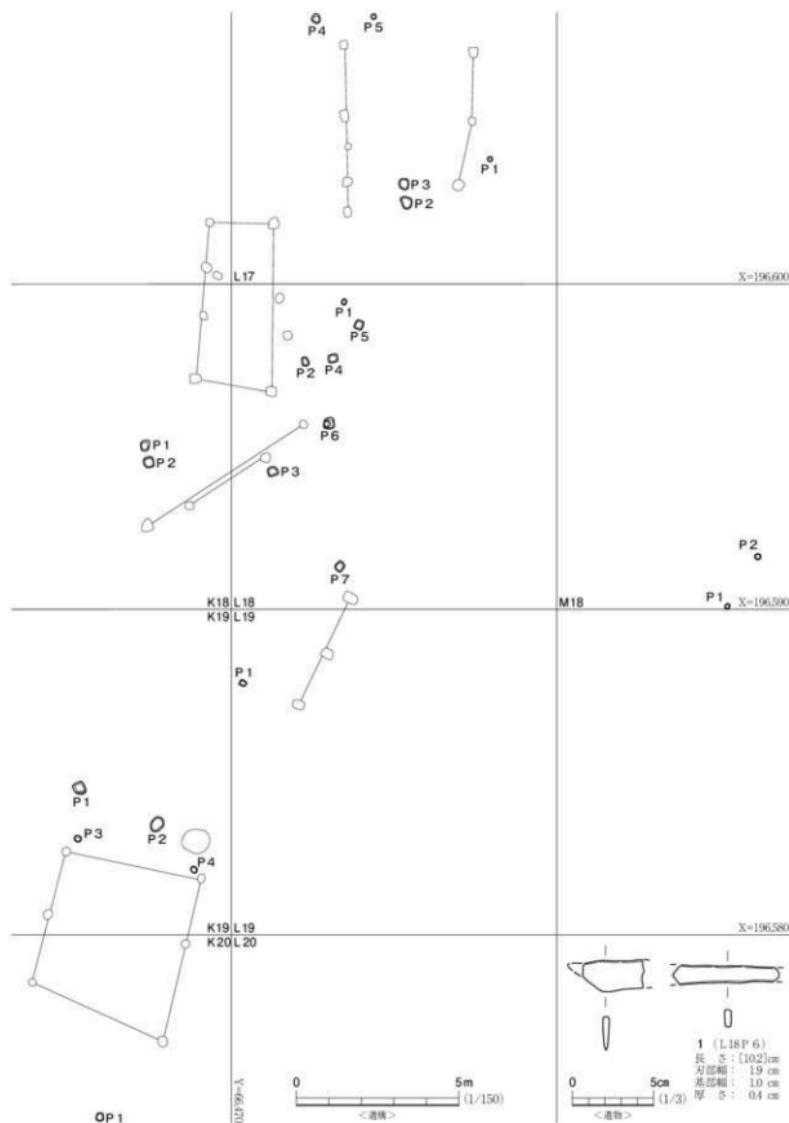


図17 小穴・出土遺物

第3章 総括

上ノ台館跡の2次調査では、1次調査区の南側に隣接する箇所1,500mの調査を実施した。調査区の地形は、南北に延びる尾根上及び東側斜面となっている。調査の結果、城館跡を構成していたと考えられる掘立柱建物跡・柱列跡・溝跡等を確認した。この他、平安時代や近世以降とみられる遺構も確認した。なお、1次調査で検出した1号平場周辺は、人工的に地山を削って切岸をつくり出した状況が伺えるが、今回の調査区では、切岸や整地土等の明瞭な痕跡は確認されなかった。一部に手を加えて利用している可能性はあるが、もともとの自然地形に近い状態であると判断している。以下、中世城館跡に伴うと考えられる遺構についてまとめる。

尾根上の比較的平坦な箇所で掘立柱建物跡を2棟確認した。この2棟の掘立柱建物跡は、いずれも尾根の延びる南北方向に平行を持ち、主軸もほぼ揃っている。掘立柱建物跡の周囲では、7列の柱列跡を確認した。このうち、1号柱列跡には布垣状の溝が伴い、隣接する2号柱列跡とともに、柱間の寸法や柱穴の底面標高が揃っている等、丁寧につくられている。7列の柱列跡は、平坦部から斜面部への落ち際付近や、斜面部でも傾斜が僅かに緩くなる箇所で検出されている。斜面部の傾斜が緩やかになる箇所は、柱列跡以外の遺構は確認できないことから、柱列跡を構築するためだけに若干地形を改変した可能性がある。また、これらの柱列跡は、掘立柱建物跡と同様、尾根筋と同じ方向につくられていることから、掘立柱建物跡と密接な関連を持ち、柵または塀等の機能が考えられる。なお、1～5号柱列跡は、高低差をもってつくられているため、東側の街道筋から見上げた際は、何重にも柵や塀が巡って見え、城館跡として一定の視覚的な効果があったと推測される。

斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上では、溝跡を2条確認した。これらの溝跡は、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。具体的には、4号溝跡は、下方に立地する2号建物跡へ直接水が流れ行かないようするために構築されたと思われる。

今回の調査では、城館跡の時期を示す遺物は出土していない。平成30年度に実施する3次調査の成果を踏まえて城館跡の年代等について判断したい。

（鶴見）

引用・参考文献

- 福島県教育委員会 2014 「福島県内遺跡分布調査報告21」福島県文化財調査報告書第502集
福島県教育委員会 2016 「福島県内遺跡分布調査報告23」福島県文化財調査報告書第512集
福島県教育委員会 2017 「福島県内遺跡分布調査報告24」福島県文化財調査報告書第521集
福島県教育委員会 2018 「第2編 上ノ台館跡」「一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6」福島県文化財調査報告書第523集

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

遺跡記号	DT-NMU、DT-NMU 2
所在地	伊達市保原町上保原字中室内
時代・種類	古墳時代の集落・中世の城館跡
調査期間	平成29年10月10日～12月22日（1次調査） 平成30年4月11日～4月13日（2次調査）
調査員	1次調査 丹治篤嘉・渡邊春喜・廣川紀子・草野潤平 鶴見諒平・枝松雄一郎 2次調査 丹治篤嘉・初山孝行・鶴見諒平・枝松雄一郎

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

中室内遺跡は、福島県伊達市保原町上保原字中室内に所在する。旧保原町内でも旧伊達町境に近い箇所で、福島市瀬上方面から伊達市保原町へと抜ける阿武隈急行線の上保原駅から北西方向に約1kmのところに位置する。遺跡の南端に沿って市道保原箱崎線が東西方向に延び、そこから調査区を縦断するように市道中室内大師堂線が南北方向に延びている。

遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された標高50mほどの自然堤防上に立地する。調査区の現況は宅地や耕作地で、周囲では水稻耕作や果樹栽培等の営農が行われている。

遺跡から南西に約700mの位置には、伊達氏初代朝宗が築いたとされる高子館跡がある。また、遺跡から南に約300m離れた丘陵頂部には奈良時代頃の祭祀遺跡とされる岩谷遺跡があり、付近には櫻内遺跡や京口遺跡といった古墳時代～平安時代頃の遺物散布地が認められる。
(廣川)

第2節 調査経過

中室内遺跡の調査は、2次にわたり実施している。

1次調査は、平成29年度に9月5日、10月24日付の福島県教育委員会の指示に基づき、2,700m²の本発掘調査を実施した。調査に係った作業日数は延べ48日である。

2次調査は、平成30年4月5日付の指示に基づき、100m²の本発掘調査を実施した。調査に係った作業日数は延べ3日間である。以下に調査の経過について、平成29年度は週ごと、平成30年度は非常に短期間であったため日ごとに記す。

平成29年度(1次調査)

10月第2週：10日(火)に重機を搬入し、プレハブ前駐車場の整備を始める。翌11日(水)に先行して6名の作業員を雇用し、周辺環境の整備を行う。12日(木)から調査区東部の表土除去を開始する。

10月第3週：表土除去が進み、試掘・確認調査で報告されていた1号土坑、1号堀跡が認められる。17日(火)に新規作業員27名の雇用を開始した。19日(木)に調査区東部1,300m²の表土除去を終え、引き続き調査区西部の表土除去に着手した。

10月第4週：先週末からの降雨で調査区内への浸水が著しく、作業員による当面の作業を中止する。25日(水)に工事用道路部分を除いた調査区西部の表土除去を終える。

10月第5週：ようやく天候が回復し、31日(火)から本格的な遺構検出作業に入る。その結果、1号堀跡がL字状に巡ること、その内側には多数の柱穴とみられる小穴や、1号堀跡

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

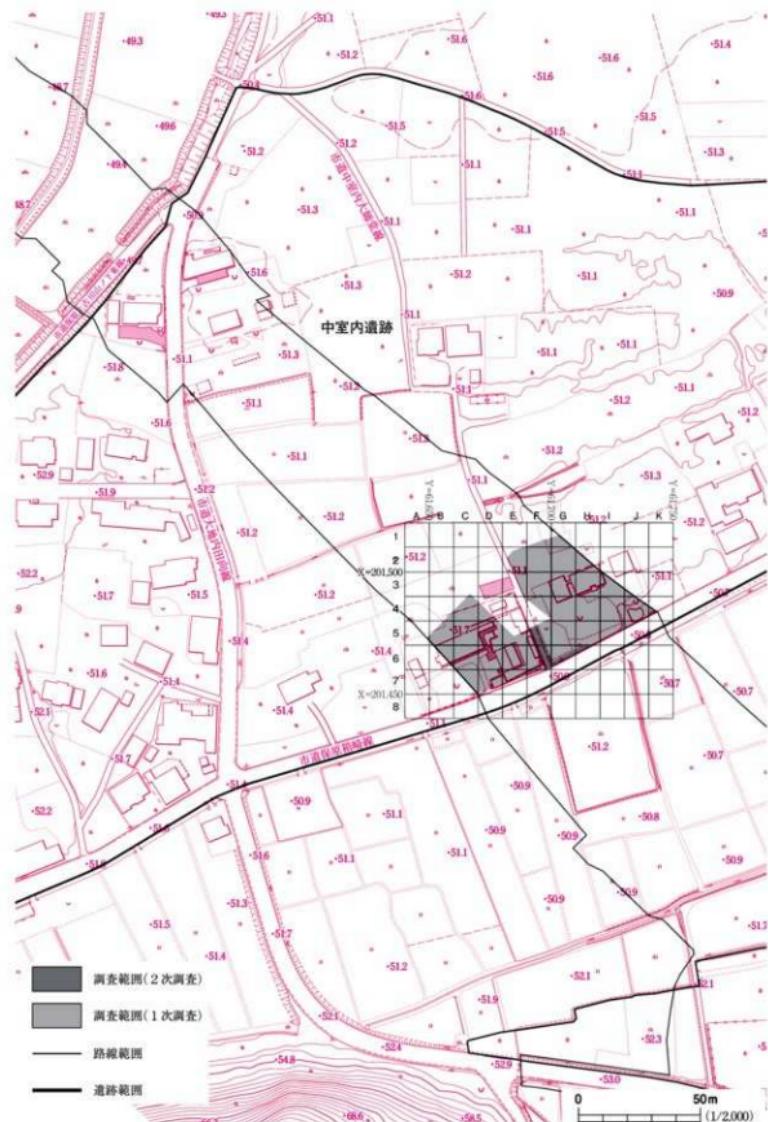


図1 調査区位置図

に平行して延びる数条の溝跡があることが確認された。

11月第1週：1日(水)から1号堀跡、2号溝跡の掘り下げを開始し、適宜断面図の作成を行った。

11月第2週：7日(火)・8日(水)に調査区西部の工事用道路部分の表土除去を行う。9日(木)から調査区西部の遺構検出を行い、複数の竪穴住居跡と小穴群の広がりが確認された。

11月第3週：調査区東部では土坑や溝跡等、検出された遺構の数が徐々に増えていったが、順次それらの精査に着手した。調査区西部では、14日(火)から他の遺構と重複していない竪穴住居跡の精査に入り、並行して小穴群の調査に取りかかる。16日(木)には基本土層図を作成する。

11月第4週：引き続き、検出した遺構の精査を行う。21日(火)・22日(水)に調査区東部の追加分300m²の表土除去を行う。追加箇所からは1号堀跡の延長部分と小穴の広がりが認められる。調査区西部では小穴群を掘り上げ、それらと重複する竪穴住居跡の調査に入る。

11月第5週：天候が安定し、作業員の出勤率が高いことから、遺構の掘り下げ作業が順調に進み、11月末までにはほとんどの遺構の調査に着手する。

12月第2週：年内での調査収束に向けて、調査区東部では遺構の作図、調査区西部では重複する竪穴住居跡の掘り下げが主要な作業となる。

12月第3週：13日(水)に調査区東部ではおおよそ遺構の作図が終了する。14日(木)に調査区東部から空中写真撮影のための清掃に入り、15日(金)に調査区全体の空中写真撮影を行う。

12月第4週：引き続き、調査区西部の遺構精査を行う。19日(火)から調査区の地形測量に入る。21日(木)に地形測量の補足、重複する4～6号住居跡の作図を行い、調査現場から不要な道具類を引き上げる。22日(金)は作業員雇用の最終日となり、残務を処理して調査を終了する。

1月第2週：年が明けた1月9日(火)よりプレハブからの発掘器材の撤収を開始する。

1月第3週：19日(金)にはプレハブ・仮設トイレを撤去した。

1月第4週：22日(月)に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

平成30年度(2次調査)

4月11日(水)：遺構の検出作業を行い、土坑・溝跡を確認。検出状況の写真撮影後、遺構の掘り下げを開始する。その後、順次、記録作成を行う。

4月12日(木)：遺構の掘り下げと記録作成の継続。

4月13日(金)：調査区内の地形測量を行い、調査が終了する。また、県文化財課・国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行う。

(廣川・鶴見)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

中室内遺跡は伊達市保原町上保原字中室内に所在する。遺跡は自然堤防上に立地していて、遺跡周辺はほぼ平坦な土地だが、北側に向かって緩やかに下っていく。調査前の1・2次調査区は、宅地や、畑、市道として利用されていた。遺跡の南側には旧河道があり、現在でも周辺よりも低い土地のため、水田として利用されている。

調査は、1次調査を平成29年度に、2次調査を平成30年度に実施した。

1次調査区は、南北に延びる市道中室内大師堂線を挟んで東西に分かれている、それぞれ調査区東部・西部と呼称している。2次調査区は、1次調査区東部・西部の境界となった市道部分を中心とした箇所である。

検出された遺構は、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡6棟、土坑27基、堀跡・溝跡17条、井戸跡2基、特殊遺構1基、小穴253基である。このうち、竪穴住居跡は、いずれも調査区西部に位置し、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。

また、調査区東部で確認した1号堀跡は、中世の屋敷跡を区画する堀と考えられる。1号堀跡の内部で確認された掘立柱建物跡は、屋敷跡に伴うものと考えられ、小穴も同時期のものを含む可能性が高い。

基本土層（図3、写真4）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～VIの6層に分層した。

L Iは、表土及び盛土層である。調査区内での層厚は85～100cmと厚く堆積している。

L IIは、調査区東部で部分的に確認された黒褐色シルト層である。層厚は10～15cmと薄い。大半の遺構には、本層に由来する土が堆積している。そのため、本来は広範囲に堆積していたと考えられるが、後世の造成により失われたとみられる。なお、断面観察により、本層の上面で検出される遺構があることを確認した。

L IIIは、灰黄褐色シルト層で、層厚は10～15cmである。L IIからL IVへの漸移的な層で、本層に由来する土が堆積する遺構も多い。調査区東部の北半では、砂質シルト層や砂層となっている。L II同様、後世の造成により失われている箇所が大半である。

L IVは、調査区全域で確認される褐色シルト層である。今回の調査で確認した大半の遺構の検出面である。調査区内での層厚は、5～25cmである。調査区東部の北半では、L IIIと同様、砂質シ



図2 遺構配置図

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

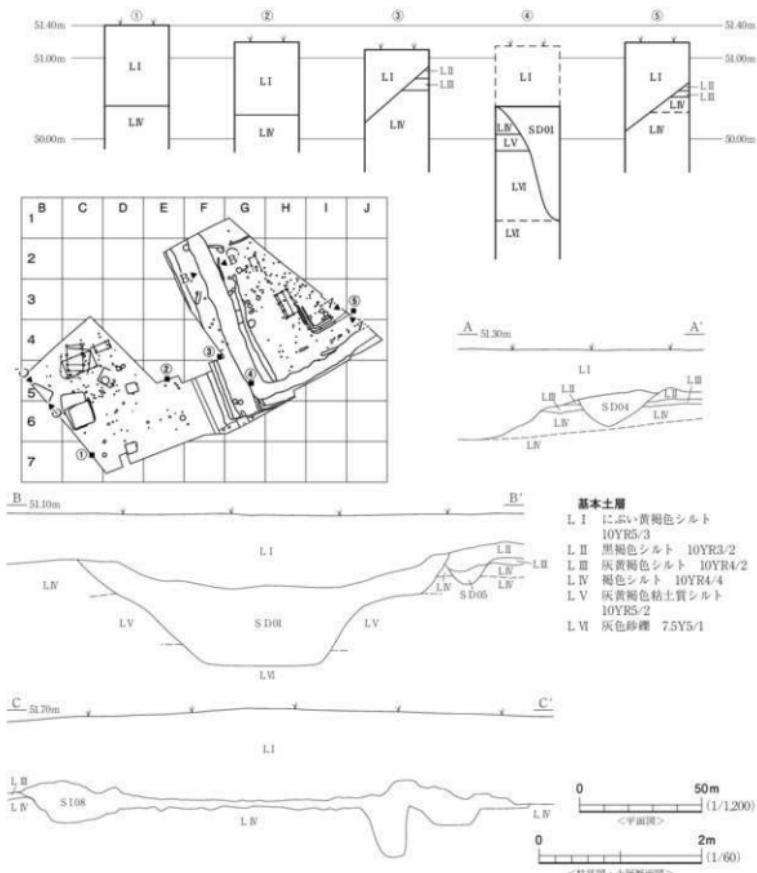


図3 基本土層

ルト層や砂層となっている。

L.Vは、灰黄褐色粘土質シルト層で、層厚は20～70cmである。堀跡や井戸跡等の深く掘り込まれた遺構の断面で確認した。

L.VIは、灰色を呈する基盤の砂礫層である。

(鶴見)

第2節 堪穴住居跡

今回の調査で発見された堪穴住居跡は8軒である。いずれも調査区西部から検出された。住居跡はカマド導入前の古墳時代前期の所産と考えられ、平面形は方形を基調とする。そのうちの4~6号住居跡は重複しており、同じ地点で建て替えないし拡張が繰り返されている。また、住居跡は宅地等の造成を受け、周壁の立ち上がりは数cmしか認められなかったが、柱穴や掘形を良好な状態で確認することができたものもある。出土遺物は乏しいが、5・7号住居跡の南西隅に設けられた貯蔵穴からは土師器がまとめて出土した。

1号住居跡 S I 01

遺構(図4、写真9)

本遺構は、調査区西南端のD7グリッドに位置する堪穴住居跡である。検出面はLIV上面である。1辺約25mの小型の住居跡で、周壁はほとんど残っていない。D7P2と重複し、本遺構の方が古い。本遺構の周囲には他にも小穴が散在し、西に約5m離れた位置では4・5号土坑が検出されている。同規模の2号住居跡は、北に約12m離れている。

遺構内堆積土は、僅かに床面上に堆積する ℓ 1と、貼床土と考えられる ℓ 2の2層を確認した。 ℓ 1はLIIに由来するものとみられ、周囲からの自然流入土と推測される。貼床土とした ℓ 2にはしまりがあり、住居跡北西部と北東部で認められた。

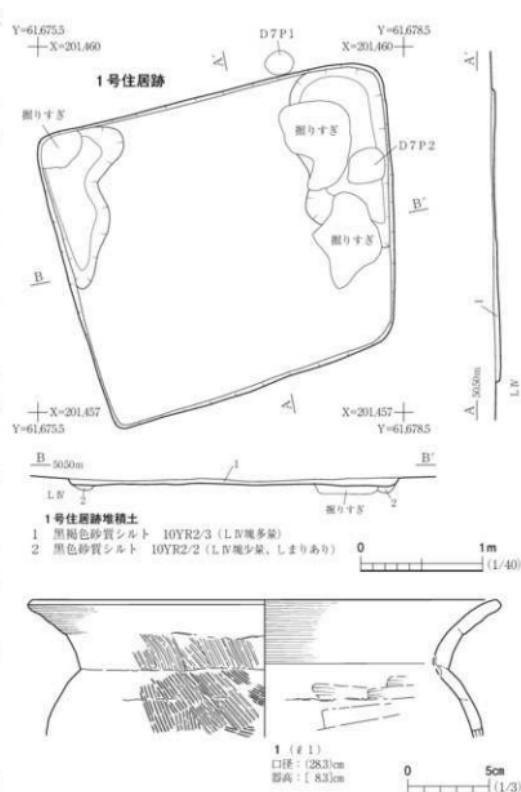


図4 1号住居跡・出土遺物

住居跡の平面形は、北東隅がやや張り出た歪んだ方形である。規模は北壁がやや長く約2.9m、西壁約2.5m、東壁約2.3m、南壁約2.4mを測る。主軸方向は、西壁でN 15°Wを示す。検出面からの深さは10cm未満である。床面は平坦で、柱穴等は認められなかった。掘形は、床面から一段低い不整な窪みとして確認された。

遺物（図4、写真68）

出土遺物は図4-1に示した1点である。

1は土師器壺で、口縁部から胴部上半にかけて残存していたものである。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反する。外面の調整は、口縁部は、横方向のナデ、頸部から胴部は、縱や斜め方向のハケメである。内面は、横方向のナデで調整されているが、胴部では輪積み痕が残る。

まとめ

本遺構は小型の住居跡で、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。周囲から検出された複数の住居跡とともに集落を構成していたものと推察される。その中でも2号住居跡と形状や規模、主軸方向が一致していることから、古墳時代前期のものでも2号住居跡と同時期に営まれていたものと想定される。

（廣川）

2号住居跡 S I 02

遺構（図5、写真10・11）

本遺構は、調査区西部のD 5グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はL IV上面である。1辺約2.5mの小型の住居跡で、周壁はほとんど残っていない。重複する遺構はないが、南西隅部分は搅乱を受けている。本遺構の北東約3mに3号住居跡、南約12mに同規模の1号住居跡がある。また、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴が散在する。

遺構内堆積土は、僅かに床面上に堆積する ℓ 1と、貼床土と考えられる ℓ 2の2層に分層した。 ℓ 1はL IIに由来するものとみられ、周囲からの自然流入土と推測される。貼床土とした ℓ 2にはしまりがあり、周壁際を中心に認められた。

住居跡の平面形は隅が丸い方形で、規模は北壁が約2.5m、西壁約2.4m、東壁約2.4m、南壁約2.4mである。主軸方向は、遺存する西壁でN 16°Wを示す。検出面からの深さは10cm未満である。床面は平坦で、柱穴等は認められなかった。掘形は、床面から一段低い不整な窪みとして確認された。

遺物は土師器壺8点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

まとめ

本遺構は小型の住居跡で、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。周囲からは複数の住居跡が検出されるが、その中でも1号住居跡と形状や規模、主軸方向が一致していることから、古墳時代前期のものでも1号住居跡と同時期に営まれていたものと想定される。

（廣川）



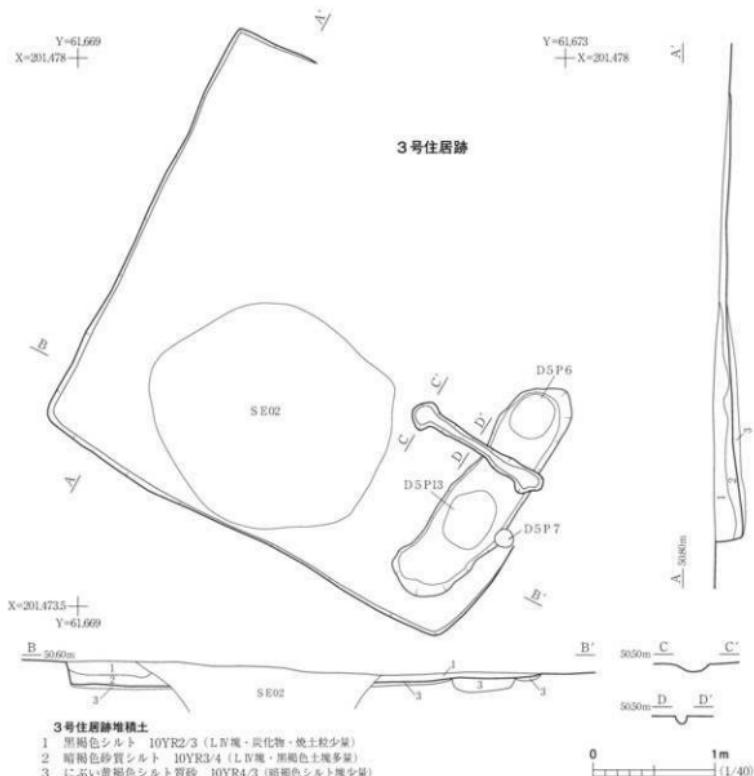


図6 3号住居跡

1.5m離れた東壁際から垂直方向に1.3mほど延びている。幅は約8~24cmで、両端の平面形は丸みを帯びている。深さは約3~6cmで、西端にかけて深くなっている。断面はU字状である。

掘形は、遺存状態の悪い北部は不明だが、南部では細かい凹凸が認められ、南東隅が東壁に沿つて一段深く掘り込まれている。

遺物は土器器窓1点が出土したが、細片のため図示できなかった。

まとめ

本遺構は、今回検出された中では中規模の住居跡である。出土遺物から、他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。近接する4~6号住居跡の重複関係から、集落内では数時期の変遷が認められるが、主軸方向が一致する8号住居跡と同時期に営まれていた可能性がある。

(廣川)

4・6号住居跡 S I 04・06

遺構 (図7~9、写真13~19)

4・6号住居跡は、調査区西部のC 5・6グリッドに位置する堅穴住居跡である。検出面はL IV上面である。4~6号住居跡は重複関係があり、古い方から6号住居跡→5号住居跡→4号住居跡の順につくられている。6号住居跡は、4号住居跡の貼床土を掘り下げていった段階で、4号住居跡の西壁よりも40~90cm内側で一段下がる直線的な掘形が検出されたため、6号住居跡の重複関係を認識することができた。なお、多数検出された柱穴についても、4号住居跡の床面では貼床土

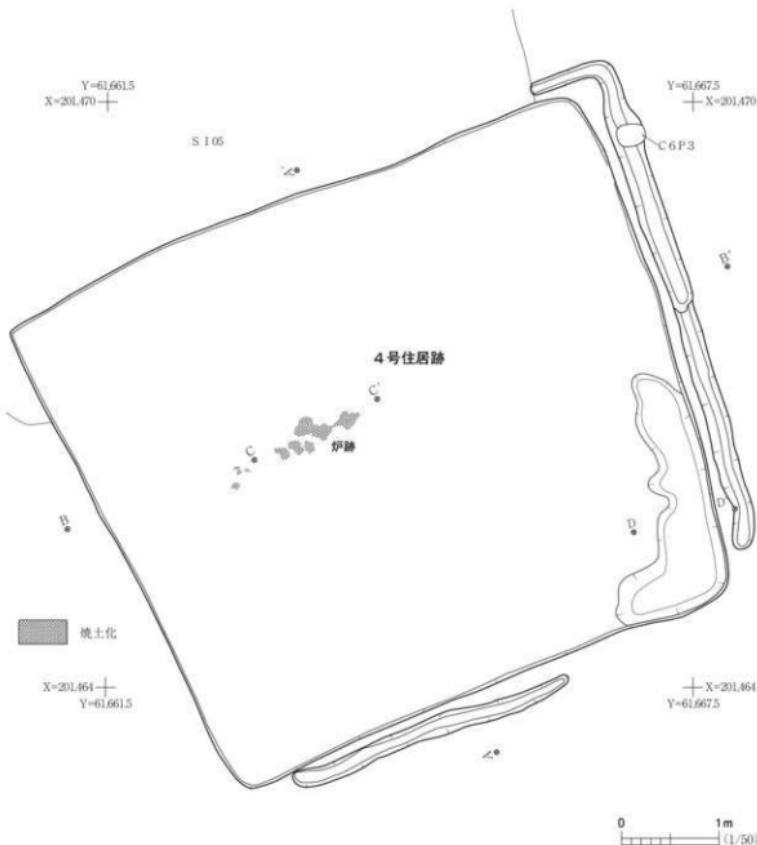


図7 4・6号住居跡(1)

との識別がつかず、大半が4号住居跡の貼床土を掘り下げていく過程で認識することができた。このことから、いずれの住居跡の柱穴か断定できないため、4・6号住居跡を合わせて報告する。

4・6号住居跡の周囲には3・7・8号住居跡があり、掘立柱建物跡の柱穴とみられる複数の小穴も認められる。小穴の一部は4号住居跡の堆積土を掘り込む形で検出されたことから、本住居跡の方が古い。

造構内堆積土は5層に分層した。 ℓ 1は4号住居跡の床面上に薄く堆積し、 ℓ IIに由来する自然流入土とみられる。 ℓ 2～4は貼床土で平坦に床面を整えている。このうち、 ℓ 4はさらに細分され、4号住居跡と6号住居跡の貼床土を区別できる可能性があるが、土層観察では認識することができなかつた。 ℓ 5は壁溝内堆積土で、 ℓ 2と近似した土で埋められていた。

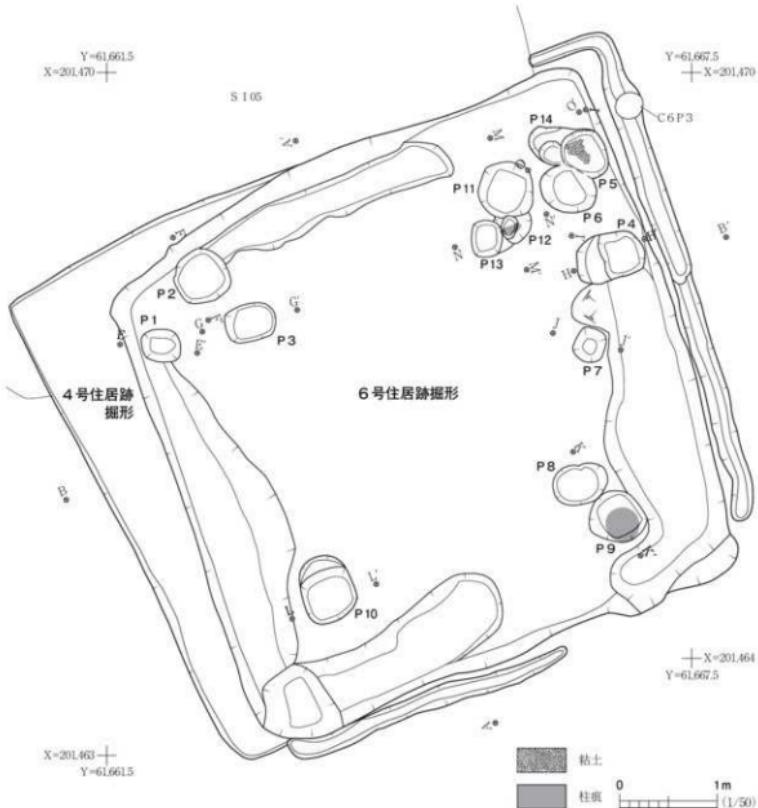
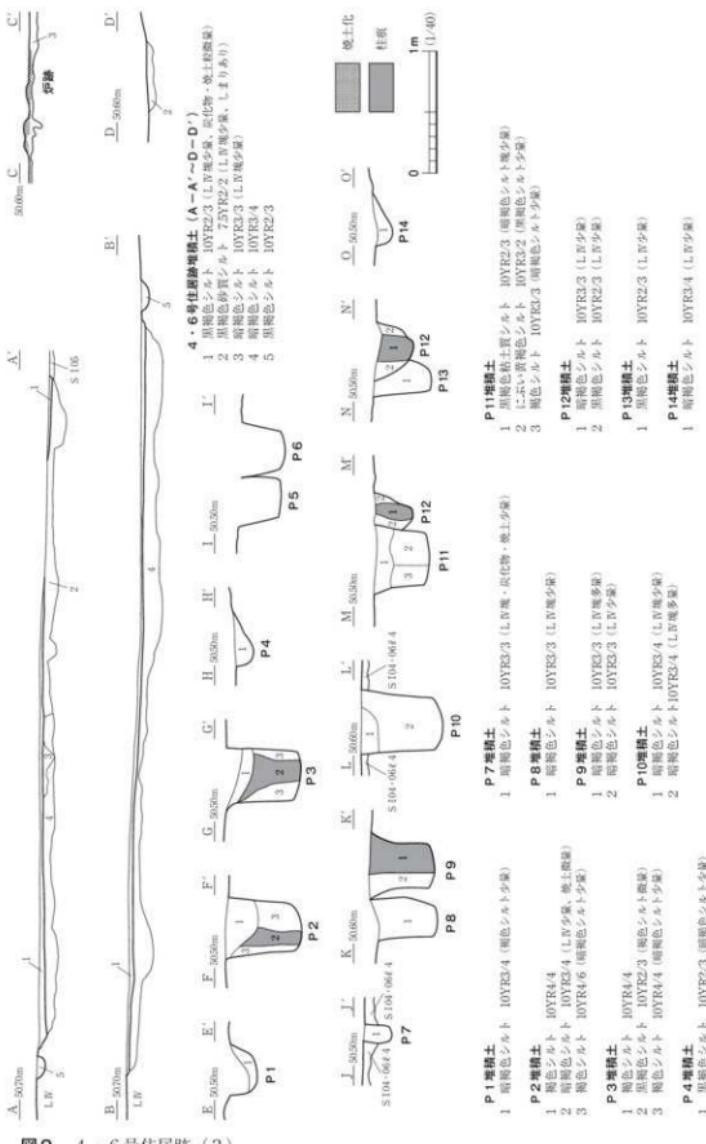


図8 4・6号住居跡（2）



4号住居跡の平面形は北壁がやや長い方形で、規模は北壁約6.3m、西壁約5.3m、東壁約5.4m、南壁約5.5mを測る。主軸方向は、西壁でN 27° Wを示す。検出面からの深さは2～4cmである。床面の中央西寄りには東西幅約1m、南北幅約50cmの範囲が熱変し、焼土塊が散ることから、炉跡と判断した。断ち割ったところ、厚さ5cmほどの熱硬化が認められた。

4号住居跡は、建て替えないし拡張の可能性が考えられ、外側の壁沿いに確認された溝状の痕跡は、 ℓ 5とした貼床土と近似した土で埋められているため、古い段階の4号住居跡の壁溝と判断した。壁溝は住居跡の北東隅から東壁に沿い、一度途切れで南壁沿いに延びている。壁溝の規模は、遺存する部分で、東壁沿いが約5.8m、南壁沿いが約3.1mを測り、幅が約20～30cm、深さが3cm前後で、断面がU字状である。壁溝の範囲から、古い段階の4号住居跡の規模は、推定で一辺約5mである。

一方、6号住居跡は、4号住居跡の貼床土を掘り下げていった段階で、4号住居跡の西壁よりも40～90cm内側で一段下がる直線的な掘形が検出されたことにより確認することができた。6号住居跡は、西壁の長さから一辺約5mの大きさと推定され、西壁の傾きから主軸方向はN 20° Wを示す。4号住居跡の貼床土を掘り下げていったところ、掘形の西半部は壁際が一段低く、中央部分が鳥状に高く残っている。掘形の東半部は4号住居跡の周壁とはば重なるものとみられる。そして、6号住居跡の掘形のおよそ4隅に分散される形で14基の柱穴と考えらえるP 1～14が検出された。

P 1～14の掘形堆積土の内、柱痕と判断したのはP 2・3の ℓ 2及びP 9・12の ℓ 1で、暗褐色シルトを基調とする。P 2・3では柱材の上部が切り取られた後に褐色シルトで埋めている様子が観察された。なお、P 5の底面近くからは白色粘土塊が認められたが、柱材の補強等に使われたものと考えられる。

柱穴の平面形は円形ないし梢円形である。柱穴の規模については、1基ずつ個別に示す。P 1が長軸約38cm×短軸約34cm×深さ約24cm、P 2が長軸約56cm×短軸約55cm×深さ約60cm、P 3が長軸約52cm×短軸約48cm×深さ約59cm、P 4が長軸約70cm×短軸約47cm×深さ約31cm、P 5が長軸約53cm×短軸約45cm×深さ約34cm、P 6が長軸約58cm×短軸約48cm×深さ約37cm、P 7が長軸約36cm×短軸約32cm×深さ約22cm、P 8が長軸約59cm×短軸約42cm×深さ約56cm、P 9が長軸約56cm×短軸約54cm×深さ約44cm、P 10が長軸約66cm×短軸約54cm×深さ約64cm、P 11が長軸約61cm×短軸約59cm×深さ約57cm、P 12が長軸約35cm×短軸約28cm×深さ約31cm、P 13が長軸約38cm×短軸約32cm×深さ約16.5cm、P 14が長軸約33cm×短軸約48cm×深さ約22cmである。全体的にある程度の深さがあり、底面は皿状に窪み、周壁が直立して立ち上がる。

柱穴はその位置関係から、北西部の3基、北東部の8基、南西部の1基、南東部の2基に大別される。そのうち重複関係があるものは、北東部ではP 14→P 6→P 5、南東部ではP 13→P 12→P 11の順に掘り込まれている。この状況から、住居跡は4本の主柱穴を持つ構造で、柱穴あるいは柱材を共用しながら建て替え、拡張が繰り返されていたものと推察される。また、柱穴の中では、北西部のP 2、北東部のP 11、南東部のP 9、南西部P 10の4基が、掘形の平面形や、40～

60cmと他と比べて深いこと等の類似点が認められる。この4基の柱穴は、P 11の重複関係も考慮すると、新しい段階の4号住居跡の主柱穴の可能性があるが、P 2は褐色シルトで埋められているため断定はできない。また、P 3・8についても、深さがそれぞれ59cm、56cmと深いことから、古い段階の4号住居跡ないし6号住居跡の主柱穴を構成していた可能性がある。

遺物は、4号住居跡から土師器103点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

まとめ

4・6号住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。今回検出された住居跡の中では大型であること、同地点での建て替えまたは拡張が繰り返されたことも考慮すると、集落内の主要な住居跡の一つと推定される。

(廣川)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図10・11、写真15・17・20~24)

本遺構は、調査区西部のB 5・6、C 5・6グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はL IV上面である。本遺構と4・6号住居跡は重複関係があり、古い方から6号住居跡→5号住居跡→4号住居跡の順につくられている。本遺構の南部は4号住居跡と重複するため床面が遺存しないが、4号住居跡の掘形から検出された貯蔵穴と柱穴2基については、位置関係から本遺構に所属するものと判断し、後述するP 1及びP 4・5とした。本遺構の周囲には、3・7・8号住居跡があり、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。C 5 P 34とも重複し、本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は2層に分層した。ℓ 1は床面上に薄く堆積し、L IIに由来する自然流入土とみられる。ℓ 2は貼床土でその上面は平坦に床面を整えている。

本遺構の形状は、東西にやや長い隅丸方形である。規模は長軸約6m、短軸約5mで、遺存する北壁では約5.5m、西壁では約4.6mを測る。主軸方向は、西壁でN 8°Wを示す。検出面からの深さは2~4cmである。床面からは、炉跡、貯蔵穴、柱穴4基を確認した。

炉跡は、床面の中央北西寄りに位置し、東西幅約60cm、南北幅約30cmの範囲が被熱している。中央が強く熱を受けた様子が観察され、最大5cmほどの厚さで熱硬化が認められた。

P 1は貯蔵穴と考えられ、南西隅で確認された。平面形は隅が丸い方形で、規模は長軸約1m、短軸約70cmである。床面からの深さは約50cmで、底面は凹凸が認められるが、周壁は直立する。堆積土は炭化物を少量含んだ暗褐色シルトの単層で、堆積土中からは数個体分の土師器がまとめて出土した。

P 2~5は柱穴と考えられ、それぞれ壁際から1mほど内側の箇所に位置し、平面形は円形ないし楕円形である。規模は、P 2が長軸約42cm×短軸約40cm×深さ約52cm、P 3が長軸約58cm×短軸約48cm×深さ約58cm、P 4が長軸約66cm×短軸約52cm×深さ約64cm、P 5が長軸約64cm×短軸約52cm×深さ約60cmを測る。柱穴の堆積土は暗褐色シルトを基調とする。P 2は他よりも小規

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

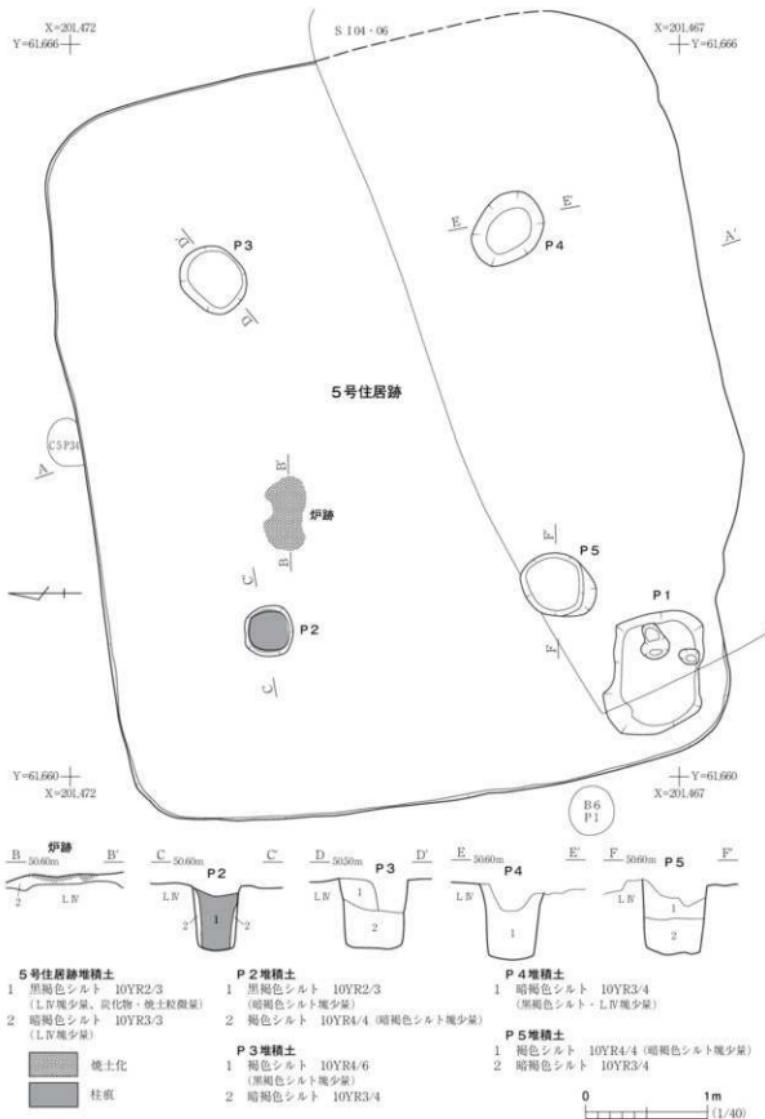


図10 5号住居跡（1）

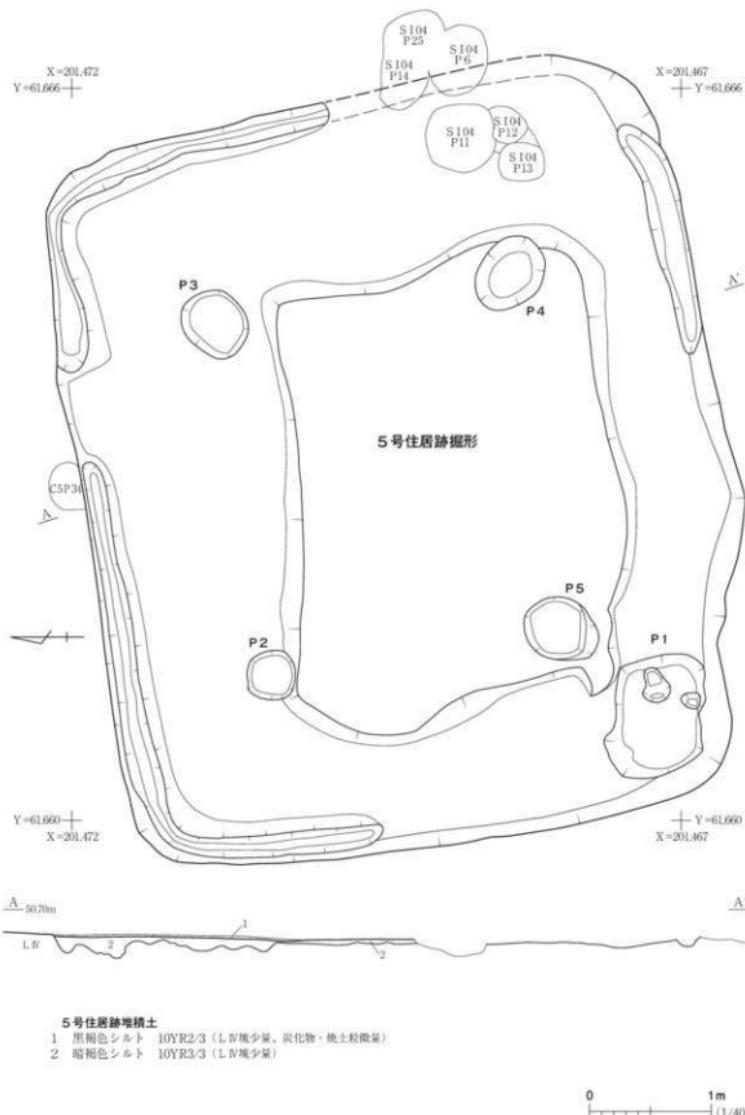


図11 5号住居跡（2）

模だが、掘形いっぱいに柱痕が認められた。

掘形は、西・南壁際から幅約1m、北・東壁際から幅約1.4mが一段低くなっており、中央が島状に高く残っている。また、北半部と南壁の一部には壁溝と考えられる溝みが確認された。壁溝が確認された長さは、北西隅が約4.2m、北東隅が約3.8m、南壁が約2mを測る。幅は約20cm、深さは約10~20cmで、底面には凹凸が認められる。

遺物 (図13、写真68)

出土遺物は土師器172点で、そのうち6点を図示した。

図13-1・2は底部が上げ底となっている小型の鉢である。いずれも外面全体に赤彩が観察され、1では内面の口縁部にも認められた。調整は、外面はハケメの後に横方向のヘラミガキを丁寧に施している。口縁部が遺存する1の内面調整は、外面と同様、横方向のヘラミガキである。

3は高杯の脚部で、3方向に円形の透かし孔が穿たれている。調整は磨滅のため不明である。

4・5は壺で、いずれも口縁部が折り返されている。口縁部は内外面とも横~斜め方向のハケ

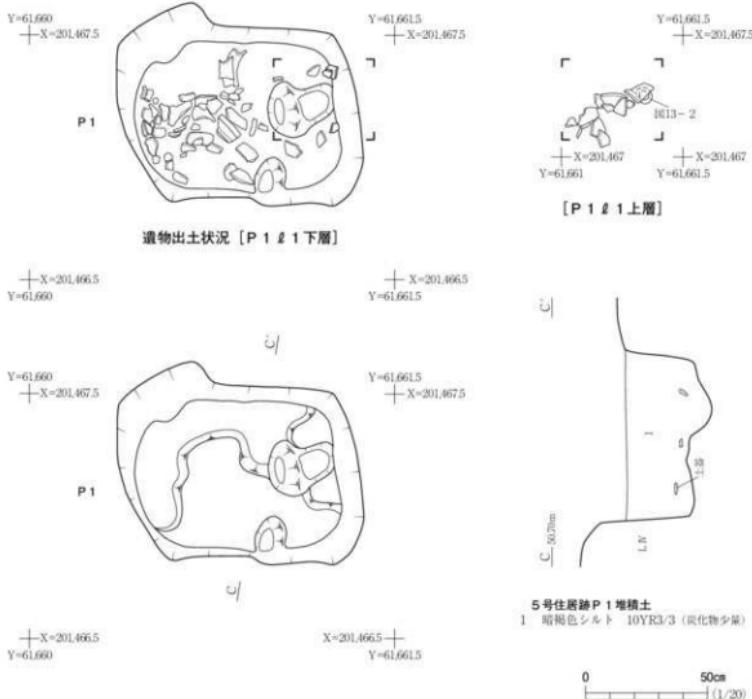


図12 5号住居跡遺物出土状況

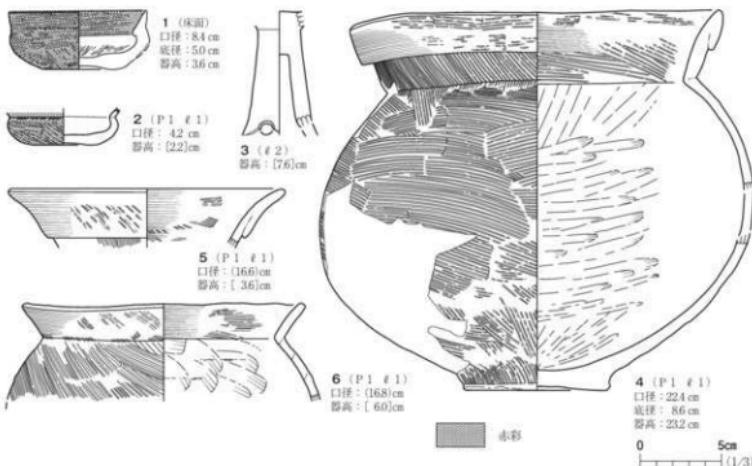


図13 5号住居跡出土遺物

メの後に横方向のナデが施されている。頭部の調整は、縦～斜め方向のハケメである。

6は亮で、内外面とも横～斜め方向のハケメの後に横方向のナデが観察される。胴部は外面が斜め方向のハケメ、内面が横方向のナデが施されている。

まとめ

本住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。南半部は4号住居跡に掘り込まれていたが、当該箇所から貯蔵穴と柱穴が検出されたため、住居跡の構造を把握することができた。本遺構の北に位置する7号住居跡からも貯蔵穴が確認されたが、住居跡の南西隅に設けられていることが共通する特徴として指摘できる。

(廣川)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図14～16、写真25～27)

本遺構は、調査区西部北寄りのB4・5、C4・5グリッドに位置する堅穴住居跡である。検出面はLIV上面である。本遺構は、複数の遺構と重複し、搅乱を受けていたため遺存状態が悪い。ただ、遺存する周壁部分と掘形の範囲から想定される住居跡の規模は一辺約7mと、検出された住居跡の中では最も大きい。本遺構の周辺には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がり、その一部や1・3号建物跡と重複し、本遺構の方が古い。検出された他の住居跡とは重複せず、それらの中では最も北に位置する。

遺構内堆積土は4層に分層した。 ℓ 1は床面上に薄く堆積し、 ℓ IIに由来する自然流入土とみられる。 ℓ 2は壁溝内堆積土である。 ℓ 3・4は貼床土である。いずれもLIV塊を少量含む暗褐色シ

ルトだが、色調が若干異なるため分層した。

本遺構の平面形は正方形に近く、規模は北壁と南壁間で約7.1m、東壁と西壁間で約6.9mを測り、1辺約7mである。主軸方向は、東壁でN 10° Eを示す。検出面からの深さは2~4cmである。床面は平坦で、貯蔵穴、間仕切り溝、柱穴3基を確認した。なお、床面からは炉跡と考えられる明瞭な被熱痕跡はなかったが、中央やや南東寄りの位置で炭化物の広がりが確認された。

P1は貯蔵穴と考えられ、西壁際から約70cm、南壁際から約40cm内側の南西隅で確認された。平面形は隅が丸い長方形で、規模は長軸約76cm、短軸約58cmである。床面からの深さは最大17cmで、底面は平坦で、周壁は直立する。堆積土は黒褐色シルトの単層で、堆積土中からは数個体分の

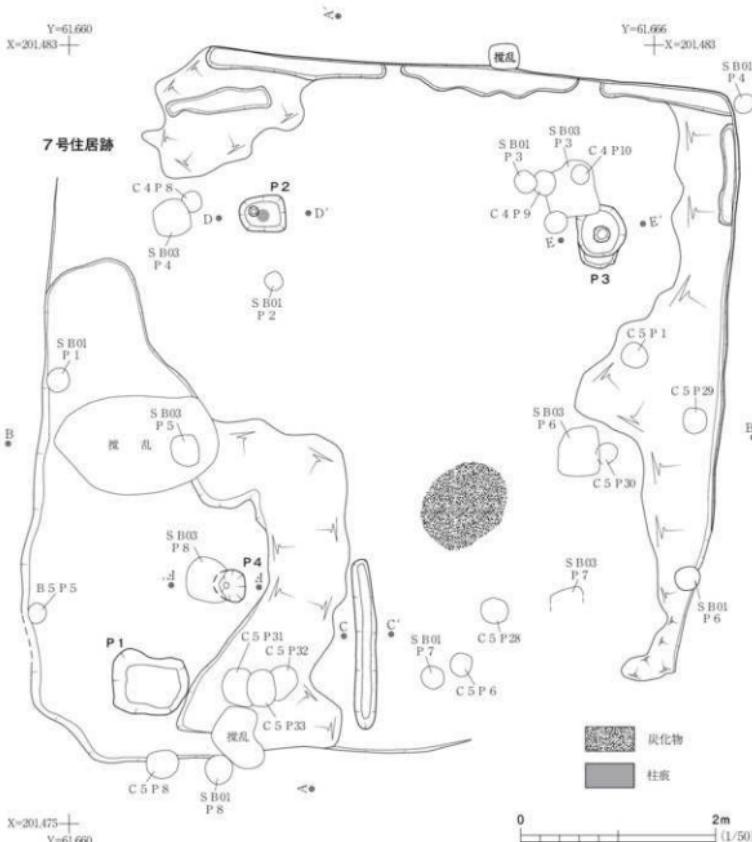


図14 7号住居跡（1）

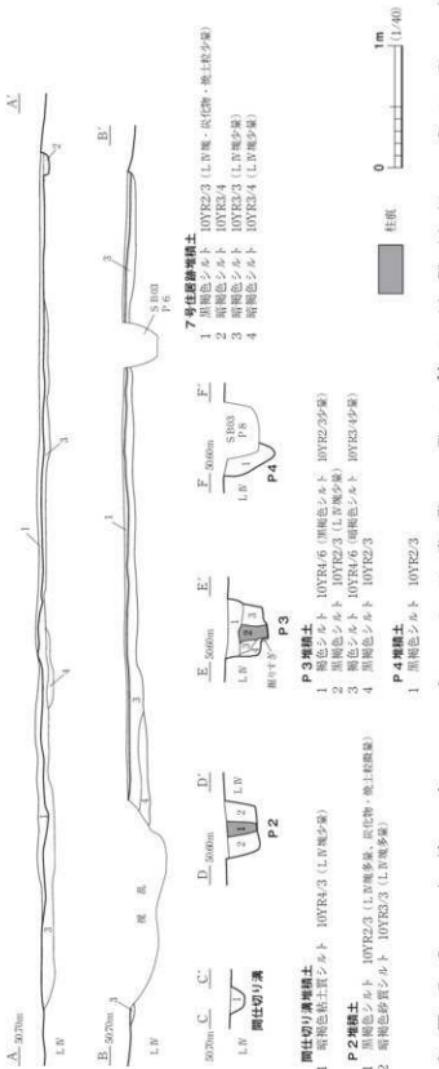


図15 7号住居跡（2）

土師器が出土した。

間仕切り溝は、南壁のほぼ中央から北に向かって延びている。規模は、長さ約2m、幅約20cm、深さ約10cmで、断面の形状はU字形である。

P 2～4は柱穴と考えられる。4本の主柱穴を持つ住居跡と推測されるが、南東部は擾乱を受けているため柱穴は確認できなかった。柱穴の平面形は隅丸方形ないし稍円形である。規模は、P 2が長軸約46cm×短軸約38cm×深さ約30cm、P 3が長軸約54cm×短軸約48cm×深さ約32cm、P 4が長軸約34cm×短軸約28cm×深さ約30cmを測る。P 2・ ℓ 1とP 3・ ℓ 2は柱痕とみられ、直径は約20～30cmである。P 2・3とも、柱痕の周縁は暗褐色砂質シルトや褐色砂質シルトを基調とした土で埋められている。

掘形は、一段低くなっている不整な窪みとして、周壁際を中心に認められた。

遺物 (図16、写真68)

出土遺物は土師器59点、縄文土器1点で、そのうち7点を図16に示した。

1は小型の土器鉢で、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。底部はやや上げ底となっている。

2は土師器の二重口縁壺である。外面の頭部は縱方向のヘラミガキが施されている。口縁部は磨滅のため調整の観察は困難である。内面は、口縁部が縱～斜め方向のヘラミガキ、頭部が横方向のナデが観察される。

3は士師器棗の小片で、口縁部が折り

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

Y=61,660
+ X=201,477

Y=61,661.5
+ X=201,477

Y=61,660
+ X=201,476

Y=61,661.5
+ X=201,476

遺物出土状況

Y=61,660
+ X=201,477

Y=61,661.5
+ X=201,477



P 1 堆積土
1 黒褐色シルト 10YR/2/3

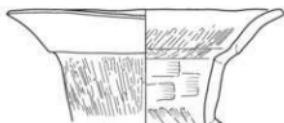


+ X=201,476
Y=61,660

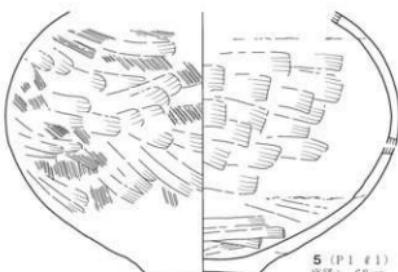
+ X=201,476
Y=61,661.5



1 (P 1 #1)
底径: 20 cm
器高: [37] cm



2 (P 1 #1 · SD01 #4)
口径: 16.6 cm
器高: [7.6] cm



5 (P 1 #1)
底径: 68 cm
器高: [16.2] cm



3 (#3)
器高: [24] cm



4 (P 1 #1)
器高: [6.6] cm



6 (P 1 #1)
底径: (6.8) cm
器高: [32] cm



7 (#3)
器高: [34] cm



図16 7号住居跡（3）、出土遺物

返されている。

4は土師器壺の口縁部～頸部付近を中心とした破片である。外面は、口縁部が横方向のナデ、頸部付近が綫～斜め方向のハケメ、内面は、口縁部が横方向のハケメ、頸部より下は横方向のナデが施されている。

5・6は土師器壺とした。5の上半部と下半部は接合しなかったが、図上で復元した。外面はハケメの後にナデが施されている。内面は横方向のヘラナデで、部分的に粘土紐の積み上げ痕が観察される。6は底部片で、外面はヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

7は縄文土器の胴部片である。貼床土中から出土したため、住居跡の構築段階で混入したものと判断される。

まとめ

本住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。遺存する範囲から1辺約7mの住居跡で、検出された住居跡の中では最も大型である。このため、集落の中心的な住居跡とみられる。また、本遺構の南に位置する5号住居跡からも貯蔵穴が確認されたが、住居跡の南西隅に設けられていることが共通する特徴として指摘される。

(廣川)

8号住居跡 S I 08

遺構(図17・18、写真27・28)

本遺構は、調査区西部のB 5・6グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はL IV上面である。1辺約5.5mの住居跡で、南西部分は工区外となるため未調査である。重複する遺構はないが、東に約2m離れて5号住居跡、さらに4・6号住居跡がある。主軸方向が一致する3号住居跡は西に約11m離れている。

遺構内堆積土は4層に分層した。 ℓ 1はL IIに由来するものとみられ、レンズ状堆積をしていることから自然堆積土と考えられる。また、 ℓ 1には炭化物や焼土粒が僅かに含まれている。 ℓ 2～4は貼床土及び掘形埋土である。

住居跡は北東部1/3程であるが、北壁が約5.3mを測り、一辺約5.5mの方形の住居跡が想定される。主軸方向は、遺存する東壁でN 25°Eを示す。検出面からの深さは最深15cmほどで、僅かに残る周壁は直立する。床面は平坦で、P 1・2とした柱穴2基を検出した。

P 1・2は、検出された位置から4基の主柱穴のうちの2基とみられる。平面形はやや不整な隅丸方形である。規模は、上端の長軸、短軸とそこからの深さを測った。P 1が遺存する部分で一辺約60cm、深さ約58cm、P 2が長軸約62cm、短軸約58cm、深さ約57cmである。堆積土は、P 1は黒色シルト、P 2は暗褐色シルトの単層で、柱痕は確認されなかった。

掘形は、中央部分が島状に高く残り、周壁に沿って幅約40～90cmの一段低い溝状となっている。中央部分と周壁との高低差は10～20cmほどで底面には凹凸が認められる。

遺物は土師器壺10点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

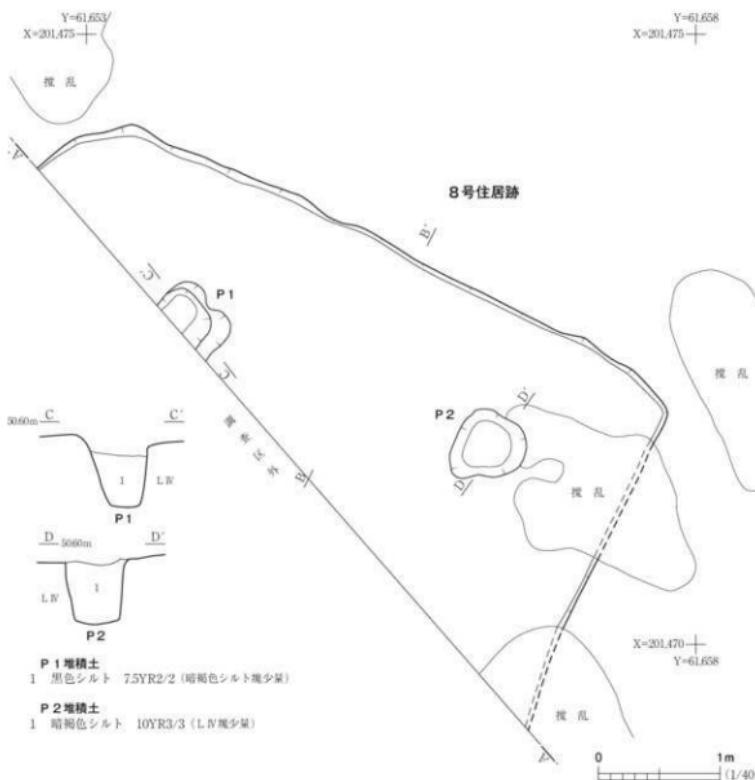


図17 8号住居跡（1）

まとめ

本遺構は、検出した中では中～大型の住居跡である。出土遺物から、他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。近接する4～6号住居跡の重複関係から集落内では数時期の変遷が認められるが、主軸方向が一致する3号住居跡と同時期に営まれていた可能性がある。（廣川）

第3節 掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は、調査区西部で3棟、調査区東部で3棟の計6棟である。3号建物跡を除いた建物跡は、L字形に屈曲する1号堀跡と主軸方向が概ね一致することから、堀跡で区画された中世の屋敷跡を構成する、あるいはそれと関連する建物跡と考えられる。3号建物跡は、これ

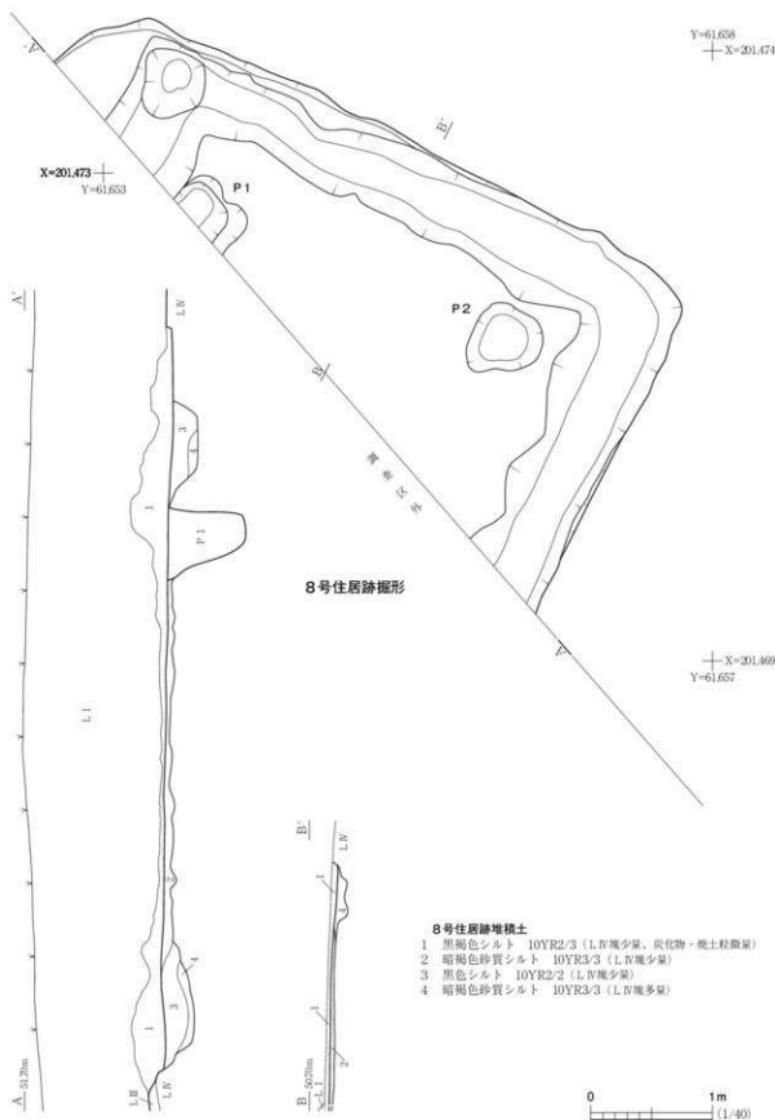


図18 8号住居跡（2）

らとは異なるため、時期や性格が異なるものとみられる。また、建物跡の付近からは柱穴とみられる小穴が多数検出されることから、同様の建物跡が他にも存在していたと考えられる。

1号建物跡 S B 01

遺構（図19、写真29・30）

本遺構は調査区西部のB 5、C 4・5グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はL IV上面である。本遺構の西側に約1m離れて2号建物跡が並列し、周辺には同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。本遺構は、7号住居跡、3号建物跡、C 4 P 9と重複している。これらの遺構との新旧関係は、本遺構の柱穴やC 4 P 9及び3号建物跡のP 3が7号住居跡の堆積土上面から確認されること、3号建物跡のP 3を掘り込んでいるC 4 P 9を、さらに本遺構のP 3が掘り込んでいることから、古い順に7号住居跡→3号建物跡→C 4 P 9→本遺構と判断される。

本遺構は東西3間×南北1間の東西棟の建物跡で、柱穴8基を検出した。南北の柱間にに対して東西の柱間の間隔が狭い。また、東西の柱間のうち、中央部がやや長い。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から1.62m+1.84m+1.56m、南側柱列が西から1.58m+1.86m+1.66m、西側柱列が2.86m、中央西寄りの柱列が2.88m、中央東寄りの柱列が2.89m、東側柱列が2.68mを測る。およそ東西5m×南北3mの建物跡である。主軸方向は、北東隅を起点とした北側柱列でN 67°Eである。なお、南西隅を基点とした西側柱列はN 24°Wである。

柱穴の掘形の平面形は梢円形ないし円形で、平面規模は直径20~25cmを基本とし、最小が北側柱列のP 2で短軸18cm、最大が南東隅のP 5で長軸42cmを測る。検出面からの深さは、P 3が20cm、P 8が24cmである以外は、12~18cmで20cmに満たない。掘形の底面はほぼ平坦で、周壁もほぼ直立する。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調とした単層である。柱痕を確認できたものはなかった。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東西3間×南北1間の東西棟の建物跡である。中世の屋敷跡を区画する1号堀跡より32m離れた位置にあるが、建物跡の主軸方向が同堀跡の東西軸と概ね一致することから、隣接する2号建物跡と共に、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。 (廣川)

2号建物跡 S B 02

遺構（図20、写真31・32）

本遺構は調査区西部のC 4、D 4グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はL IV上面である。本遺構の西側に約1m離れて1号建物跡が並列し、周辺には同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。重複する遺構はないが、いくつかの小穴が近接することから、本遺構と前後する時期に複数の建物が存在していたと推測される。

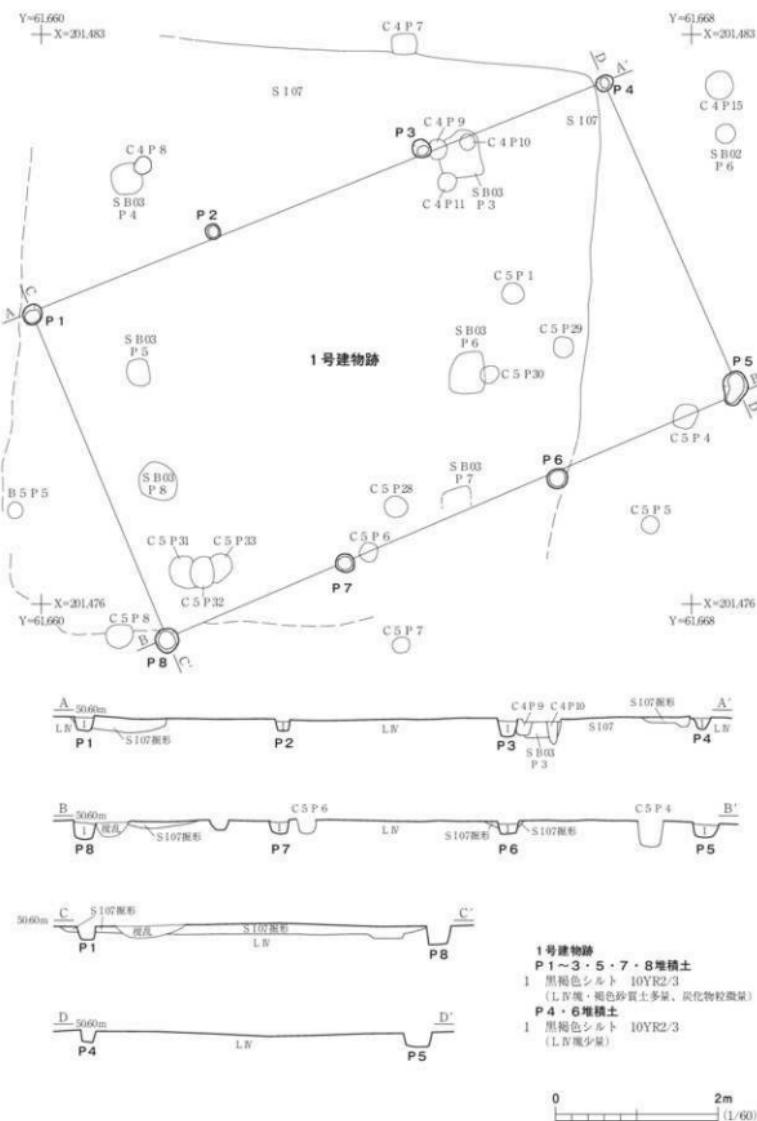


図19 1号建物跡

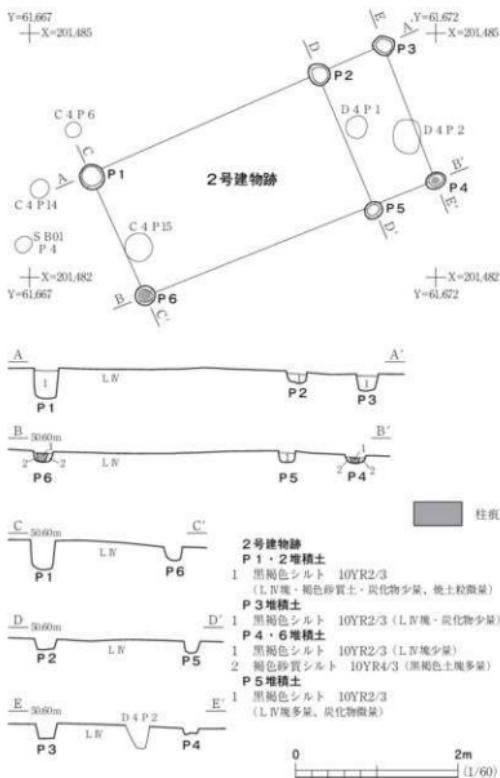


図20 2号建物跡

掘形の底面は平坦ないし皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。

柱穴の掘形内堆積土は、LIV塊を含んだ黒褐色シルトを基調としている。P4・6のℓ1は柱痕で、平面形は直径10~14cmの円形を呈する。P4・6のℓ2は柱の周囲の埋土である。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東西2間×南北1間の東西棟の建物跡である。中世の屋敷跡を区画する1号堀跡より27m離れた位置にあるが、建物跡の主軸方向が同堀跡の東西軸と概ね一致することから、隣接する1号建物跡と共に、中世の屋敷跡と関連する建物跡の一つと考えられる。
(廣川)

本遺構は東西2間×南北1間の東西棟の建物跡で、柱穴6基を検出した。東西の柱間では東寄りが狭く、P3・4は廂の柱の可能性も考えられる。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から2.02m+0.58m、南側柱列が西から1.98m+0.56m、西側柱列が1.08m、中央の柱列が1.18m、東側柱列が1.18mを測る。およそ東西2.6m×南北1.1mの建物跡である。主軸方向は北東隅を起点とした北側柱列でN66°Eである。なお、南西隅を基点とした西側柱列はN25°Wである。

柱穴の掘形の平面形は椭円形ないし円形で、平面規模は直径25~30cmを基本とし、最小が南東隅のP4で短軸20cm、最大が北西隅のP1で長軸32cmを測る。検出面からの深さは、P1が37cmであるのに対し、P2~6は7~19cmと浅い。

3号建物跡 S B03

遺構 (図21、写真33・34)

本遺構は調査区西部のC4・5グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はLIV上面である。本遺構は、7号住居跡、1号建物跡、C4P9等の小穴と重複している。これらの遺構との新旧関係は、本遺構の柱穴やC4P9等の小穴及び1号建物跡の柱穴が7号住居跡の堆積土上面から確認されること、本遺構のP3を掘り込んでいるC4P9をさらに1号建物跡のP3が掘り込んで

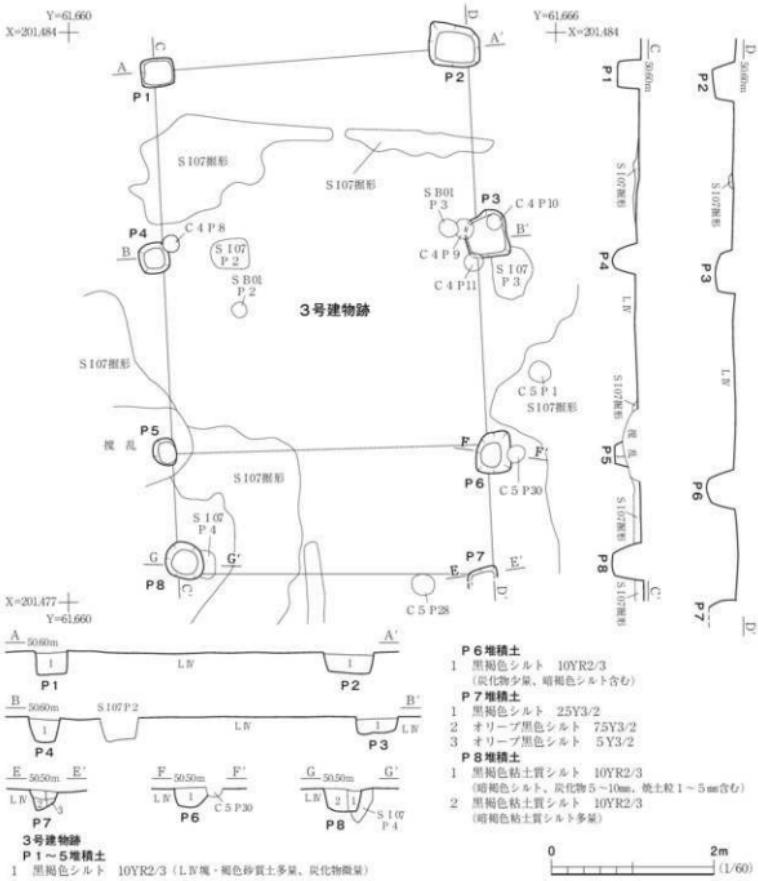


図21 3号建物跡

いること、C 4 P 9 等の他の小穴も本遺構の柱穴を掘り込んでいることから、古い順から、7号住居跡→本遺構→C 4 P 9 等の小穴→1号建物跡と判断される。

本遺構は東西1間×南北3間の南北棟の建物跡で、柱穴8基を検出した。南北の柱間では南寄りの柱間が狭いため、P 7・8は廟の柱穴である可能性も考えられる。芯々間での柱間の間隔は、西側柱列が北から1.52m+1.58m+0.92m、東側柱列が北から1.54m+1.80+1.06m、北側柱列が2.40m、中央北寄りの柱列が2.70m、中央南寄りの柱列が2.60m、南側柱列が2.44mを測る。およそ南北4m×東西25mの建物跡である。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でN 4°Wである。

柱穴の掘形の平面形は方形を基調とした形状を呈する。平面規模は長軸38~55cmを基本とし、最小が西側柱列のP 5で短軸30cm、最大が北東隅のP 2で長軸63cmを測る。検出面からの深さは、P 3・5が20cm前後でやや浅いが、それ以外は27~35cmである。掘形の底面は平坦ないし皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。なお、P 7は大部分が搅乱を受けていて不明である。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調としている。P 7ℓ2とP 8ℓ1が柱痕の可能性があるが、断定はできない。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東西1間×南北3間の南北棟の建物跡である。検出された他の1・2・4~6号建物跡とは、主軸方向や柱穴の形状が異なっているため、別な時期の建物跡と推測される。また、重複関係から、古墳時代前期以降で中世以前の所産と判断される。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、柱穴の形状が方形を基調とするものは、古代以降に多いことから、概ね古代から中世の所産と考えておきたい。

(廣川)

4号建物跡 S B 04

遺構 (図22、写真35・36)

本遺構は調査区東部の中央東寄りとなるH 3 グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はL IV上面である。本遺構と5号建物跡は、平面的な位置関係から、重複関係にあると判断される。なお、P 2が5号建物跡のP 2と検出面で僅かに接するが、新旧関係を把握することはできなかつた。なお、その他、他遺構と重複する柱穴はない。

本遺構は、東西1間×南北3間の南北棟の建物跡で、柱穴6基を検出した。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北から2.3m+2.16m+1.88mと漸減し、梁行の北側柱列が2.16m、南側柱列が2.05mを測る。東側柱列のP 2とP 3との間に柱穴が検出されなかったが、確認された柱穴がいずれも浅い点を考慮すると、削平されて確認できなかつた可能性が高い。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でN 28°Wで、1号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の平面形は不整円形のものが多いが、P 4・6は方形ないし長方形を基調とする。掘形の平面規模は長軸30~35cm前後を基本とし、最小が北東隅のP 2で直軸26cm、最大が南西隅のP 4で長軸42cmを測る。検出面からの深さは10~18cmと浅く、全体的に上部が大きく削平されて

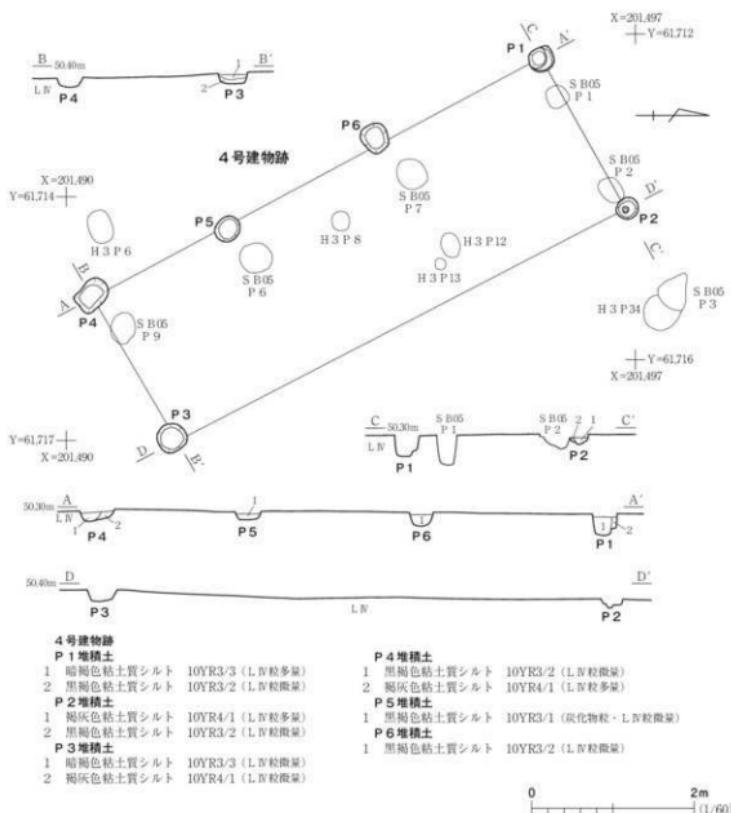


図22 4号建物跡

いるものと考えられる。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色粘土質シルトを基調とするが、柱痕を確認できたものはない。P 1・2・4は、ℓ 2が柱の周囲の埋土、ℓ 1が柱を抜き取った箇所に流入した土層と考えている。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東西1間×南北3間の南北棟の建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、1号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。（草野）

5号建物跡 S B 05

遺構（図23、写真35～37）

本遺構は調査区東部の中央東寄りとなるH 3 グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はL IV上面である。本遺構と4号建物跡は、平面的な位置から、新旧関係にあると判断される。なお、P 2が4号建物跡のP 2と検出面で僅かに接するが、新旧関係を把握することはできなかつた。この他、重複が確認されたのは、P 3とP 8である。P 3はH 3 P 34を掘り込んでいることから、本遺構の方が新しいと判断される。また、P 8は上部が8号溝跡に削られているため、本遺構の方が古いと判断される。

本遺構は、東西2間×南北3間の南北棟の建物跡で、柱穴9基を検出した。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北から2.04m+2.20m+1.84m、東側柱列で北から2.24m+2.04m+1.98m、梁行の北側柱列で西から1.26m+1.5mとばらつきが見られる。南側柱列は1間となっているが、対応する北側柱列のP 2が深い柱穴であることを考慮すると、削平されて確認できなかつた可能性が高い。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でN 28° Wで、1号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の平面形は不整円形ないし梢円形のものが多いが、P 5は長方形を基調とする。掘形の平面規模は長軸35～40cm前後を基本とし、最小が北西隅のP 1で長軸26cm、最大が南東隅のP 8で長軸45cmを測る。また、P 3・4の底面に直径6～10cmの根石、P 5には厚さ10cmの礎盤石が確認された。検出面からの深さは、P 6が24cmとやや深い他は30～35cm前後ではほぼ一定しているが、上述した通り北側柱列のP 2が特に浅く18cmを測る。

柱穴の掘形内堆積土をみると、P 4・6・7で柱痕を確認した。柱痕としたP 4・6・7のℓ 1は、いずれも黒褐色粘土質シルトで、平面形は直径15cm前後の円形を呈する。東側柱列のP 3・5・8では、柱を抜き取った後に土が流入したような状況が観察された。

なお、遺物はP 9のℓ 2から土師器細片が1点出土しただけで、本建物跡の成立ないし廃絶時期を示唆する遺物は皆無である。また、遺物は図示できなかつた。

まとめ

本遺構は、東西2間×南北3間の南北棟の建物跡である。遺構の所属時期を判断する遺物に欠けるが、1号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。

重複する4号建物跡との新旧関係は定かではない。しかし、P 8が中世の屋敷地に帰属すると考えられる8号溝跡に削られている点を重視すれば、5号建物跡の廃絶後に西へずらした位置に4号建物跡がつくられ、その後に8号溝跡がP 8を開削したという可能性も考えられる。（草野）

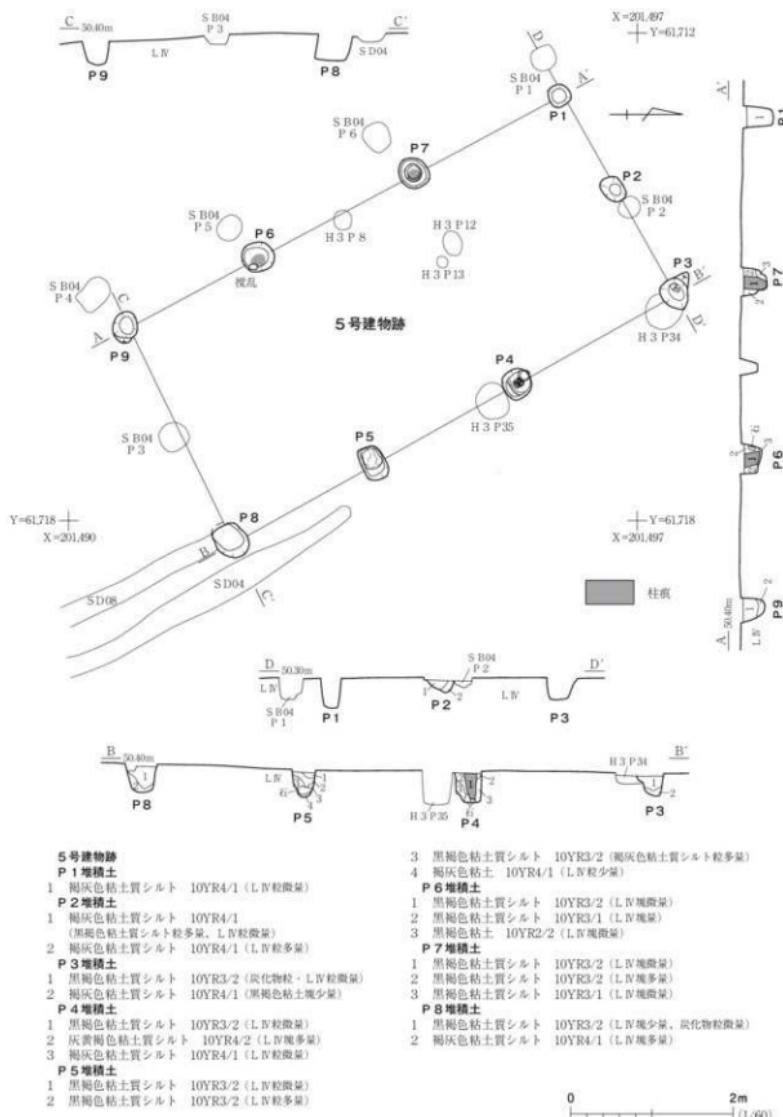


図23 5号建物跡

6号建物跡 S B 06

遺構（図24、写真38・39）

本遺構は、調査区東部でも北東部となるG2グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はLIV上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が散在する。

本遺構は、東西1間×南北2間の南北棟の建物跡で、柱穴5基を検出した。柱間寸法は、桁行の東側柱列で北から1.9m+2.2m、梁行の北側柱列で1.72mを測る。南西隅の柱穴は確認されなかつた。しかし、対応する南東隅のP4が浅い柱穴であることを考慮すると、削平された可能性が高い。主軸方向は南東隅を起点とした東側柱列でN25°Wで、1号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の規模・平面形は直径24~30cmの円形ないし梢円形を呈する。検出面からの深さは北側の4基が20cm前後で一定しているが、上述した通り浅いP4は12cmを測る。

柱穴の掘形内堆積土は、柱痕を残すものは皆無で、すべて単層の人为的な埋土であった。P1~3は焼土塊・炭化物粒を非常に多く含む黒褐色粘土質シルト層、P4・5は焼土塊・炭化物粒を少し含む褐色シルト層で、建物廃棄後に焼却され埋め戻された可能性を考えられる。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東西1間×南北2間の南北棟の建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、1号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。（草野）

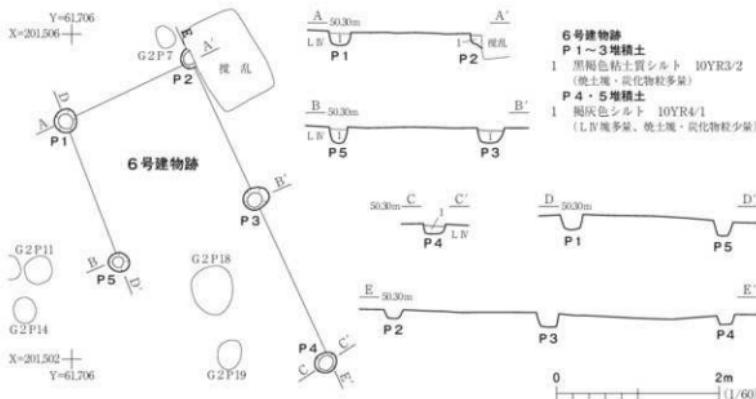


図24 6号建物跡

第4節 土 坑

1次・2次調査で発見された土坑は27基である。このうち21基(1・6~24・27号)は調査区東部で検出され、古墳時代前期の堅穴住居跡の周辺にはあまり認められない。全体として出土遺物に乏しく時期が不明のものがほとんどだが⁴、周辺遺構との関係から古代ないし中世に位置付けられる可能性がある。

1号土坑 SK 01 (図25・29、写真40・69)

本遺構は、調査区東部の南西隅にあたるG 6 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、西側に1号井戸跡が隣接する。

平面形は直径100~120cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは最深部で40cmを測る。断面形は南西部及び南東部の上方の掘り込みが浅く緩やかで、底面は若干の凹凸がある。

堆積土は色調・含有物の違いにより3層に分層した。 ℓ 1・3はレンズ状堆積を示す自然堆積土、 ℓ 2はL IV塊や黒色粘土質シルト塊を斑状に多く含む特徴から人為堆積土と考えられる。

遺物は、比較的遺存状態が良かった土師器鉢の他、土師器細片2点が出土した。図29-1の土師器鉢は内外面ともナデが施され、口縁部外面と体部との境にヨコナデによって生じた弱い段が認められる。

本遺構から出土した遺物は、その特徴から7世紀代の資料の可能性があるが、断定はできない。なお、遺構の性格は不明である。

(草野)

2号土坑 SK 02 (図25、写真40)

本遺構は、調査区西部の中央付近、C 5・D 5 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が広がっている。

平面形は隅丸方形を基調とし、長軸70cm、短軸68cmを測る。検出面からの深さは30cmである。周壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。

堆積土はL IV塊を多く含む黒褐色シルトの單層で、人為的に一度に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器片7点が出土した。いずれも細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明だが、所属時期については、出土遺物から古墳時代以降に位置付けられる。

(廣川)

3号土坑 SK 03 (図25)

本遺構は、調査区西部の南東部、E 6・F 6 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面

である。重複する遺構はなく、周囲にも小穴が僅かに点在する程度である。

平面形は直径130cmの円形を呈する。検出面からの深さは18cmで、底面は平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、LⅣ由来の褐色砂質シルトを斑状に含むことから、人為堆積土と考えられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (廣川)

4号土坑 SK 04 (図25、写真40)

本遺構は、調査区西部の南西部、D 6・D 7グリッドに位置する土坑である。検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.4m南方に5号土坑がある。

平面形は長軸82cm、短軸60cmの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは15cmで、底面は平坦である。

堆積土はLⅣに近い暗褐色砂質シルトの単層で、しまりもないことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (廣川)

5号土坑 SK 05 (図25)

本遺構は、調査区西部の南西隅にあるD 7グリッドに位置する土坑である。検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.4m北方に4号土坑がある。

平面形は、長軸100cm、短軸94cmの楕円形である。検出面からの深さは約15cmを測る。底面は概ね平坦だが、中央部が直径40cmほど浅く窪んでいる。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色細砂のℓ1、にぶい黄褐色細砂のℓ2、暗褐色シルトのℓ3に分層した。中央部のℓ1はしまりのない自然堆積土だが、ℓ3は黒褐色シルトとLⅣ由来の褐色砂質シルトを斑状に含むことから人為堆積土と考えられる。ℓ2は中央部の浅く窪む箇所、ℓ3は外周にのみ認められる。堆積状況や遺構の形状から、土坑内に枠状の仕切りがあった可能性が想定される。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (廣川)

6号土坑 SK 06 (図25)

本遺構は、調査区東部の北西部、F 3グリッドに位置する土坑である。検出面はLⅣ上面である。北北東方向に延びる7号溝跡と重複する。同溝跡によって本遺構東部の上端が削られているため、本遺構の方が古いと判断される。

平面形は長軸70cm、短軸60cmの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。南東部に比べ西部の掘り込みが急勾配で、底面は平坦である。

堆積土は色調・含有物の多寡により2層に分層した。薄いレンズ状堆積を示すℓ1は自然堆積土、LⅣ塊を多く含む厚い堆積のℓ2は人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の色調や土

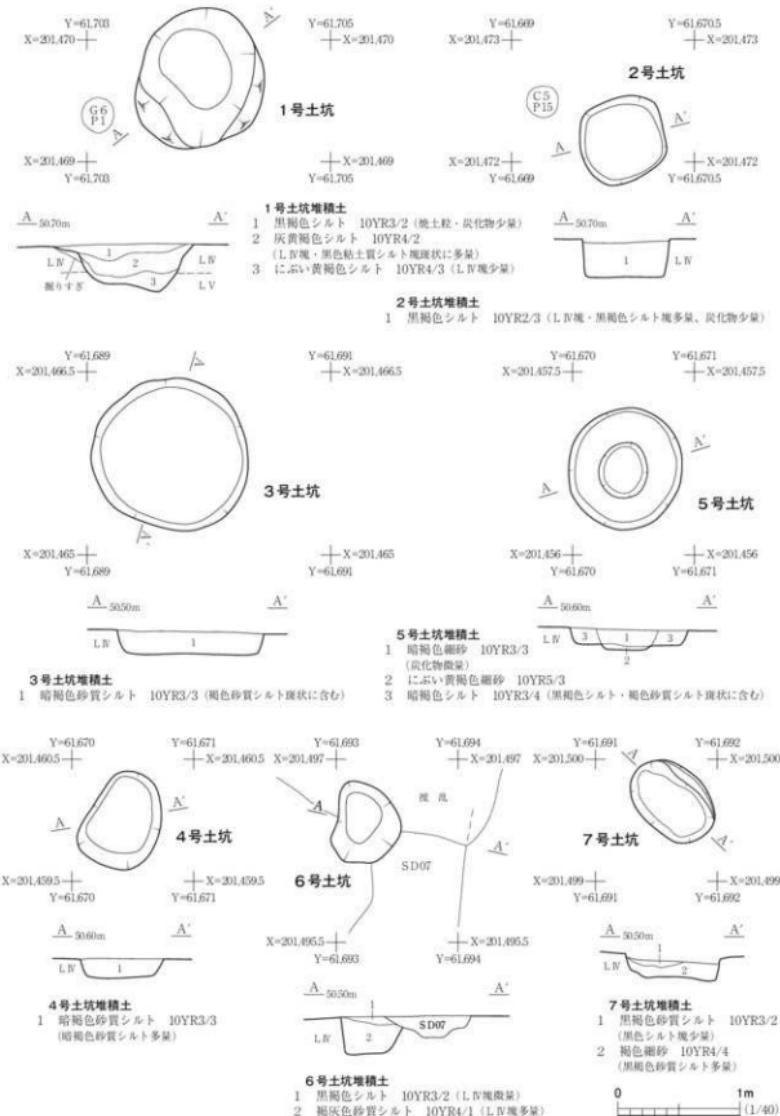


図25 1~7号土坑

質が1号土坑に近いことから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。

(草野)

7号土坑 SK 07 (図25)

本遺構は、調査区東部の北西部、F 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、2.8m南東に6号土坑がある。

平面形は、長軸78cm、短軸54cmの楕円形で、主軸方向はN 50°Wである。検出面からの深さは16cmを測り、底面には細かな起伏が見られるが、概ね平坦である。

堆積土は、色調・含有物の違いから2層に分層し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。

(草野)

8号土坑 SK 08 (図26)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。1号溝跡に沿って北北西方向に延びる3号溝跡と重複する。同溝跡に西側を大きく削られていっているため、本遺構の方が古いと判断される。また、東側には12・13号土坑が隣接する。

残存範囲によると、平面形は長軸130cmの不整楕円形で、検出面からの深さ5cm程度の浅い皿状を呈する。

堆積土はL IV塊を多く含む暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。

(草野)

9号土坑 SK 09 (図26・29、写真40・69)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 4グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、3号溝跡の東側に近接し、約1.6m北方に15・16号土坑がある。

平面形は長軸約200cm、短軸160cmの不整楕円形を呈し、掘り込みは緩やかで検出面からの深さは32cmを測る。

堆積土は色調やL IV塊の多寡により2層に分層し、レンズ状堆積を示すことからいざれも自然堆積土と考えられる。

出土遺物は縄文土器小片2点のみで、このうち1点を図示した。図29-2は口縁部付近の破片である。磨滅のため、明瞭ではないが、沈線で区画された内部に縄文が観察される。

本遺構の性格等は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしない。なお、1・6号土坑の堆積土と比べると、本遺構の堆積は自然堆積と考えられる点が異なるが、これらの土坑と色調や土質が近似している。このことから、1号土坑や6号土坑に近い時期の所産の可能性もある。

(草野)

10号土坑 SK 10 (図26、写真40)

本遺構は、調査区東部の南東部、I 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、南東側に22号土坑が近接する。

平面形は長軸114cm、短軸90cmの楕円形を呈する。南西側から北東側に向かって緩やかに深くなり、検出面からの深さは最深部で20cmを測る。

堆積土はL IV塊を少量含む黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

11号土坑 SK 11 (図26、写真40)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北側に小穴群が認められる他、約2m南西に12・13号土坑がある。

平面形は長軸100cm、短軸76cmの楕円形を呈し、主軸方向はN 26° Eである。検出面からの深さは16cmである。断面形は浅い皿状を呈し、底面は多少の凹凸はあるものの比較的平坦である。

堆積土は色調・L IV塊の多寡により2層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

12号土坑 SK 12 (図26、写真41)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、3号溝跡の東側にあって、北西側に13号土坑、南東側に15・16号土坑が隣接する。

平面形は直径約100cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。掘り込みの上方は浅く緩傾斜で、底面が平らな断面形である。

堆積土は2層に分層した。 ℓ 1は焼土粒・炭化物を含む黒褐色砂質シルト、 ℓ 2は暗褐色砂質シルトである。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

13号土坑 SK 13 (図26、写真41)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、3号溝跡の東側にあって、西側に8号土坑、南東側に12号土坑が隣接する。

平面形は長軸84cm、短軸72cmの不整楕円形、断面形は擂鉢状を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。

第2編 中室內遺跡（1・2次調査）

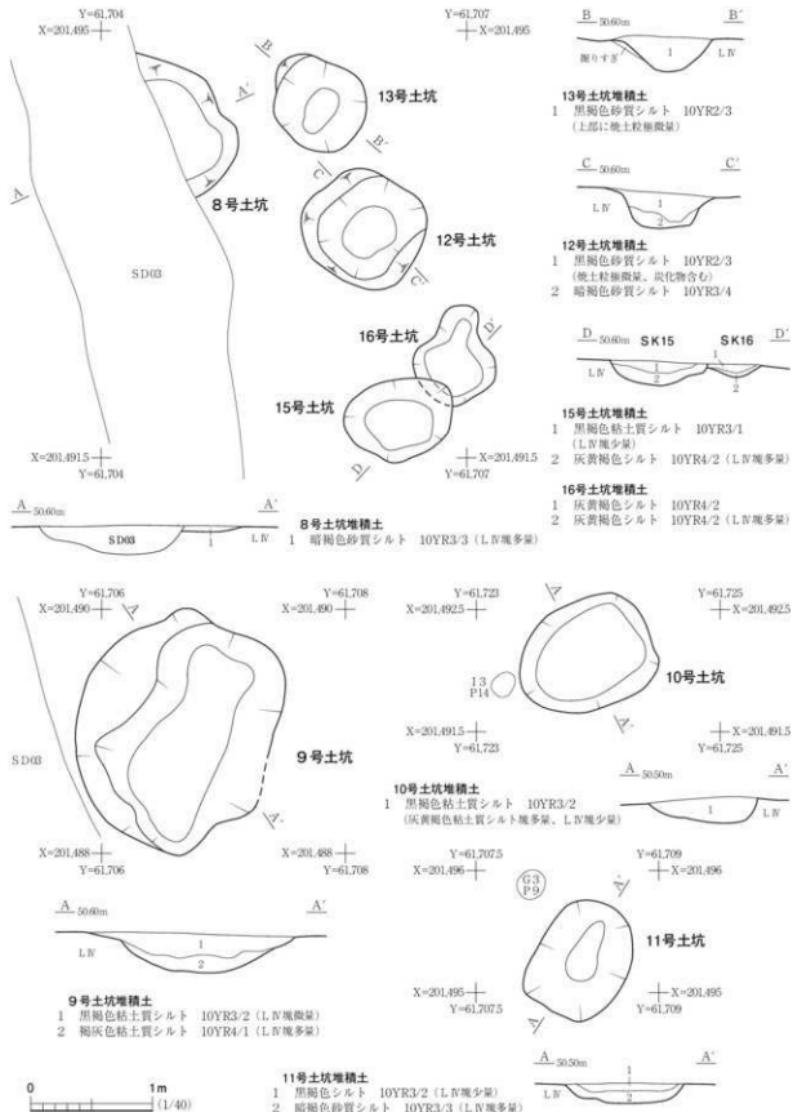


図26 8~13・15・16号土坑

堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

14号土坑 S K 14 (図27・29、写真41・69)

本遺構は、調査区東部の北部、G 2 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、約1m北方を11・12号溝跡が東西方向に走り、2.4m南東に6号建物跡がある。

平面形は長軸3.26m、短軸2.68mの不整形円形を呈する。周壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは46cmを測る。

堆積土は4層に分層した。主体をなす黒褐色粘土質シルトのℓ 1・2が一度に埋められたような人為堆積の状況を示すのに対し、底面に薄く広がるℓ 3と西壁付近に認められるℓ 4は自然堆積と考えられる。

遺構内部には、主軸方向N 22° W の石積み1列が底面に設置されていた。残存していた石列は7個の自然石からなり、うち2個が積まれた状態で検出された。このほか元位置をとどめていない10~30cm大の石が6個確認されたため、おそらく全体が2段積みの石列だったと考えられる。遺構東部に堆積するℓ 2は、底面からこの石積みを覆うように認められ、逆に有機物を多く含むℓ 3が石積みの東側に広がらない点を勘案すると、ℓ 2は石積みの裏込めとして施された埋土と捉えられる。石列の長さは1.86m、底面からの高さは中央の2段積み部分で36cmを測る。

遺物はℓ 1から土師器・瓦質土器擂鉢・陶器蓋が出土した。図29-3は瓦質土器擂鉢の口縁部片で、1単位5本の擂目が施される。図29-4は摘み部分が剥離したロクロ成形の陶器蓋片で、その特徴から、近世の岸窯製品と考えられる。底面には回転糸切り痕が残る。

本遺構の具体的な性格は不明であるが、遺構内部を石積みで区画し、深く広い西部を主体とした利用形態が想定される。遺構の所属時期は、瓦質土器擂鉢の特徴から15~16世紀以降に位置付けられ、陶器蓋の年代観から近世までに埋没したものと考えられる。 (草野)

15号土坑 S K 15 (図26、写真42)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。16号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。この他、北に12号土坑、西に3号溝跡が隣接する。

平面形は長軸90cm、短軸64cmの不整形円形を呈する。底面は中央部分が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは最深部で20cmを測る。

堆積土は色調・土質・L IV塊の多寡により2層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の色調や土質が9号土坑に近いことから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。 (草野)

16号土坑 SK 16（図26、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。15号土坑と重複し、本遺構の方が古い。この他、北に12号土坑、西に3号溝跡が隣接する。

平面形は長軸84cm、短軸30～68cmの不整形を呈する。底面は中央部分に向かって浅く緩やかに窪み、検出面からの深さは10cmを測る。

堆積土はL IVの多寡により2層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土は重複関係にある15号土坑のℓ 2と共に通性が高く、近い時期に位置付けられるものと考えられる。（草野）

17号土坑 SK 17（図27、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。18号土坑と1号堀跡と重複し、これらの遺構よりも本遺構の方が古い。

平面形は長軸122cm、短軸90cmの不整長方形ないし梢円形を呈する。底面は西側に向かって緩やかに低くなる形状で、1号堀跡の最深部で深さ22cmを測る。

堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、1号堀跡に遺構西部が削られていることから、中世の屋敷跡が営まれる以前に位置付けられることは確かである。

（草野）

18号土坑 SK 18（図27、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。17号土坑と3号溝跡と重複し、17号土坑より新しく、3号溝跡より古い。

平面形は長軸110cm、短軸90cmの梢円形である。底面は中央部分が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは最深部で22cmを測る。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、17号土坑と同様に自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（草野）

19号土坑 SK 19（図28、写真42）

本遺構は、調査区東部の北部、G 2 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、24m東方に小穴群を挟んで6号建物跡がある。

平面形は長軸140cm前後の不整形を呈し、検出面からの深さは最深部で26cmを測る。断面形も全体的に歪で、底面の起伏が目立つ形状である。

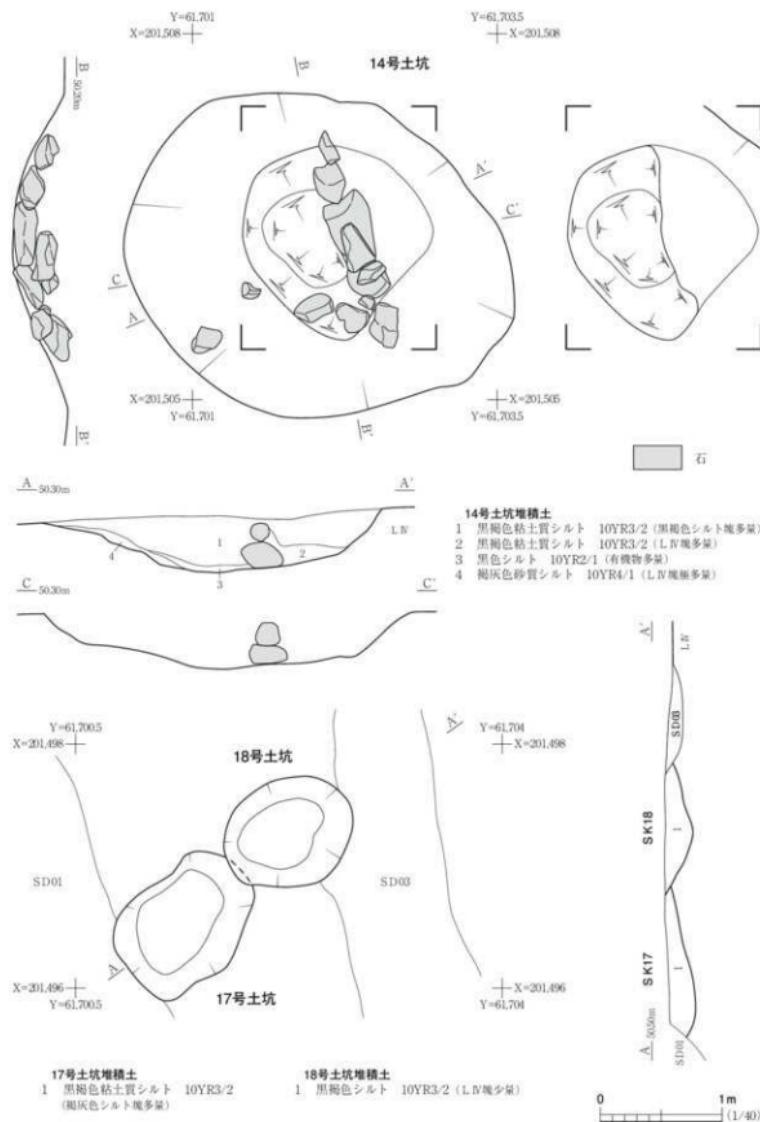


図27 14・17・18号土坑

堆積土は色調・L IV塊の多寡により2層に分層し、いずれも自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

20号土坑 S K 20 (図28)

本遺構は、調査区東部の北部、F 2 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。

12号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。また、東側に14号土坑が隣接する。

上方が削平を受けているため、検出面からの深さは最深部でも12cm程度と浅く、特に南東部では遺構の上端が確認されなかった。そのため、本来の規模・形状は定かでないが、残存部による限り、平面形は長軸170cm以上、短軸72~104cmの不整長方形を呈する。底面は平坦である。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、L IV塊を多量に含む特徴等から人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

21号土坑 S K 21 (図28、写真42)

本遺構は、調査区東部の北部、G 2 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。

重複する遺構はないが、3号溝跡北端の西側に隣接する。

平面形は長軸80cm、短軸66cmの不整楕円形を呈する。底面が平らな形状で、検出面からの深さは24cmを測る。

堆積土は色調・L IV塊の多寡により2層に分層した。L IV塊を多量に含むℓ 2は、人為堆積土と考えられる。ℓ 1は自然堆積土であろう。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (草野)

22号土坑 S K 22 (図28、写真40)

本遺構は、調査区東部の南東部、I 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北西側に10号土坑、南東側に13号溝跡が近接する。

平面形は長軸124cm、短軸104cmの不整楕円形である。底面は南東方向に向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。

堆積土は灰黄褐色粘土質シルトの単層で、L IV塊を多量に含むため人為堆積土と考えられる。

遺物は、土師器片1点が出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明だが、所属時期については、出土遺物から古墳時代以降に位置付けられる。

(草野)

23号土坑 S K 23 (図28、写真42)

本遺構は、調査区東部の南東部、I 3 グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面であ

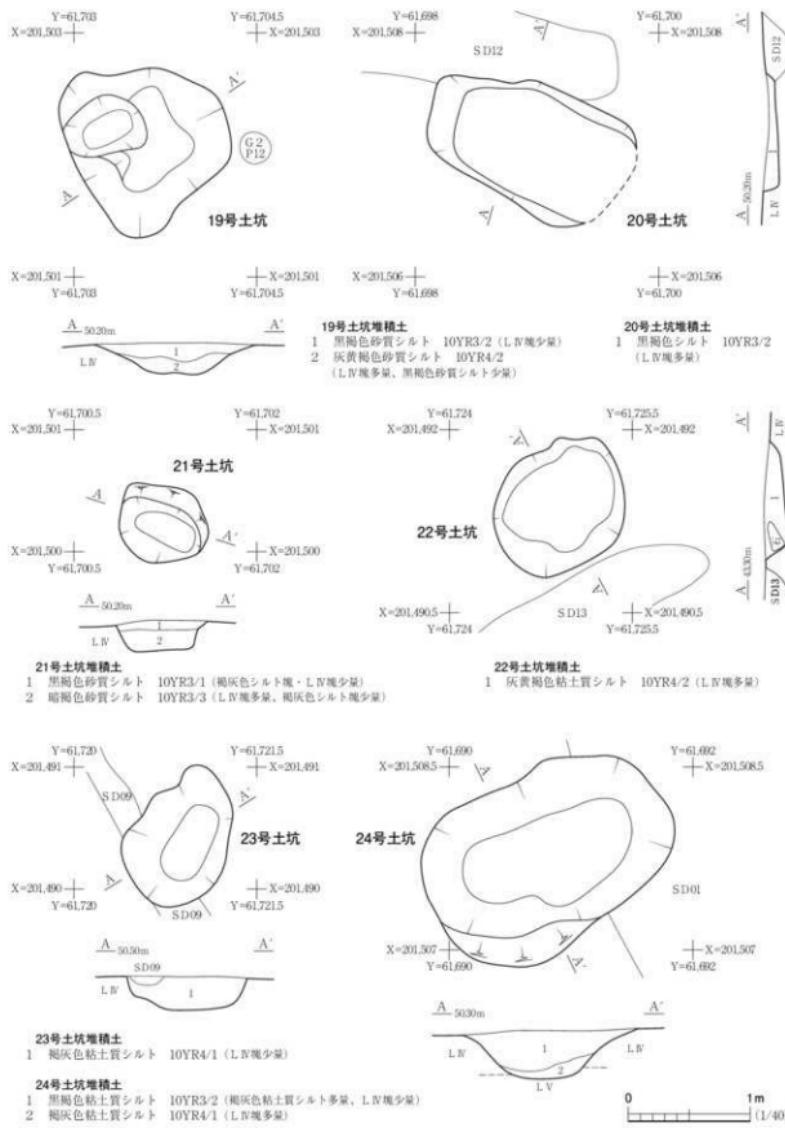


図28 19~24号土坑

る。9号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は長軸120cm、短軸54～82cmの不整橢円形を呈する。底面にはやや凹凸が見られ、検出面からの深さは28cmを測る。

堆積土は褐色灰色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

遺物は、土師器片1点が出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしえないが、出土遺物及び重複関係のある9号溝跡よりも古いことから、古墳時代～中世のいずれかの時期におさまるものと考えられる。

（草野）

24号土坑 SK 24（図28、写真43）

本遺構は、調査区東部の北西部、F 2グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。1号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は長軸206cm、短軸130cmの橢円形である。遺構の掘り込みは検出面から40cm下のL V上面にまで及び、底面は緩やかな鍋底状を呈する。

堆積土は色調・含有物の違いにより2層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構の性格は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしえないが、重複関係のある1号堀跡よりも古いことから、中世の屋敷跡が営まれる以前に位置付けられると考えられる。（草野）

25号土坑 SK 25（図29、写真43）

本遺構は、調査区西部の北東部、D 5グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北東側に26号土坑が近接する。

平面形は長軸112cm、短軸60～106cmの不整橢円形である。検出面からの深さは30cmを測り、底面は平坦である。なお、遺構内の北西際とその約30cm外側に張り出した箇所に直径約10cm、長さ約60cmの杭（前者：杭B、後者：杭A）が打ち込まれている。さらに、杭Aの西隣に直径約8cm、長さ28cmの杭Cが確認されたが、本遺構との関係については不明である。

堆積土は色調により3層に分層したが、いずれもグライ化しているため、堆積要因は判然としなかった。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、規模・形状や堆積土の特徴が共通する26号土坑と関連する可能性が高い。

（草野）

26号土坑 SK 26（図29、写真43）

本遺構は、調査区西部の北東部、D 5グリッドに位置する土坑である。検出面はL IV上面であ

る。重複する遺構はないが、南西側に25号土坑が近接する。

平面形は長軸108cm、短軸82cmの梢円形である。検出面からの深さは26cmを測り、底面は平坦である。

堆積土は色調により2層に分層したが、いずれもグライ化しているため、堆積要因は判然としなかった。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、規模・形状や堆積土の特徴が共通する25号土坑と関連する可能性が高い。(草野)

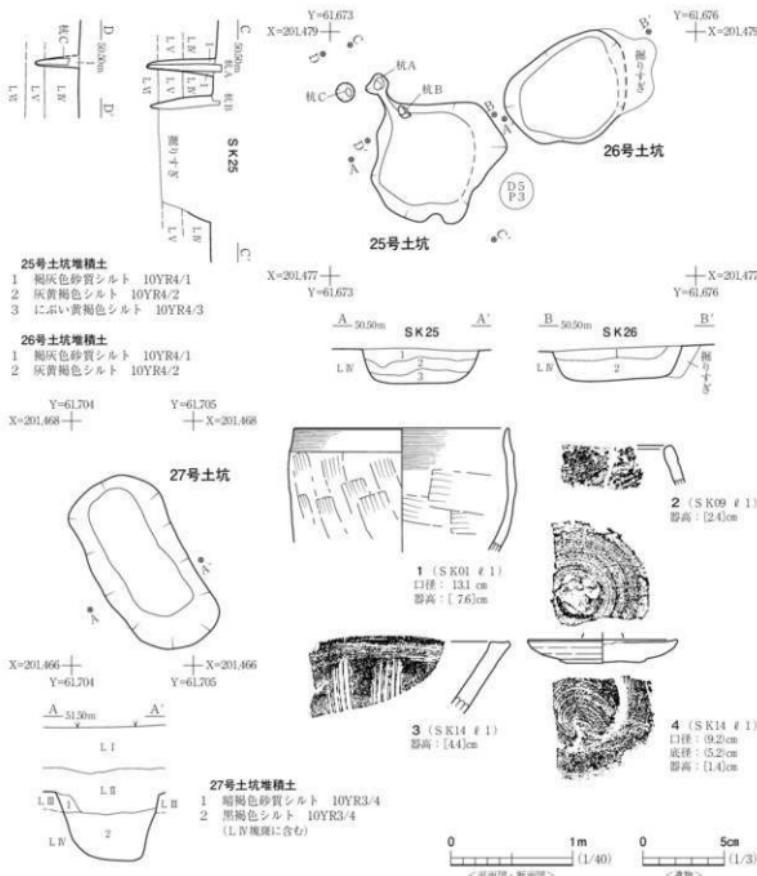


図29 25~27号土坑、土坑出土遺物

27号土坑 S K 27 (図29)

本遺構は、調査区西部の南西端、G 6 グリッドに位置する土坑である。検出面は L III 上面である。東側に 15 ~ 17号溝跡、西側に 2 ~ 14号溝跡が接する。1次調査では溝跡としていたが、2次調査の結果、土坑であることが判明した。

平面形は長軸 153cm、短軸 75cm の南北に長い橢円形である。検出面からの深さは最大で 48cm である。

堆積土は 2 層に分層した。 ℓ 1 は上部の壁際のみで見られる暗褐色砂質シルトで、壁の崩落土と見られる。 ℓ 2 は黒褐色シルトを基調としていて、L IV 塊が混ざる。しまりもあることから、人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。 (鶴 見)

第5節 堀跡・溝跡

今回の調査では堀跡・溝跡 17 条が確認された。1号堀跡としたものは、平成 28 年度に伊達市教育委員会が実施した中室内遺跡第 1 次確認調査(伊達市教育委員会 2017)で検出された館跡の区画溝と考えられる遺構の続きで、他に検出された溝跡 16 条と比べて大規模で防御的な機能を有すると判断したため、堀跡として区別した。

1号堀跡 S D 01

遺構 (図30~33、写真44~49・62)

本遺構は、調査区東部の南西隅近くで L 字形に屈曲するコーナー部分をもち、F 1 ~ 4、G 3 ~ 5、H 5、I 4 ~ 5、J 4 グリッドを横断して直線的に走る堀跡である。検出面は L IV 上面だが、調査の過程で F 2 グリッドにおいて L II 上面から掘り込まれていることを確認した。重複遺構として 17・24 号土坑、3・5・6・12・15・17 号溝跡、1 号特殊遺構があげられ、これらを壊してつくられており、本遺構の方が新しい。調査区東部の南東隅にあたる J 4 グリッドでは、現代の搅乱によって本遺構が大きく削られ、辛うじて北側の上端を残すのみであった。

堆積土は色調・含有物の違い等により 7 層に分層した。 ℓ 1・2 は礫や砂質シルト塊などが含まれ、近現代の焼し瓦や陶器片が出土する人為堆積土、 ℓ 3 ~ 7 は自然堆積土と考えられる。植物遺体・木片を非常に多く含む黒褐色粘土層の ℓ 3 は、堀跡が東西方向に走る間は薄いレンズ状堆積を示しているが、コーナー付近から徐々に層厚を増し、堀跡中央が不自然に窪んだ形状を呈する。伊達市教育委員会による中室内遺跡第 1 次確認調査成果によれば、「昭和の初め頃、稻作が行われた際に堀跡がまだ埋まり切っていないことから、水路として利用していたことが周辺からの聞き取り調査で判明した(伊達市教委 2017 : p.13)。」とあり、 ℓ 3 の落ち込みは近現代の堀跡再利用に伴う

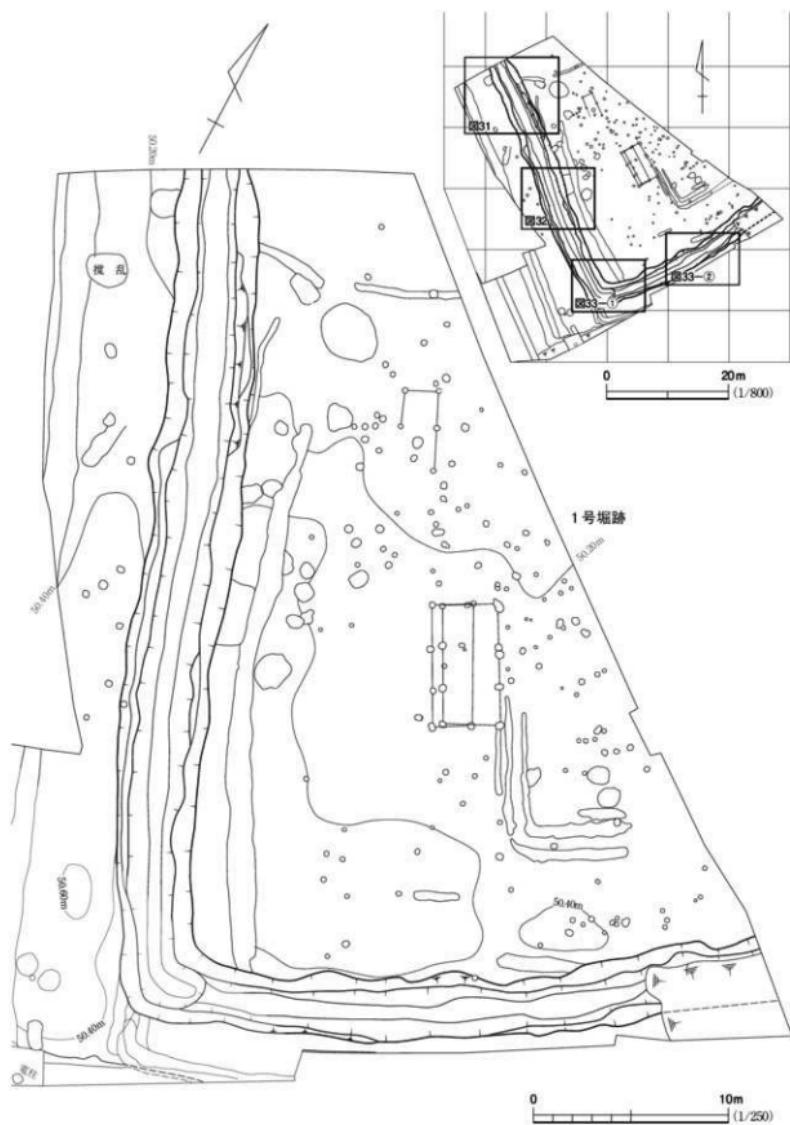


図30 1号堀跡（1）

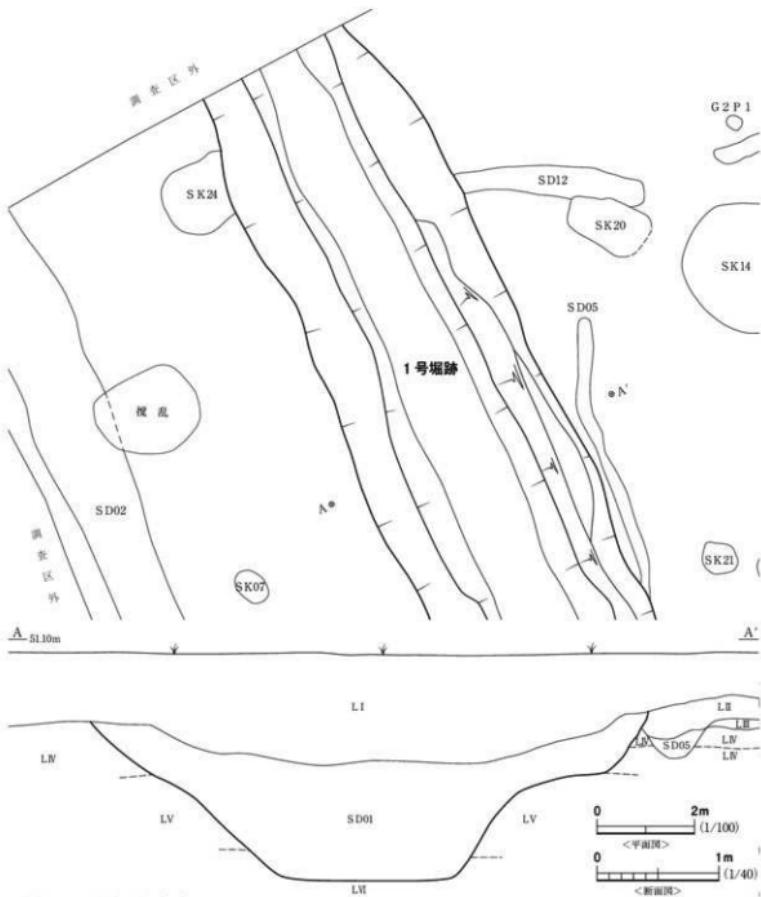


図31 1号堀跡（2）

浚渫によるもので、ここに含まれる多量の植物遺体・木片は水路利用後に生じた滞水状況を示していると考えられる。ℓ 4はG 3・4グリッドに位置する1号特殊遺構の覆土の流れ込み、ℓ 6は堀跡コーナー付近の外側に堆積した肩部の崩落土と考えられ、ともに一部の箇所で限定的に確認された。堀跡全体で確認されるℓ 5・7では、深さに応じた基本土層由来の含有物が整合的に認められ、自然堆積層と判断できる。とくに厚く堆積するℓ 5は、屋敷跡廃絶後の近世を中心とした時期に形成されたものだろう。なお、堀跡と併せて土壘の有無が問題となるが、今回の調査範囲でその存在を積極的に示す痕跡は認められなかった。

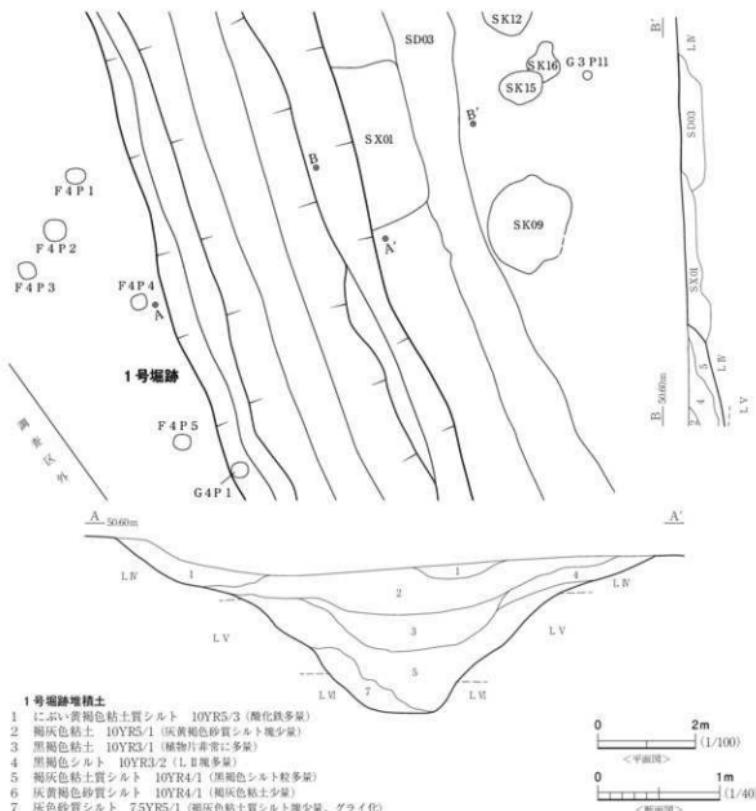


図32 1号堀跡（3）

調査区内で確認された堀跡の長さは、L字形に屈曲するコーナー部から北北西方向(N 24° W)へ走る南北軸で約44m、同じくコーナーから東北東方向(N 64° E)へ走る東西軸で約33mを測り、それぞれ調査区外に延びていく。検出面での幅は南北軸が4m前後と相対的に幅広く、17号土坑付近で最大4.9m、調査区北端で最小3.2mを測る。東西軸の幅は3m前後で広狭を繰り返し、6号溝跡の西端付近で最大3.4m、最小2.5mを測る。断面形は底面幅0.6~1.6mの逆台形で、全体的に上部と下部とで掘り込みの傾斜が異なっている。南北軸では、浅く緩やかな上部掘り込みと急傾斜の下部掘り込みの間に幅0.3~0.8mほどの緩傾斜面があり、とくに外側(西側)はコーナー部のやや北側から約23mにわたって認められる。一方で、東西軸では緩傾斜面が存在せず、外側(南側)より内側(北側)の傾斜が緩やかな特徴を指摘できる。底面は全体的に概ね平坦だが、コーナー部分で

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

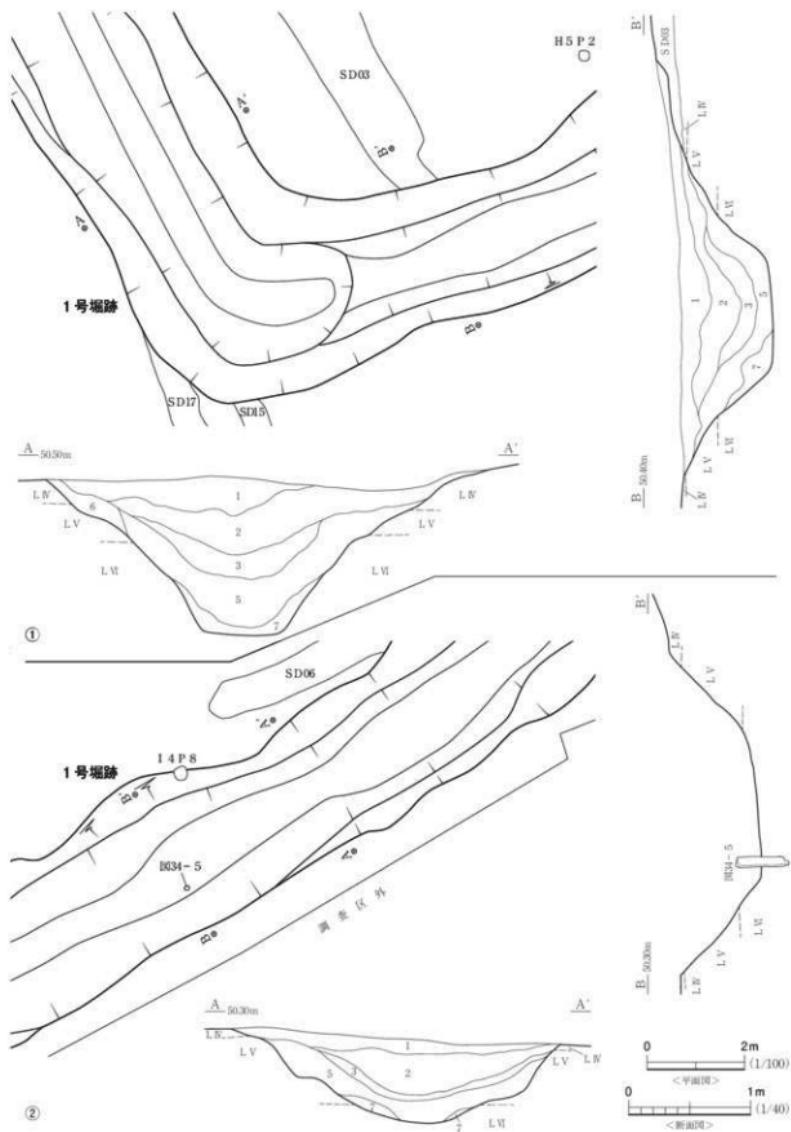


図33 1号堀跡 (4)

南北軸の方が一段深く掘り込まれており、検出面からの深さは南北軸で約1.3m、東西軸で約0.7mを測る。また、底面標高は、全体的な傾向として、南北軸・東西軸とも南西隅に向かって低くなる特徴がある。

なお、I 5グリッドでは、本遺構の底面に20cmほど垂直に打ち込まれた杭が1本確認された(図33の断面B-B')。杭は直径7cm、残存長44.8cmで、樹皮がついたままの丸太材に一面削りが施されている(図34-5)。杭先は先端から7cmが削り面の裏側に施された段状加工によって厚さ3~3.5cmの板状を呈し、鋭く尖らせる事なく隅丸方形に整えられている。単独検出のため用途が定かでなく、杭が堀跡に伴うものか否か判然としないが、残存部が③より下部におさまることから杭上部は近現代の堀跡再利用時に削平されたものと考えられ、それ以前に打ち込まれた可能性が高い。

遺 物 (図34、写真70)

遺物は土師器・石製品・木製品が計41点出土し、このうち6点を図34に示した。1~4は、いずれも1号特殊遺構の覆土から流出したと考えられる④出土の土師器である。1は口縁部を折り返した壺で、接合した16点のうち頸部片1点が1号特殊遺構の覆土内から出土したものである。2は内面にナデ、外面にハケメを施す土師器の体部で、外面に煤の付着と被熱痕が見られるものの、上部がすばまる器形と外面に粗いミガキが施される特徴を勘案して壺と判断した。3は内外面

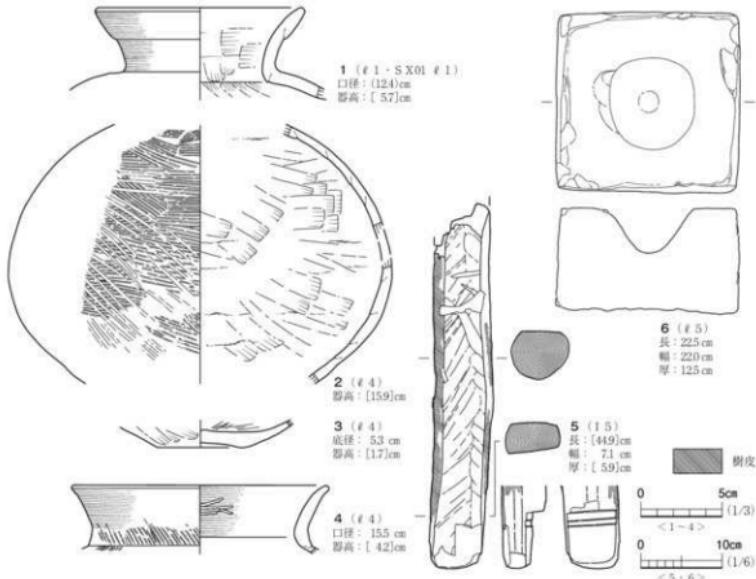


図34 1号堀跡出土遺物

に指ナデを施す上げ底気味の底部片で、器形の特徴から壺と考えられる。外面の一部に被熱痕がみられるが、胎土や器厚の違い等から2とは別個体と判断される。4は外面にハケメを施す壺の口頭部で、外面の一部に煤の付着と被熱痕が認められる。

5は先述の杭である。

6は、コーナー付近のℓ5から出土した直方体の石造物である。凝灰岩製で一辺約22cm、高さ12.5cmを測り、五輪塔の地輪と考えられる。片側の面の中央に直径10.4～11.2cm、深さ5.5cmの円形の窪みが施されており、反対面の調整加工が最も粗いことから円形の窪みのある面が上面と推定される。なお、石材側面に梵字等が施された痕跡は認められなかった。

まとめ

本遺構は、規模やL字形に屈曲する形状、本遺構の内部で多数の小穴が確認されたこと等から、中世の屋敷跡を区画する堀跡と考えられる。堀跡の堆積状況からは近世以前に位置付けられ、僅かながら堀跡の内部の小穴から出土した遺物の年代観を考えあわせると、15～16世紀頃には存在していたものと想定される。

(草野)

2号溝跡 SD 02

遺構 (図35・36、写真50・51)

本遺構は、調査区東部の西辺沿い、E2・3、F3～5、G5・6グリッドを縦断して直線的に走る溝跡である。調査区の制限によりF4グリッドで10mほど途切れるが、一直線につながる位置関係から同一の溝跡と判断した。溝跡の上部は、調査区の西側を通る市道設置に伴い大きく削られている。そのため検出面はLIV上面だが、F5グリッドの調査区端でLI上面から掘り込まれていることが確認できた。南端部で14号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土の特徴は、上記の未調査部分を挟む南北で異なっており、南部で5層、北部で4層に分層した。南部の5層は、いずれも基本土層由来の含有物が整合的に認められる自然堆積土で、とくに黒褐色シルト層のℓ1はLIIの流れ込みで形成されたと考えられる。かたや北部のℓ1は南部に認められない土層であり、LIV由来の褐灰色砂質シルト粒を多く含む人為堆積土と考えられる。北部のℓ2～4はレンズ状堆積を示す自然堆積土で、このうち黒褐色シルト層のℓ2が南部のℓ1に対応するものと判断した。

検出された溝跡の長さは、南部で15.5m、北部で21.4mを測り、南北一連のものとすると調査区南壁から北壁までの約45mとなる。全体的に大きく幅を減じることなく1号溝跡の南北軸と概ね平行する北北西方向(N21°W)に走っている。検出面での幅は、南部が1.1m前後と相対的にやや狭く、南部の北端で最狭0.88mを測る。北部では1.3m前後の箇所が多く、北端近くで最大1.72mを測る。

断面形は底面幅0.2～0.4mの逆台形の2段掘りとなっており、掘り込みの中ほどに幅0.2～0.4mのテラス状の緩傾斜面が一部形成される。ただ、南部と北部では掘り込みの深さや角度に違いが

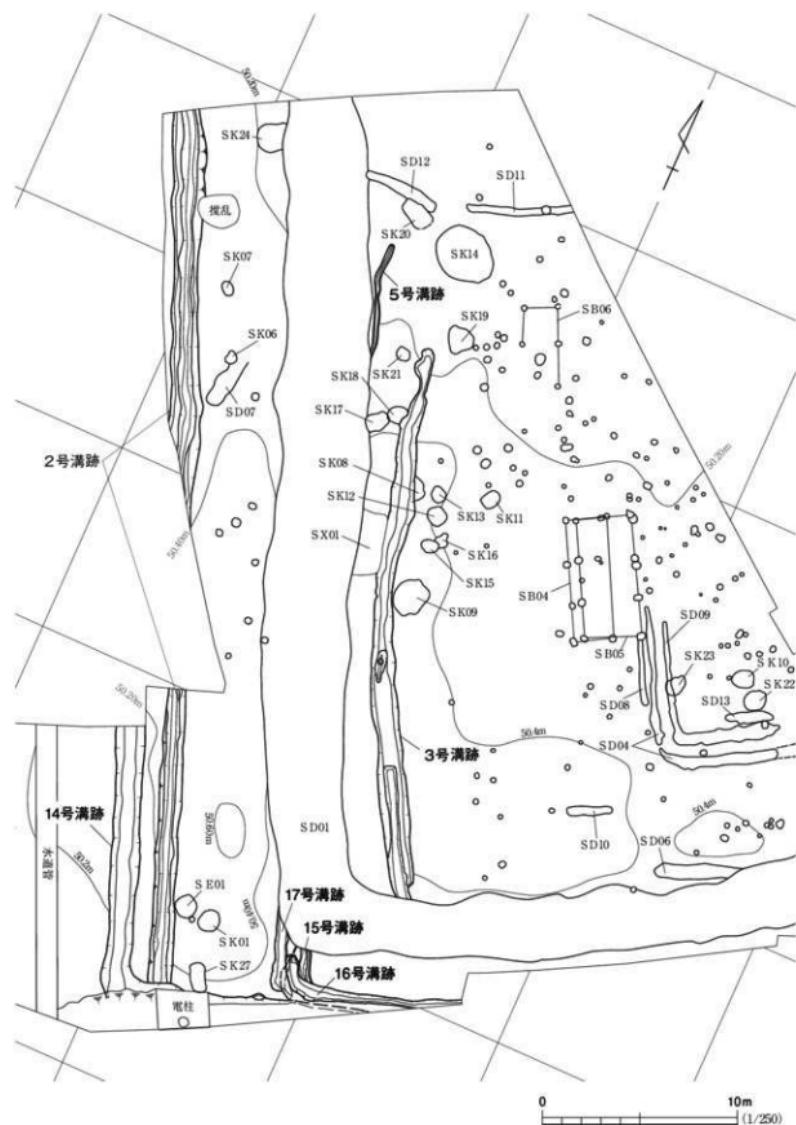


図35 2・3・5・14~17号溝跡全体図

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

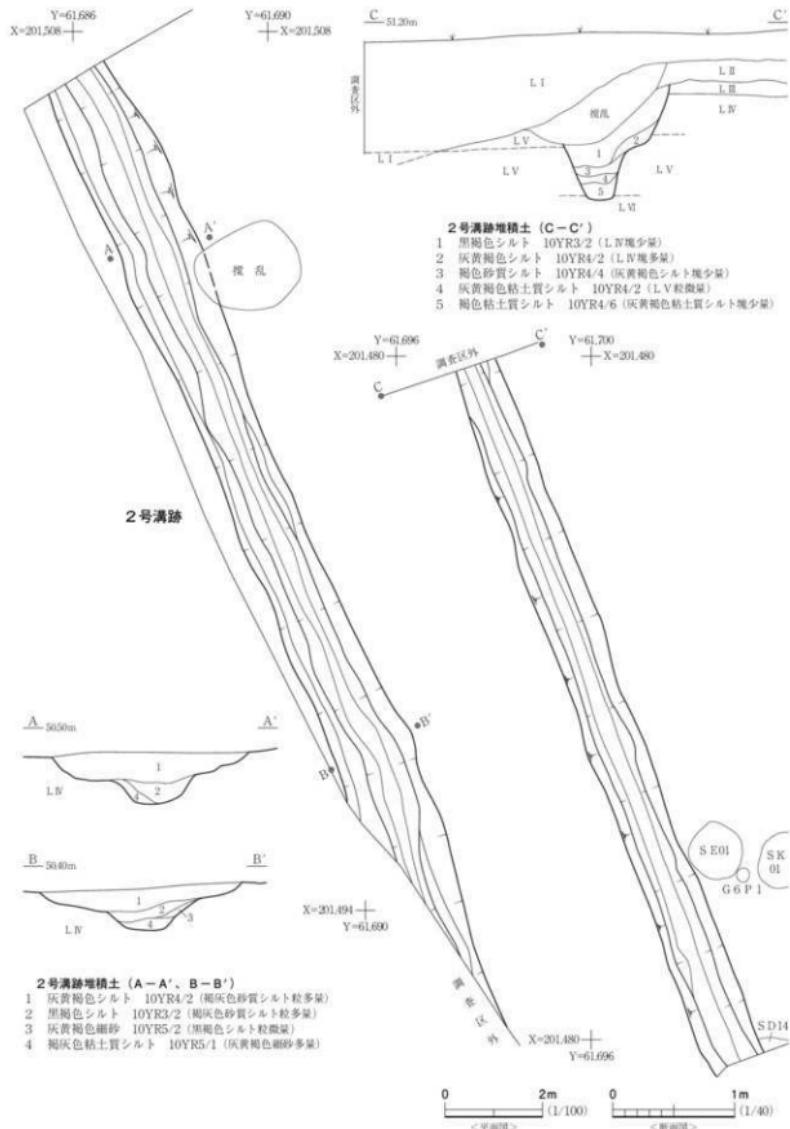


図36 2号溝跡

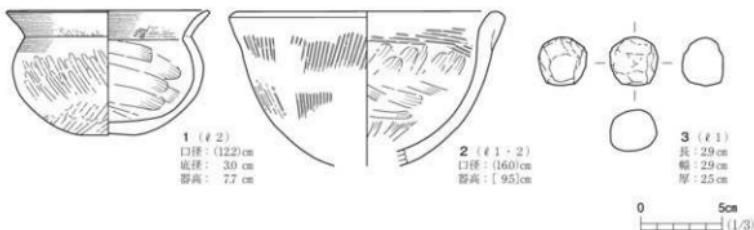


図37 2号溝跡出土遺物

見られる。南部は2段階とも深く急角度で、掘り込み面から底面までの深さは約0.9mを測る。一方、北部は2段階とも浅く緩やかで、検出面から底面までの深さは約0.4mを測る。特に北部の上部掘り込みには、先述した通り南部に広がらない人為堆積土が認められ、堆積時期の違いを示唆する。掘り込み形状の違いも考え合わせると、溝を掘り直している可能性もある。

遺 物 (図37、写真71)

遺物は土師器片58点、土製品1点が出土し、このうち北部で出土した3点を図37に示した。1は平底気味の土師器小型短頭鉢で、器部外面にミガキ、内面にナデを施す。2は底部を欠く半球形の土師器鉢で、器壁が厚く粗い胎土が特徴的である。体部外面と口縁部内面にハケメ、体部内面にナデを施す。3はやや歪だが球状に整えられた土製品である。孔や凹みは認められない。

ま と め

2号溝跡の所属時期は、出土遺物の年代観から古墳時代前期以降に位置付けられる。1号堀跡に平行する点を評価すると屋敷跡との関連が想定されるが、2号溝跡の掘り込み面がLⅢ上面であることから1号堀跡より先行して開削された点は疑いない。このため、所属時期の下限は中世以前と判断される。ただし、遺構の北部が後後に掘り直されたと仮定した場合、屋敷跡に取り込まれる形で再利用された可能性も考えられる。

遺構の性格は、何らかの区画や用排水の溝の他、直線的であることを評価すれば道路の側溝等の可能性も指摘されるが、積極的に特定する根拠は得られなかった。
(草野)

3号溝跡 S D 03

遺 構 (図35・38、写真42・52・62)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G 2～5、H 5グリッドを縦断して直線的に走る溝跡である。検出面はLⅣ上面である。本遺構は、南端で1号堀跡と、北部で8・18号土坑及び1号特殊遺構とそれぞれ重複し、1号堀跡と1号特殊遺構より古く、8・18号土坑より新しい。

堆積土は単層ないし2層に分層し、1号特殊遺構や9号土坑付近を境にして南北で状況が異なっていた。南側の堆積土は、LⅣ塊を多く含む灰黄褐色シルトを主体とした人為堆積土と考えられるのに対し、北側は含有物の少ない暗褐色ないし黒褐色シルトで、LⅡ由来の自然堆積土と考えられ

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

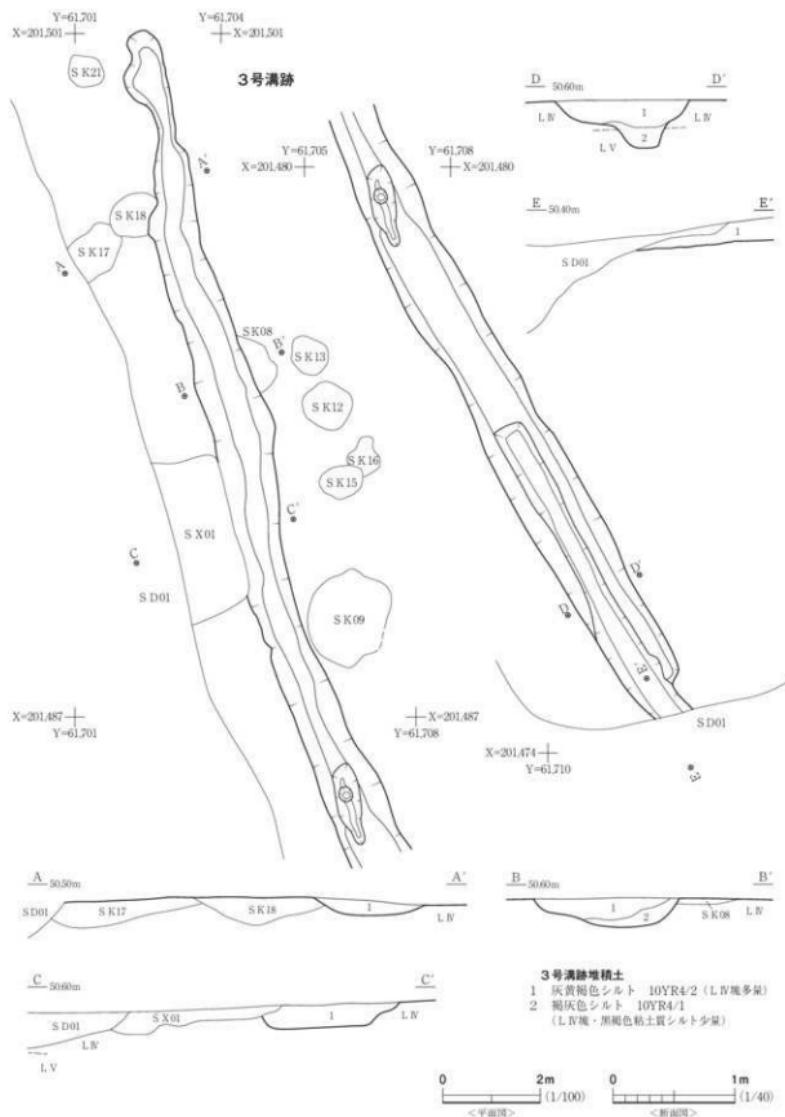


図38 3号溝跡

る。

検出された溝跡の長さは約28mで、南端は1号堀跡に削られているが、幅3m弱を測る1号堀跡の外側までは続かない。堀跡に削られる手前で幅を減じ浅くなる点を勘案すると、本来の規模も30mに満たないと判断できる。西側に隣接する1号堀跡の南北軸と概ね並行する北北西方向に走っているが、北端部では5号溝跡と同様に北方向に緩やかに屈曲する。検出面での幅は南部で12~14m前後、北部で9~12m前後である。断面形は浅く緩やかな逆台形を基本とするが、南部6mほどが西寄りを一段深く掘り下げる2段掘りとなっていて、検出面からの深さは南部で約40cm、北部で約20cmを測る。

遺物は土器片13点が出土した。いずれも細片で図示し得なかったが、古墳時代前期の可能性がある。

まとめ

本遺構の所属時期の特定は難しく、出土遺物の特徴と1号堀跡開削時には埋没していたことを勘案し、大まかに古墳時代前期～中世頃としておきたい。また、本遺構の北端部は5号溝跡と並行するような形状であることから、同溝跡と関連を持って機能していた可能性もある。（草野）

4・8・9・13号溝跡 SD 04・08・09・13

遺構（図39、写真53~55）

本遺構群は調査区東部でも南東部、1号堀跡で区画された内部のH3・4及びI3・4グリッドで検出された並走する溝跡である。このうち、4・9号溝跡は1号堀跡の形状に沿うようにL字形に屈曲する。検出面はLIV上面だが、I3グリッドの調査区東壁で4号溝跡がLI上面から掘り込まれていることが確認できた。4号溝跡の両脇を並走する8・9号溝跡も同時期の所産と考えられ、同様にLI上面から掘り込まれている可能性が高い。8号溝跡が5号建物跡を構成する南東隅柱穴のP8を、9号溝跡が23号土坑をそれぞれ掘り込んでおり、また13号溝跡も南側の上端が僅かながら9号溝跡に削られていた。

堆積土は、単層ないし2層に分けられ、4・9号溝跡のコーナー部付近を境にして状況が異なっている。北北西方向(N 29°W)へ走る4・8・9号溝跡の南北軸がLIV塊を多く含む灰褐色シルトで人為的な埋め戻し土と考えられるに対し、コーナーから東北東方向(N 60°E)へ走る4・9号溝跡の東西軸では含有物の少ない黒褐色粘土質シルトないし褐色シルトでLI由來の自然堆積土と考えられる。ただし掘り込み面が確認できた調査区東壁の土層断面D-D'によると、4号溝跡の黒褐色粘土質シルト層の上にLIV塊を多く含む暗褐色シルト層が堆積しており、覆土の上層については人為堆積土と考えられる。なお、9号溝跡に一部削られる13号溝跡は、近接する9号溝跡と明らかに異なる灰黄褐色シルトの自然堆積土で、埋没時期の違いを示唆している。

コーナー部で一旦途切れる4号溝跡の長さは、北北西方向へ走る南北軸で約7m、コーナーから東北東方向へ走る東西軸で約5.8mを検出し、東西軸はさらに調査区外に延びて10m以上となる。

第2編 中室内遺跡（1・2次調査）

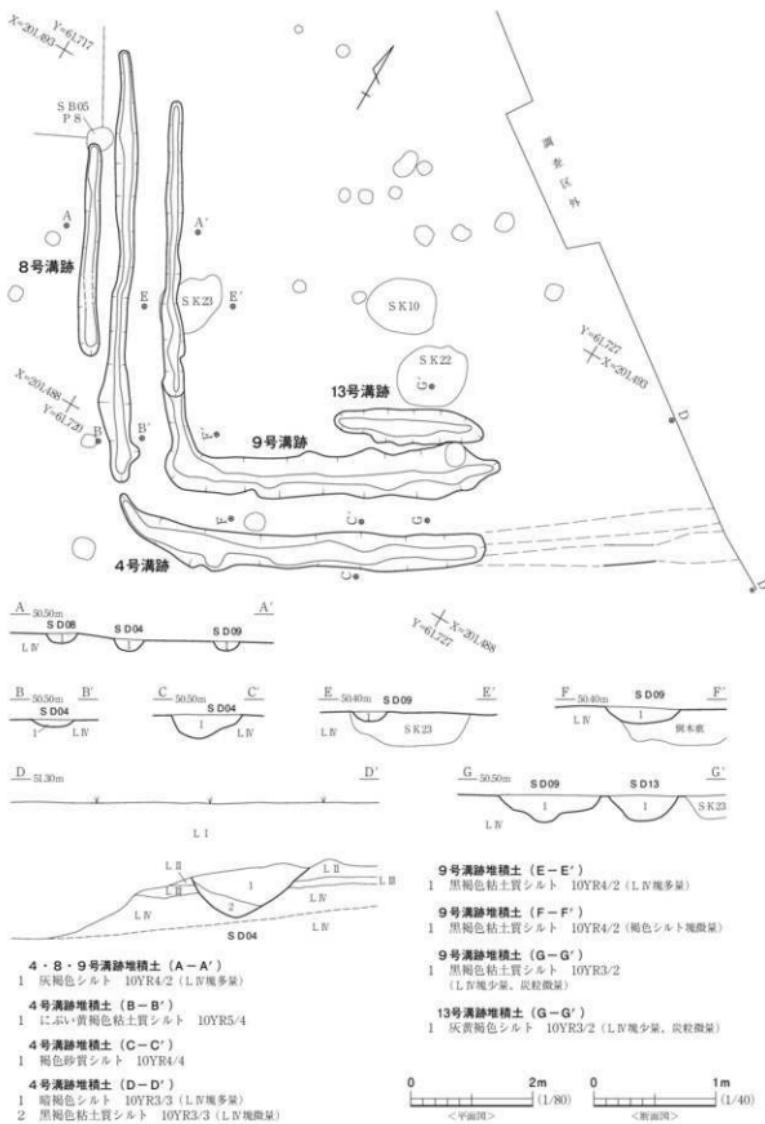


図39 4・8・9・13号溝跡

4号溝跡の西側を並走する8号溝跡の長さは約3.5m、4号溝跡の東側をL字形に並走する9号溝跡は南北軸で約6.4m、東西軸で約5.5mを測り、13号溝跡の長さは約2.5mである。検出面での幅は、4・9号溝跡の南北軸と8号溝跡が0.2~0.5m前後と相対的に狭く、4・9号溝跡の東西軸では0.5~0.8mと広くなる。13号溝跡の幅は0.36~0.56mを測る。断面形はいずれも底面中央が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは4・9号溝跡の南北軸と8号溝跡で10cm前後、4・9号溝跡の東西軸と13号溝跡で20cm前後を測る。

遺物は4号溝跡から土師器片3点、9号溝跡から土師器片2点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

まとめ

遺構の具体的な性格・時期は不明であるが、並走する4・8・9号溝跡については同時期に開削された一連のものである可能性が高く、屋敷地内部の何らかの区画溝と推測される。1号堀跡に沿う形状で、掘り込み面が同じくLⅡ上面であることから、1号堀跡開削後の15~16世紀以降に位置づけられる。8号溝跡の北端が5号建物跡の柱穴を掘り込んでいる点を踏まえると、少なくとも屋敷地の造営当初には存在しなかったと考えられる。また13号溝跡については、4・8・9号溝跡より古く位置付けられるが、出土遺物もなく詳しい時期は不明である。
(草野)

5号溝跡 SD 05

遺構(図40)

本遺構は、調査区東部でも西部のF2・3及びG5・6グリッドで検出された溝跡である。検出面はLⅣ上面だが、F2グリッド及びG6グリッドの調査区南壁でLⅢ上面から掘り込まれていることが確認できた。南端部は1号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土は、最初に含有物の少ない灰黄褐色シルトが堆積し、その後、LⅡが周囲から流入した状況を呈する。いずれも自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは、南部で5.5mを測る。平面形は、3号溝跡の北端部と並行するような形状となっている。断面形は浅く緩やかな逆台形を基本とし、掘り込み面からの深さは約30cmを測る。なお、出土遺物はなかった。

まとめ

本遺構は3号溝跡との関連を重視すれば、これらと同時期、ないし相前後して掘られた可能性も考えられる。なお、遺構の具体的な性格は不明である。
(草野)

6号溝跡 SD 06

遺構(図41、写真56)

本遺構は、調査区東部でも南東部の、I4グリッドに位置する溝跡である。検出面はLⅣ上面である。1号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

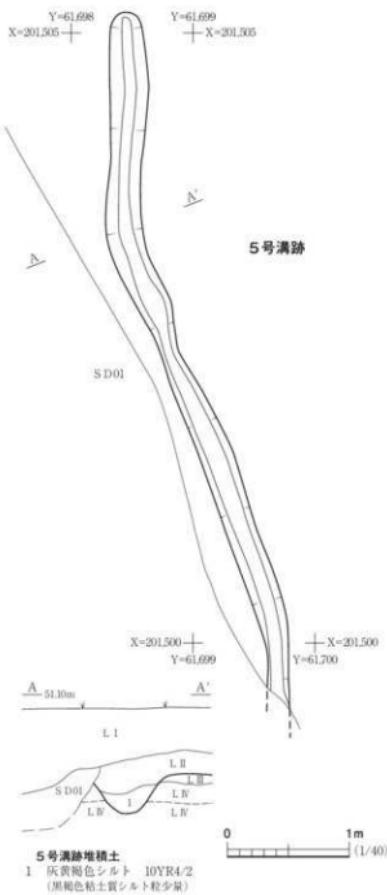


図40 5号溝跡

しい。また、遺構の北部は搅乱により失われている。

堆積土は、L IV塊を多量含む黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。L IV塊は下層を中心認められ、層中には壁の崩落土も含まれていると考えられる。

検出された溝跡の長さは2.6m、検出面での幅は0.8~1.1mである。底面は凹凸が認められる箇所もあるが、概ね平坦である。検出面から底面までの深さは10~15cm前後で、全体的に浅い。

遺物は土師器が1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

堆積土は、L IV塊を少量含む灰黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは約4.5mだが、東方向に延びるところで1号堀跡に削られていったため本来の長さは不明である。検出面での幅は0.6~0.8mで、主軸方向はN 68°Eである。底面は平坦で、検出面からの深さは10~20cmを測る。

遺 物 (図41、写真71)

遺物は土師器片20点、須恵器片1点が出土し、このうち3点を図41に示した。1は酸化焰焼成による土師器壺の胴部片だが、外側に平行タタキ目、内面に青海波状の當て具痕が認められ、須恵器の技法が駆使されてつくられている。2は底面に木葉痕を残す土師器壺、3は須恵器壺の口縁部片である。

ま と め

本遺構の時期は、1号堀跡との重複関係から中世以前であることがわかり、出土遺物の年代観を勘案すると古代頃と推察される。また、検出部分が一部に限られるため、溝跡の機能については判然としない。(草野)

7号溝跡 S D 07

遺 構 (図41、写真56)

本遺構は、調査区東部でも北西部のF 3グリッドに位置する溝跡で、検出面はL IV上面である。6号土坑と重複し、本遺構の方が新

まとめ

本遺構の時期は、6号土坑よりも新しいが、出土遺物が少ないため、詳細な時期は不明である。ただ、本遺構の主軸方位は、1号堀跡を含めた他の溝跡とはずれているが、12号溝跡の主軸方向とほぼ直交する。このことから、12号溝跡と同時期に機能していた可能性もある。

(草野)

10号溝跡 S D 10

遺構 (図41、写真57)

本遺構は、調査区東部でも南東部のH 4 グリッドに位置する溝跡で、検出面はL IV上面である。重複する遺構は確認されていない。

堆積土は、黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは2.34m、検出面での幅は0.4~0.45mで、ほぼ一定の幅で掘られている。底面は平らで、検出面からの深さは15~18cm前後である。出土遺物はない。

まとめ

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。

(鶴見)

11号溝跡 S D 11

遺構 (図42、写真57)

本遺構は、調査区東部北端のG 1・2 グリッドに位置する溝跡である。検出面はL IV上面である。G 1 P 1と重複していて、本遺構の方が古い。

堆積土は褐灰色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは4.8mであり、さらに調査区外に続いている。検出面での幅は約35cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは10cm前後である。また、出土遺物はなかった。

まとめ

本遺構は、G 1 P 1と重複しており、この小穴よりも古い時期の溝跡である。G 1 P 1を含めた調査区東部の小穴群の時期は概ね中世頃と考えられることから、本遺構は中世以前のものと判断している。なお、遺構の性格は不明である。

(鶴見)

12号溝跡 S D 12

遺構 (図42)

本遺構は、調査区東部の北端付近であるG 1・2 グリッドに位置する溝跡である。L IV上面で検出した。20号土坑、1号堀跡と重複していて、本遺構の方がそれよりも古い。

堆積土は、褐灰色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

東西に長い溝跡で、長さは約3.9m、検出面での幅は42~64cmで、西側が狭い。また、中央部付

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

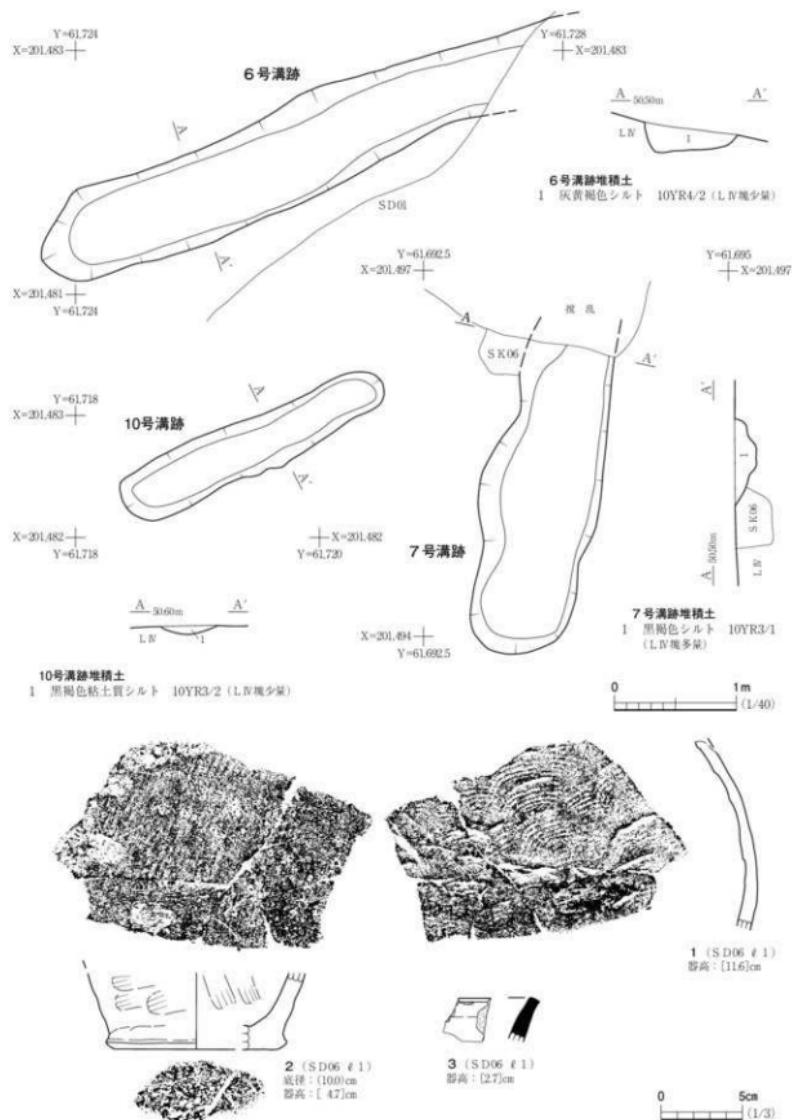


図41 6・7・10号溝跡、6号溝跡出土遺物

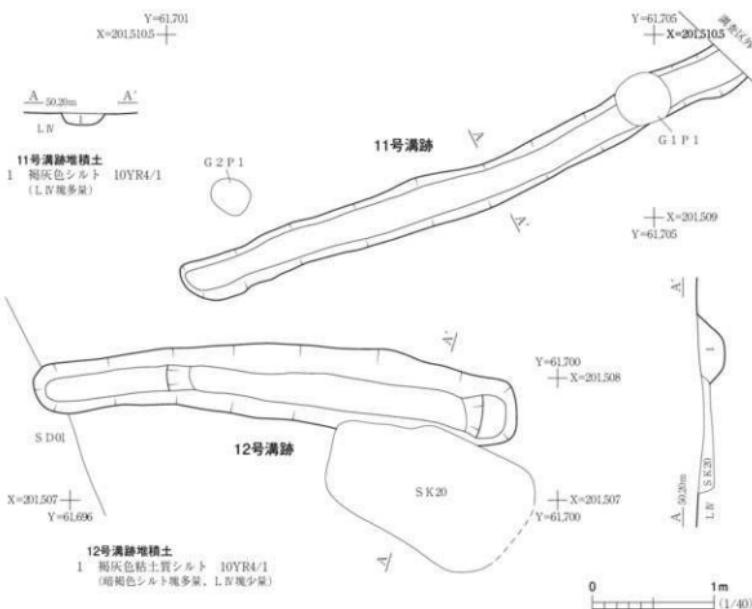


図42 11・12号溝跡

近で底面が一段低くなっている。そのため、検出面からの深さは両端では10cm前後なのに対し、中央部では最も深い場所で38cmを測る。出土遺物はない。

まとめ

本遺構の所属時期は明確ではないが、20号土坑や1号堀跡よりも古い遺構である。1号堀跡は、15・16世紀頃には存在していたと推定されているため、本遺構はそれ以前のものと考えられる。

また、本遺構の主軸方位は、1号堀跡を含めた他の溝跡とはずれているが、7号溝跡の主軸方向とほぼ直交する。このことから、7号溝跡と同時期に機能していた可能性もある。

(鶴 見)

14号溝跡 S D 14

遺構 (図43・44、写真58)

本遺構は、2次調査区で確認された溝跡で、F 5・6、G 6、H 6グリッドに位置する。検出面はL IV上面である。2号溝跡と15号溝跡と重複し、それらの遺構よりも本遺構の方が新しい。また、南端部は現代の擾乱により削られている。

堆積土は、2層に分層し、いずれも自然堆積土と判断している。

遺構は、F 5～6グリッドまでは南北方向に延び、F 6グリッドで向きを変えて東に続くL字形

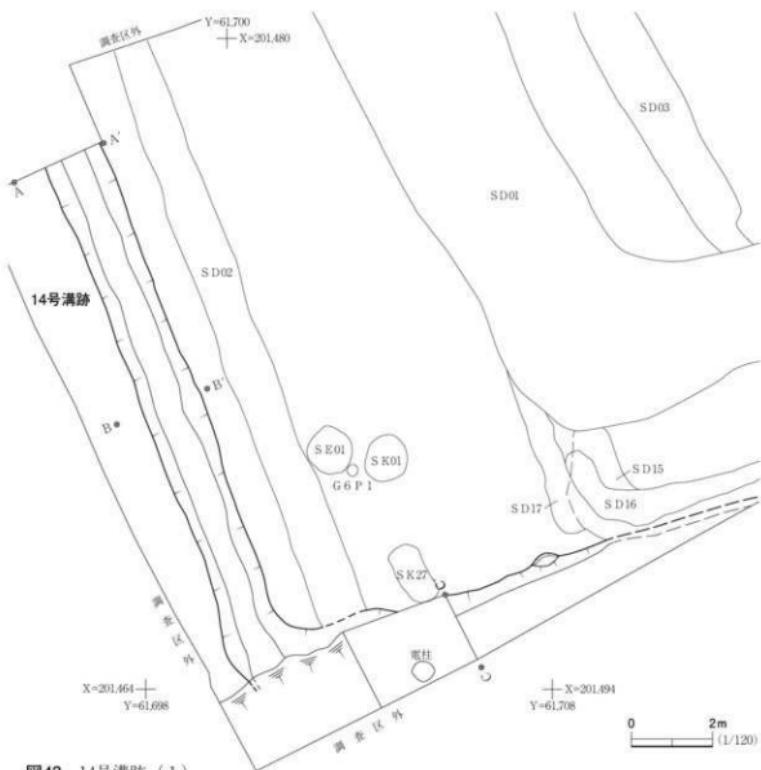


図43 14号溝跡（1）

を呈している。検出した範囲での規模は、北端からコーナーまで13m、コーナーから東端まで12mである。幅は1.5m前後で一定している。検出面からの深さは最大で33cmである。底面の標高は、南西隅に向かって低くなっている。また、遺構の南西隅は、底面の形状から、まっすぐ南に延びる可能性がある。

本遺構からは、土師器が25点出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと、内面黒色処理が施されたロクロ形成の古代のものが含まれている。

まとめ

本遺構は、出土遺物から古代以降の溝跡と考えられ、さらに、重複する2・15号溝跡よりは新しい時期のものと判断できる。また、1号堀跡と同様、L字形に屈曲することから、同堀跡に関連した区画溝の可能性もあるが、同堀跡との同時性を判断する根拠に欠けるため断定できない。なお、遺構の南西隅が南に延びていたとすれば、排水の機能も有していたと推測される。

（鶴見）

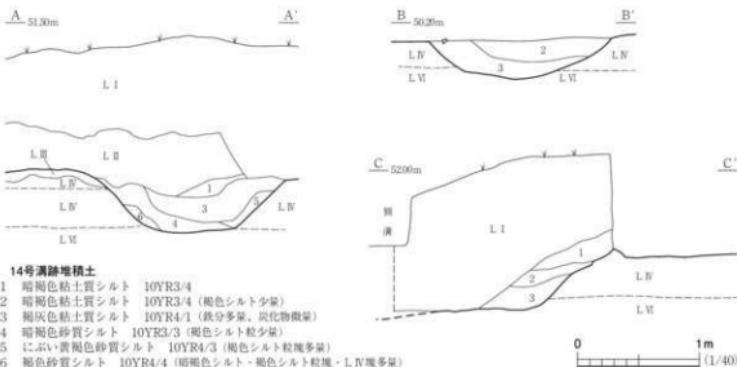


図44 14号溝跡（2）

15号溝跡 S D 15

遺構（図45、写真59）

本遺構は、調査区東部の南東隅にあるG 5・6、H 6グリッドに位置する溝跡である。検出面はL IV上面だが、土層断面の観察からL III上面から掘り込まれていることが確認できた。1次調査の段階では、溝跡であることが把握できず、2号特殊遺構としていたが、2次調査の成果を踏まえて溝跡として報告することとした。本遺構は、1号堀跡及び14・16・17号溝跡と重複し、1号堀跡・14号溝跡よりは古く、16・17号溝跡よりは新しい。また、遺構の南壁及び東端部は現代の擾乱により失われている。

堆積土は5層に分層した。 ℓ 1はにぶい黄褐色シルト、 ℓ 2は黒褐色シルトを基調とする。ともに周囲の基本土層には見られない褐灰色粘土質シルト粒が多く含んでおり、その特徴から人為堆積土の可能性が高いと考えられる。 ℓ 3～5の堆積要因は判然としないが、 ℓ 1・2同様、人為堆積の可能性がある。

本遺構はL字形に屈曲する溝跡で、その規模は、南北方向約4m、東西方向で9.3m以上である。当初、重複する16号溝跡の存在に気付かず一緒に掘り進めてしまったが、土層断面で確認できた検出面での幅は約1.6mを測る。断面形は緩やかな逆台形を呈する。掘り込み面から底面までの深さは最深部で40cmである。なお、本遺構は16号溝跡と平面的に同じ箇所にあることから、16号溝跡をつくりなおしたものであると判断される。

遺物（図45、写真51）

遺物は ℓ 2から土師器片3点が出土しており、このうちの1点を図45に示した。1は、器面がやや磨滅しているものの外側に櫛描き波状文が施されており、外に向かって直線的に開く器形から壺の口頭部片と判断できる。器形・調整は須恵器の特徴を有しているが、酸化焰焼成による軟質の

焼き上がりで内面に黒色処理が施されている。

まとめ

本遺構の所属時期は、出土遺物の特徴から古代以降に位置付けられ、1号堀跡より古いことと掘り込み面がL III上面であることから、中世の屋敷跡が営まれる15～16世紀以前と考えられる。遺構の性格は、L字形に屈曲する形状から、何らかの区画溝と考えられる。
(草野・鶴見)

16号溝跡 S D 16

遺構 (図45、写真59)

本遺構は、調査区東部の南東隅にあたるG 5・6グリッドに位置する溝跡である。検出面はL IV上面である。東隣で検出された15号溝跡によって上部全体を削平されている。1次調査の段階では、遺構の一部の検出に留まったことから溝跡であるとは断定できず、3号特殊遺構としていたが、2次調査の成果を踏まえて溝跡として報告することとした。

堆積土は2層に分層した。ℓ 1は褐色粘土質シルト、ℓ 2は灰黄褐色シルトを基調とする。ℓ 1は15号溝跡と同様、周囲の基本土層では見出し難い褐灰色粘土質シルト粒を含んでおり、その特徴から人為堆積土の可能性が高いと考えられる。このことから、平面的に同じ位置ある15号溝跡は、本遺構を埋め立てた後につくりなおされたものと判断される。

本遺構は、L字形に屈曲する溝跡で、長さは南北方向で約2m、東西方向で約6mである。検出された範囲での幅は40～60cm前後だが、上部を15号溝跡に削られているため、本来の幅はこれよりも広かった可能性がある。検出面からの深さは最大で18cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、底面は概ね平坦だが、底面標高はコーナー付近が一番低くなっている。

出土遺物は土師器が1点出土したが、細片のため図示できなかった。

まとめ

本遺構は、L字形に屈曲する形状を呈することから、何らかの区画溝と考えられる。重複する15号溝跡と併せると、同じ箇所で新旧2時期に渡る区画溝がつくられたと判断される。

本遺構の所属時期については、15号溝跡と同様、中世の屋敷跡が営まれる15～16世紀以前としておきたい。
(草野・鶴見)

17号溝跡 S D 17

遺構 (図45、写真59)

本遺構は、調査区東部の南東隅にあたるG 5・6グリッドに位置し、検出面はL IV上面である。1号堀跡と15・16号溝跡と重複し、それらの遺構よりも本遺構の方が古い。1次調査段階では、本遺構から北に約30m離れている5号溝跡と一緒にるものとして考えていた。しかし、2次調査で溝跡と判明した15・16号溝跡も近接した位置にあるため、5号溝跡がいずれの溝跡に続くかは判然としなくなった。このことから、新たに17号溝跡として報告することとした。

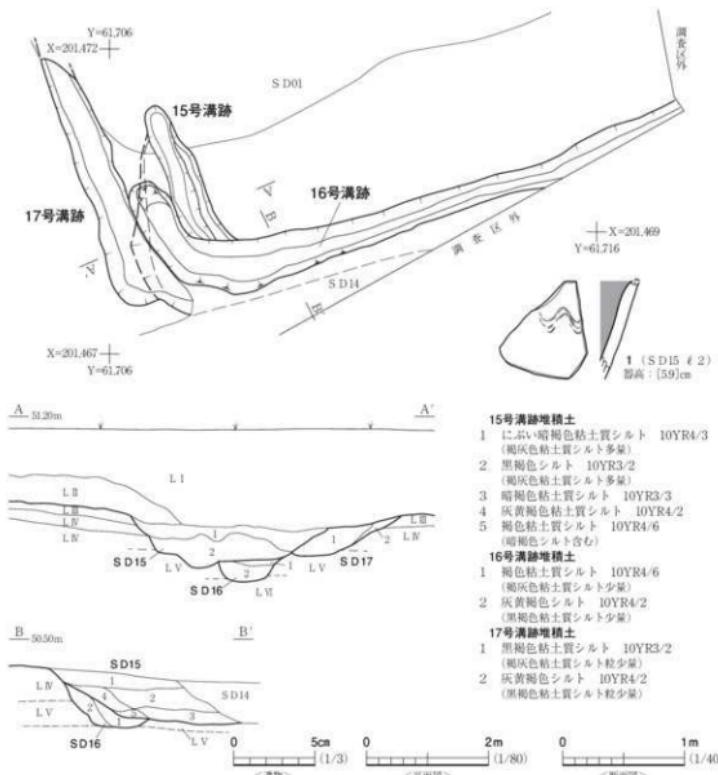


図45 15~17号溝跡、15号溝跡出土遺物

堆積土は2層に分層した。いずれも周囲からの自然流入土と判断した。

検出された溝跡の長さは5.8mで、検出面での幅は46~62cmである。南東部が15号溝跡に削られているため不明だが、本遺構周辺で検出された溝跡はL字形に屈曲するものが多いことから、本遺構も東方向に続いていた可能性も否定できない。遺構の断面形は逆台形で、検出面からの深さは約20cmである。なお、出土遺物はなかった。

まとめ

本遺構は、重複関係から、15~16世紀以前に位置付けられる1号堀跡よりは古い時期のものであると判断される。遺構の具体的な性格については不明である。

(鶴見)

第6節 井戸跡

調査区東部と西部で1基ずつ、計2基の井戸跡を検出した。ともに井桁や井戸枠を伴わず、当初は土坑と考えて調査を進めたが、遺構底面が湧水層まで達することから素掘りの井戸跡と判断した。所属時期は、1号井戸跡が古代以降、2号井戸跡が古墳時代以降と考えられるが、周辺遺構との関係から中世に下る可能性もある。

1号井戸跡 S E 01 (図46、写真60・71)

本遺構は調査区東部の南西隅にあるG 5・6グリッドに位置する。検出面はL IV上面である。

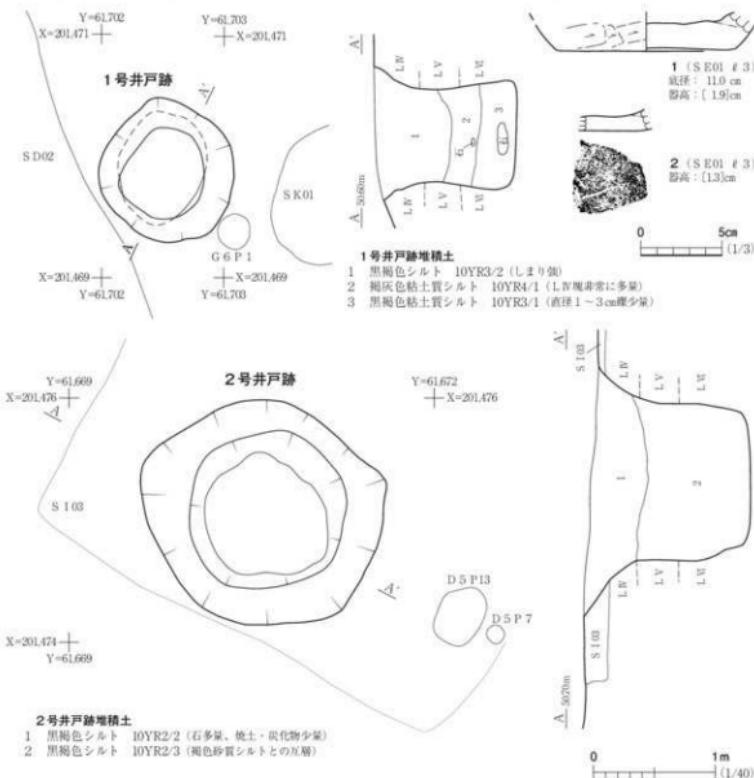


図46 1・2号井戸跡、1号井戸跡出土遺物

重複する遺構はないが、西側には2号溝跡、東側には1号土坑及びG 6 P 1が隣接している。また、東に4mには1号堀跡がある。

検出面での平面形は、直径1.1~1.18mの不整円形で、隣接する1号土坑に近い規模・形状を呈する。検出面から深さ30cmあたりまで緩やかに傾斜し、LV上面付近で楕円形状にすぼまつた後、南北壁を中心として抉れて底面に至る。検出面からの深さは1.16mで、基盤の礫層であるL VIは45cm掘り込まれている。

堆積土は、色調・含有物の違い等により3層に分層した。均質な黒褐色シルトのℓ 1とL IV塊を非常に多く含む褐灰色粘土質シルトのℓ 2は人為堆積土で、ℓ 3は自然堆積土と考えられる。

遺物は、ℓ 3から土師器甕の底部片が2点出土した。図46-1は、底部の内外面はナデ調整だが、体部下端には横方向のヘラケズギが施されている。図46-2は、全体的に磨滅しており調整は不明だが、底面外面に木葉痕が認められる。

本遺構は、基盤の礫層を深く掘り込み、遺構底面が湧水層まで達することから井戸跡と判断した。遺構の所属時期は、出土土器の特徴から古代以降と考えられるが、1号堀跡や小穴群との関連で中世まで下る可能性もある。

(草野)

2号井戸跡 S E 02 (図46、写真60)

本遺構は調査区西部の中央北寄り、C 5・D 5グリッドに位置する。L IV上面で検出された3号住居跡の覆土上面で検出され、住居跡の南西壁より内側を深く掘り込んでつくられていることから、同住居跡よりも新しいと判断した。この他、直接重複する遺構はないが、周囲には小穴群が点在する。

検出面での平面形は、長軸2.02m、短軸1.4~1.84mの不整楕円形を呈する。検出面から深さ40cmあたりまでは緩やかに傾斜し、LV上面付近で直径約1.3mの円形状にすぼまつた後、そこから垂直気味に底面に至る。検出面からの深さは約1.3mで、基盤の礫層であるL VIは60cm掘り込まれている。

堆積土は黒褐色シルトで、含有物等の違いにより2層に分層した。ℓ 1は石や焼土・炭化物を含むが比較的均質な土である。ℓ 2は黒褐色シルトとL IVに起因する褐色砂質シルトとの互層である。いずれも人為堆積土と判断した。

遺物は、ℓ 1から土師器片4点が出土したが、小片のため図示できなかった。これらは、上述した重複する3号住居跡に伴うもの可能性が高い。

本遺構は、基盤の礫層を深く掘り込み、遺構底面が湧水層まで達することから井戸跡と判断した。遺構の所属時期は、重複する3号住居跡より新しいため、古墳時代以降に位置付けられる。なお、中世に属すると考えられる小穴群が周囲に広がる点を踏まえると、中世まで下る可能性もある。

(廣川)

第7節 特殊遺構

特殊構造は1基確認した。平面形の特徴からは堅穴住跡の可能性が考えられたが、底面の起伏が顕著であること等から、性格を特定することができなかつた。

1号特殊遺構 SX01

遺構 (図47、写真61・62)

本遺構は、調査区東部の中央付近、G3・4グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面である。1号堀跡と3号溝跡と重複し、1号堀跡より古く、3号溝跡よりは新しい。

堆積土は黒褐色シルトを基調とし、下部を中心にLⅣ塊が多く含まれる。LⅡ由来の土を主体とする人為堆積土と考えられる。

遺構の西半部は1号堀跡に大きく削られているが、確認された周壁は直線的で、残存範囲による限り、平面形は南北軸3.2m前後の方形ないし長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは概ね15cm前後を測るが、周壁より50~70cmほど内側のあたりから底面の起伏が目立ち、窪みの顯著な箇所では検出面からの深さが20cmほどになる。

遺物は②1上層で古墳時代前期の特徴を持つ土師器片30点が出土したが、接合関係をもたない。



図47 1号特殊遺構

細片が多く図示し得なかった。

ただし、このうち1点が1号堀跡のℓ4から出土した壺(図34-1)と接合しており、1号堀跡のℓ4から出土した他の土師器(図34-2~4)についても本来は本遺構の覆土に含まれていたものが流出したものと考えられる。

ま と め

本遺構の所属時期は、出土遺物から古墳時代以降と考えられ、また1号堀跡の開削時に埋没していた点を考え合わせると中世の屋敷跡が営まれる15~16世紀以前であることは確かである。ただし、それ以上絞り込む根拠はないため、大まかに古墳時代~中世頃としておきたい。

遺構の具体的な性格は不明である。なお、検出段階では、平面形の特徴と出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居跡と推定されたが、底面の起伏が顕著で貼床等の痕跡も認められず、堅穴住居跡と判断する根拠は得られなかった。ただ、つくりかけの堅穴住居跡の可能性は残されている。(草野)

第8節 小穴群

遺 構 (図48~55、写真63~67)

検出した小穴は253基である。調査区ごとに見ると、東部が146基、西部が107基で、確認された数の差はあまり大きくなない。調査区東部・西部ともに遺構検出面はLIV上面である。

調査区西部では、C4・5グリッド周辺と、D6グリッド周辺に小穴が集中している。C4・5グリッドで確認された小穴は、同グリッドで複数の建物跡が確認されていることから、建物跡の柱穴であったと推定される。

調査区東部では、1号堀跡で区画された内部に小穴が集中している。特に、G2グリッド、H2・3グリッドが多く、周辺で建物跡も確認されているため、建物跡の柱穴と推定される。それ以外の場所で確認された小穴は、G2グリッド、H2・3グリッドに比べると密度が低い。F4グリッドやI4グリッドでは、1号堀跡や4号溝跡等と同じ軸線方向で並ぶ小穴があり、堀や溝に沿って設置された柱列跡が存在していたと推定される。

各小穴の径は10~60cm前後とばらつきが見られるが、概ね20~30cm前後のものが多い。平面形は円形ないし歪んだ円形を呈するのが大半だが、調査区西部では方形を基調とするものも數基確認された。検出面からの深さは、浅いものでは10cm以下、深いものでは最大64cmのものもある。

堆積土は、黒褐色または灰黄褐色シルトの単層のものがほとんどで、これらは柱が抜き取られた後に堆積した自然堆積土と判断される。柱痕が観察できたものによれば、柱材の直径は15~20cmである。また、H3P28では、柱の抜き取り痕が確認された。

遺 物 (図55、写真71)

253基の小穴のうち、11基の小穴から、土師器や瓦質土器が各1~4点出土した。そのうち、瓦質土器1点を図示した。土師器は小片のため図示できなかつたが、古墳時代や古代のものとみられる。

図55-1はG 2 P 2から出土した瓦質土器の風炉と考えられる破片である。頸部に雷文があり、窓と考えられる透かし部が僅かに確認できる。

まとめ

検出した小穴は、建物跡あるいは柱列跡等の柱穴と推定される。各小穴の厳密な所属時期は不明だが、6号建物跡の周縁で確認されたG 2 P 2から中世の瓦質土器が出土したことから、中世のものが中心と考えられる。調査区東部は、1号堀跡の内側にあたり、複数の掘立柱建物跡も確認されていることから、屋敷地の中心となる箇所と推定される。小穴は建物跡の周縁や、1号堀跡に沿うよう分布しているため、確認できたものとは別の建物や、堀に沿って設置された柵または塀などが存在していたと推定される。

調査区西部で確認された方形を基調とするものは、3号建物跡と同様の時期の可能性がある。なお、1号堀跡で区画された内部の遺構では、近世の遺物も僅かに出土しているため、近世の小穴も存在している可能性がある。

(鶴見)

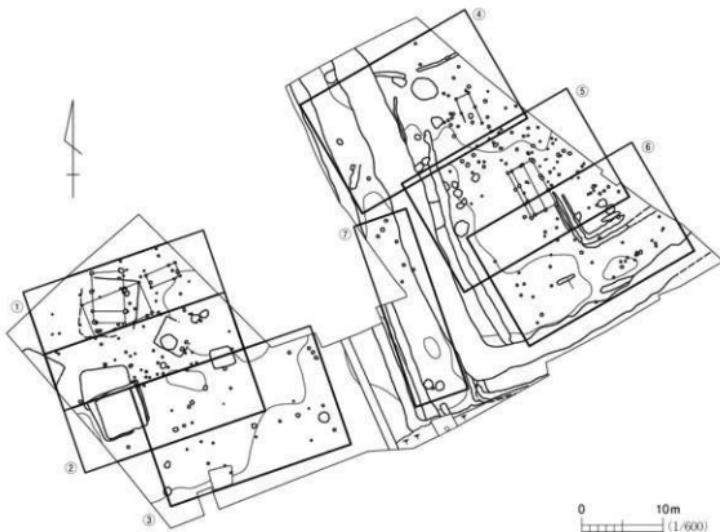


図48 小穴群全体図

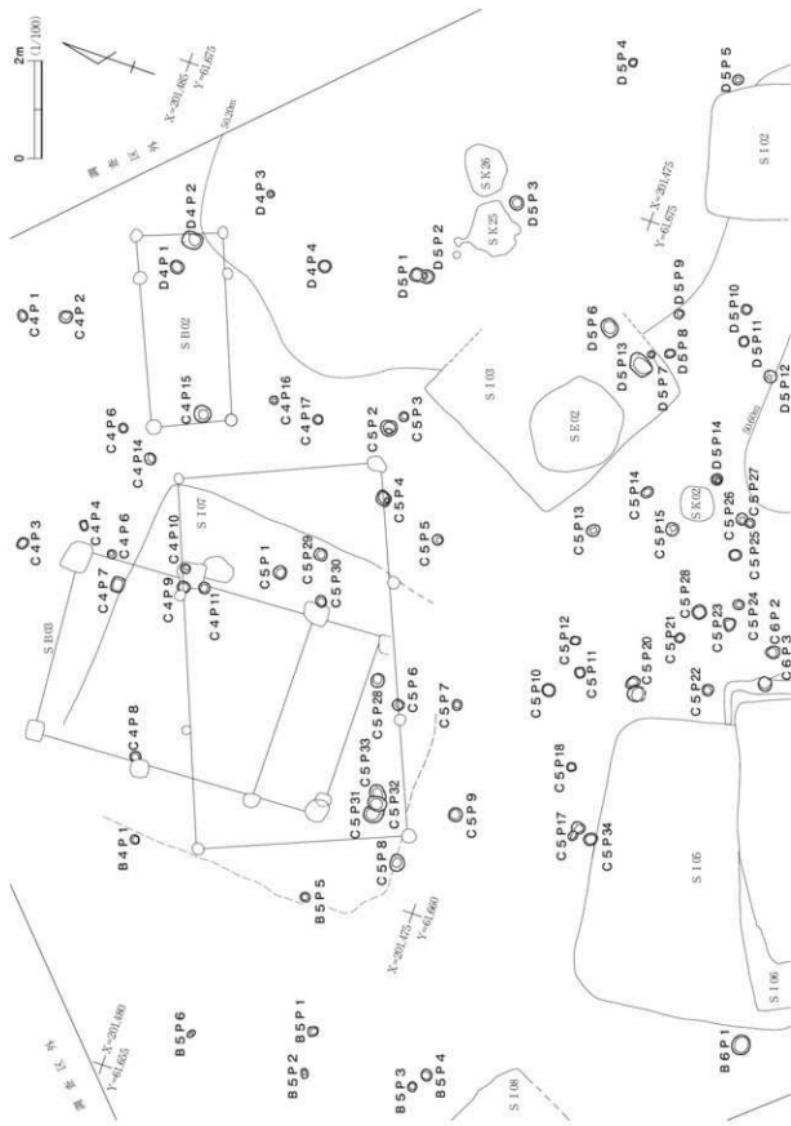


図49 小穴群①

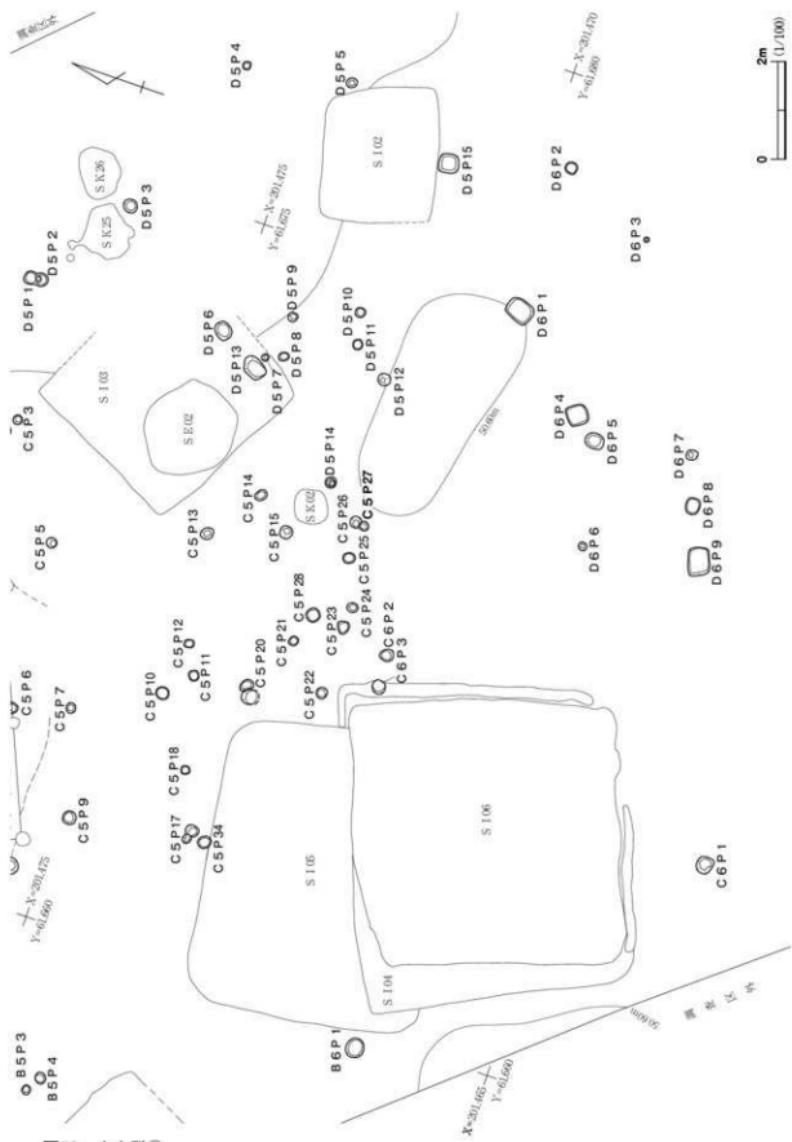


図50 小穴群②

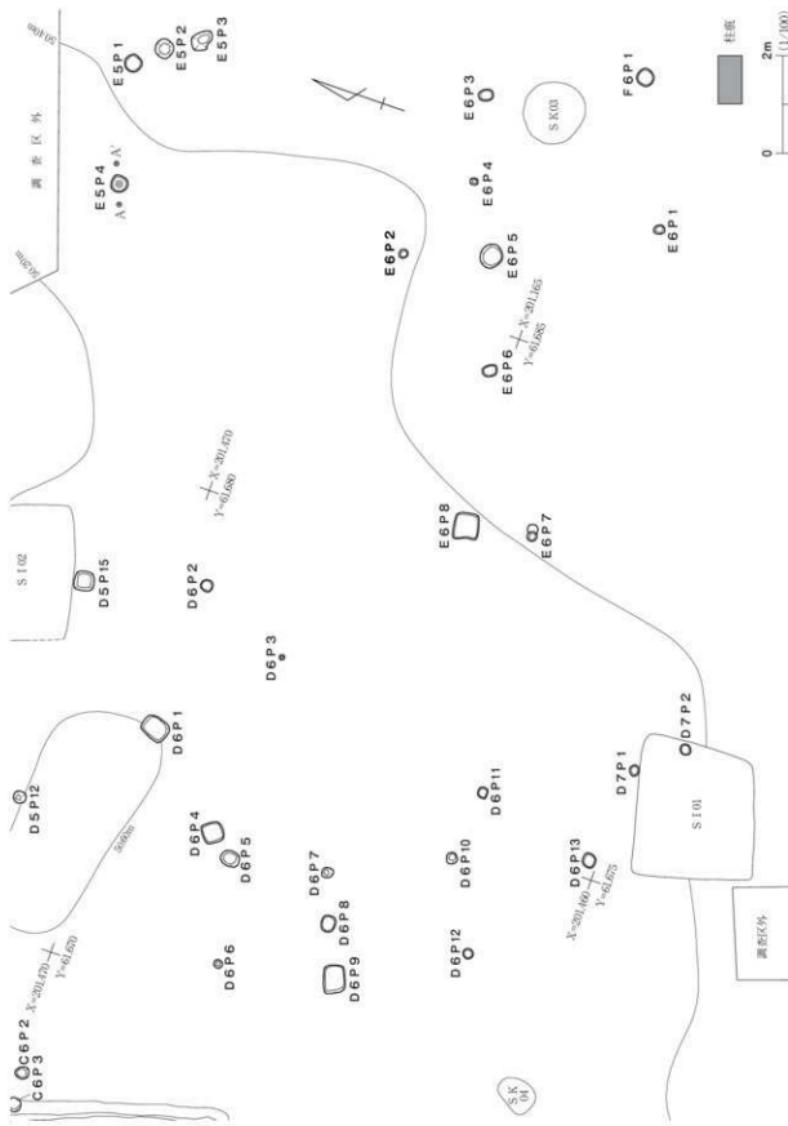


図51 小穴群③

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)



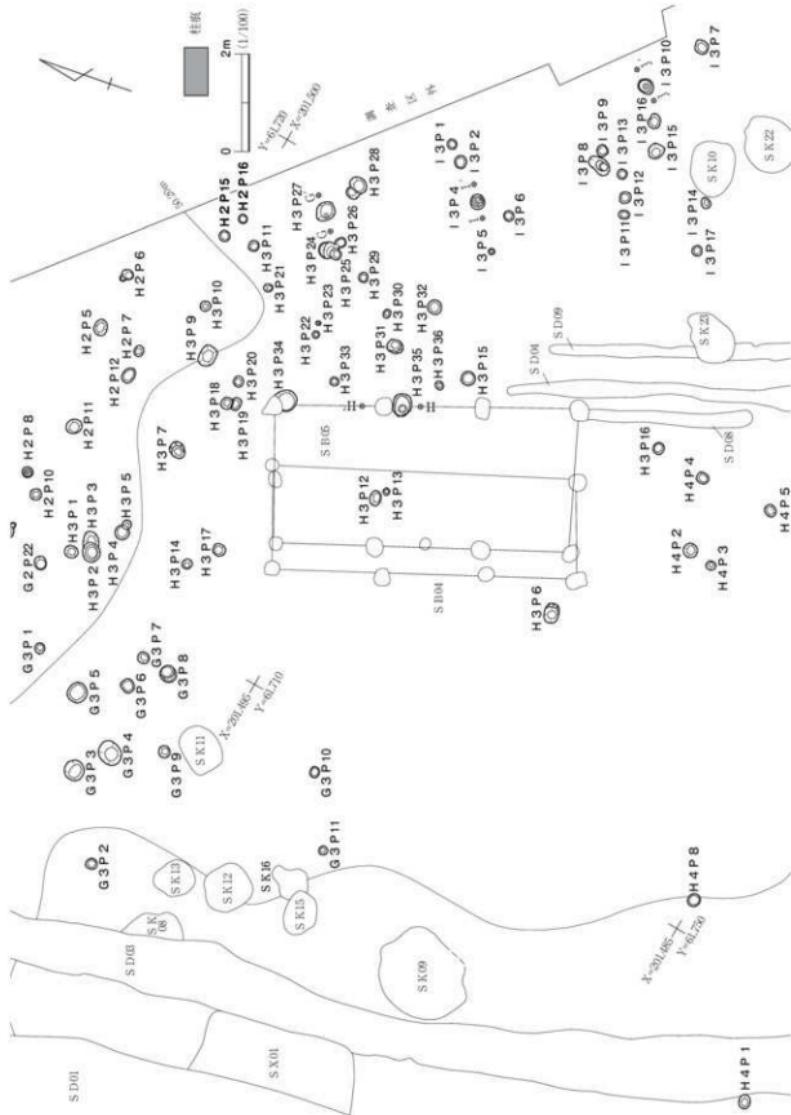


図53 小穴群⑤

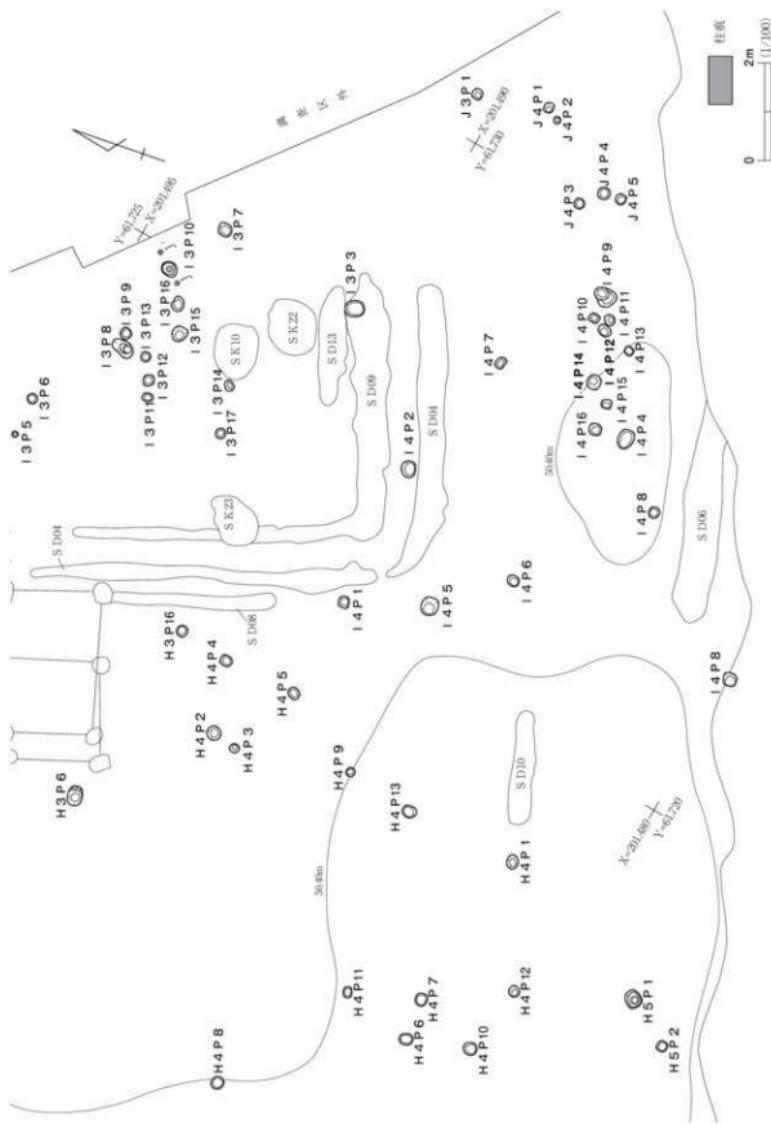


図54 小穴群⑥

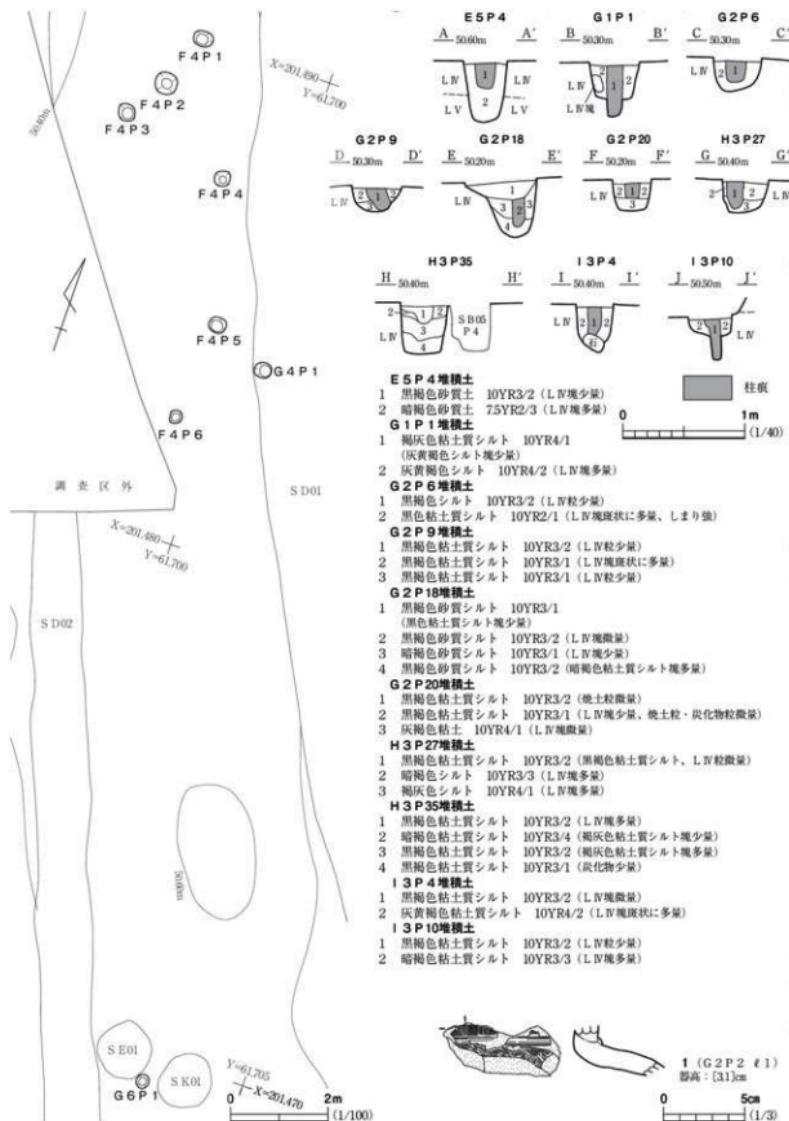


図55 小穴群⑦、G 2 P 2 出土遺物

第2編 中室内遺跡(1・2次調査)

表1 小穴一覧(西部)

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考	グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考	
B 4	1	20	18	20	△B 1		C 6	1	36	34	13	F 3		
	1	23	20	20.5	B 1			2	30	28	13	△B 1		
	2	20	14	18	△B 1			3	30	28	21	☆B 1		
	3	20	18	14	B 3			1	29	26	23	○B 1		
	4	25	20	17	B 1			2	44	34	28.5	△B 3		
	5	20	19	20.5	△B 1			3	26	26	8	△C 3		
B 5	6	18	12	14	△B 1			4	25	25	28	△B 1		
	1	42	36	30	△B 1		D 4	1	30	28	15	△C 3 P 1→P 2		
	1	24	20	9	C 3			2	28	20	15	△C 3 P 1→P 2		
	2	26	24	12	○B 1			3	30	28	5	F 3		
	3	27	20	19	○B 1			4	30	18	15	○B 1		
	4	20	16	19	☆B 1			5	22	20	12	○B 1		
	5	18	18	11	△B 1			6	1	32	24	○B 1		
C 4	6	20	18	24	B 1			7	15	15	15	F 3		
	7	34	26	10	☆C 1			8	22	18	9	○B 1		
	8	22	18	14.5	△B 3			9	20	18	8	F 4		
	9	26	20	32	△B 3			10	21	21	11.5	F 3		
	10	20	20	31	△B 3			11	22	20	25	○B 1		
	11	23	22	28.5	△B 3			12	28	26	10	F 3		
	12	18	18	9	△B 1			13	52	36	61	△C 3		
C 5	13	26	20	26	£ 1△B 1 £ 2△B 3 £ 1柱底			14	24	24	26	△B 1		
	14	26	22	16	△B 1			15	46	36	30	£ 1○B 1 £ 2○C 3		
	15	36	34	29	○B 1			1	60	44	15	△C 1		
	1	28	27	75	△C 3			2	25	25	24	△B 3		
	2	35	32	32	△B 1			3	10	10	4.5	B 1		
	3	29	20	16	△B 1			4	52	42	15	△C 1		
	4	34	28	41	£ 1△B 1 £ 2 G 3			5	49	32	21	C 1		
	5	22	22	18	F 3			6	18	17	15	B 1		
	6	25	23	16	£ 1△B 1 £ 2 G 3			7	20	21	26	△C 3		
	7	23	20	4	F 4			8	35	30	25	○C 3		
	8	34	30	23.5	£ 1△B 1 £ 2 F 3 £ 1柱底			9	58	44	10	○C 3		
	9	28	27	23	○B 1			10	24	22	18	F 3		
	10	27	26	4	△C 3			11	22	20	21	C 3		
	11	23	22	3	△C 3			12	21	20	7	C 3		
	12	20	16	30	△B 1			13	32	28	28	F 4		
	13	28	25	18	£ 1△C 1 £ 2 C 3 £ 1柱底			1	22	20	29.5	△C 3		
	14	26	20	7	F 3			2	24	20	29.5	△C 3		
	15	28	26	30	△B 1			1	38	35	49	○C 1		
	16	20	18	15	△C 3 P 17→P 16			2	40	38	14	△B 1		
	17	28	22	12	△C 3 P 17→P 16			3	50	36	8.5	B 1		
	18	18	18	7	△B 1			4	38	34	51	H55		
	19	32	32	39	△B 1			1	22	20	5	C 3		
	20	30	10	9	△C 1			2	20	18	6	F 4		
	21	10	12	14	△B 1			3	32	24	11.5	○C 3		
	22	24	24	17	△C 3			4	16	14	11	C 3		
	23	28	26	10	△B 3			5	50	46	12	△C 3		
	24	22	20	13	△B 1			6	30	23	3	£ 1△C 1 £ 2△C 3 £ 1柱底		
	25	24	22	6	△B 3			7	20	20	10	○C 3		
	26	22	20	24	C 3 P 26→P 27			8	68	52	15	F 4		
	27	20	18	25	△B 1 P 26→P 27			9	1	36	36	14	△C 3	
	28	30	30	16	△B 1									
	29	26	24	24.5	△B 1									
	30	24	20	12	F 3									
	31	44	36	12.5	△B 3									
	32	40	30	19	△B 1									
	33	36	28	23	△B 3									
	34	28	26	47	○C 3									

含有物：☆ L古窯、地土、炭化物

土質：A 黒色 10YR2/1

○ L古窯、地土

B 黒褐色 10Y3/2

○ L古窯、炭化物

C 黑褐色 10YR3/3

△ L古窯

D 灰灰褐色 10YR4/1

なし 含有物なし

E 灰褐色 10YR4/2

F にぶく黄褐色 10YR4/3

G 黄色 10YR4/4

土質：I シルト

2 粘土質シルト

3 砂質シルト

4 砂

5 砂土

表2 小穴一覧(東部)

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	埋蔵土	備考	グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	埋蔵土	備考
F 3	1	42	34	135	△B 1		H 3	18	24	22	10	△B 1	
	2	42	32	235	△B 3			19	27	18	105	△B 1	
F 4	2	46	45	335	○B 3		H 4	20	22	20	17.5	△B 1	
	3	40	35	255	△B 3			21	20	17	13	△B 2	
G 1	4	36	33	205	△B 1		H 5	22	15	14	16.5	△B 2	
	5	36	32	155	C 1			23	10	9	7	△B 2	
G 2	6	28	25	22	△B 2		I 3	24	40	35	10	△D 1	
	1	47	45	42	W55			25	24	23	27	△D 2	
G 3	2	28	26	18	△E 2			26	23	20	18	△B 2	
	1	34	28	295	△B 2		I 4	27	45	38	32	W55	
G 4	2	33	31	36	○B 2	瓦質土器		28	45	26	32	△B 2	
	3	30	23	35	△B 2			29	20	19	19	△B 2	
G 5	4	32	28	15	△B 2			30	18	14	7	△B 1	
	5	29	26	145	OB 5			31	34	28	30.5	△B 1	
G 6	6	42	40	28	W55			32	30	28	24	△B 1	
	7	39	23	9	△B 2			33	18	17	12	△B 2	
H 2	8	29	16	8	△B 2			34	43	32	14	E 2	
	9	44	40	20	W55			35	46	37	38	W55	
H 3	10	31	25	135	△B 2			36	20	16	11	△E 2	
	11	35	35	11	△D 1		I 5	1	29	24	18	△E 2	
H 4	12	27	25	13	○B 2			2	30	28	18	△B 2	
	13	32	31	165	OB 2			3	20	18	12	△B 2	
H 5	14	34	27	155	○D 1			4	26	22	33.5	△B 2	
	15	49	35	35	△B 2			5	26	24	19	△B 2	
H 6	16	31	26	28	○D 1			6	30	24	15	△E 2	
	17	41	39	235	OD 1			7	28	27	155	OB 2	
I 3	18	61	50	30	W55			8	27	26	16.5	△B 1	
	19	38	28	235	△ 1 △ C 2 △ 2 △ A 5			9	19	19	11	△B 2	
I 4	20	31	30	25	W55			10	28	27	12.5	△B 2	
	21	40	33	12	△B 1			11	23	18	16	△B 2	
I 5	22	28	24	17	△ 1 △ B 2 △ 2 △ B 2			12	25	22	9	△ E 2	
	1	23	20	14	△B 1			13	30	25	31.5	△C 1	
I 6	2	24	22	49	△B 3		I 6	1	39	32	33	△B 2	
	3	42	40	235	OE 2			2	22	21	19.5	△B 2	
I 7	4	54	45	35	△B 2			1	20	20	20	△B 2	
	5	45	40	20	OB 1			2	28	25	13.5	△B 2	
I 8	6	30	30	22	△B 3			3	40	32	29	△B 2	
	7	25	23	165	△B 2			4	31	30	27	W55	
I 9	8	33	35	68.5	C 2			5	13	13	8	△B 2	
	9	25	23	185	△B 2			6	21	20	12.5	△B 2	
I 10	10	22	19	13	△E 2			7	32	30	16.5	△D 2	
	11	29	19	8	△B 2			8	49	24	36.5	△D 2	
I 11	1	37	31	32.5	△B 2			9	24	24	11	△D 2	
	2	30	26	185	△B 1			10	36	30	22.8	W55	
I 12	3	25	23	14	△B 1			11	22	18	29.5	△B 1	
	4	30	25	18	△B 1			12	26	22	31.5	△B 2	
I 13	5	33	26	15	○B 1			13	22	20	17	△B 2	
	6	30	12	30.5	△B 1			14	22	18	11.5	△B 2	
I 14	7	23	19	8	○B 1			15	33	30	40	△B 2	
	8	22	21	20	△B 2			16	30	24	24	△B 2	
I 15	9	38	15	12	○B 2			17	22	22	15.5	△B 2	
	10	25	23	19	△B 2		I 7	1	28	22	14	△E 2	
I 16	11	35	29	20	○B 2			2	34	30	26	△B 2	
	12	34	24	11	△B 1			3	32	28	26	△B 2	
I 17	1	32	24	13	☆B 2			4	42	32	57	○B 2	
	2	42	30	14	△ 1 △ B 2 △ 2 △ B 2			5	40	34	31.5	△ 1 C 1 △ 2 D 2	
I 18	3	32	22	18	△B 1			6	26	24	28	△E 2	
	4	30	24	115	△B 1 P 4 → P 5			7	26	18	12.5	△E 1	
I 19	5	29	19	8	△B 2 P 4 → P 5			8	24	24	12.5	△B 2	
	6	41	30	42	△B 2			9	47	30	40	△B 2	
I 20	7	38	30	24	○B 2			10	24	18	37	△B 2	
	8	25	22	165	火			11	24	20	10.5	△B 2	
I 21	9	44	33	25	△ 1 △ C 1 △ 2 △ B 2			12	28	22	30	△B 2	
	10	22	20	28.5	△B 2			13	22	18	34.5	△B 2	
I 22	11	24	20	14	△B 2			14	32	30	28	△B 2	
	12	32	23	16	△B 2			15	22	18	15.5	△B 2	
I 23	13	15	15	8.5	△B 2			16	28	26	27.5	△B 2	
	14	22	19	12	△B 1			1	25	24	11.5	○B 2	
I 24	15	30	29	21	△B 1			2	22	20	16.5	△B 1	
	16	25	24	16	△B 2			3	15	15	8	△B 1	
I 25	17	28	25	23	△B 1			4	26	26	27.5	△B 2	
								5	24	22	24.5	△B 2	

第9節 遺構外出土遺物

遺構外からは、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器の計200点の遺物が出土した。主体を占めるのは土師器で、他の資料は1～3点程度である。このうち、土師器5点、須恵器1点、瓦質土器1点、陶器1点を図示した。

図56-1～5は土師器である。1は器台で、脚部を欠いている。2はミニチュアの鉢である。内面には丁寧なハケ目が観察される。3は器形不明の土器の台部である。ハケ目が内外面に施されている。4は杯で、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。外面は底部～体部下端に手持ちヘラケズリを施しているため、ロクロ成形か非ロクロ成形かは不明である。5は壺または壺の底部である。1・2・5は古墳時代前期、4は古代であろうが、3は時期の特定は難しい。

図56-6は須恵器壺の破片である。外面は平行タキ目、内面は同心円文の当て具痕が観察される。古代のものと考えられる。

図56-7は瓦質土器で、香炉の口縁部と見られ、外面には縱方向のヘラミガキが観察される。15～16世紀頃の資料とみられる。

図56-8は陶器の擂鉢である。11本単位の卸目が間隔をあけて施されている。中・近世のものと考えられる。
(鶴 見)

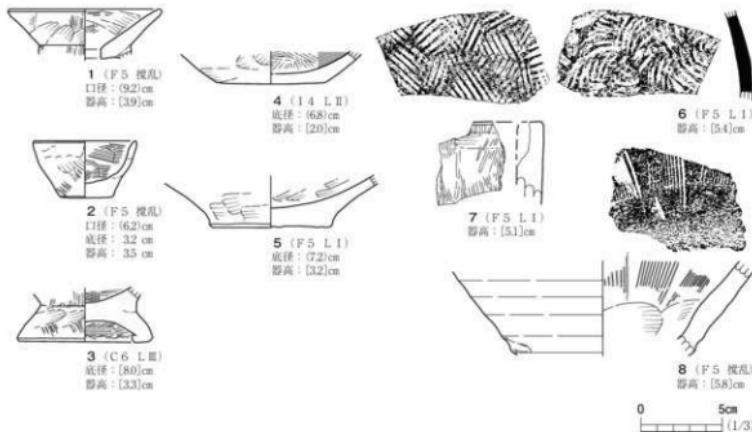


図56 遺構外出土遺物

第3章 総括

中室内遺跡の1・2次調査では、堅穴住居跡8軒、掘立柱建物跡6棟、土坑27基、堀跡・溝跡17条、井戸跡2基、特殊遺構1基、小穴253基を検出した。これらの遺構は、古墳時代～中世に営まれたものと考えられるが、詳細な時期の特定が難しいものも多い。以下、古墳時代、古代～中世の各時代について言及し、総括としたい。

古墳時代

今回の調査では、古墳時代前期の集落跡が見つかったことが成果の一つである。これまで、伊達市保原町の上保原地区では、当該期の集落の発掘調査が行われたことがなかったため、貴重な調査事例となった。調査区西部で検出した堅穴住居跡8軒は、出土遺物から古墳時代前期でも中葉頃のものと判明した。いずれの住居跡も堆積土が薄く、遺存状態は良くないが、平面形は方形を基調とし、貼床が確認された。また、床面で炉跡と思われるものが確認できたのは4・5号住居跡で、他の住居跡では確認されなかった。なお、堅穴住居跡の分布状況から、集落は西側の調査区外にも広がっていると推定される。

古代～中世

古代～中世の主要な遺構は、1～6号建物跡、1号堀跡、4・8・9号溝跡、小穴群である。この内、3号建物跡は、1・2・4～6号建物跡と比べると、柱穴の平面形が円形ではなく方形を基調とすること、柱穴の規模がやや大きいこと、主軸方向が異なっている等の特徴が指摘される。異なる時期の建物跡である可能性が高いが、遺物が出土していないため明確な時期は不明である。重複状況などを考慮すると、古代～中世のものと推定される。また、3号建物跡が位置する調査区西部で検出された方形を基調とする柱穴も古代～中世の可能性がある。この他には、古代の遺物が出土し、主軸方向が1号堀跡と異なる6号溝跡も古代の可能性がある。

中世では、1号堀跡が重要な遺構と言える。1号堀跡は、調査区内でL字形に屈曲し、その規模は長さ南北44m以上、東西33m以上、幅3～4m、深さ1～1.6mである。区画された内部には、4～6号建物跡の他、同様の建物跡を構成する柱穴とみられる多数の小穴が確認された。また、4・8・9号溝跡も、1号堀跡で区画された内部で3条並行して確認された。このうち、4・9号溝跡は1号堀跡の形状に沿うようにL字形に屈曲する。何らかの区画溝と推測されるが、内部に明瞭な建物跡やその他関連するとみられる遺構を確認することができなかつたため、具体的な性格は判然としない。また、1号堀跡の区画外にある1・2号建物跡についても、建物の長軸方向が1号

堀跡の東西軸とほぼ一致することから、同時期の建物跡と推測される。

これらの遺構は、中世の屋敷跡及びそれに関連する遺構群と評価される。時期については、1号堀跡から15世紀以降のものとみられる五輪塔の地輪が出土していること、小穴から15～16世紀頃の瓦質土器が出土していることから、概ね15～16世紀頃と推測される。

1号堀跡は、発掘調査以前からその存在が認識されていて、明治時代の字切り図にも描かれている。地籍図を基に作成したものが図57である。字切り図の堀は、北と南で二重に巡っている。内側の堀は、方形を呈するが、南東隅で途切れ全周しない。今回見つかった1号堀跡は、L字形に屈曲する形状から、地籍図で示されている堀のうち、内側の堀の西辺と南辺の一部と考えられる。また、伊達市教育委員会による確認調査の際に見つかった堀跡（図58-①）は、1号堀跡の延長上にあることから、1号堀跡の続きと考えられる。1号堀跡の南西コーナーから図58-①までは約73mである。なお、1号堀跡の南辺が地籍図に描かれた通り東辺に続かずに収束するとすれば、図58-①は、1号堀跡の東端に近い箇所と推測される。

今回の調査区より北側の部分では、福島県教育委員会による確認調査（福島県教育委員会2017）

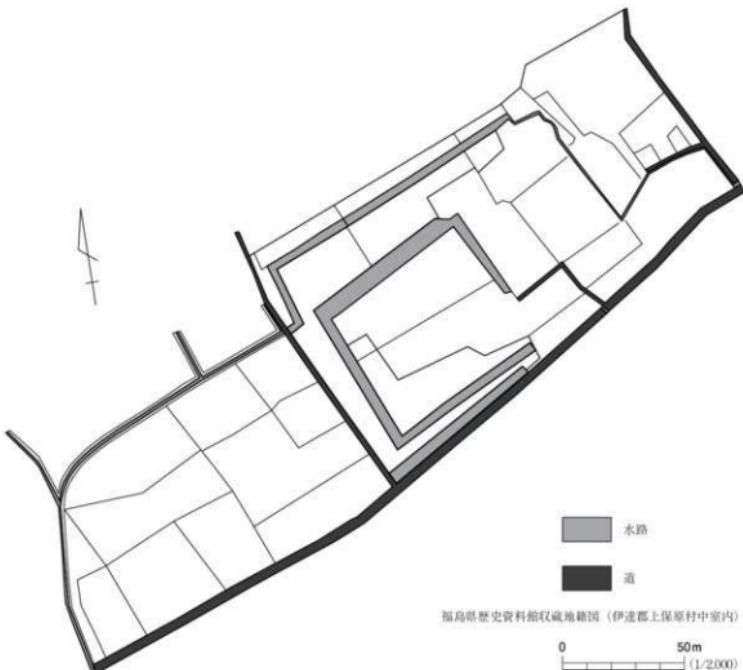


図57 中室内遺跡周辺の地籍図

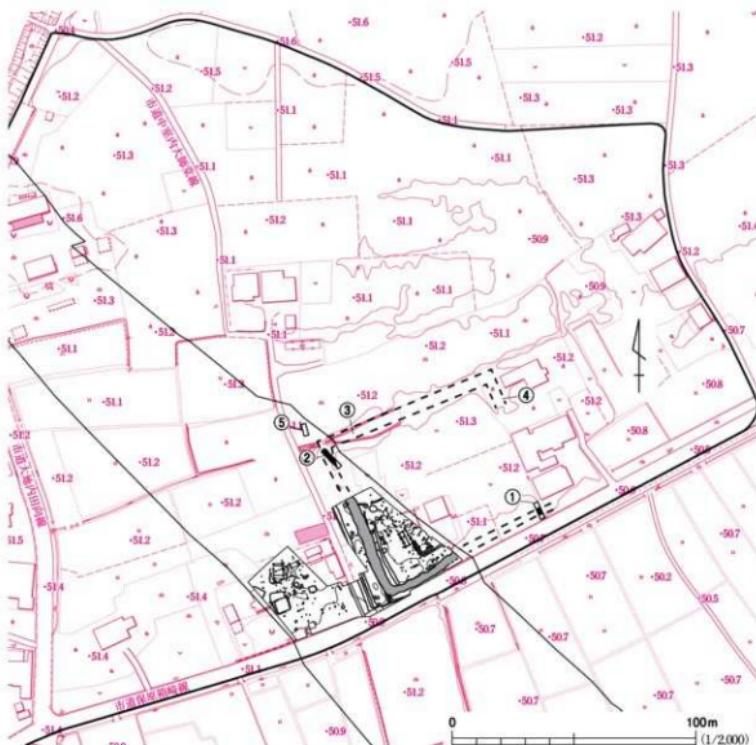


図58 堀跡推定図

で1号堀跡の延長部分が見つかっている(図58-②)。そして、これのすぐ北に隣接して現在も用水路として利用されている深さ約0.3mの東西に延びる溝(図58-③)があるが、周辺の住民の話によれば、この溝は昭和30年代頃には深さ約1mの用水路であったという。1号堀跡は、伊達市教育委員会による確認調査の際には、図58-①の箇所は昭和の初め頃に堀跡が完全には埋没しておらず、窪んだ状態だったことから水路として利用していたという情報が得られている。また、今回の発掘調査でも、それを裏付ける堆積状況が1号堀跡で確認されている。これらのことから、図58-③についても、完全には埋没していない1号堀跡の北辺が、現在も水路として使用されている可能性がある。なお、北辺から東辺にかけてのコーナーは、現在の等高線を参考にすると、図58-④の箇所で南側に屈曲するため、当該箇所の可能性がある。

次に、字切り図に描かれた二重に巡る堀のうち、外側のものについて言及したい。北辺の西端部分と予想された図58-⑤の箇所に設定した福島県教育委員会の確認調査(福島県教育委員会2017)

では遺構は皆無であり、その存在については把握することができなかった。このため、北辺の堀については、工区外にあるとみられる。南辺の堀については、地籍図に描かれた特徴、すなわち内側の堀と同程度の幅で直線的な堀とみられる遺構は確認されなかつた。なお、1号堀跡より南側で確認された溝跡は、14～17号溝跡であるが、15～17号溝跡は1号堀跡に掘り込まれているため、1号堀跡より古い時期の遺構と判断される。14号溝跡は、厳密な所属時期を特定する材料に欠けるが、重複する15・16号溝跡よりも新しく、1号堀跡と同時期に存在していた可能性がある。ただ、L字形に屈曲する形状であること、幅は規模がわかる西辺で約1.5mを測り、1号堀跡の半分以下であること等、字切り図に描かれた特徴とは異なっている。なお、14号溝跡の南辺の大部分は市道保原箱崎線の道路造成による搅乱により失われているため、本来の規模は不明である。

また、14号溝跡だけでなく、15・16号溝跡もL字形に屈曲する形状である。15・16号溝跡は、いずれも人為堆積土との調査所見がある。のことから、1号堀跡は、これらの溝跡を意識して構築された可能性もある。このような状況を考える上で、伊達市保原町保原城跡の調査事例が参考となる。保原城跡では、14世紀中葉～16世紀前葉にかけては、在地領主の館跡または宗教関連施設としての機能が想定され、16世紀中葉に大規模な堀を備えた城館跡に変化すると考えられている。また、遺構の観察では、城館跡として整備される際に、前代までの遺構は全て埋め戻されていたことがわかっている（保原町教育委員会2005）。中室内遺跡についても、当初は小規模な溝で区画された屋敷跡で、その後、小規模な溝を埋め立て、大規模な1号堀跡を構築した可能性がある。

以上、述べてきたように、今回の中室内遺跡の調査では、古墳時代前期の集落跡が見つかった。そして、堀跡で区画された中世の屋敷跡の一部が明らかになった。特に、中世の屋敷跡に関しては、地籍図と対比できる資料が得られたことが成果として強調できる。

出土遺物は多くはないが、その中に、瓦質土器の風炉が含まれていたことも注目できる。瓦質土器の風炉は、福島県内では、伊達氏と関連する遺跡からの出土が多いとされる（佐藤2017）。また、中室内遺跡の周辺には、西に0.8kmに伊達市初代朝宗が築いたとされる伊達市保原町高子館跡、東に3kmには遺跡の成り立ちの背景に伊達氏との強い関わりがうかがえると評価されている伊達市保原町舟橋遺跡（伊達市教育委員会2007）がある。中室内遺跡の中世の屋敷跡については、文献に記載がないため、どのような人物が居住していたのかは不明であるが、上記のことを踏まえると、伊達氏との関係も想定される。

（鶴 見）

参考文献

- 佐藤 俊 2017 「福島県内における瓦質土器風炉の様相」『福島考古 第59号』福島県考古学会
- 伊達市教育委員会 2005 『保原城跡Ⅳ・宮下遺跡・大地内△遺跡』保原町文化財調査報告書第18集
- 伊達市教育委員会 2007 『舟橋遺跡』伊達市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 伊達市教育委員会 2017 『平成28年度市内遺跡発掘調査報告書（試掘調査）』伊達市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 福島県教育委員会 2017 『福島県内遺跡分布調査報告書25』

第3編　ひ　でり　だ　日照田遺跡

遺跡記号	QR-HDD
所在地	伊達郡桑折町大字松原字日照田
時代・種類	縄文時代の狩場、古代の流路跡、中世の居住域
調査期間	平成29年4月17日～4月28日 平成29年5月29日～8月24日
調査員	丹治篤嘉・渡邊春喜・廣川紀子・草野潤平・枝松雄一郎・鶴見諒平

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。東北本線の伊達駅から、北に約1kmのところに位置する。松原地区は、桑折町の南西端に位置し、福島市飯坂町湯野地区と接している。遺跡より北側の丘陵裾部には、飯坂町方面から桑折町市街地へ通じる県道124号線が東西方向に延びている。遺跡の位置する箇所は、一般国道115号相馬福島道路と東北自動車道が交差するジャンクション予定地となっており、北西側に隣接して東北自動車道が走っている。遺跡のさらに東方には、東北新幹線や東北本線が縱走する。

遺跡は、標高85mほどの低位段丘上に立地する。現況では、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた緩やかな傾斜地で、水稻耕作や果樹栽培が行われている。同じ段丘上には、平成28年度に調査が行われた川原田遺跡や、平成29年度に並行して調査が行われた館ノ前遺跡(本書第4編)が存在する。

(廣川)

第2節 調査経過

日照田遺跡の調査は、4月3日付で福島県教育委員会より2,800m²の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ61日である。調査区を図1に示したようにⅠ～Ⅲ区に分け、工事計画の優先度の高い日照田遺跡Ⅰ区(100m²)の調査から着手し、同じく優先度の高い館ノ前遺跡Ⅰ区(900m²)とともに先行して引き渡しを行った。その後に、残りの日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区(2,700m²)の調査を行った。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

4月第4週：17日(月)に作業員駐車場に仮設トイレを設置する。18日(火)に作業員の雇用を開始し、19日(水)から遺構検出作業に入る。

4月第5週：24日(月)に1号溝跡を検出し、調査を進める。26日(水)に基本土層図の作成、27日(木)に調査区全体の写真撮影、28日(金)までに地形測量を終えて日照田遺跡Ⅰ区(100m²)の調査を終了する。

5月第5週：29日(月)に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅰ区(100m²)について現地引き渡しを行った。また、同日、重機を搬入し、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区(2,700m²)の表土除去を開始する。

6月第1週：1日(金)～翌週5日(月)まで降雨のため作業を中止する。

6月第2週：Ⅱ区北部の表土除去が終了し、8日(木)に作業員の雇用を再開する。9日(金)からⅡ区北部の遺構検出作業に入り、小穴群が集中することを確認する。

第3編 日照田遺跡

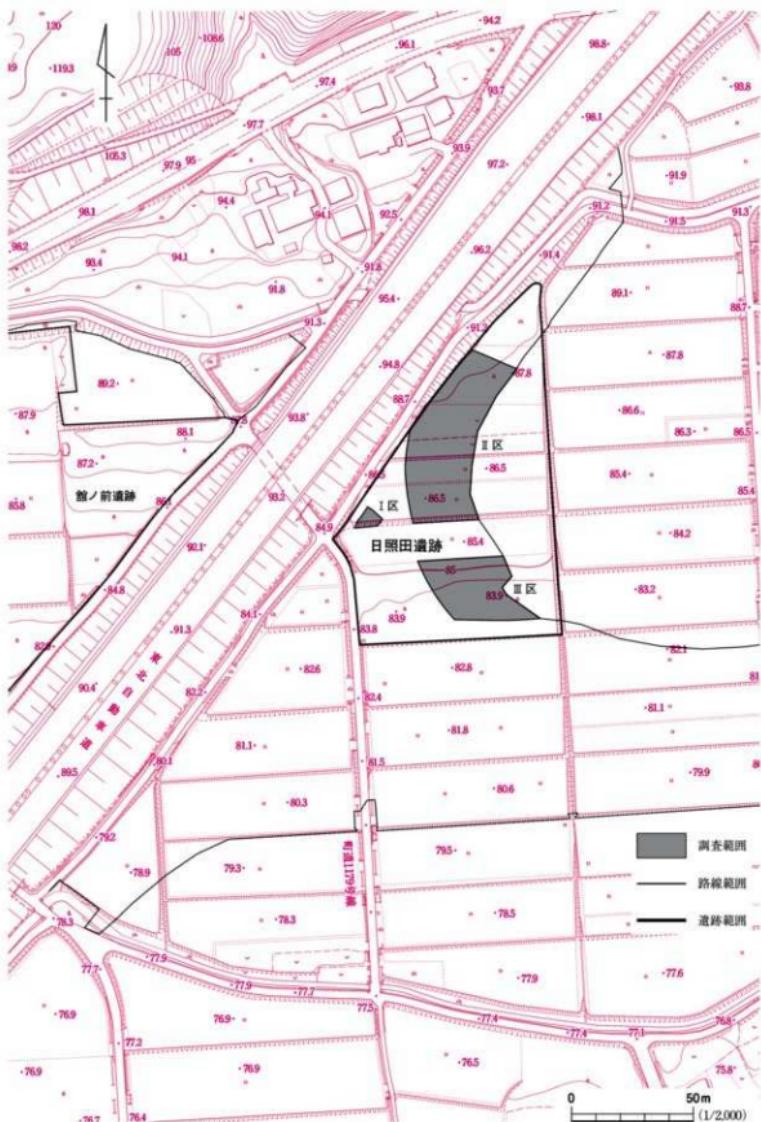


図1 調査区位置図

- 6月第3週：表土除去は14日(水)にⅡ区南部を終えてⅢ区に移る。遺構検出作業はⅡ区南部に移り、16日(金)から流路跡の掘り下げを行い、土師器・須恵器片が出土し始めた。
- 6月第4週：引き続き流路跡の掘り下げを行う。20日(火)にⅢ区の表土除去が終了し、縄文時代の落し穴と考えられる土坑数基を確認する。23日(金)よりⅢ区の遺構検出作業を始める。
- 6月第5週：27日(火)からⅢ区より検出した土坑7基の掘り下げを行う。29日(木)に4・5号土坑の断面図を作成する。
- 7月第2週：梅雨の時期に入り、調査区内に溜まる雨水の排水作業を余儀なくされる。引き続き土坑群の精査を行い、4日(火)に基本土層図の作成、5日(水)からⅢ区の流路跡の掘り下げを始め、7日(金)からは流路跡脇から検出された特殊遺構群の精査に取りかかった。
- 7月第3週：Ⅲ区の調査を継続しながら、10日(月)からⅡ区北部の遺構検出作業とⅡ区南部の流路跡の確認作業に入る。11日(火)に測量基準点を打設する。週の後半から、Ⅱ区北部では検出した建物跡、土坑数基、小穴群の精査に入る。
- 7月第4週：20日(木)よりⅡ区南部の遺構検出作業、流路跡の掘り下げに入る。21日(金)にⅢ区の全体写真のための清掃及び撮影を行う。
- 7月第5週：25日(火)に流路跡の平面図を作成する。週の後半から、Ⅱ区南部で検出された土坑数基の精査に入る。
- 8月第1週：調査区全体の地形測量を行う。Ⅱ区北部では掘り上げた遺構の作図と清掃を行って、4日(金)に全体写真を撮影した。
- 8月第2週：Ⅱ区南部の調査に集約し、流路跡の掘り下げを行う。10日(木)には、流路跡から検出された杭列の取り上げを行った。
- 8月第4週：21日(月)より調査を再開する。Ⅱ区南部の流路跡の底面を確認し、清掃を行って23日(水)に全体写真を撮影する。24日(木)に器材類を撤収して日照田遺跡の全調査を終了した。
- 9月第2週：4日(月)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区(2,700m²)について現地引き渡しを行った。

(廣川)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

日照田遺跡は、北から南に向けて緩やかに傾斜する地形に立地している。今回の調査区は水田や果樹園として利用されていた。調査箇所は3箇所に分かれており、西から時計回りにI区、II区、III区とした。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑13基、溝跡1条、特殊遺構3基、小穴52基、流路跡である。土坑は、縄文時代の落し穴9基を含む。溝跡、特殊遺構、流路跡は平安時代のもので、土師器・須恵器が出土する。掘立柱建物跡や小穴は中世のものとみられる。

基本土層(図2)

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～Vの5層に分層した。調査箇所が3箇所に分かれることから調査区内の数カ所で土層を確認し、I区(A-A')、II区(B-B'、C-C')、III区(D-D')の4地点を柱状図で示した。

L Iは、表土・耕作土及び盛土層である。細分して表土・耕作土をL I a、盛土をL I bとした。L I aはII区を除いたI・III区では30～40cm、L I bは30cm前後の厚さが認められる。

L IIは、黒褐色粘土質シルト層で、調査区全体から確認された。層厚は25～35cm程度である。この付近一帯の果樹園造成等により、欠層している箇所も多い。

L IIIは、III区でのみ確認されたにぶい黄褐色粘土質シルト層である。L IIからL IVへの漸移的な層で、層厚は約20cmである。

L IVは、調査区全域で確認されるにぶい黄褐色シルト層である。今回の調査では、本層の上面で遺構が検出された。

L Vは、II区南部で確認した極暗赤褐色を呈する基盤の砂礫層である。

(廣川)

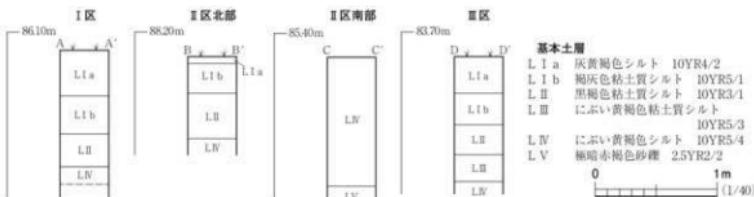


図2 基本土層

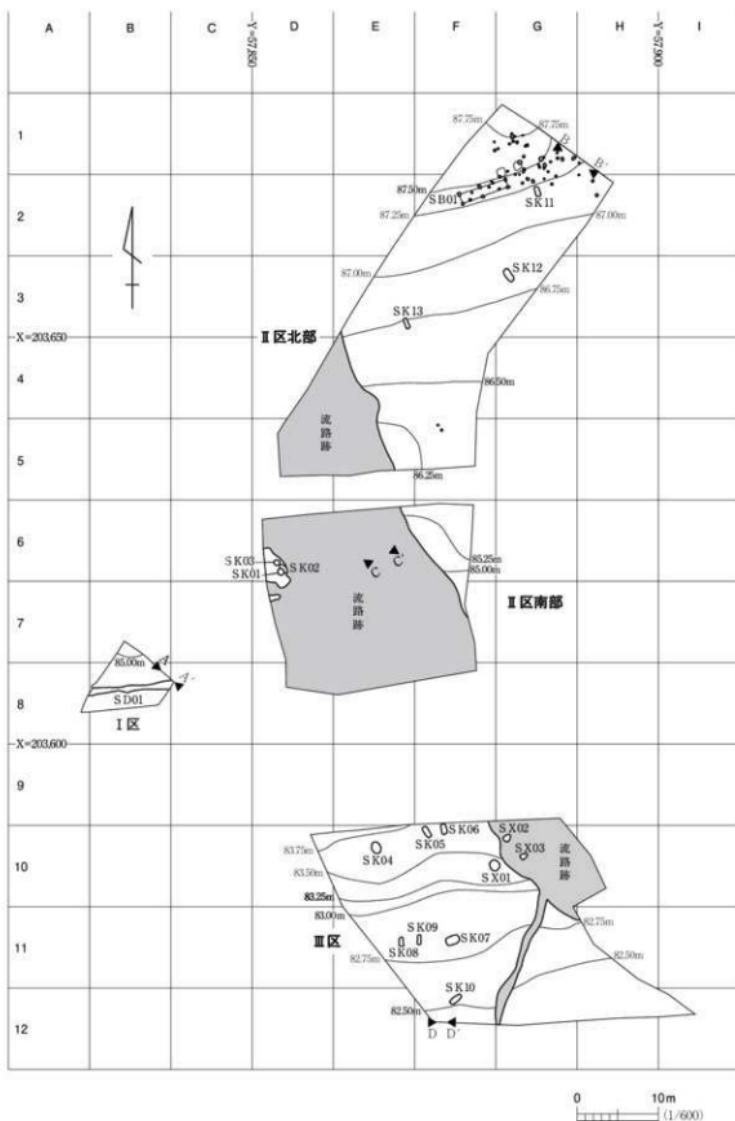


図3 遺構配置図

第2節 堀立柱建物跡

今回の調査で発見された堀立柱建物跡は1棟で、2間×1間の細長い東西棟の建物である。この建物跡の北東部には、同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群の広がりが認められる。

1号建物跡 S B 01

遺構(図4、写真5・6)

本遺構はII区北部の北端寄りとなるF2、G2グリッドで検出した堀立柱建物跡である。本遺構の周辺では、建物跡の柱穴とみられる小穴52基が検出されており、これらの小穴群の西端部に位置する。検出面はLIV上面である。また、本遺構のP3は小穴の一つであるG2P2と重複していて、本遺構の方が新しい。

本遺構は東西2間×南北1間の細長い東西棟の建物跡で、柱穴6基を検出した。東西の柱間にに対して、南北の柱間の間隔が半分の長さに満たない特徴的な構造となっている。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から2.76m+3.28m=6.04m、南側柱列が西から2.65m+3.34m=5.99m、西側柱列が1.24m、中央の柱列が1.12m、東側柱列が1.04mを測る。東西間では東寄りの柱間が広く、およそ東西6m×南北1mの少規模な建物跡である。主軸方向は北西隅を起点とした北側柱列でN70°Eである。

柱穴の掘形の平面形は梢円形ないし円形で、規模は直径が30~35cmを基本とし、最小が北東隅のP3で長軸26cm、最大がP2で長軸52cmを測る。検出面からの深さは、P1は26cm、2は30cmであるのに対し、P3~6は約17cmと浅い。掘形の底面は概ね平坦である。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調とした単層である。北側のP1~3には柱材の一部が遺存する。また、P4の底面近くとP6の底面からは石が認められ、特にP4は平たい大ぶりのものであるため礎盤石のような役割が考えられる。

遺物(図4、写真19)

P1~3からは柱材の一部が確認されたが、他に出土遺物は認められなかった。

図4-1~3はいずれも柱材である。この3点については、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、1・2がクリ、3が針葉樹という結果が出ている。年代測定の結果は、いずれも曆年較正年代で、1が1039calAD~1188calAD(95.4%)、2が1118calAD~1213calAD(57.2%)、3が1029calAD~1155calAD(95.4%)という結果が出ている(付録参照)。

まとめ

本遺構は、東西2間×南北1間の細長い東西棟の建物跡で、梁行の幅も狭いため、居住用とは異なるものとみられる。また、周囲から検出された小穴群は、本建物跡の東側に集中して認められる。そして、本建物跡の東西柱列の延長上にまとまって分布する一群があることから、同様の東西

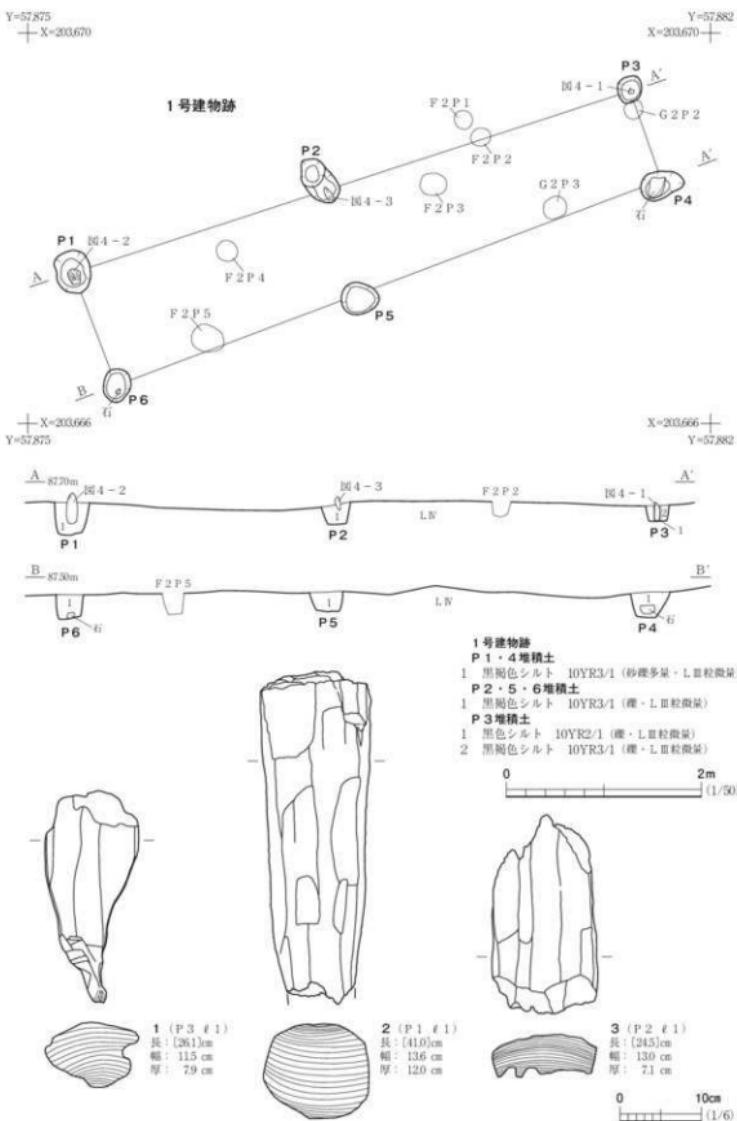


図4 1号建物跡・出土遺物

棟の建物跡が並存していた可能性がある。

本遺構では、柱材の放射性炭素年代測定の結果、11世紀前半～13世紀初頭頃という測定結果が得られた。これに対し、本遺構周辺の小穴群の一つであるG 1 P 30からは13～14世紀頃の常滑焼とみられる陶器が出土している。本遺構は、これら的小穴と一連のものと考えられること、柱材の伐採時期や建材の転用等の可能性を考慮すると、測定結果よりも新しい年代と考えることに矛盾はないことから、13～14世紀頃の建物跡と考えておきたい。

(廣川)

第3節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は13基である。4～10・13号土坑の8基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴と考えている。底面に逆茂木を刺したとみられる小さい穴が認められるものが多い。12号土坑は落し穴の可能性もあるが、出土した木片の年代測定では古墳時代という結果が出ていることから、4～10・13号土坑とは時期が異なると考えている。1～3号土坑の性格は不明だが、出土遺物や平安時代の流路跡に開まれた中洲状の箇所に立地することから、平安時代のものと推察される。11号土坑は時期、性格とも不明である。

1号土坑 SK 01 (図5、写真7)

本遺構は、II区南部西端のD 6グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面で、2号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、北西1mに隣接して3号土坑がある。流路跡に開まれた中洲状の箇所に立地している。

平面形は楕円形で、規模は長軸86cm、短軸73cm、検出面からの深さは14cmである。断面形は概ねレンズ状を呈する。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

遺物は、平安時代の土師器が1点出土したが、細片のため図示できなかった。

本遺構の性格は不明だが、平安時代の土師器が出土したこと、平安時代の流路跡に開まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。

(鶴見)

2号土坑 SK 02 (図5、写真7)

本遺構は、II区南部西端のD 6グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面で、1号土坑と重複し、本遺構の方が古い。

平面形はやや歪んだ楕円形で、規模は長軸133cm、短軸79cm、検出面からの深さは最大15cmである。東壁は、流路跡に向かって開口しているが、流水により失われた可能性がある。南西壁は、1号土坑によって掘り込まれているため、上半部が残っていない。また、北壁の立ち上がりは他の箇所に比べ緩やかとなっている。

堆積土は2層に分層した。 ℓ 1は1号土坑の ℓ 1と近似した黒褐色粘土質シルト、 ℓ 2はややグライ化した褐灰色を呈する粘土質シルトである。いずれも自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構の性格は不明だが、1号土坑同様、平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。

(鶴 見)

3号土坑 SK 03 (図5・7、写真7・20)

本遺構は、II区南部西端のD 6グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。南東1mに隣接して1・2号土坑がある。

平面形は歪んだ円形で、規模は長軸64cm、短軸62cmである。検出面からの深さは、最大で11cmと浅い。壁の立ち上がりは、全体的に緩やかである。

堆積土は2層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。また、 ℓ 1・2は、土色や含有物等の状況が2号土坑の堆積土と近似する特徴を示す。

遺物は、1点出土した。図7-5はクロコ成形の土師器杯である。口縁部から体部下半にかけての破片で、内面には黒色処理とミガキが認められる。その特徴から9世紀代のものと考えられる。

本遺構の性格は不明だが、平安時代の土器が出土したこと、平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。なお、堆積土の特徴が2号土坑と近似することから、同土坑と同時期に埋没した可能性がある。

(鶴 見)

4号土坑 SK 04 (図5、写真7)

本遺構は、III区北端のE 10グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、東に6~8mには5・6号土坑、南東に11mには8・9号土坑がある。

平面形は、検出面では梢円形だが、底面では長方形を呈している。各部の計測値は、検出面では長軸146cm、短軸107cm、底面では長軸111cm、短軸51cmである。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、中央付近で小穴を1基確認した。小穴は、長軸39cm、短軸23cmの梢円形で、土坑底面からの深さは58cmである。

堆積土は11層に分層した。 ℓ 1~10は黒褐色または褐灰色シルトを主体とし、遺構の中央部に向けて流れ込んでいることから、周囲から流入した自然堆積土と判断した。 ℓ 11は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められず、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や深さ、底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。

(鶴 見)

5号土坑 SK 05 (図5、写真7)

本遺構は、III区北端のF 10グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複す

第3編 日照田遺跡

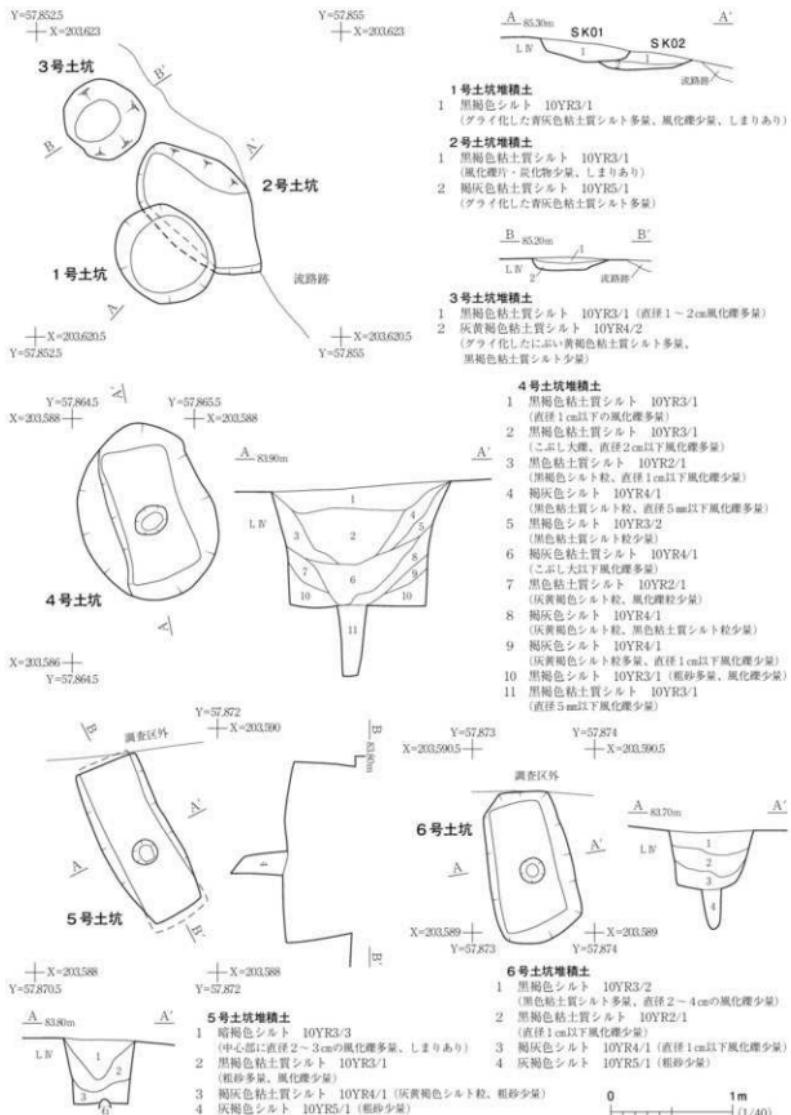


図5 1~6号土坑

る遺構はないが、東に1.5mには6号土坑、西に6mには4号土坑がある。

平面形は長方形で、検出面での規模は、長軸136cm、短軸59cmである。検出面から底面までの深さは最大で58cmである。東西の壁は直立するが、南北壁は抉れている。底面は平坦で、中央よりやや南寄りの位置で小穴を1基確認した。小穴は径20cmの円形で、土坑底面からの深さは43cmである。小穴の底面は水平ではなく、南側の方が深くなっている。

堆積土は4層に分層した。 ℓ 1～3は遺構の中央部に向けて流れ込んでいることから周囲から流入した自然堆積土と判断した。 ℓ 4は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められず、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。 (鶴 見)

6号土坑 SK 06 (図5、写真7)

本遺構は、Ⅲ区北端のF 10グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、西に1.5mには5号土坑がある。

平面形は長方形を基調としている。検出面での規模は、長軸124cm、短軸69cmである。検出面からの深さは最大で47cmである。周壁の立ち上がりは垂直に近い。底面は平坦で、中央付近からは小穴を1基確認した。小穴は径20cmの円形で、土坑底面からの深さは32cmである。小穴の底面は丸みがあり、平坦ではない。また、底面付近は常時湧水している。

堆積土は4層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 4は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。 (鶴 見)

7号土坑 SK 07 (図6、写真7)

本遺構は、Ⅲ区中央部のF 11グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、西に3mには9号土坑、西に5mには8号土坑、南に6.5mには10号土坑がある。

平面形は長方形を呈し、検出面での規模は、長軸160cm、短軸111cmである。検出面から底面までの深さは最大で89cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁のみ内側に抉れている。底面の凹凸は少なく、ほぼ平坦である。なお、底面では、土坑の中軸線上に2基、北壁寄りの位置に2基、計4基の小穴を確認した。小穴の平面形はいずれも円形で、径は12～21cm前後、土坑底面から小穴底面までの深さは、30cm前後にまとまっている。

堆積土は13層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1～7・9～12は、黒褐色または褐色を基調とする周囲から自然流入土、 ℓ 8はにぶい黄褐色を基調とした壁の崩落土、 ℓ 13は

小穴部分の堆積土である。なお、小穴部分の堆積土には、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。

本遺構からは、 ℓ 1 の検出面付近から土師器が 1 点出土したが、細片のため図示できなかった。
出土状況から、後世に流入した遺物と考えられる。

本遺構は、縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期は不明である。また、本遺跡で確認された他の落し穴と考えられる土坑と比べると、規模が大きく、逆茂木の杭の痕跡とみられる小穴が 4 つ確認されるといった異なる特徴が認められる。

(鶴 見)

8号土坑 SK 08 (図6、写真7)

本遺構は、Ⅲ区西端の E 11 グリッドで検出した土坑である。検出面は L IV 上面である。重複する遺構はないが、東に 2 m には 9 号土坑、東に 5 m には 7 号土坑がある。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸 112cm、短軸 47cm ある。検出面から底面までの深さは最大で 52cm である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央付近で小穴を 1 基確認した。小穴は長軸 23cm、短軸 20cm の楕円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは最大で 23cm である。

堆積土は 6 層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1 ~ 4 は周囲からの流入土、 ℓ 5 は周囲からの流入土と壁の崩落土が混在した層である。 ℓ 6 は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。

(鶴 見)

9号土坑 SK 09 (図6、写真8)

本遺構は、Ⅲ区 F 11 グリッドで検出した土坑である。検出面は L IV 上面である。重複する遺構はないが、西に 2 m には 8 号土坑、東に 3 m には 7 号土坑がある。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸 122cm、短軸 43cm である。検出面から底面までの深さは最大 47cm である。周壁の立ち上がりは垂直に近く、底面はほぼ平坦である。底面では、中央よりやや南寄りの位置で小穴を 1 基確認した。小穴は径 19cm の円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは 15cm である。

堆積土は 4 層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1 ~ 3 が周囲からの流入土、 ℓ 4 は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。

(鶴 見)

10号土坑 SK 10 (図6、写真8)

本遺構は、Ⅲ区南端の F 12 グリッドで検出した土坑である。検出面は L IV 上面である。重複する遺構はないが、北に 6.5 m には 10 号土坑がある。

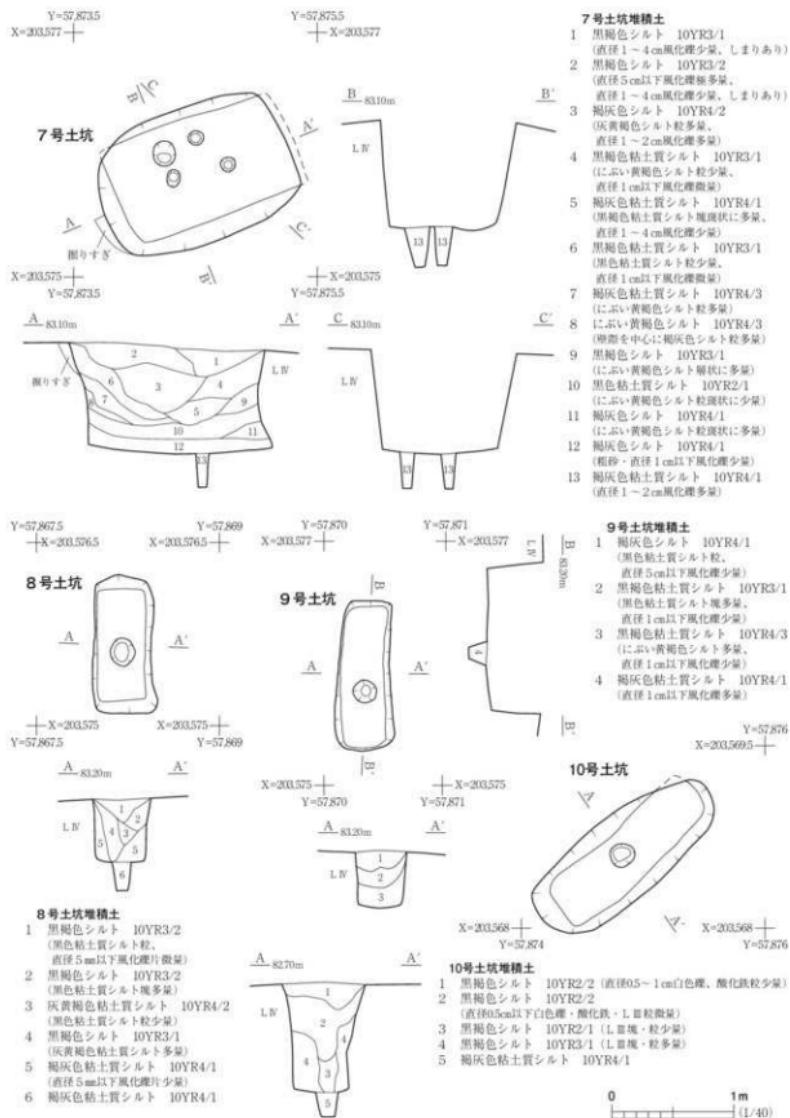


图6 7~10号土坑

平面形は隅が丸い長方形で、検出面での規模は、長軸172cm、短軸69cmである。検出面から底面までの深さは最大で90cmである。周壁はほぼ直立するが、北西隅の下部が抉れている。底面は平坦で、中央付近で小穴を1基確認した。小穴は径19cmの円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは20cmである。

堆積土は5層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1～3は周囲からの流入土、 ℓ 4は周囲からの流入土と壁の崩落土が混在した層である。 ℓ 5は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や深さ、底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。

(鶴見)

11号土坑 SK 11 (図7、写真8)

本遺構はII区北部の北端近くのG 2グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、本遺構の北側には小穴群の広がりが認められ、本遺構から西に3mには1号建物跡がある。

東壁の北半分が搅乱を受けているが、平面形は長軸126cm、短軸56cmの長方形で、検出面からの深さは最大で32cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 12°Wで、等高線にはほぼ直交している。

堆積土は黒褐色シルトで、含有物の違い等により3層に分層した。周囲からの自然流入土を主体とするが、 ℓ 3はL IV塊を多量含むことから、壁の崩落土も混在していると考えている。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構の時期や性格は不明である。平面形の形状や大きさは本遺跡で確認される落し穴と似ているが、掘り込みがかなり浅いため異なるものとみられる。

(廣川)

12号土坑 SK 12 (図7、写真8・20)

本遺構はII区北部の中央東寄りのG 3グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北に9.5mには11号土坑、南西方向に13mには13号土坑がある。

平面形は長軸約168cm、短軸約80cmの細長い楕円形で、検出面からの深さは最大で106cmである。

底面は平坦で、下端がやや抉れて掘り込まれており、周壁は内側に反った弓なり状に立ち上がる。主軸方向はN 34°Wを示す。

堆積土は4層に分層した。 ℓ 1・3・4は周囲からの流入土、 ℓ 2はL IV塊を多量に含む西壁の崩落土である。 ℓ 3・4は、西壁の崩落土である ℓ 2が堆積した影響を受けたとみられ、土圧により東側に押されたような堆積状況となっている。流入土のうち、 ℓ 1・3は黒褐色シルトないし黒色シルトで土色が近似している。一方、 ℓ 4はグライ化した灰色粘土質シルトで、底面上に厚さ

50~60cmほど堆積する。

出土遺物は4点で、そのうち3点を図示した。図7-1~3は縄文土器である。1は口縁部に近い箇所の破片である。地文は沈線で区画され、横方向の沈線の下には刺突がある。2・3は体部の破片で、沈線と地文のみ確認できる。いずれも縄文時代後期中葉~後葉頃のものと考えられる。また、底面付近から本片が出土していて、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はケンボナシ属、暦年較正年代は345calAD~396calAD(68.2%)という結果が出ている(付編参照)。

本遺構は、調査段階の所見では、その形状と掘り込みの深さ、堆積土中から縄文土器が出土したことから縄文時代の落し穴と考えた。しかし、底面から出土した本片の放射性炭素年代測定結果は古墳時代前期に相当し、縄文時代とは大きく年代が異なっている。このため、堆積土中から出土した縄文土器は後世に流入したもの可能性が高い。よって、本遺構は、底面出土の本片の年代から、古墳時代前期の可能性が高いと考えられる。具体的な性格は断定できないが、形状から落し穴の可能性もある。

(廣川)



図7 11~13号土坑、土坑出土遺物

13号土坑 S K 13 (図7、写真8・20)

本遺構はII区北部中央のE 3グリッドで検出した土坑である。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。本遺構に近接した遺構もないが、北東に13m離れた位置に12号土坑がある。

平面形は長方形で、規模は長軸約130cm、短軸約42cmである。検出面からの深さは最大で62cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 22° Wで、等高線にはほぼ直交している。

堆積土は3層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1・2は黒褐色シルトを基調とし、含有物の違いから2層に分層した。その下層に ℓ 3の黒色シルトが底面上に厚く堆積する。

出土遺物は縄文土器1点である。図7-4は縄文土器で、体部下半の破片である。確認できるのは地文のみであるが、胎土等の特徴から後期のものと推定される。

本遺構は、形態の特徴から落し穴と考えられる。時期については、堆積土中から縄文時代後期頃の土器が確認されていることから、当該期の所産と考えておきたい。

(廣川)

第4節 溝 跡

今回の調査で発見された溝跡は1条である。I区でのみ確認されていて、出土遺物から平安時代のものと考えられる。

1号溝跡 S D 01

遺構 (図8、写真9)

本遺構は、I区のB 8グリッドで検出した溝跡である。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。

東西に延びる溝跡で、調査区内で確認した範囲の長さは10.6m、幅は最少36cm、最大104cmである。検出面からの深さは10~26cmで、東に行くほど深く遺存状態が良い。また、底面は東に向かって傾斜している。溝の断面形は、逆台形を呈する。

堆積土は4層に区分した。いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1~3は、レンズ状に堆積している。 ℓ 4は北壁際に認められる層である。ややグライ化して土色が変質しているが、L IVに起因すると考えられ、壁の崩落土と判断した。

遺物 (図8、写真20)

遺物は、土師器29点、須恵器3点が出土した。その内、器種が判断できる3点を図示した。

図8-1は、土師器杯である。ロクロ成形されたもので、口縁部から体部にかけて残存した破片である。口縁部はわずかに外反し、内面は黒色処理とミガキが施されている。図8-2は土師器甕の口縁部から頸部の破片である。ロクロ成形で、口縁端部は上につまみ上げられており、頸部は

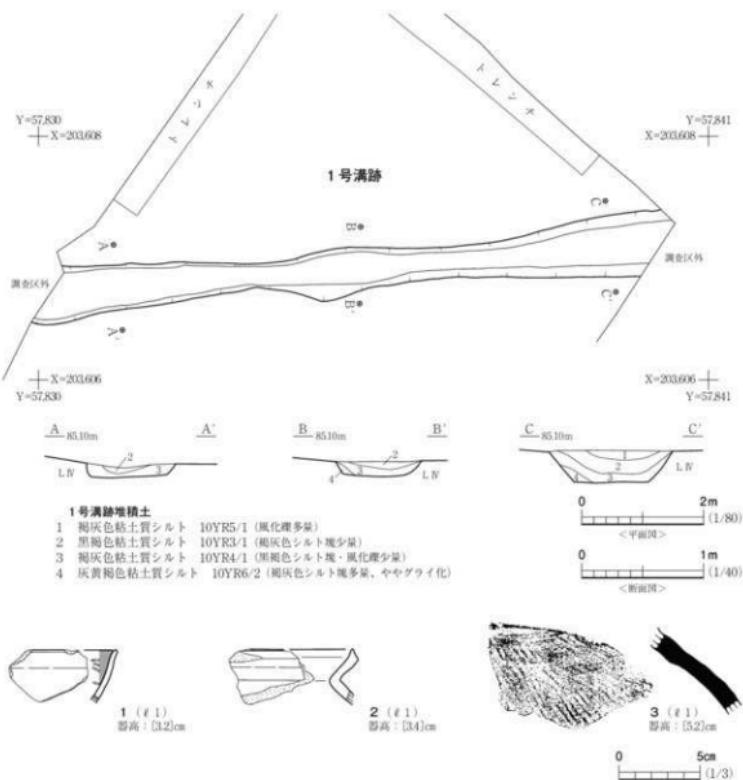


図8 1号溝跡・出土遺物

「く」の字状に曲がる。図8-3は須恵器甕で、頭部付近から胴部にかけてのものである。外面は平行タタキ目が残るが、内面はナデ調整により当て具痕は確認されなかった。

まとめ

本遺構は、平安時代の土師器・須恵器が出土したことから、当該期の溝跡と考えられる。調査が一部のため具体的な性格については不明だが、遺構底面は東に傾斜するため、II区南部の流路跡の方に排水する機能があった可能性もある。

(鶴見)

第5節 特殊遺構

今回の調査で発見された特殊遺構は3基である。3基ともⅢ区の流路跡の岸辺付近で確認された。出土遺物等から、いずれも平安時代の遺構と考えられる。

1号特殊遺構 S X 01

遺構 (図9、写真10)

本遺構は、Ⅲ区のF 10・G 10グリッドで検出した遺構である。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北東に25mには2号特殊遺構、東に25mには3号特殊遺構がある。当初は遺物が出土せず、窪地状の地形と考えていたが、遺構西部の堆積土を掘り下げた段階で遺物がまとまって出土したため、遺構として調査を行った。

平面形は歪んだ円形で、規模は南北144cm、東西129cmである。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は緩やかに立ち上がるが、西壁側では二段になっている。底面は中央部がやや低くなるが、ほぼ平坦である。

堆積土は2層に分層し、ℓ 1・2ともに自然堆積と判断した。ℓ 1は多量の炭化物と少量の焼土を含んでいたが、周壁や底面に焼けた痕跡はなかった。

遺物 (図10、写真21)

遺物は、土師器片108点が出土し、杯2個体、壺1個体、鍋3個体分が復元できた。遺物は、遺構中央付近からまとめて出土した。出土層位はℓ 1のみである。土師器杯は底部を上に向いた状態で、ほぼ完形を保っていた。それ以外は、割れた状態で折り重なって出土した。

図10-1～2は土師器杯で、1はほぼ完形である。いずれもロクロ成形で、内面には黒色処理

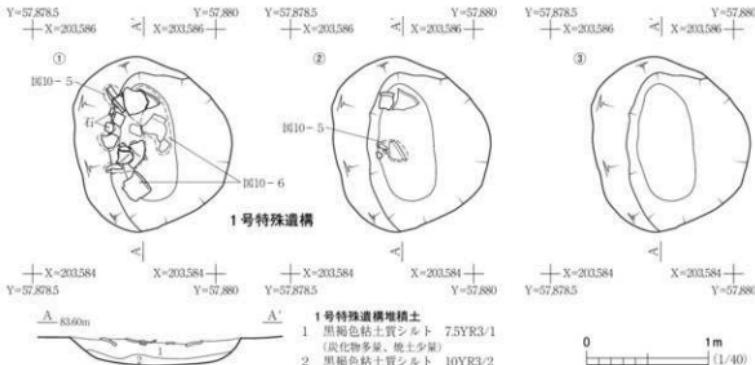


図9 1号特殊遺構

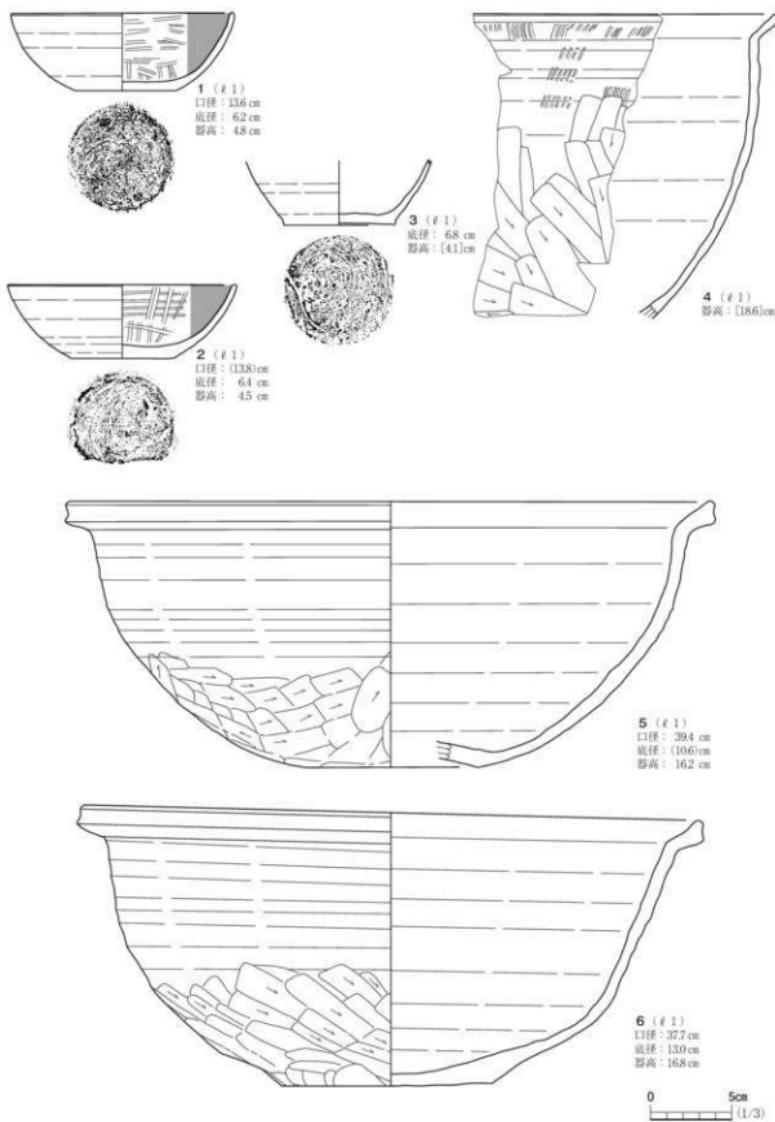


図10 1号特殊遺構出土遺物

とヘラミガキが認められ、底部の切り離しは回転糸切りである。底部～体部下端には切り離し後の調整は観察されなかった。また、2は外面が赤みを帯びていて、器面が剥離した痕跡がある。

図10-3は土師器甕である。胴部下半から底部にかけて残存していた。ロクロ成形で、器壁は薄い。底部の切り離しは回転糸切りである。また、全体的に器面が赤く、底部を中心に黒色の付着物が認められる。

図10-4～6は土師器鍋で、頸部は「く」の字状に屈曲している。4が薄手のつくりであるのに対し、5・6は厚手となっている。4の外面は、タタキで成形した後にロクロナデ、そしてその後、縦や斜め方向のヘラケズリが施されている。5・6には4のようなタタキ目は認められず、ロクロ成形後に胴部下半をヘラケズリして調整している。口縁端部の直下は外側に張り出し、端部との間は凹みが観察される。底部は平底で、底径は口径と比べ、かなり小さい。6の底部には、被熱痕跡とみられる赤色化した部分が確認できる。

まとめ

本遺構は、土器の出土状況から、不要になった土器の投棄場と考えられる。ただ、廃棄した段階では土坑状の落ち込みは一定程度埋没していたため、本来は別な用途があったと考えられる。しかし、その具体的な性格は不明である。

本遺構では、出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行っている。年代測定の結果は、暦年較正年代で、694calAD～746calAD(57.2%)という結果が出ていて、7世紀末～8世紀中頃にあたる(付録参照)。しかし、本遺構から出土した土器は全てロクロ成形で、杯の特徴から9世紀中～後半頃のものと考えられる資料であり、測定結果とは差がある。ただ、炭化物のもととなつた木の伐採時期や転用等の可能性も考慮すると、測定結果よりも新しい年代と考えることに矛盾はなく、本遺構周辺及び本遺跡では7世紀代の遺構・遺物は確認されていないことから、本遺構は9世紀後半頃のものと考えておきたい。

(鶴見)

2号特殊遺構 S X 02

遺構(図11、写真11)

本遺構は、Ⅲ区北端のG10グリッドで検出した遺構である。流路跡の岸辺付近にあり、流路跡の堆積土を掘り下げている段階で確認した。したがって、流路跡が完全に埋没する以前に機能していたものと考えられる。当初、遺構と認識できなかつたため、内部の堆積土を少し掘り過ぎてしまつた。検出面はLIV上面である。重複する遺構はないが、南東に2mには3号特殊遺構、南西に2.5mには1号特殊遺構がある。

平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸92cm、短軸71cmである。検出面からの深さは最大で20cmである。底面は周壁に被熱の痕跡は確認されなかつた。

堆積土は黒色粘土質シルトの単層である。 ℓ 1は、流路跡堆積土の ℓ 2に相当し、自然堆積土と判断した。

遺 物 (図11、写真22)

本遺構の出土遺物は、土師器片237点、須恵器片1点、羽口片15点の他、鉄滓が出土している。その内、復元できた土師器4点、羽口6点を図示した。また、鉄滓については、楕円形2点について、写真22に掲載した。

図11-1・2は土師器杯である。いずれもロクロ成形で、内面は黒色処理され、ヘラミガキで調整されている。1のヘラミガキは、放射状に施されている状況が観察できる。1の底部外面には回転糸切り痕が残り、切り離し後の調整はされていない。これに対し、2は底部周縁～体部下端

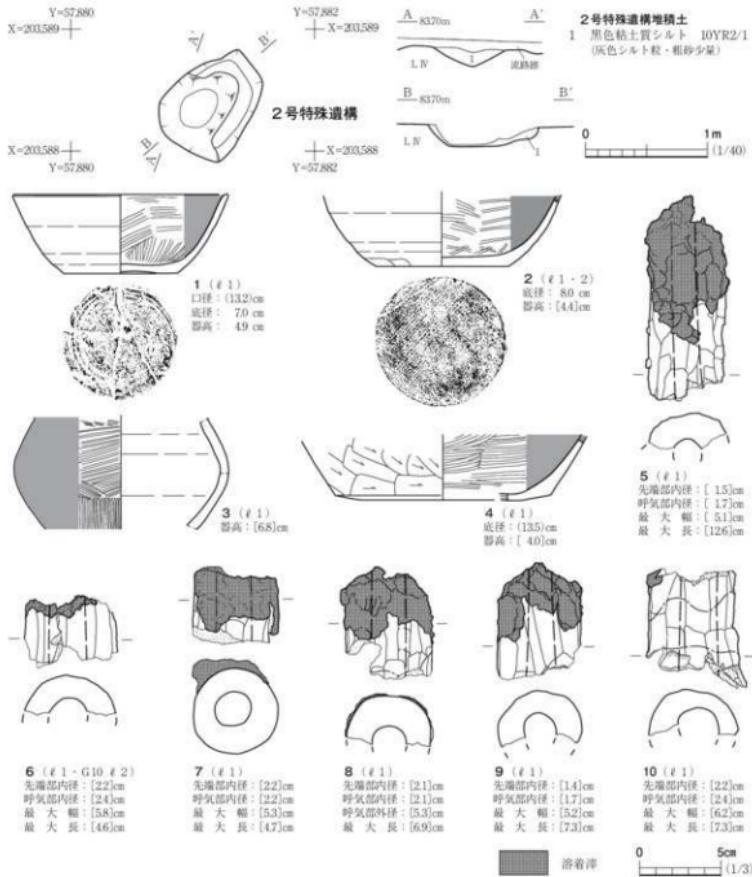


図11 2号特殊遺構・出土遺物

に手持ちヘラケズリ調整が認められる。また、底部には筋状の痕跡が認められるが、静止糸切りの痕跡とするには線が直線的過ぎるため、何らかの敷物の痕跡が残ったと想定される。

図11-3は土師器壺である。口縁部と底部が欠ける破片資料で、僅かに頭部が残っている。外面はヘラミガキと黒色処理が施されているが、内面はロクロナデ調整のみである。

図11-4は土師器壺または鉢の底部とみられる、胴部下端～底部にかけての破片である。外面は、横方向主体の手持ちヘラケズリで調整されている。内面は横方向のヘラミガキと黒色処理が観察される。

図11-5～10は羽口である。いずれも溶着済が確認できる。先端部・吸気部ともに残存していないものが多く、全体の形状・長さがわかるものはなかった。5は出土したものの中では遺存状態が良い資料で、吸気部以外が残存していた。10の下端はやや「ハ」の字状に開くことから、吸気部付近の資料と考えられる。

写真22の椀形滓は底が丸い形状を呈し、鍛冶に伴うものと考えられる。

なお、羽口や椀形滓が出土したことから、掘り上げた遺構内部の堆積土の洗浄を行ったが、精錬時に生じる細かな鍛冶滓は確認されなかった。

まとめ

本遺構は、長軸が100cmに満たない小規模の遺構だが、遺構内部から羽口がまとめて出土し、椀形滓も出土した。しかし、遺構には被熱の痕跡は皆無で、精錬時に生じる細かな鍛冶滓も確認されないことから、不要になった羽口や鉄滓等を廃棄した遺構と推定される。今回の調査区内では鍛冶炉は検出されなかったが、遺跡周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い。なお、本遺構から出土した土師器片についても、鍛冶関連遺物とともに廃棄されたと考えられるが、ℓ 1の上半で出土したものに関しては、流路跡が埋没する過程で流されてきた資料も含まれていると推測される。

また、本遺構では、出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行っている。年代測定の結果は、曆年較正年代で、764calAD～886calAD(80.1%)という結果が出ている(付編参照)。出土した土師器片は9世紀中頃のものであり、測定結果の中におさまる。このことから、本遺構の年代は、9世紀中頃と考えている。

(鶴見)

3号特殊遺構 S X 03

遺構(図12、写真12)

本遺構は、Ⅲ区北東部のG 10グリッドで検出した遺構である。流路跡の岸辺付近にあり、流路跡の堆積土を掘り下げている段階で確認した。したがって、流路跡が完全に埋没する以前に機能していたものと考えられる。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、北西側2mには2号特殊遺構、西側に2.5mには1号特殊遺構がある。

平面形は不整形で、規模は長軸83cm、短軸70cmである。検出面からの深さは最大で13cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は2層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。

遺構の中央部には横長の板材(図12-2)が置かれ、二本の杭で固定されていた。一本は遺構中央部、残りの一本は壁際付近で打ち込まれている。遺構中央部の杭(図12-3)は、板材(図12-2)を固定した状態のまま検出された。一方、壁際付近の杭(図12-4)は北西側に傾いており、遺構が埋没する過程で倒れたと推測される。また、板材や杭の周辺には10~20cm大の石が7点まとめて検出された。本遺構周辺では石がまとめて検出されることはないと想定したため、本遺構に関連するものである可能性も考慮した。しかし、これらの石は全て $\ell 1$ の上部で検出されたため、判然としない。あるいは、流水で運ばれてきた石が板材に当たったことにより、本遺構周辺に散乱していた状況の可能性も考えられる。

遺 物 (図12、写真22)

出土遺物は、土師器杯が1点、木製品が3点、羽口1点、鉄滓1点で、このうち土師器と木製品

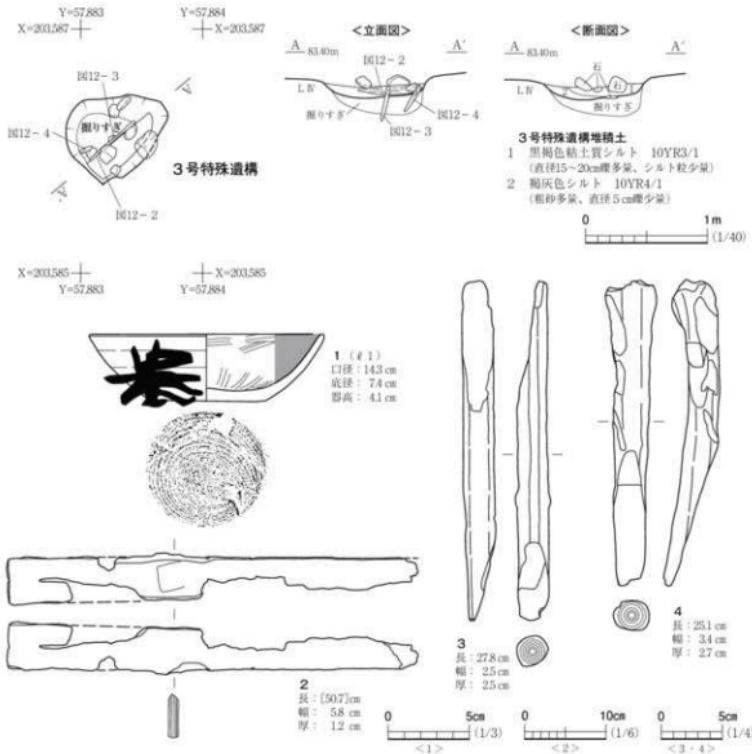


図12 3号特殊遺構・出土遺物

について図12に示した。

1は土師器杯である。ロクロ成形で、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されているが、黒色処理は剥落し、遺存状態は悪い。底部外面には回転糸切り痕が残り、切り離し後の調整はされていない。また、体部外面に墨書きが観察されたが、具体的な文字の判別はできない。

2は、板材である。腐食のため、もともとの長さは不明である。明瞭ではないが、一部に手斧らしき加工痕が残る。3・4は杭である。自然木の先端部を加工して杭にしている。3は上下両端に加工があり、上部は2の板材と接する部分にある。なお、2の板材は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、ニレ属、曆年較正年代は622calAD - 655calAD (68.2%)という結果が出ている(付録参照)。

まとめ

本遺構は、僅かな窪みの中に板材を杭で固定した遺構である。流路跡の岸辺付近に位置することから、流路跡と関連する何らかの施設の可能性もあるが、具体的な用途は不明である。

本遺構から出土した土師器杯は、その特徴から9世紀後半頃の資料と考えられるが、板材の示す7世紀前半～中頃という測定結果とは差がある。ただ、板材については、木の伐採時期や転用等の可能性も考慮する必要がある。また、本遺構周辺及び本遺跡では7世紀代の遺構・遺物は確認されていない。以上のことから、本遺構は9世紀後半頃のものと考えておきたい。 (鶴見)

第6節 小穴群

いずれの小穴もⅡ区北部から検出された。小穴はⅡ区北部の流路跡東側から検出された2基を除き、Ⅱ区北部の北端近くに集中する。その一角からは1号建物跡が検出されており、小穴群は同様の建物跡の柱穴と考えられる。

小穴群(図13、写真13～15)

検出した小穴は52基である。小穴はグリッドごとに番号を付け、一覧表に長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土等の所見をまとめた。検出面はいずれもL IV上面である。F 5グリッドで検出された2基を除き、他の小穴はⅡ区北部の北端近く、F 1・2、G 1・2、H 1・2グリッドで確認されている。小穴群は、分布状況から、北側の調査区外へも広がるものとみられる。

これらの小穴の平面形は橢円形ないし円形である。規模は、短軸の計測値で20～30cmの範囲内に収まるものがほとんどで、それより小さい20cm未満のものがいくつか存在する。

掘形内の堆積土は、多くが黒褐色シルトを基調としている。それぞれの小穴の中には重複するもの、堆積土中から柱痕跡や柱材の礎盤石の可能性がある石が認められたものがあり、それらは一覧表中に付け加えた。

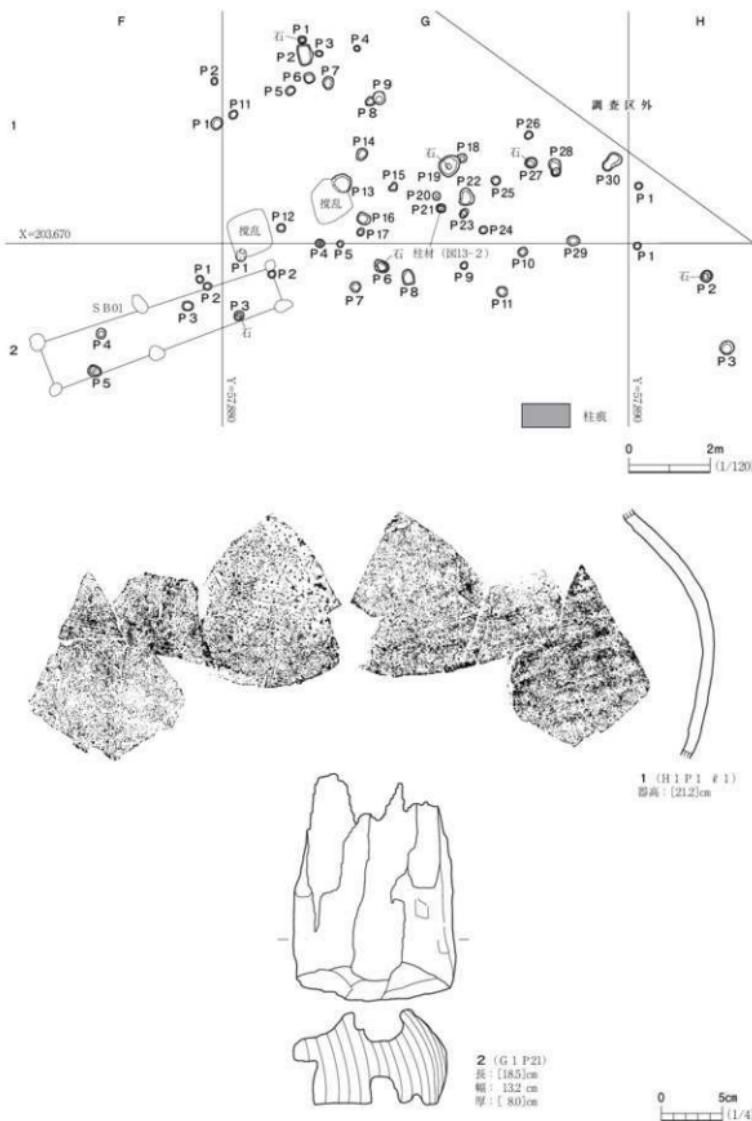


図13 小穴群・出土遺物

表1 小穴一覧表

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
F 1	1	31	26	11	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・炭少量)	土師器
	2	18	16	6	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	1	19	19	12	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	2	20	20	12	10YR3/1 黒褐色シルト(LⅢ粒少量)	
	3	26	22	16	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒多量・炭少量)	
F 2	4	22	22	15	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・炭少量)	
	5	33	28	19	10YR2/1 黒褐色シルト(LⅢ粒微量)	
	1	20	18	11	75YR3/2 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多)	土師器
	2	20	18	11	75YR3/2 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多)	
	1	20	18	11	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・炭微量)	
F 5	2	52	34	14	10YR3/1 黒褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多量)	
	3	20	14	7	10YR2/3 黒褐色シルト(LⅢ粒少量)	
	4	14	13	4	10YR2/3 黒褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	
	5	24	20	11	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量・炭微量)	
	6	28	26	8.5	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	7	32	24	12	10YR2/3 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	
	8	22	20	12	75YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・炭微量)	
	9	32	27	38	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多量・炭微量)	
	11	24	18	8	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・炭微量)	
	12	21	19	10	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多)	
G 1	13	49	46	14	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	14	30	24	16	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	16	34	28	23	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量) (10YR3/1 黑褐色シルト塊・LⅢ粒多量)	
	17	20	16	11	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量) (10YR3/1 黑褐色シルト塊・LⅢ粒多量)	
	18	22	18	32	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多量)	
	19	56	45	20	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	
	20	20	18	4	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	21	22	21	6	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒少量)	柱材
	22	45	30	28	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	23	25	18	3	10YR3/2 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量・炭微量)	
G 2	24	21	18	20	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	25	22	22	34	75YR2/1 黑褐色シルト(LⅢ粒微量)	
	26	21	18	12	10YR2/1 黑褐色シルト(LⅢ粒微量)	
	27	30	25	8	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊少量)	
	28	44	24	30	10YR3/1 黑褐色シルト(縦多量・LⅢ粒少量)	
	29	30	24	19	75YR2/1 黑褐色シルト(LⅢ粒少量)	
	30	52	26	18	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多量) LⅢに近似	
	1	32	26	20	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多量)	
	2	20	18	6	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒微量)	
	3	24	22	16	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量・炭少量)	
H 1	4	22	20	11	10YR4/2 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多量)	
	5	16	15	135	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	
	6	38	28	12	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	
	7	25	25	14	10YR2/1 黑褐色シルト(LⅢ粒微量) LⅢに近似	
	8	38	30	18	10YR3/1 黑褐色シルト	
H 2	9	20	16	10	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒多量)	
	10	24	20	16	10YR2/1 黑褐色シルト	
	11	26	24	8	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多量)	陶器
H 1	1	18	18	4	10YR3/1 黑褐色シルト(縦・LⅢ粒・塊多量)	
H 2	1	18	18	6	10YR3/2 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多量)	
	2	30	26	10	10YR3/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊多量)	
	3	34	30	30	15YR2/1 黑褐色シルト(LⅢ粒・塊少量)	

遺物 (図13、写真23)

出土遺物はほとんどなく、F 1 P 1、F 5 P 1から出土した土師器杯の破片と、H 1 P 1から出土した中世陶器、G 1 P 21から出土した柱材で全てである。細片で図化できないものを除き、2点を図示した。

図13-1は陶器である。常滑焼とみられる壺で、頸部付近から胴部中央付近の破片である。胎土は緻密で、胴部上半を中心に自然釉の付着が認められる。13~14世紀頃のものとみられる。

図13-2は柱材である。腐朽が進行していて、加工痕は明瞭ではない。この柱材は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はクリ、暦年較正年代は1065calAD~1155calAD

(66.4%)という結果が出ている(付図参照)。

まとめ

小穴群は、1号建物跡の柱穴と形状や規模、堆積土が近似することから、同様の建物跡の柱穴と考えられる。小穴群の中には、1号建物跡の東西柱列の延長上にまとまって分布する一群があることから、同建物跡と同様の東西棟の建物跡が並存していた可能性がある。

小穴群からは、H 1 P 1 から 13～14世紀頃の中世陶器が出土した。その一方で、G 1 P 21 から出土した柱材の放射性炭素年代測定では、11世紀後半～12世紀中頃との結果が出ている。ただし、柱材については、木の伐採時期や転用の可能性も考慮する必要がある。そのため、小穴群の所属時期は陶器の年代観から13～14世紀頃と考えたい。

(廣川)

第7節 流路跡

流路跡は、出土した遺物から、平安時代に機能していたと考えられる。遺物は、II区南部の1～3号土坑周辺及びE 6グリッドの南東部、III区の2・3号特殊遺構周辺の比較的限られた範囲から出土した。また、II区南部の流路跡の底面では、杭列が確認された。その機能は判然としないが、平安時代に自然流路の一部を何らかの目的で利用したと思われる。

流路跡(図14～17、写真16・17)

流路跡はII区北部の南西部、II区南部、そしてIII区東部で確認した。底面に凹凸が多く認められ、流水により堆積したと考えられる砂礫層が確認されることから自然の流路跡と判断した。検出面はLIV上面である。II区北部では重複する遺構はないが、II区南部の中洲状の箇所に1～3号土坑がある。III区では岸辺付近に2・3号特殊遺構があり、これらの遺構は流路跡の堆積土を除去した段階で検出されたことから、流路跡が完全に埋没する以前に営まれたものと考えられる。

流路跡は北西から南東方向に向かって延びている(図14)。流路跡の規模は、検出された範囲で全長77.6mである。全体の幅がわかる箇所はないが、確認できる範囲での最大幅は24.8mである。深さは、II区南部の中央やや東寄りで最大15mを測る。底面の標高は南東方向に向かって低くなっていく。また、III区の流路跡南西部では、南西方向に延びる支流を確認した(図17)。支流は、検出された範囲での規模は、全長19.5m、幅は60～150cmである。支流の底面の標高は、南西方向に向かって低くなっていく。

堆積土に関しては、II区とIII区とでは堆積状況が異なっており、土層の対応関係は把握できなかった。そのため、別々に層の番号を付けて記録した。

II区では堆積土を8層に大別し、さらに各層を細別した(図15)。 ℓ 1・3・5は粘土質シルト主体の層、 ℓ 2・4は砂礫主体の層で、交互に堆積している。このうち、 ℓ 1・3は東部、 ℓ 2・4・5は西部を中心に堆積している。 ℓ 6・7は東部の岸辺付近から流路跡が一段深くなる箇所に

第3編 日照田遺跡

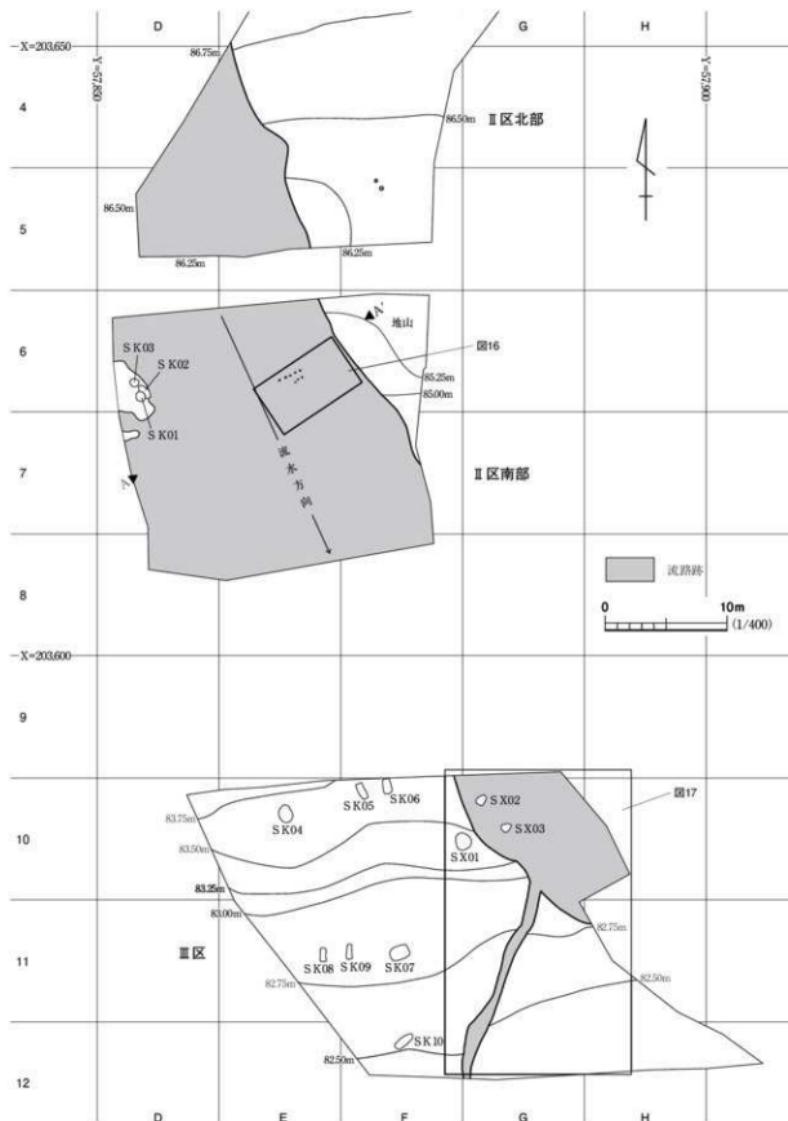
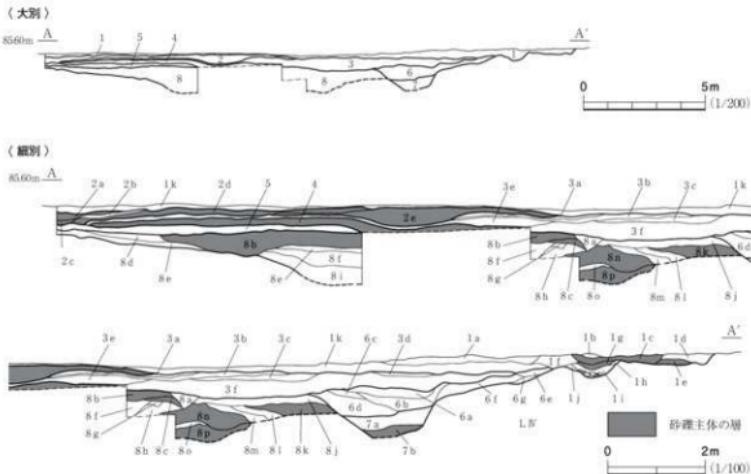


図14 流路跡 (1)



流路跡堆積土

- | | | | | | |
|-----|-------------|------------------------|-------|-------------|------------------------|
| 1 a | 黒褐色シルト | 10YR3/2 | 6 b | 灰褐色粘土質シルト | 10YR4/2 |
| 1 b | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/3 | 6 c | 黒褐色粘土質シルト | 2.5Y3/1 |
| 1 c | 暗いリーブ褐色シルト | 2.5Y3/3 | 6 d | 黒褐色粘土質シルト | (混合む) |
| 1 d | 灰褐色シルト | 10YR4/2 (混合む) | 6 e | 黒褐色シルト | 10YR2/2 (化泥水多量) |
| 1 e | 暗い褐色沙質シルト | 5YR3/2 (混合量) | 6 f | オーリーブ粘土質シルト | 7.5Y3/2 |
| 1 f | 褐色沙質シルト | 10YR3/3 (混合む) | 6 g | 黒褐色粘土質シルト | 2.5Y3/1 |
| 1 g | 褐色砂質 | 10YR4/4 | 7 a | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 (ややグライ化) |
| 1 h | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/2 | 7 b | 灰褐色粘土質シルト | 10YR5/2 (褐色粘土質シルト多量) |
| 1 i | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/1 (オーリーブ黒褐色と互層) | 7 s a | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2 (混合量) |
| 1 j | 黒褐色粘土質シルト | 2.5Y3/1 | 7 s b | 褐色砂質 | 10YR4/4 (褐色粘土質シルト多量) |
| 1 k | 黒褐色シルト | 10YR2/2 (灰褐色シルト含む) | 7 s c | 黒褐色沙質シルト | 10YR2/3 (混合量) |
| 1 l | 灰褐色砂質 | 10YR4/2 | 7 s d | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/3 (混合む) |
| 2 b | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 | 7 s e | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 |
| 2 c | 褐色砂質 | 10YR3/3 | 7 s f | 黑色粘土シルト | 10YR2/1 |
| 2 d | 褐色砂質 | 10YR4/4 | 7 s g | 黒褐色シルト | 10YR2/2 |
| 2 e | 褐色砂質 | 10YR4/4 | 7 s h | オーリーブ砂質シルト | 7.5Y2/2 |
| 3 a | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/3 | 7 s i | 黒褐色土シルト | 2.5Y3/1 |
| 3 b | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 7 s j | 黒褐色土シルト | 10YR3/1 (混合む) |
| 3 c | 黒褐色シルト | 10YR3/2 (混合量) | 7 s k | 褐色砂質 | 10YR4/4 |
| 3 d | オーリーブ粘土質シルト | 5Y3/1 | 7 s l | 黑色泥炭 | N1.5 |
| 3 e | 褐色粘土質シルト | 10YR4/1 (にふい黄褐色砂質状に含む) | 7 s m | 黒褐色土シルト | 10YR3/1 |
| 3 f | 灰褐色粘土質シルト | 10YR4/2 (にふい黄褐色シルト混合む) | 7 s n | オーリーブ砂質 | 7.5Y3/1 |
| 4 a | 褐色砂質 | 10YR3/4 | 7 s o | 灰色シルト | 7.5Y4/1 (黑褐色粘土質シルトと互層) |
| 5 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 | 7 s p | 黑色砂質 | 7.5Y2/4 |
| 6 a | にふい黄褐色粘土シルト | 10YR4/5 (混合量) | | | |

図15 流路跡（2）

堆積している。 ℓ 6は粘土質シルト主体の層である。 ℓ 7は上部がややグライ化した粘土質シルト層(7 a)で下部が砂礫層(7 b)である。 ℓ 8は中央部～西部に堆積する層で、中央部付近では粘土質シルト層と砂礫層が交互に堆積している。これらの層の観察から、中央部～西部(ℓ 8)→東部(ℓ 6・7)→西部(ℓ 4・5)→東部(ℓ 3)→西部(ℓ 2)→東部(ℓ 1)というように、流路の中心がわりながら堆積していったと推測される。

遺物は、II区北部では皆無で、II区南部ではD6グリッドの1～3号土坑周辺、E6グリッドの南東部の比較的限られた範囲から出土した。出土層位を見ると、ℓ1・2・6・7aから多く出土

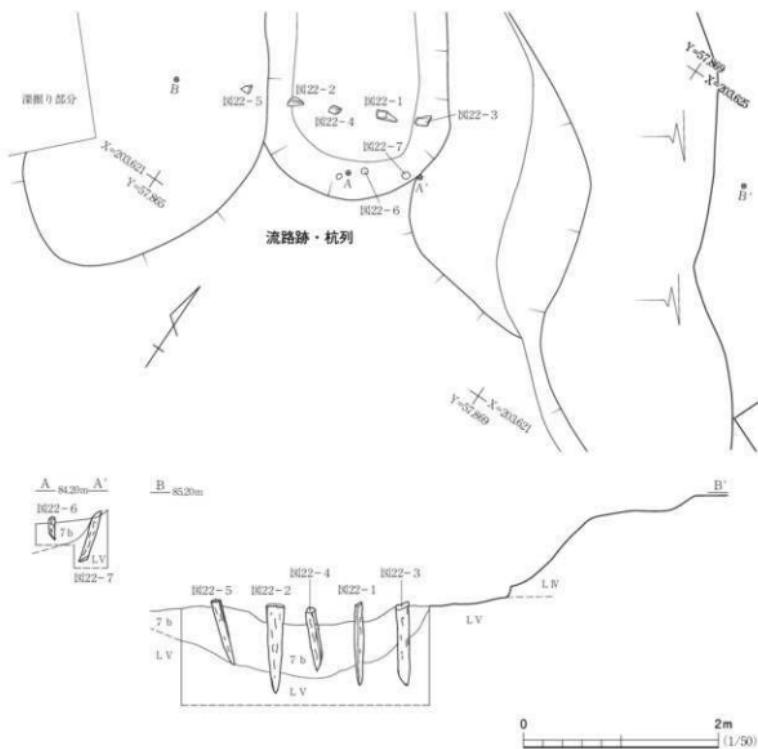


図16 流路跡（3）

した。7 b 層以下は無遺物層である。

Ⅲ区では堆積土を5層に分層した(図17)。 ℓ 1～3はシルト層ないし粘土質シルト層で、2・3号特殊構造周辺から遺物がまとまって出土した。 ℓ 4・5は砂疊層で、無遺物層である。また、Ⅲ区の南西方向に延びる支流の堆積土は、暗褐色ないし黒褐色を呈し、礫を含む特徴がある。

また、Ⅱ区南部では、東部の一段深くなる箇所で杭列を確認した(図16)。杭列は、流路の方向とは直交する形で、北側に5本、南側に2本の計7本並んでいた。この7本の杭は、いずれも7 b 層の上面から打ち込まれていると判断した。北側杭列は、杭の長さは70～90cmで、深いものでは基盤の疊層であるLVまで打ち込まれていた。杭間の間隔は20～35cmで、ほぼ一定間隔で打ち込まれている。なお、杭列の北側には、杭に引っかかって止まったとみられる流木が観察された。

遺 物 (図18～28、写真24～34)

流路跡からは縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石器、木製品、羽口が計4,940点

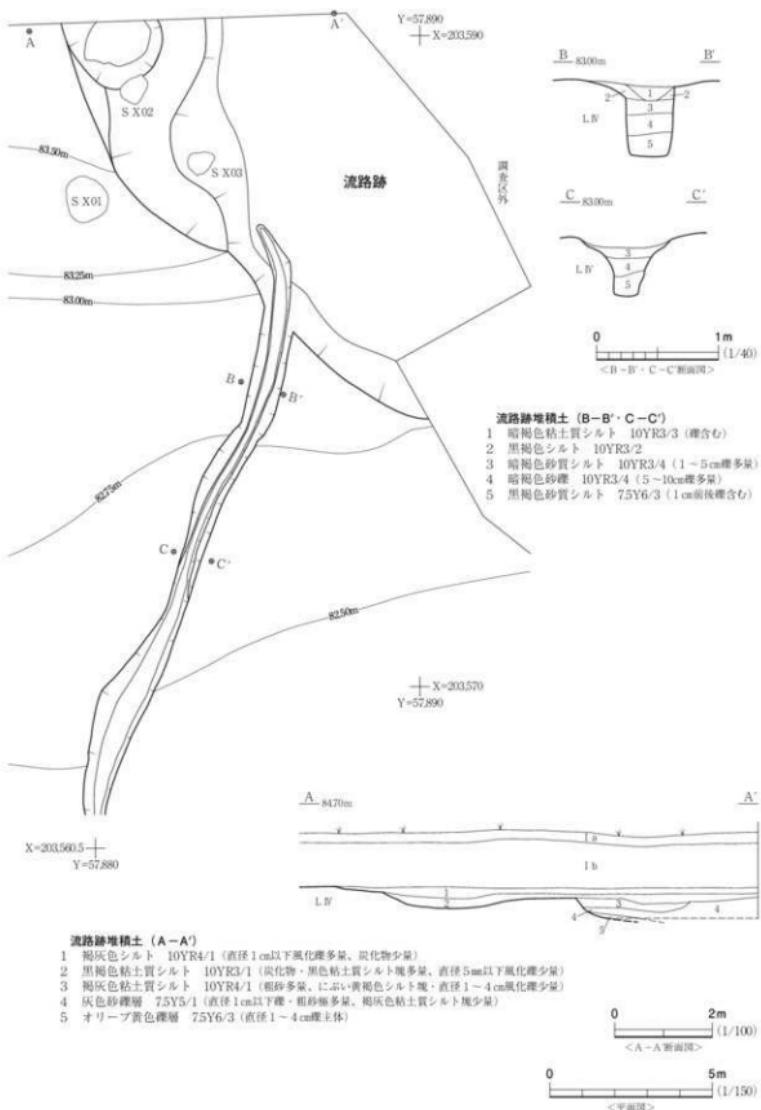


図17 流路跡 (4)

出土したが、主体となるのは平安時代の土師器と須恵器である。器形がわかるものを中心に133点を掲載したが、先述した通り、土層の記録はⅡ区とⅢ区とで別々に作成したため、遺物もⅡ区とⅢ区とに分けて報告する。

Ⅱ区出土遺物

土師器(図18・19、写真24・25)

図18-1～18は杯である。ロクロ成形で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されるものが多いが、2・7ではヘラミガキが観察できなかった。このうち、7は内面にロクロナデの痕跡が明瞭に認められることから、ヘラミガキが施されていないと考えられる。16は外面にも黒色処理とヘラミガキが認められる。内面のヘラミガキは、底部から体部下半まで放射状、体部から口縁部までは横方向で施されているものが多い。

底部の切り離しは、いずれも回転糸切りだが、8は器面の状態が悪いため不明瞭となっている。また、15では切り離しを途中でやり直したためか、最終的な切り離しとは別の痕跡が観察される。切り離した後は、3は体部下端に回転ヘラケズリ、4・13・15は体部下端に手持ちヘラケズリで調整している。

13・17には墨書、18には刻書が見られるが、具体的な文字の判別はできない。

なお、3・9・11は外面が赤色化していて、このうち3は内面の黒色処理も剥落している箇所が多く、11は黒色処理がほぼ剥落している。これらの資料は、二次的に熱を受けた可能性がある。また、6・8は外面に円形の剝離痕があり、焼成不良の可能性がある。

図18-19・20は高台付杯としたが、浅い皿状の器形を呈する可能性もある。いずれも、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。19の杯部の底部には回転糸切り痕が残るが、20はロクロナデにより消されており、切り離しの痕跡は確認できなかった。

図19-1～3は杯または高台付杯の口縁部で、墨書が認められる。2・3は正位に書かれているが、1は横位の可能性がある。いずれも判読できない。

図19-4～6は壺である。4は口縁部に、6は頭部付近に煤が付着している。5は内面にカキ目状のナデが観察される。

須恵器・灰釉陶器(図19・20、写真25・26)

図19-7・9は須恵器の杯または高台付杯である。7は口縁部が外反する器形を呈する。9には墨書があり、文字というよりは何らかの記号かもしれない。図19-8は高台付杯で口縁部及び台部が欠損している。杯部の底面には手持ちヘラケズリが認められる。

図19-10は細片だが、須恵器短頸壺と推定され、外面にはカキ目状のナデが施される。

図19-11は小型の須恵器壺である。口縁部と底部が欠損するが、破片から大きさを復元した。外面には自然釉が付着する。

図19-12・13は須恵器長頸瓶と考えられる。12は破片資料だが径を復元して掲載した。口縁部は受け口状になっている。また、内外面に自然釉が付着する。13は頸部片で、リング状凸帯が僅

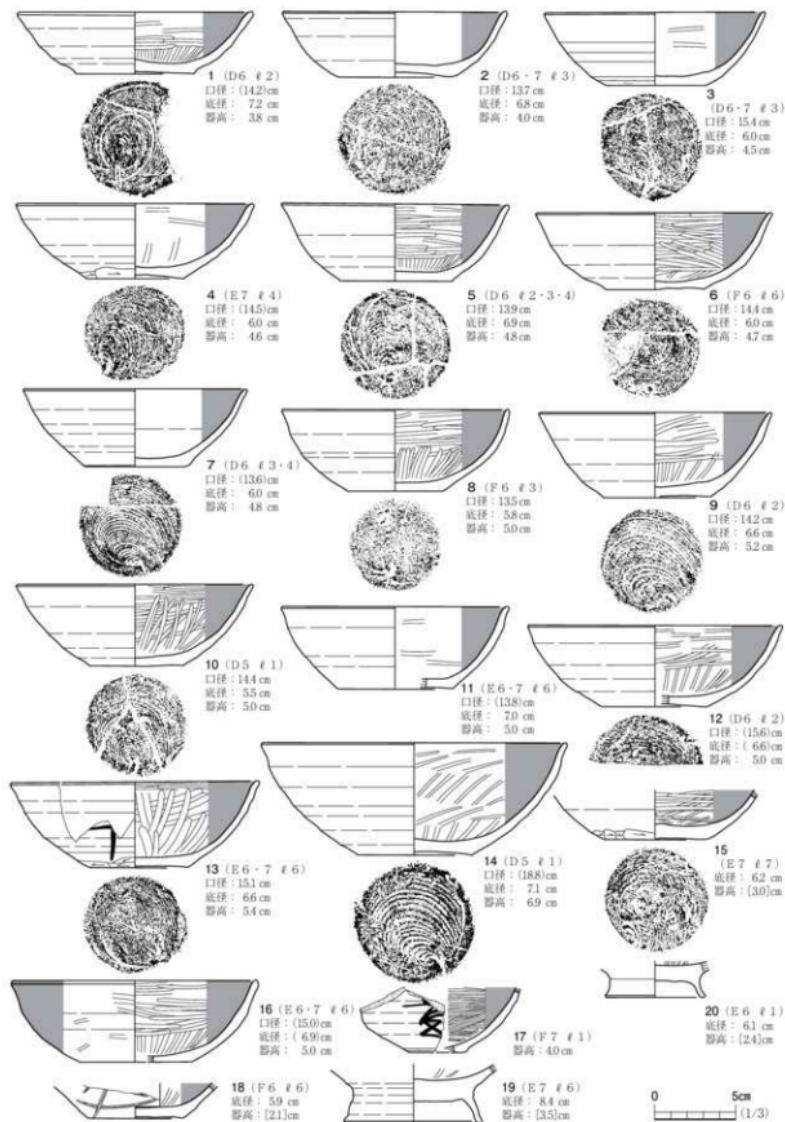


図18 流路跡出土遺物（1）

かに確認できる。

図19-14は須恵器鉢である。口縁部が内湾し、胴部上半に最大径を持つ器形を呈する。この器形から、鉄鉢を模倣したものと思われる。また、口縁端部と外面に自然釉が付着する。

図19-15~17は須恵器壺である。15は口縁部の破片で、横方向の波状文が施されている。内面には自然釉が付着する。16・17は胴部から底部にかけての資料である。16は外面にタタキ目その後にナデが施されるが、一部にヘラケズリも認められる。内面はロクロナデで調整されている。また、底部外面にはハケやタタキ目状の筋が認められる。この調整後に、ナデ調整が施されている。17は外面の胴部下端にのみ手持ちヘラケズリが認められるが、それ以外は底部外面も含め、ナデ

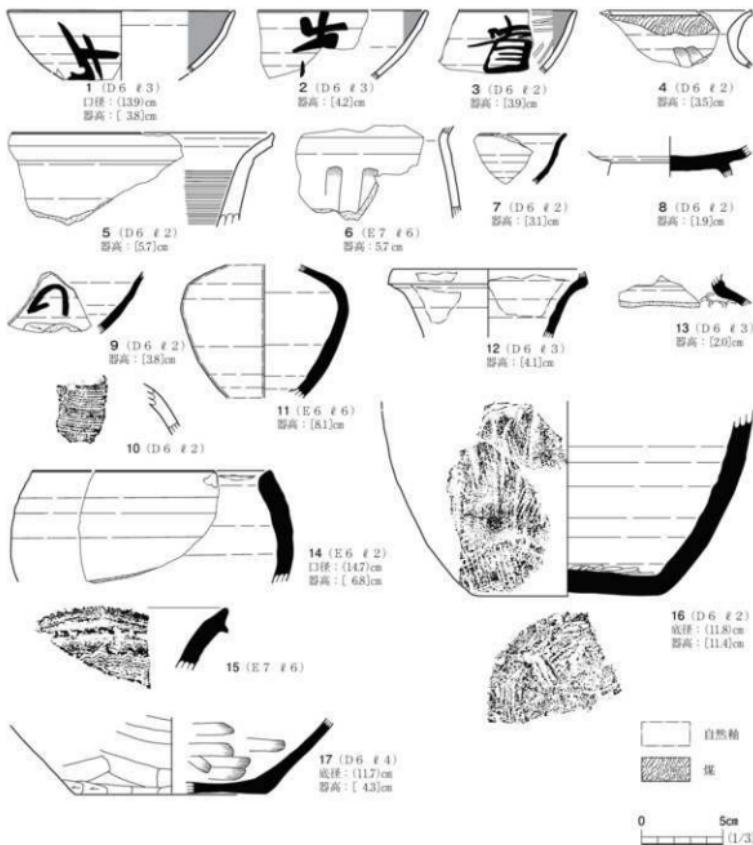


図19 流路跡出土遺物（2）

調整を施している。

図20-1～5は須恵器壺の胴部片をまとめた。いずれも外面には平行タタキ目が認められる。1・4・5は内面がナデにより判然としないが、無文の當て具痕の可能性がある。2の内面の當て具痕は、ナデ調整により不明である。3の内面の當て具痕はナデ調整により部分的にしか残っていないが、長方形格子状文とみられる。なお、3のナデ調整は筋が明瞭であることから、木の小口部分を用いた工具を用いていると推測される。

図20-6は灰釉陶器で、碗または皿の破片とみられる。

縄文土器・石器・木製品(図20～22、写真26～28)

図20-7は縄文時代後期の粗製土器である。櫛歯状工具による条線文が、口唇部直下では横方向に直線的に施されている。これより下では縦方向に弧を描くように施されている。

図20-8・9は石器で、2点とも微細剝離痕を有する剝片である。いずれも縄文時代のものと思われる。

図21-22には木製品をまとめた。図21-1・2は曲物である。2は底板のみだが、1は側板が遺存していた。また、1は側板と底板をサクランの樹皮で固定している。

図21-3は板状の木製品である。先端の形状から楔として使用された可能性もある。図21-4は先端が炭化していることから、火付け木と考えている。

図21-5～7は角材で、腐食が進行していて表面に加工痕があるかは判然としない。

図21-8はミカン割材である。

図22は、Ⅱ区南部で確認した杭列に使用されていた杭である。同図1～5は北側の杭で、全体的に手斧による加工痕が認められる。一方、南側の杭列の6・7は、先端部以外は整形されていない。なお、1・3の2点については、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、いずれもカエデ属、曆年較正年代は、1は776calAD - 904calAD (70.8%)、3は885calAD - 985calAD (95.4%)という結果が出ている(付録参照)。

III区出土遺物

土師器(図23～25、写真29～32)

図23には杯をまとめた。いずれもロクロ成形で、内面にはヘラミガキと黒色処理が認められる。ヘラミガキは、3・4・8・10・11・13の底部から体部下半にかけて放射状に施されている。1・3・4・12・13には、外面の体部下端に手持ちヘラケズリが認められる。

底部の切り離しは、回転糸切りのものがほとんどである。そして、回転糸切り痕が残る資料の底部外面は、3・4が切り離し後にナデまたはヘラケズリで調整されている以外は無調整である。一方、1は静止糸切りで、切り離し後にナデ調整が施されている。

9では、体部に墨書きが観察されたが、何の文字かは不明である。また、15は底部外面にヘラ記号が施されている。

なお、1・2・12では内面の黒色処理が剥落している。1は内面の底部中心、2・12は全体的

第3編 日照田遺跡

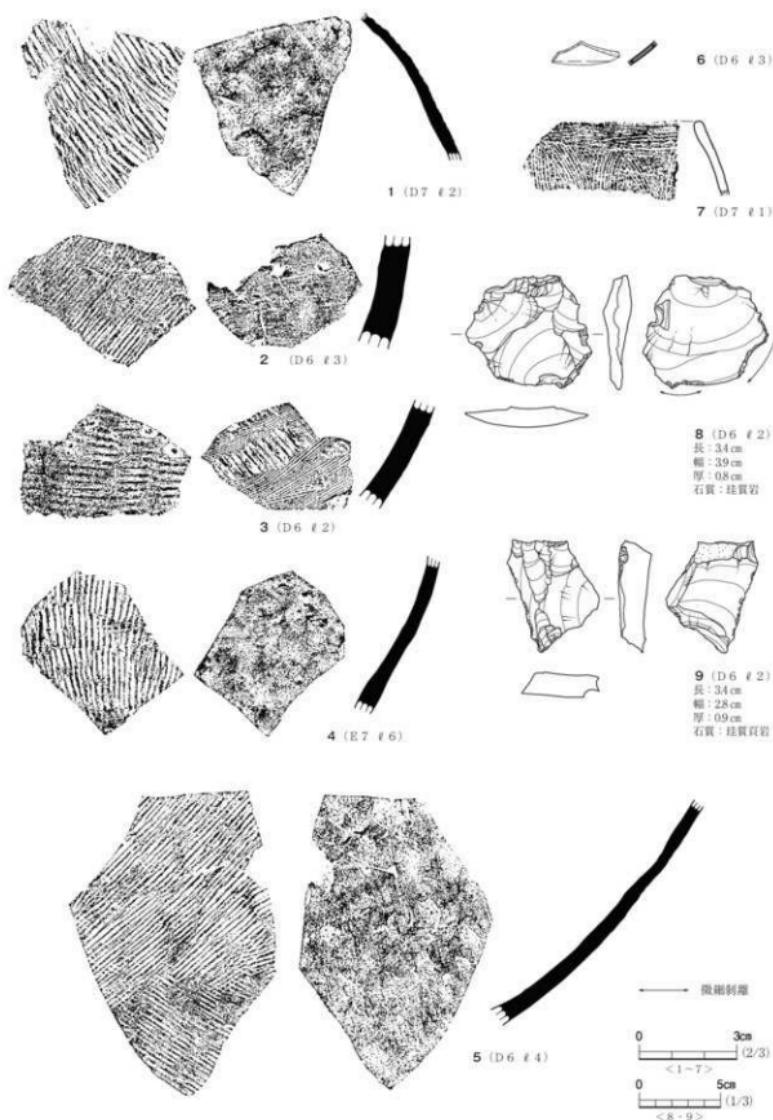


図20 流路跡出土遺物（3）

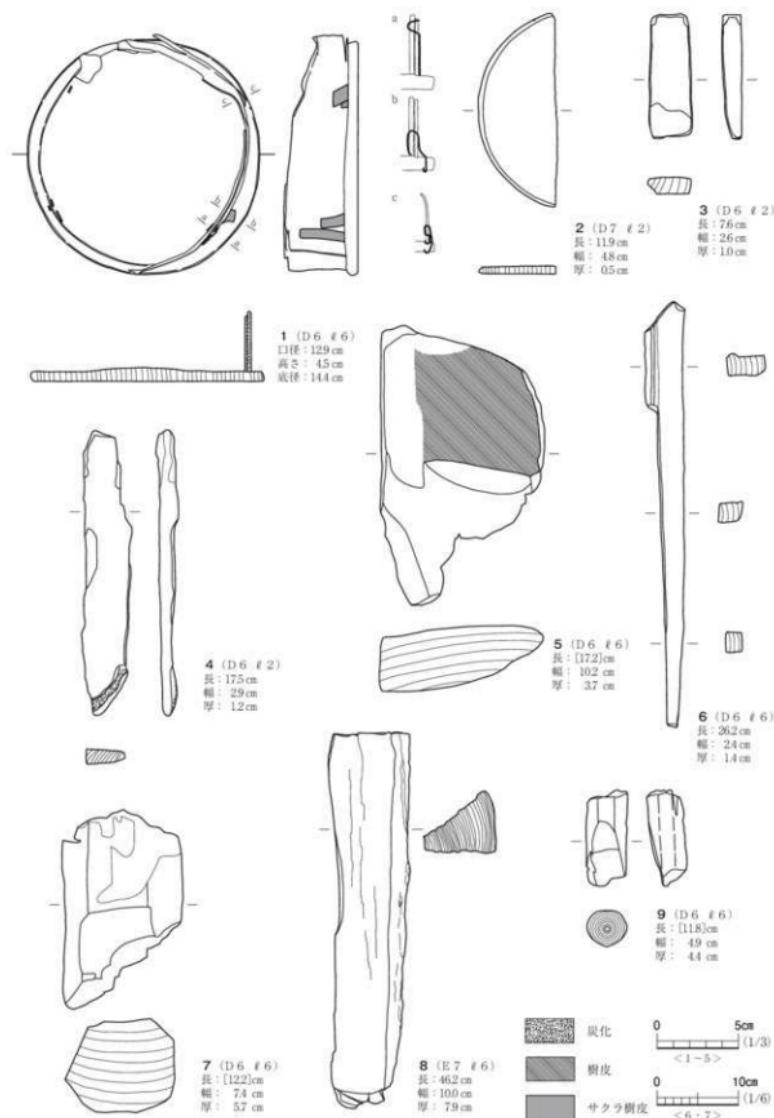


図21 流路跡出土遺物（4）

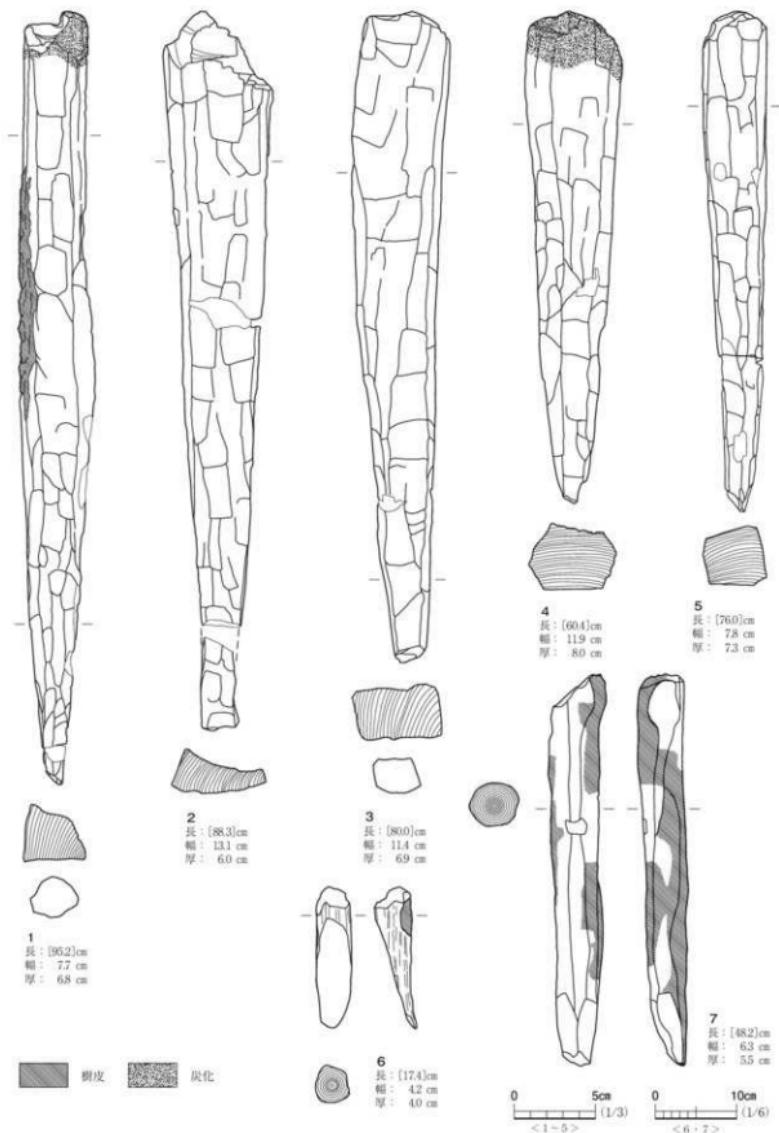


図22 流路跡出土遺物（5）

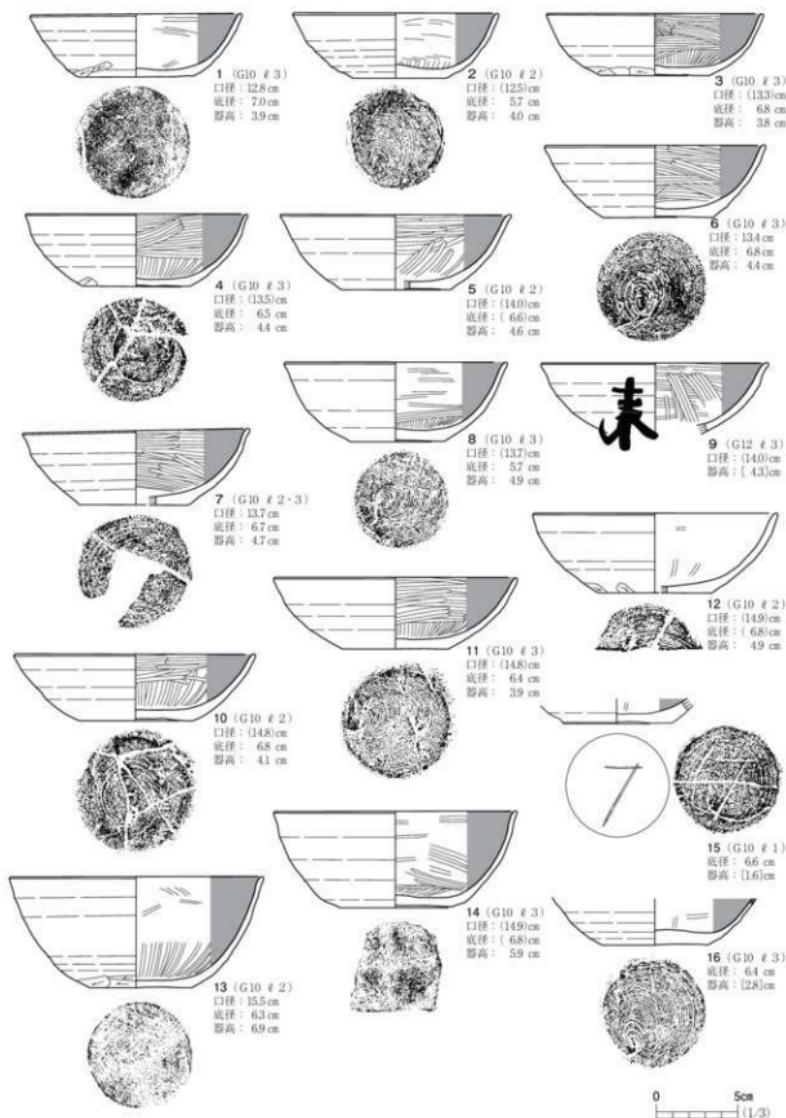


図23 流路跡出土遺物（6）

に剥落している。また、2では底部内面には器面が剥離した痕跡がある。13は口縁部付近や内面に器面が赤色化した箇所があり、熱を受けたか焼成不良と考えられる。

図24-1～5は杯または高台付杯の破片である。外面の口縁部～体部に墨書が観察された。文字が判読できるものはない。

図24-6は器壁が薄く、大型の杯または小型の鉢と推定する。内面は横方向の丁寧なヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

図24-7はほぼ完形に復元できた高台付杯である。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されているが、接合した破片の一つだけが黒色処理が完全に剥落していている。割れた後、この破片だけ二次的に熱を受けたものと思われる。

図24-8は、一般的に認められる高台付杯と比べて浅い器形を呈することから皿としておく。福島県内ではあまり類例のない器形である。高台部のつくり方は高台付杯と変わらない。高台が付く皿は、灰釉陶器や綠釉陶器等で見られることから、施釉陶器模倣のものと考えられる。図24-9・10は破片だが、8と同一の器形のものだろう。

図24-11は皿または高台付杯の高台部である。高台部だけでは、判別は難しいが、図24-8の高台部とつくりが近似する。

図24-12～16はロクロ成形の壺である。12・13は小型の壺で、どちらも底部を欠いている。12では胴部下端に粘土を付け足している状況が観察された。14～16は長胴壺で、15・16では胴部下半を縱方向の手持ちヘラケズリやナデで調整している。

図25-1は内面黒色処理が施された壺である。外面は、胴部上半にカキ目状のナデが施され、胴部下半は手持ちヘラケズリで調整されている。内面のヘラミガキは、胴部上半は横方向、胴部下半は横や斜め方向に施されている。

図25-2は鉢とした。口縁部が短く、端部が丸みを帯びている。同図1と調整の施し方が似ているが、カキ目状のナデは認められなかった。

図25-3・4は壺または鉢の底部である。外面の底部～体部下端にかけての調整は、3が手持ちヘラケズリ、4が回転ヘラケズリである。なお、3の底部外面には、何らかの敷物に置いた際に付いたとみられる筋が観察できた。

図25-5は小片だが、外面にタタキ目があり、壺と考えている。図25-6は非ロクロ成形の小型壺の底部で、底面には木葉痕がある。

図25-7は、瓶と推定している。把手部分が剥離したとみられる痕跡がある。また、外面は赤くなっている、色を塗った可能性がある。

図25-8・9は鍋とした。どちらも頸部で外側に強く屈曲し、口縁部は受け口状になっている。8は胴部下端を中心に手持ちヘラケズリで調整している。9は外面にはロクロナデで消され切っていないタタキ目が観察された。また、ロクロナデの後に、胴部中央～下端にかけて手持ちヘラケズリで調整している。

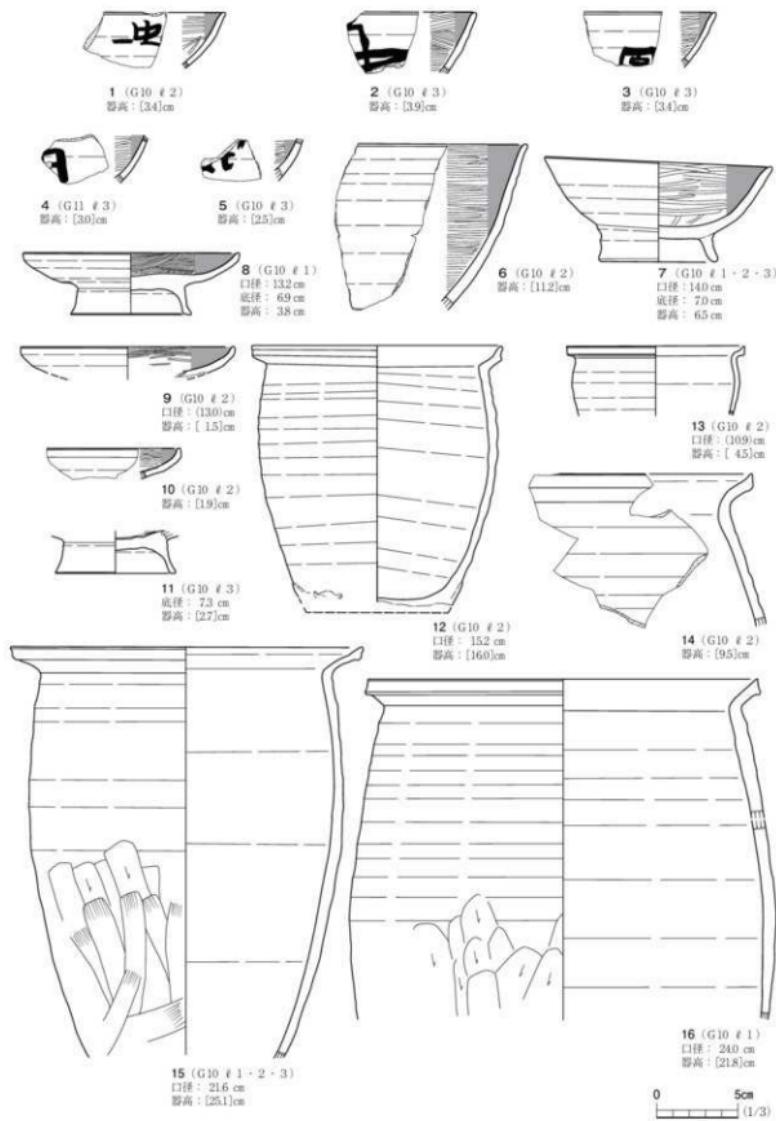


図24 流路跡出土遺物 (7)

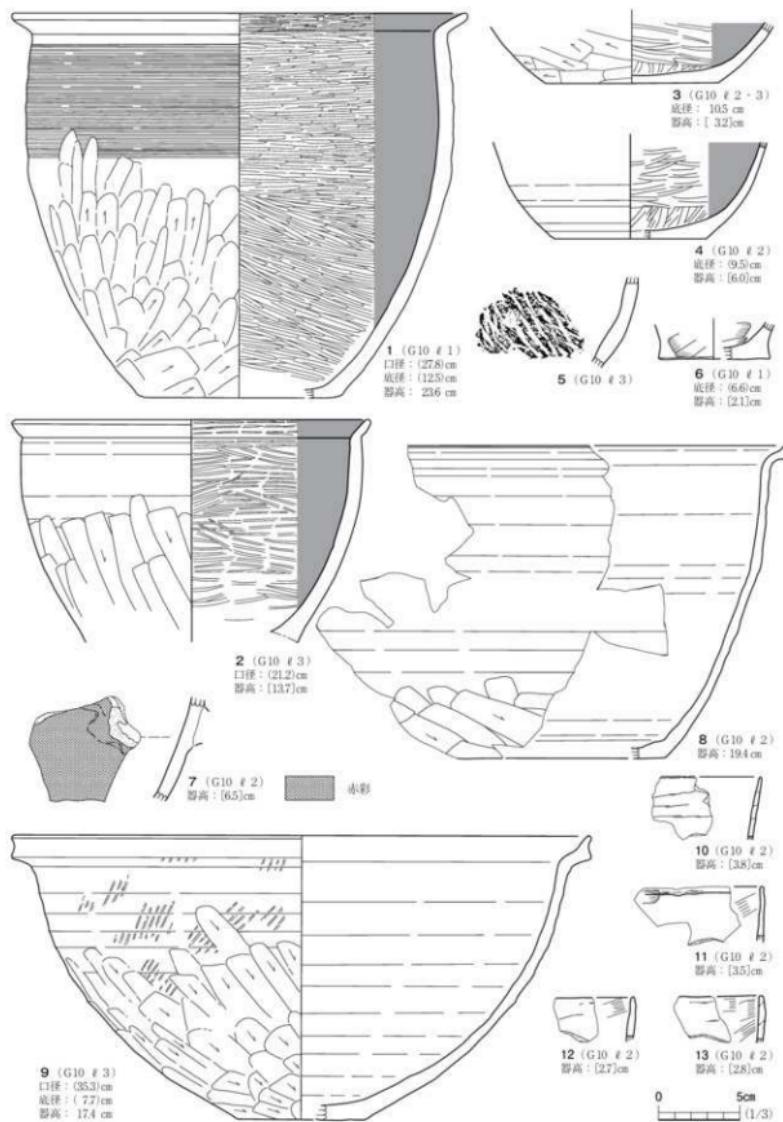


図25 流路跡出土物 (8)

図25-10～13は筒形土器である。口縁部付近の破片を中心に掲載した。外面には積み上げ痕が残るものがあるが、内面は丁寧にナデ調整されている。

須恵器(図26・27、写真33・34)

図26-1・2・4～7は杯である。1は外面の底部～体部下端を手持ちヘラケズリで調整している。4～7は底部のみの資料で、底部切り離しはいずれも回転糸切りで、切り離し後の調整は観察されない。

図26-3は杯または高台付杯で、外面に墨書があるが、文字の判読はできない。

図26-8は壺とみられる。小片だが、復元して掲載した。外面の頸部付近から胴部上半にかけてカキ目状のナデが認められる。

図26-9・10・12～14、図27-1～3は壺である。そのうち、図26-9・10・12は口縁部が残る資料である。図26-11は壺または広口瓶だろう。

図26-9は破片から径を復元した。外面は肩のあたりまで、内面は口縁部に自然釉が付着している。外面のタタキ目は自然釉が付着しているため明瞭ではない。内面はナデ調整により、当て具痕は不明瞭である。僅かに長方形格子状文のような痕跡が観察されるが判然としない。

図26-10は胴部外面に平行タタキ目が見られるが、内面は丁寧にナデ調整が施されているため当て具痕は確認できない。

図26-11は口縁部が強く外反する。頸部は平行タタキの後にナデ調整が施されている。

図26-12は、外面は口縁端部と頸部、内面は口縁部全体に自然釉が付着する。

図26-13は平行タタキ目が残るが、一部がナデ調整により消されている。また、内面には自然釉が付着している。

図26-14、図27-1は頸部付近から胴部上半が残るものである。胴部外面はどちらも平行タタキ目があるが、図26-14は縱方向、図27-1は横方向となっている。また、図26-14の内面は丁寧にナデ調整されていて、当て具痕は見られない。図27-1もナデ調整により当て具痕の種類は不明だが、工具を当てた丸い痕跡が重なり合っている様子が観察された。この工具の痕跡は、重なり具合から図上で左から右に徐々に移動していると判断されるため、須恵器をつくる工人はタタキ成形の作業を時計回りの方向で行っていたと考えられる。

図27-2は胴部下半の破片で、外面には平行タタキ目が観察される。内面の当て具痕は長方形格子状文だが、ナデ調整で部分的に消されている。

図27-3は、器面の色調に赤みがあり、本遺跡出土の他の須恵器とは異なっている。内外面ともにロクロナデのみ観察される。器種は、瓶類の可能性もある。

図27-4は底部片である。外面は平行タタキ目が残る。内面には当て具痕は見られず、ナデ調整のみである。また、外面と内面に自然釉が付着する。

縄文土器・土製品・石器・木製品(図28、写真33・34)

図28-1・2は縄文土器で、1は口縁部、2は体部の破片である。1は、2条の横方向の沈線

第3編 日照田遺跡

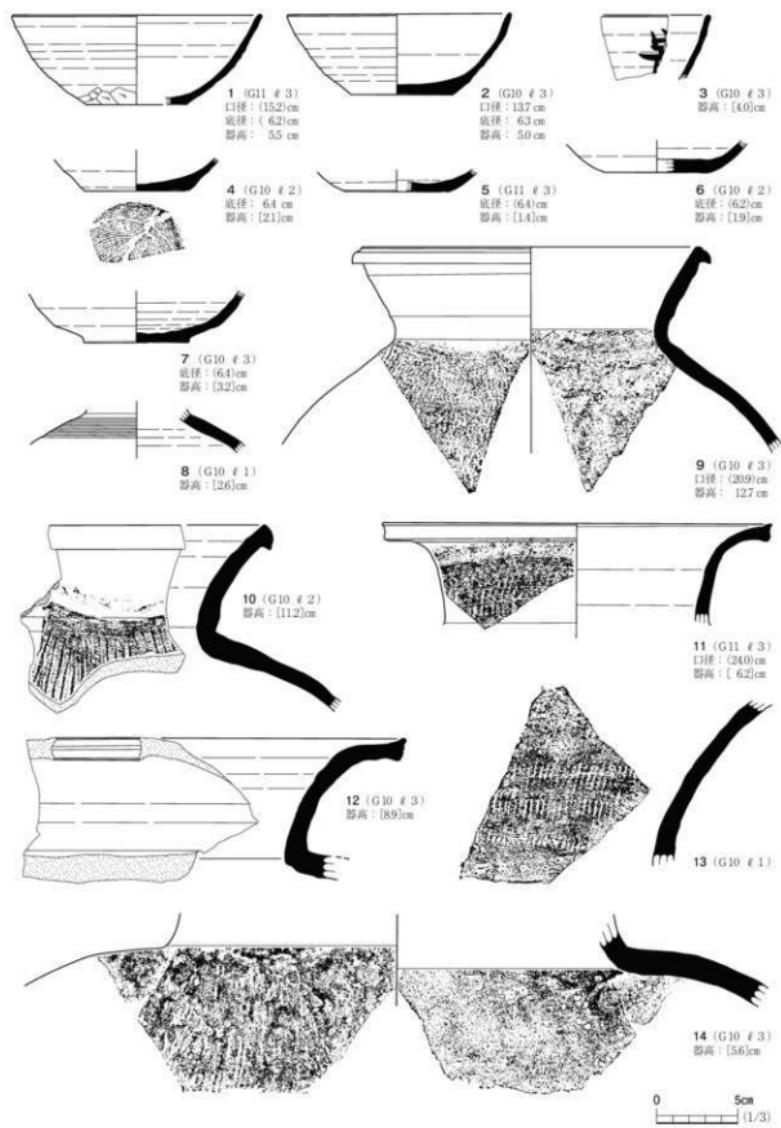


図26 流路跡出土遺物 (9)

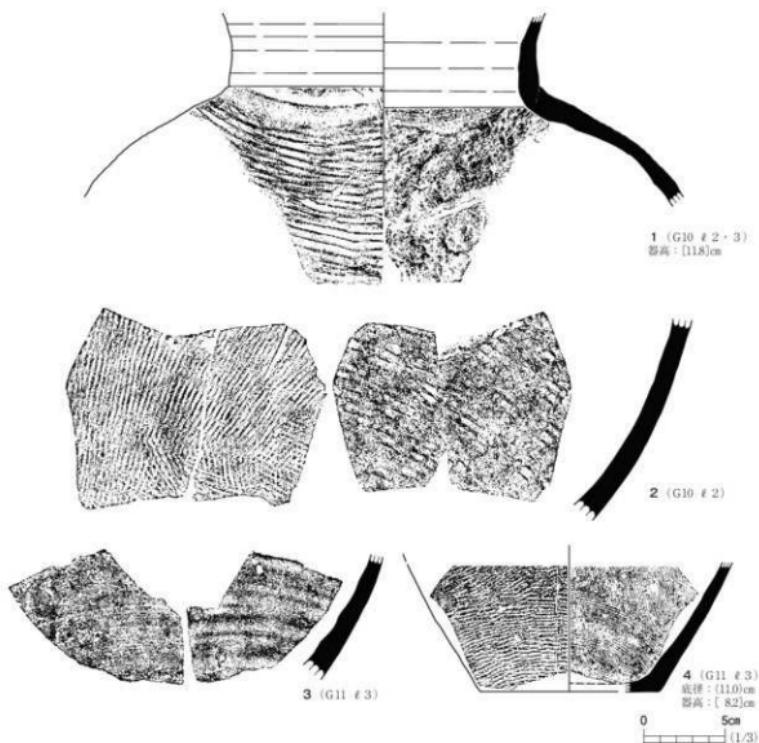


図27 流路跡出土遺物（10）

で区画され、口縁部に隆起する箇所がある。2は地文のみ確認できる。1は後期のものと考えられるが、2は断定できない。

図28-3は球状土製品で、突起が一つだけある。全面黒色処理が施されているが、ヘラミガキは見られない。時期・用途ともに不明である。

図28-4は羽口で、吸気部が欠損している。先端部に溶着済が確認できる。流路跡の岸辺付近に立地する2号特殊遺構に廃棄された羽口が流出したものとみられる。

図28-5は頁岩製の石核である。端部に微細な剥離が見られる箇所があり、剥片採取後に道具として利用した可能性もある。縄文時代のものと推定される。

図28-6・7は木製品で、加工痕が見られる部材である。6は板状の角材、7は両端に加工痕が見られる。

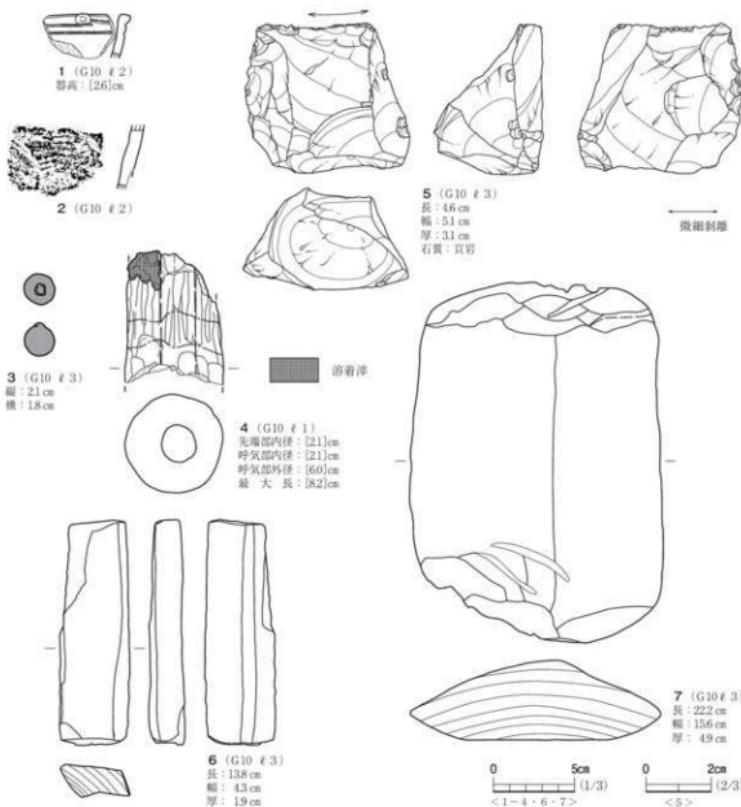


図28 流路跡出土遺物（11）

まとめ

流路跡から出土した遺物は、平安時代の土師器・須恵器を中心である。杯は9世紀後半のものが多いが、前半から中葉頃のものも含まれている。以上のことから、流路として機能していた時期は平安時代と推測される。流路底面で検出した杭列の放射性炭素年代測定結果も、出土遺物の年代観と大きな矛盾は見られない。また、人工的に打ち込まれた杭列があることから、平安時代に何らかの目的で自然流路の一部を利用したとみられるが、機能を特定する所見は得られなかった。

なお、流路跡とその周辺の遺構から平安時代の遺物が多く出土したが、調査区内では供給源となる竪穴住居跡等の遺構が確認されていないことから、調査区外に集落等の存在が想定される。

(鶴見)

第3章 総括

今回の調査では、掘立柱建物跡1棟、土坑13基、溝跡1条、特殊遺構3基、小穴52基、流路跡1条を検出した。これらは縄文時代、平安時代、中世のものと考えられる。

縄文時代

縄文時代の遺構は土坑8基で、いずれも落し穴と考えられる。平面形が長方形、底面に逆茂木を刺したとみられる小さい穴が確認されることが多い。隣接する館ノ前遺跡(本書第4編)や、東へ約200mの位置にある川原田遺跡(福島県教育委員会2018)でも落し穴が確認されているが、これらの遺跡は立地する地形が同じ低位段丘で、山裾に沿う様に落し穴が点在している。縄文時代には、周辺一帯が狩場として利用されていたようである。

平安時代

平安時代の所産としたのは、土坑3基、特殊遺構3基、流路跡1条である。土坑、特殊遺構とともに、流路跡の岸辺付近で確認されていて、流路とその周辺を利用していた可能性がある。

2号特殊遺構からは、羽口と鉢渋がまとめて出土した。出土した羽口は口径が小さく、楕円形渋が出土していることから見ても、これらの資料は鍛冶に伴うものと考えられる。ただし、2号特殊遺構は被熱痕跡がなく、不要となった羽口等を廃棄した遺構と判断した。なお、今回の調査範囲では、鍛冶炉は確認されなかつたが、遺跡周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い。

流路跡では、Ⅱ区南部で流路跡の底面に打ち込まれた杭列を確認した。自然の流路に一部手を加えて、利用していたと推定される。3号特殊遺構は、板材を杭で固定した遺構で、その立地から流路跡に伴う何らかの施設であった可能性もある。

流路跡及びその周辺の遺構からは、平安時代の土器・木製品等が出土した。最も多いのが土師器の供膳具で、特に杯が出土遺物の大半を占める。杯は、9世紀後半を中心とする時期のものが多い。また、施釉陶器の皿を模倣したと思われる土師器も出土した。土師器では例外的な器形と考えられるが、高台部のつくりは土師器高台付杯とあまり変わらないとみられ、高台部だけが出土した場合の識別は難しい。

土師器の煮炊具は杯に比べ少ないが、壺と鍋が出土している。古代の鍋は、周辺地域では東北北部や北陸地方で出土事例がある。福島県では会津を中心に出土するが、中通りでの事例は極めて少ない。また、会津では煮炊具として、タタキ調整の長胴壺も特徴的に確認されており、これらは北陸地方の影響を受けた土器のつくり方と考えられている。タタキ調整の長胴壺は、本遺跡ではその可能性のある小片しか見つかなかったが、隣接する川原田遺跡で全体の形状がわかる資料が出土している。このことから、現在の桑折町松原地区では、古代において北陸地方の影響を受けた会津と同じ特徴の煮炊具のセットが確認されたと評価できよう。

流路跡からは、灰釉陶器や鉄鉢模倣の須恵器等、一般集落ではあまり見られない遺物も出土している。特に、灰釉陶器・綠釉陶器などの施釉陶器は、東北地方では官衙やその関連遺跡、寺院跡等から出土する事例が多い。本遺跡周辺では、川原田遺跡でも灰釉陶器・綠釉陶器が見つかっている。また、土師器耳皿も出土しているが、耳皿も官衙関連遺跡や拠点的な集落からの出土事例が多いことが指摘されている（伊東2000）。川原田遺跡では、廬を持つ可能性がある建物跡も見つかっていて、一般集落とは異なる様相を見せている。このような施釉陶器等の遺物が出土する遺跡が近接していることは注目できる。

上記のような特殊な遺物が出土する背景を考えるために、周辺の遺跡を確認しておきたい。福島盆地北部では、福島市飯坂から桑折町を経て、国見町に至るまで、盆地西部の山麓に沿って古代の寺院跡や須恵器窯跡が点在している（図29）。特に、本遺跡の周辺を見ると、南では桑折町成田窯跡、成田前窯跡、伊達市伊達窯跡、瀬戸場窯跡等の奈良・平安時代の須恵器窯跡が存在している。北には平沢寺跡、花水寺跡という平安時代の寺院跡があり、西にも福島市西原魔寺跡、高寺魔寺跡、平野魔寺跡等の古代寺院がある。本遺跡からは少し離れるが、東には国見町徳江魔寺や大木戸窯跡があり、古代の寺院跡・窯跡として知られている。本遺跡を中心見た場合、半径3km圏内に多くの窯跡や寺院跡が集中していることがわかる。

古代においては、福島盆地内には信夫郡、伊達郡という2つの郡が存在していたとされる。その内、伊達郡は10世紀初頭頃に信夫郡から伊達郷、静戸郷、鎌山郷を分割して成立したものと考えられている。この中で、阿武隈川西岸城にあたる伊達郷は、現在の福島市飯坂町、伊達市の旧伊達町周辺、桑折町、国見町の範囲に相当する。この範囲は、前述の寺院や窯跡の分布とほぼ一致している。これらの遺跡は限られた発掘調査しか行われていないが、現状では10世紀以降に下る古代の遺物は確認されていない。少なくとも古代における伊達郷に所在する遺跡であり、関連も想定しておくべきだろう。

このような寺院や窯跡の周辺には、公的な施設や集落等も多数存在していたと推定され、川原田遺跡で確認された建物跡もその一部と考えられる。本遺跡では、掘立柱建物跡や堅穴住居跡は確認されていないが、今回の調査区周辺に存在している可能性は高い。流路跡から灰釉陶器が出土したこと、川原田遺跡が近接していることを踏まえると、未調査箇所にあるのは一般集落とは異なる性格のものという可能性もあるだろう。

中世

中世の遺構は、掘立柱建物跡1棟の他、II区北部で確認された小穴群も中世の所産と考えられる。小穴群は、掘立柱建物跡や柱列跡の柱穴とみられ、本遺跡には複数棟の建物やそれに伴う柵等があったと推測される。小穴からは常滑焼とみられる甕が出土していて、13～14世紀頃のものと判断している。

本遺跡と関連が想定される遺跡として、本遺跡の北側約200mに松原館跡、西側約600mに松原下館跡という、中世城館跡がある。松原館跡では、一部で発掘調査が行われていて、掘立柱建物跡



図29 日照田遺跡周辺の須恵器窯跡・古寺跡

や平場等が確認された。出土遺物はⅠ期(13世紀後半～14世紀)、Ⅱ期(14世紀末～15世紀初頭)、Ⅲ期(16世紀)の3時期に分けられている(桑折町教育委員会2003)。このうち、Ⅰ期が日照田遺跡の年代と近い。

松原館跡や松原下館跡は、飯坂から桑折へと通じる街道筋に面していたと考えられていて、街道は松原館跡の南側を走る県道124号に近いルートであったと推定されている。日照田遺跡で確認された中世の遺構は、県道124号からは100m程と近い位置にある。本遺跡の建物跡の立地は、街道を意識している可能性が高く、街道筋に面した屋敷地あるいは何らかの施設であったと想定される。

(鶴 見)

引用・参考文献

- 伊東正人 2000 「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究』X V 日本中世土器研究会
桑折町教育委員会 2003 『松原館跡発掘調査報告』桑折町埋蔵文化財調査報告書 16
福島県教育委員会 2018 「第3編 川原田遺跡」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6』福島県文化財調査報告書第523集

第4編 たて の まえ 館ノ前遺跡

遺跡記号	QR-T NM
所在地	伊達郡桑折町大字松原字館ノ前
時代・種類	縄文時代の狩場、平安時代の流路 跡
調査期間	平成29年4月18日～5月24日 平成29年8月28日～9月15日
調査員	丹治篤嘉・渡邊春喜・廣川紀子・ 草野潤平・枝松雄一郎・鶴見諒平

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

館ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字館ノ前に所在する。東北本線の伊達駅から、北に約1kmのところに位置する。松原地区は、桑折町の南西端に位置し、福島市飯坂町湯野地区と接している。遺跡より北側の丘陵裾部には、飯坂町方面から桑折町市街地へ通じる県道124号線が東西方向に延びている。遺跡の位置する箇所は、一般国道115号相馬福島道路と東北自動車道が交差するジャンクション予定地となっており、南東側に隣接して東北自動車道が走っている。遺跡のさらに東方には、東北新幹線や東北本線が縱走する。

遺跡は、標高85mほどの低位段丘上に立地する。現況では、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた緩やかな傾斜地で、果樹栽培等の耕作地となっている。同じ段丘上には、平成



図1 調査区位置図

28年度に調査が行われた川原田遺跡や、平成29年度に並行して調査が行われた日照田遺跡(本書第3編)が存在する。また、遺跡より北側の丘陵地上には、松原館跡、松原下館跡が立地する。

(廣川)

第2節 調査経過

館ノ前遺跡の調査は、4月3日付で福島県教育委員会より1,600m²の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ38日である。工事計画に沿って優先度の高い館ノ前遺跡I区(900m²)の調査から着手し、同じく優先度の高い日照田遺跡I区(100m²)とともに先行して現地引き渡しを行った。館ノ前遺跡II区(700m²)の調査は、優先度の高い日照田遺跡II・III区(2,700m²)の調査終了後に実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

4月第4週：18日(火)から調査区の縄張り等の作業に入る。21日(金)には、プレハブ・仮設トイレを設置する。

4月第5週：基準杭打設の準備作業等を行う。

5月第1週：1日(月)に作業員の雇用を開始する。2日(火)から遺構検出作業とともに検出された土坑数基の精査に入る。

5月第2週：遺構精査を継続する。9日(火)から基本土層図の作成、地形測量を行う。

5月第3週：降雨により調査区が冠水。復旧作業を行った後、調査区全景写真を撮影するための準備作業を行う。

5月第4週：調査区内の清掃を行って、23日(火)に調査区全景写真を撮影する。24日(水)に器材類を撤収して館ノ前遺跡I区(900m²)の調査を終了する。

5月第5週：29日(月)に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、館ノ前遺跡I区(900m²)について現地引き渡しを行った。

8月第5週：28日(月)に館ノ前遺跡II区(700m²)の調査を開始。29日(火)から遺構検出作業とともに検出された1号溝跡、流路跡の一部掘り下げを行う。

9月第2週：遺構精査を継続する。7日(木)に地形測量を行う。

9月第3週：11日(月)に1号溝跡、1号特殊遺構を完掘する。12日(火)に基本土層図の作成、13日(水)に流路跡の断面図作成、14日(木)に調査区全景写真の撮影を行った。15日(金)に器材類を撤収し、館ノ前遺跡の全調査を終了した。

10月第1週：2日(月)に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、館ノ前遺跡II区(700m²)について現地引き渡しを行った。

(廣川)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

館ノ前遺跡とその周辺は、北から南へ緩やかに傾斜する地形で、水田や果樹園として利用されている。今回の調査箇所は2箇所に分かれており、東からI区、II区とした。

検出された遺構は、土坑4基、溝跡2条、特殊遺構1基、そして流路跡である。それらの時期は、概ね縄文時代、平安時代以降、中世以前のものと考えられる。

基本土層（図2・3、写真3・4）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～Vの5層に分層した。

L Iは、表土及び盛土層である。表土がL I a、I区の盛土がL I b、II区の盛土がL I c・dと細分した。いずれの調査区でも、果樹園造成時の盛土が厚く堆積する様子が認められる。

L IIは、I区南部でのみ確認される褐灰色シルト層で、層厚は10cm程度である。I区北部及びII区では、果樹造成時の開削によりL IIは失われていた。

L IIIは、にぶい黄褐色シルトを基調とした層である。基盤層に起因する風化礫を多く含むため、基盤層が再堆積したものと考えている。色調や含有物の違いにより、I区ではL III a、II区ではL III b～L III dと細分した。I区ではL III aの上面、II区ではL III bの上面が遺構検出面である。

L IVは、I区でのみ確認される黒褐色シルト層である。層厚は20～30cmで、L IIIが堆積する以前の旧表土層である。

L Vは、調査区全域で確認される基盤層である。

（廣川）

第2節 土 坑

土坑は、4基確認した。その内の2基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴とみられる。残りの2基は中世以前のものと考えられるが、具体的な性格等は不明である。

1号土坑 SK01（図4、写真5）

本遺構は、I区南部のK 3グリッドに位置する土坑である。南西に3mには2号土坑がある。重複する遺構はない。表土除去の段階で遺構上部を誤って掘削してしまったため、検出面はL V aとなっているが、本来の検出面はL III a上面と考えられる。

第4編 館ノ前遺跡



図2 I区遺構配置図・基本土層

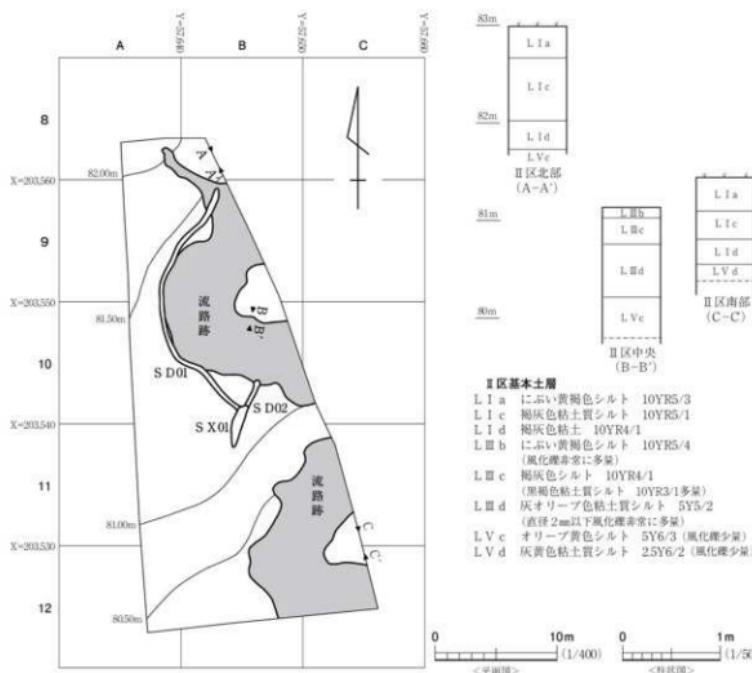


図3 II区遺構配置図・基本土層

平面形は長方形で、規模は長軸130cm、短軸58cmである。検出面からの深さは16cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は黒褐色粘土質シルトで、含有物の違いにより2層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平面形態の特徴から縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期については不明である。

(廣川)

2号土坑 SK 02 (図4、写真5)

本遺構は、I区南部のJ3グリッドに位置する土坑である。北東に3mには1号土坑がある。検出面はL III a上面で、重複する遺構はない。

平面形は四隅が丸い長方形を基調とするが、検出面ではやや不整形となっている。検出面での大きさは長軸139cm、短軸68cm、底面では長軸92cm、短軸31cmと上部から下部に向かって狭くなっていく。検出面からの深さは87cmを測り、遺存状態は良好である。断面形は、底部から中央付近

まではまっすぐに立ち上がる。中央付近から検出面にかけては、西壁は外側に向かって開くが、東壁ではまっすぐに近い形状である。

堆積土は6層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1～3は、周囲から流入したような堆積状況が顕著に認められた。 ℓ 5は、LV aに起因する壁の崩落土と考えられる。なお、堆積土のうち、 ℓ 3・4はL IIに近似した特徴を示している。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平面形や断面形の特徴から、縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期については不明である。

(廣川)

3号土坑 SK 03(図4、写真5)

本遺構は、I区中央付近のL 3グリッドに位置する土坑である。検出面はLV a上面だが、1号土坑と同様、本来の検出面はL III a上面と考えられる。重複する遺構はない。

平面形はやや歪んだ円形で、径は58cm、検出面からの深さは23cmを測る。遺構の断面形は、播

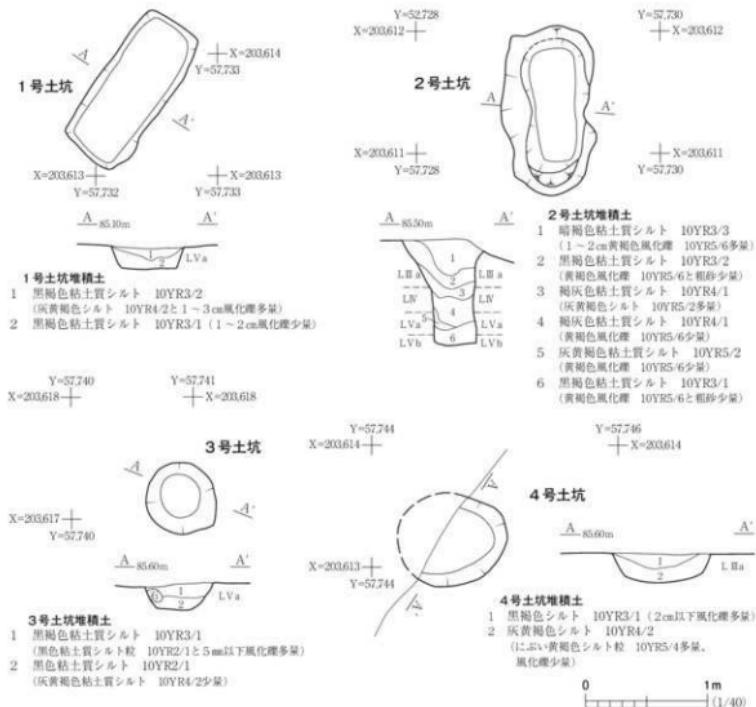


図4 1～4号土坑

鉢形である。

堆積土は黒褐色粘土質シルトで、含有物の違いにより2層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中からは、土器等の遺物の出土はなかったが、ℓ1から木片が1点出土した。この木片は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はクリまたはコナラ属コナラ節、曆年較正年代は1205calAD - 1255calAD (64.2%)という結果が出ている(付編参照)。

本遺構では、木片の放射性炭素年代測定の結果では、13世紀頃という測定結果が得られた。年代測定を実施した木片はℓ1出土であり、遺構の埋没過程で流入したものと考えられる。以上のことから、本遺構は13世紀以前のものと考えられるが、具体的な時期や性格等は不明である。

(鶴 見)

4号土坑 SK 04 (図4、写真5)

本遺構は、I区中央付近のL3グリッドに位置する土坑である。検出面はLIIIa上面で、重複する遺構はない。

表土除去の段階で遺構の西部を誤って掘削してしまっているが、本来は楕円形を呈する土坑と推定される。残存している箇所での計測値は、東西73cm、南北74cm、検出面からの深さは24cmである。遺構の断面形は播鉢形で、底面は僅かだがレンズ状に窪んでいる。

堆積土は2層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。

本遺構からは、ℓ1より土器器壺の破片が5点出土した。いずれも細片のため図示できなかつたが、クロ成形で、平安時代でも概ね9世紀頃のものと考えられる。また、ℓ1からは炭化物が出土した。炭化物は、放射性炭素年代測定を実施し、曆年較正年代で1182calAD - 1217calAD (56.8%)という結果が出ている(付編参照)。

本遺構では、炭化物の放射性炭素年代測定では、12世紀末から13世紀初頭という測定結果が得られた。これに対し、出土した土器は、9世紀頃のもので、放射性炭素年代測定の時期と齟齬をきたすことから、遺構の時期を示すものではないと考えられる。以上のことから、本遺構は13世紀以前のものと考えられるが、具体的な時期や性格等は不明である。

(鶴 見)

第3節 溝跡

溝跡は2条検出した。いずれも平安時代以降と考えられるが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

1号溝跡 SD 01 (図5、写真6)

本遺構は、II区北部のA9・10、B9・10グリッドにかけて検出した溝跡である。検出面はLIIIb上面である。北端と中央部付近では流路跡と、南端では1号特殊遺構と重複している。流路跡

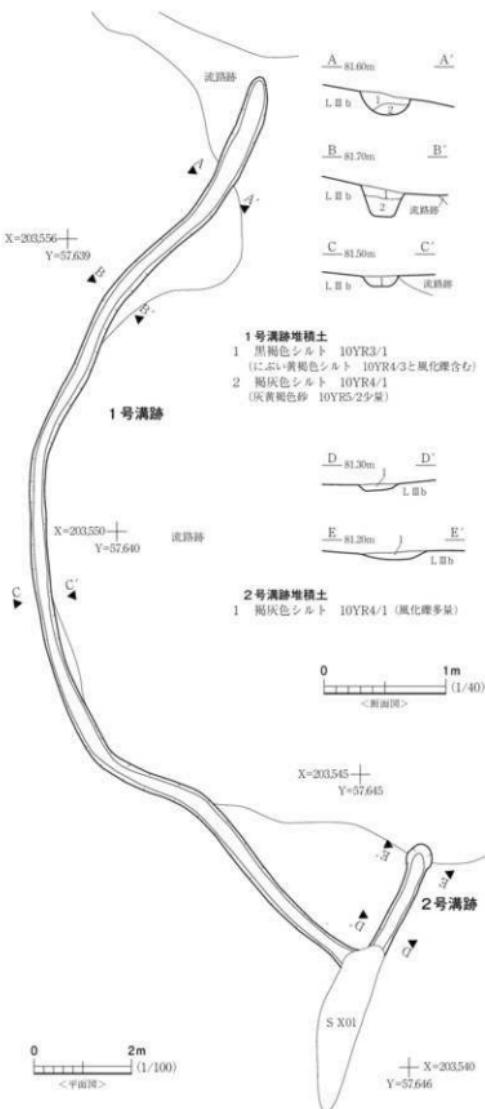


図5 1・2号溝跡

との新旧関係は、検出面及び断面で確認した結果、本遺構の方が新しいと判断した。一方、1号特殊遺構は、検出面では新旧関係は判然としなかったが、断面で検討した結果、本遺構より後につくられたと考えて記録を作成した。ただ、本遺構と1号特殊遺構の堆積土は近似していることや、後述する遺構の分布状況から同時期に機能していた可能性がある。

本遺構は、半月状に弧を描いた溝跡で、流路跡の外縁に沿うように確認されたが、1号特殊遺構と重複した箇所より先には延びていない。全長は22.3m、幅は30~52cmである。検出面からの深さは8~26cmで、南部が少し浅い。断面形はすり鉢形で、底面に凹凸はなく、平坦である。

堆積土は2層で、②はL IIに近似した褐灰色シルトである。いずれも自然堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平安時代以前には大半が埋没していたと考えられる流路跡より後につくられた溝跡である。したがって、本遺構の年代は平安時代以降と判断される。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する1号特殊遺

構より先には延びないこと、隣接する2号溝跡も本遺構と同様の状況を示すことから、1号特殊遺構・2号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。

(鶴 見)

2号溝跡 S D 02 (図5、写真6)

本遺構は、II区中央部のB 10グリッドで検出した溝跡である。検出面はL III b上面である。北端部では流路跡、南端部では1号特殊遺構と重複している。流路跡との新旧関係は、検出面及び断面で確認した結果、本遺構の方が新しいと判断した。一方、1号特殊遺構は、検出面では新旧関係は判然としなかったが、断面で検討した結果、本遺構より後につくられたと考えて記録を作成した。ただ、本遺構と1号特殊遺構の堆積土は近似していることや、本遺構が1号特殊遺構に接続することから同時期に機能していた可能性がある。

本遺構は、直線的な溝跡で、1号特殊遺構と重複した箇所より先には延びていない。全長は228cm、幅は35~51cmである。検出面からの深さは6cm前後で、非常に浅い。

堆積土は、L IIに近似した褐灰色シルトの単層である。自然堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、流路跡の大半が埋没した後につくられた溝跡であり、1号溝跡と同様に平安時代以降の所産と考えられる。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する1号特殊遺構より先には延びないこと、隣接する1号溝跡も本遺構と同様の状況を示すことから、1号特殊遺構・1号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。

(鶴 見)

第4節 特 殊 遺 構

1号特殊遺構 S X 01 (図6、写真6)

本遺構は、II区中央付近のB 10・11グリッドにかけて位置し、検出面はL III b上面である。浅く掘り窪められた土坑状を呈するが、北端部で重複する1・2号溝跡との関連が想定され、単独の土坑とは異なる性格をもつ可能性が高いと判断して特殊遺構とした。

平面形は、長軸3.56m、短軸40~88cmの南北方向に細長い不整椭円形を呈し、主軸方向はN 20° Eである。北西方向から延びる1号溝跡と北東方向から延びる2号溝跡が交わる位置に北端部が重なり、両溝跡よりも深く掘り込まれている。検出面からの深さは、北端部がやや深くなるものの最深部で14cm程度であり、全体的に浅く緩やかな掘り込みとなっている。遺構検出作業の段階では、流路跡に接続する1・2号溝跡の中継地点にあって水位を調節する堰跡、あるいは何らかの水場遺構などの可能性を考えたが、杭や木組み等の導水・止水にかかるような特別な構造は認められなかった。

堆積土は3層に分層した。 ℓ 1は黒褐色粘土質シルトで、1号溝跡の ℓ 1に近似する。 ℓ 2は南東壁に認められるにぶい黄褐色シルトで、壁の崩落土と考えられる。 ℓ 3は褐灰色シルトで、1号

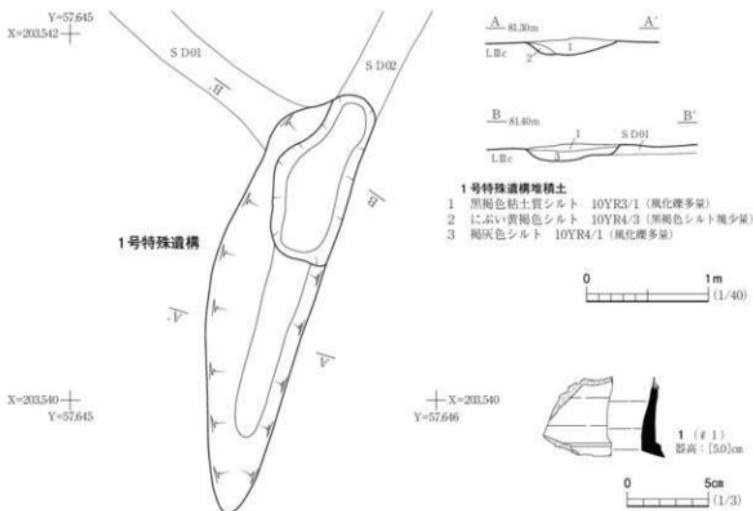


図6 1号特殊遺構・出土遺物

溝跡のℓ 2及び2号溝跡のℓ 1に近似する。

遺物は1点出土した。図6-1は、須恵器長頸瓶である。頭部の破片で、リング状の突帯が認められる。

本遺構は、1・2号溝跡との重複関係から、平安時代以降の所産と考えられる。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する1・2号溝跡はいずれも本遺構より先には延びないことから、1・2号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。

(草野)

第5節 流路跡

流路跡はII区で2箇所確認されたが、それらは調査区外でつながる同一のものとみられる。流路として機能していた時期は不明であるが、出土遺物から埋没時期は平安時代以前と考えられる。

流路跡(図7・8)

流路跡は、II区のA 8~10、B 8~12、C 11・12グリッドにかけて確認した。検出面はL III b上面である。底面に凹凸が多く見られ、底面上には砂礫層が厚く堆積することから、自然の流路跡と判断した。調査区内の地形は、北西隅で標高約82.0mを測り、そこから南東隅にかけて緩やかに傾斜し、調査区北端部と南端部との比高は約1.5mである。検出された流路跡も、大きく蛇行しながら地形が傾斜する南方向へと流れているものと考えられる。なお、同じII区から検出された1・

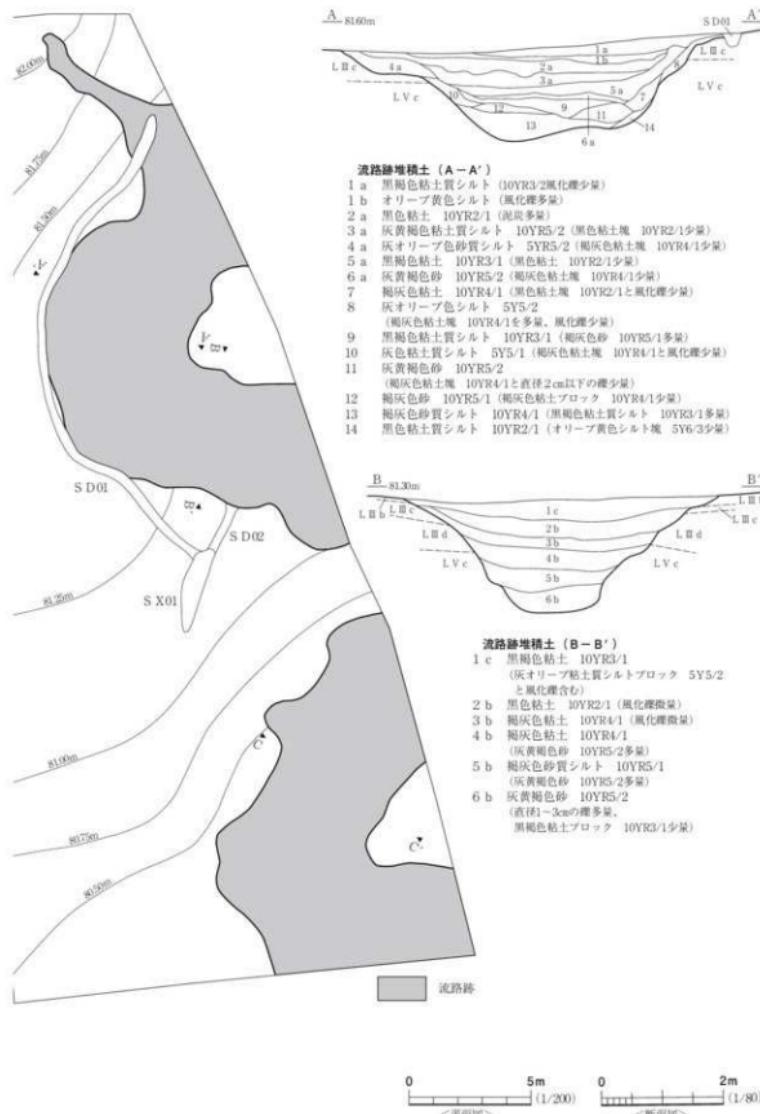


図7 流路跡（1）

2号溝跡と重複し、これらの遺構よりも古い。

流路跡の堆積状況は、土層断面図A-A'・B-B'・C-C'の計3箇所で確認した。堆積土は総じてレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。14層に分層したが、土層観察箇所により色調や含有物が異なるため、必要に応じて細分した。

ℓ 1は黒褐色粘土質シルトを基調とした層である。流路跡から確認された遺物の大半は、ℓ 1からの出土である。ℓ 2は黒色粘土を基調とした層で、ℓ 2a～2dに細分した。このうち、ℓ 2aには層中に泥炭を多く含んでいる。ℓ 6は流路内を流れてきた土砂が堆積したものと考えられ、土層断面図B-B'・C-C'地点では灰黄褐色砂層ないし灰色砂層が最下層に厚く堆積している。一方、土層断面図A-A'地点では、ℓ 6の堆積は薄いが、これより下層のℓ 11・12や底面上に厚く堆積するℓ 13は、ℓ 6と同様、水流による土砂の堆積と考えられる。流路跡の側壁に認められるℓ 7・8・10は、流路の上端付近の崩落土とみられる。

流路跡は、Ⅱ区北部と南部でそれぞれ半円を描くように蛇行して調査区外へと延びている。これらの流路跡は、調査区内でつながる状況が確認できなかったため、厳密には同一のものとは断定できないが、堆積土の状況が近似することから一連のものと推測される。

流路跡の規模は、検出された範囲で全長約33m、幅約5～6mである。検出面からの深さは、

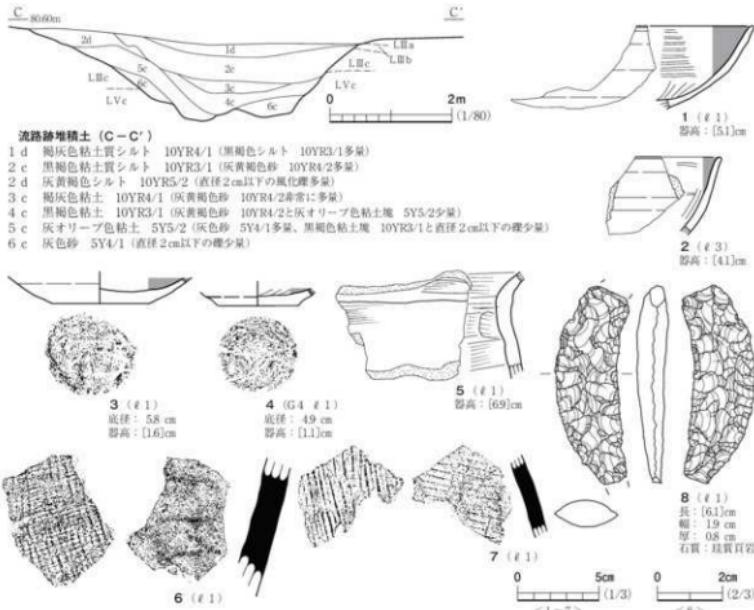


図8 流路跡(2)・出土遺物

土層断面図B-B'地点では最深1.9mを測るが、土層断面図A-A'及びC-C'地点では1.5m程度である。断面は逆台形状で、底面は水流によって抉られたとみられる凹凸が認められる。また、流路跡の北端部分では、幅約1.5mの支流が北西方向から6mほど流れ込んでいる。

遺 物 (図8、写真7)

遺物は、土師器杯を中心とする44点が出土した。そのうち、8点を図示した。

図8-1～4はロクロ成形の土師器杯で、内面黒色処理が施されている。1・2は口縁部片、3・4は底部片である。3・4の底部切り離しは回転糸切りで、ヘラケズリ等の調整は施されていない。

図8-5は非ロクロ成形の土師器壺で、頸部付近の破片である。内外面ともに調整は横ナデで、内面には粘土紐の積み上げ痕が残る。

図8-6・7は須恵器壺の胴部片である。6は外面に格子状のタタキ目、内面の當て具痕は無文、7は外面に平行タタキ目、内面の當て具痕は長方形格子状文が観察される。

図8-8は両面を丁寧に加工した石匙である。摘み部と先端部が欠けている。

ま と め

流路跡からの出土遺物は大半が最上層からの出土で、中層から下層では認められなかった。そのため、流路跡として機能していた時期は不明であるが、平安時代以前には大半が埋没して浅く埋もれただ状態となっていたものと推察される。
(廣川)

第6節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土師器4点、須恵器6点で、いずれも平安時代のものである。そのうち3点を図示した。

図9-1は土師器杯で、破片から復元している。ロクロ成形のもので、内面黒色処理がされている。図9-2・3は須恵器壺である。2点とも外面にタタキ目が観察され、2は平行タタキ目、3は格子状のタタキ目である。また、2・3とも内面の當て具痕はナデ調整により不明瞭だが、無文とみられる。
(草野)

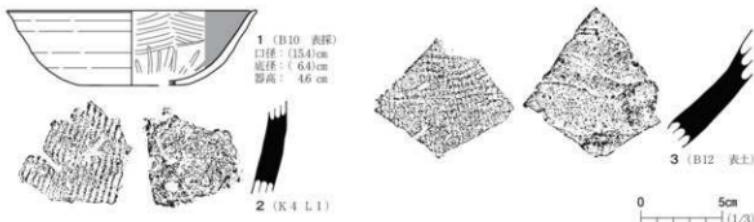


図9 遺構外出土遺物

第3章 総括

今回の調査では、土坑4基、溝跡2条、特殊遺構1基、流路跡1条を検出した。それらの時期は、概ね縄文時代、平安時代以降、中世以前のものと考えられる。

縄文時代の遺構は土坑2基である。いずれも落し穴とみられ、遺存状態の良い2号土坑は長軸約140cm、短軸約70cm、深さ約90cmを測る。日照田遺跡(本書第3編)からも落し穴が9基確認され、この付近一帯が狩り場であったようである。

平安時代以降と考えられる遺構は、溝跡2条、特殊遺構1基である。1号特殊遺構は1・2号溝跡を繋ぐ位置にあり、これらは一連の遺構であったと考えられる。また、1号溝跡が流路跡の外縁沿いに位置し、2号溝跡の北端部分が流路跡内に延びていることから、埋没して浅く窪んだ状態となった流路跡との関連性も想定される。これらの遺構の詳細な時期は、出土遺物がなく不明だが、流路跡の最上層から出土した土器の時期に近い可能性もある。なお、今回の調査区から出土した平安時代の遺物は僅かだったため、平安時代の集落の中心は隣接する日照田遺跡側にあったと推測される。また、この付近の当該期の調査事例としては、館ノ前遺跡の北側丘陵地に立地する松原館跡から平安時代の堅穴住居跡1軒が検出されている。よって、流路跡の遺物の供給源が館ノ前遺跡より北側にあった可能性も皆無ではない。

中世以前と考えられる遺構は、土坑2基である。いずれも小規模の土坑で、具体的な性格等は不明である。なお、館ノ前遺跡の名称が示す通り、調査箇所の小字名は「館ノ前」である。このことから、館跡に関連した遺構の存在も想定されたが、今回の調査区では確認されなかった。松原館跡が機能していた段階には、本遺跡内において目立った活動痕跡は残されず、その後、「館ノ前」という地名だけが現代まで受け継がれたようである。

(廣川)

引用・参考文献

桑折町教育委員会 2003 『松原館跡発掘調査報告書』 桑折町埋蔵文化財調査報告書 16

付 編 自然科学分析

第1章 日照田遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社 加速器分析研究所

第1節 樹種同定

1. 試 料

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。建物跡や流路跡等の遺構から出土した炭化材 FB-HDD-04 と杭や柱材などの木材 FB-HDD-03, 05 ~ 11 の合計 9 点を対象に樹種同定を行った。FB-HDD-05 が繩文時代、FB-HDD-03, 04, 10, 11 が平安時代、FB-HDD-06 ~ 09 が中世の遺構から出土したとされている。

なお、これら 9 点を含む 11 点の試料について放射性炭素年代測定が実施されている FB-HDD-06 ~ 11 はおおむね推定に近い値となったが、FB-HDD-03 は推定より古く、FB-HDD-04, 05 は新しい結果となった(別稿年代測定報告参照)。

2. 分析方法

炭化材は乾燥させた後、ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の断面を割り出し、粘土でプレパラートに固定して、反射光式顕微鏡で観察、現生標本の形態に基づいて同定した。

木片は、ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、ガムクロラールにてプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察、現生標本の形態に基づいて同定した。

3. 結 果

同定結果を表 1 に示す。炭化材はタケ亜科、木材はニレ属、ケンボナシ属、クリ、針葉樹、カエデ属に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・針葉樹

横断面では仮道管が規則的に並んでおり、晚材部

付近で径が小さくなっているのが確認できる。細胞内に菌類の胞子が多量に確認され、風化が進んでいることがわかる。放射断面では分野壁孔を確認できず、針葉樹と同定するにとどめた。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

年輪ははじめにやや大きな道管が数列配列し、徐々に径を減じてやや角ばった小さい管孔が波状に配列する環孔材。放射細胞は単列で同性である。

・ニレ属 (*Ulmus*)

年輪ははじめに大きな道管が数列配列し、その後径が急減して小さい管孔が接線方向や斜めに比較的規則的に集合して配列する環孔材。小道管内にはらせん肥厚があり、道管は單穿孔である。放射組織は 1 ~ 7 細胞幅程度で、すべて平伏細胞からなる同性である。

・カエデ属 (*Acer*)

中程度の管孔が年輪内にほぼ均等に散在する散孔材。道管は單穿孔、道管内にらせん肥厚がある。放射組織は同性で 1 ~ 8 細胞幅である。

・ケンボナシ属 (*Hovenia*)

年輪ははじめに大きな道管が 1 ~ 数列配列し、径が急減して、厚壁の小道管が単独ないし数個放射方向に複合してまばらに分布する環孔材。道管は單穿孔である。放射組織は、平伏と直立と方形の異性で、1 ~ 3 細胞幅で背が低い。道管・放射組織間壁孔は細かい。

・タケ亜科 (*Bambooosideae*)

横断面で確認できる維管束は、向軸側の原生木部腔と真ん中にある一对の後生木部道管、背軸側の師部からなり、その外側を纖維組織が取り囲んでいる。

表1 日照田遺跡出土炭化材・木材の樹種

試料番号	遺構・層位	種類	樹種
FB-HDD-03	S X 03 ℰ 2	杭	ニレ属
FB-HDD-04	F 2 P 3 ℰ 1	炭化材	タケ亜科
FB-HDD-05	S K 12 底面	木材	ケンボナシ属
FB-HDD-06	S B 1 - P 1 ℰ 1	柱材	クリ
FB-HDD-07	S B 1 - P 2 ℰ 1	柱材	針葉樹
FB-HDD-08	S B 1 - P 3 ℰ 1	柱材	クリ
FB-HDD-09	G 1 P 21 ℰ 1	柱材	クリ
FB-HDD-10	流路跡 杭列 No. 1	角材	カエデ属
FB-HDD-11	流路跡 杭列 No. 2	角材	カエデ属

4 考 察

杭 FB-HDD-03 はニレ属で、東北地方では比較的入手が容易な樹種であるため、土木材に利用される。木材 FB-HDD-05 はケンボナシ属で、東北地方の山地に広く分布している広葉樹である。加工材としての出土数は少ないが、東北地方を中心柱、杭などに利用される例がある。柱材 FB-HDD-06～09 は、クリが 3 点と針葉樹である。クリは耐久性が優れていることから建築土木用材として優先的に利用されているため、各時期を通して出土例が多い。東北ではとくに縄文時代以降土木建築材として

近世まで多用されており、本遺跡の出土例もこの傾向に調和的であると言える。角材 FB-HDD-10、11 はいずれもカエデ属である。耐久性がよいわけではないが、山地に多く分布することから入手が容易で利用したと考えられる(伊東ほか 2012)。

文 献

伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社.

※) 本分析は古代の森研究会の協力を得て行った。

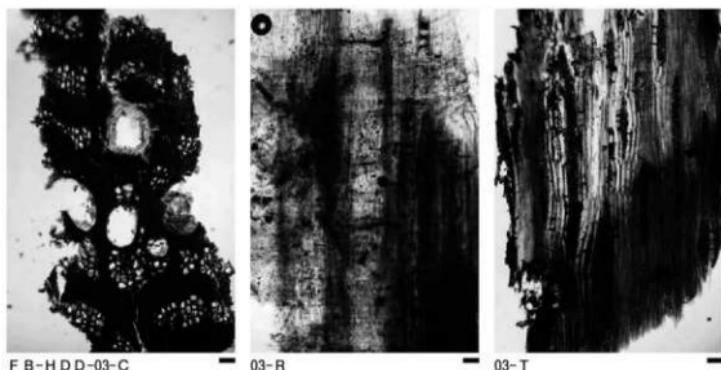


図1 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接触断面 スケール: 0.1mm

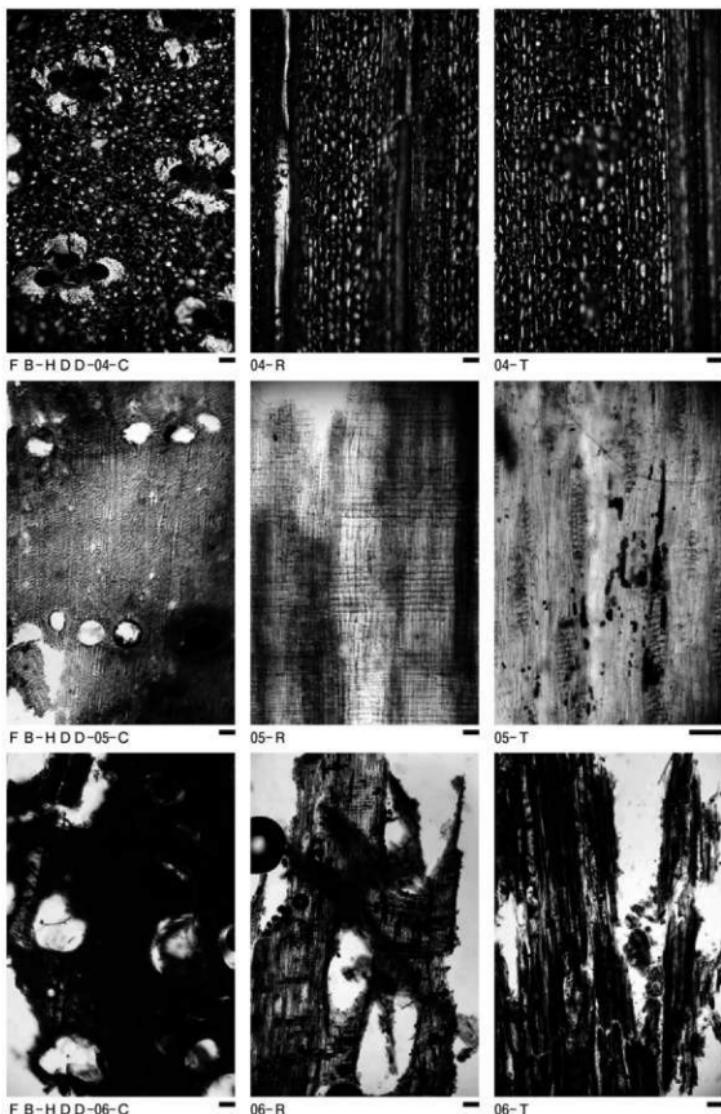


図2 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接触断面 スケール: 0.1mm

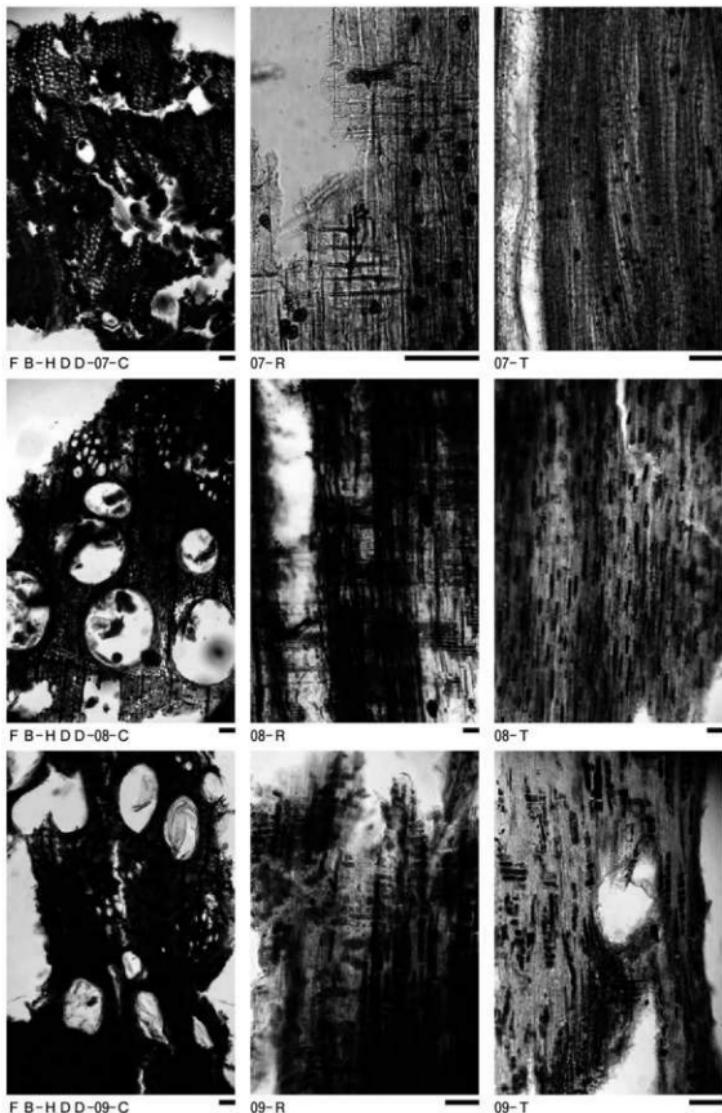


図3 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接触断面 スケール: 0.1mm

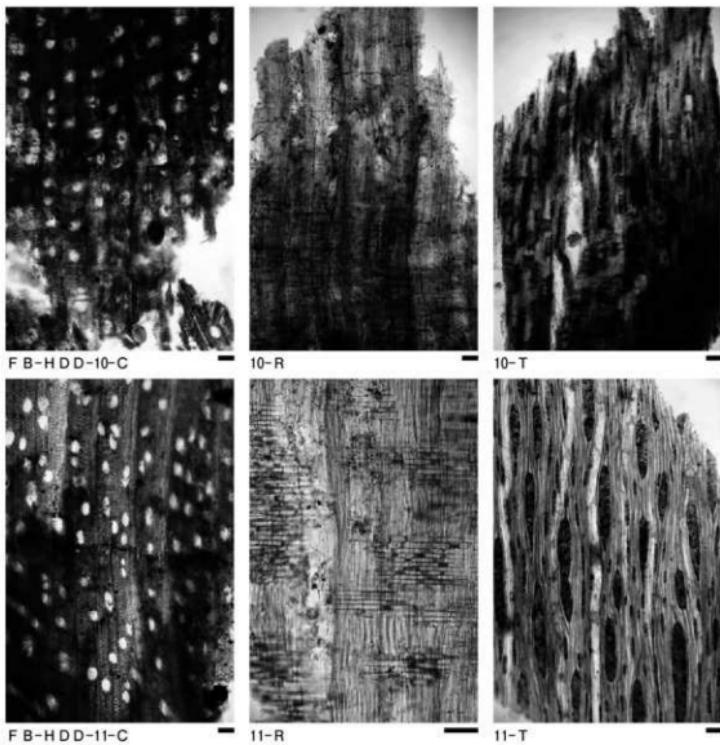


図4 日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)

C:横断面 R:放射断面 T:接觸断面 スケール:0.1mm

第2節 放射性炭素年代 (AMS測定)

1 測定対象試料

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化材、杭、木材、角材の合計11点である(表1)。なお、試料FB-HDD-03～11については樹種同定が行われている(別稿樹種同定報告参照)。

試料の時期は、古い方から順にFB-HDD-05が縄文時代、FB-HDD-01～04、10、11が平安時代、FB-HDD-06～09が中世と考えられている。なお、FB-HDD-05の測定結果は、後述するように縄文時代より大幅に新しく、4世紀を主とする年代値を示した。

2 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過

去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、δ¹⁴C補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

繩文時代とされる木材FB-HDD-05の¹⁴C年代は 1680 ± 20 yrBP、曆年較正年代(1σ)は $345 \sim 396$ cal ADの範囲となり、推定より大幅に新しい。平安時代とされる試料FB-HDD-01～04、10、11の¹⁴C年代は、 1410 ± 20 yrBP(杭FB-HDD-03)から 710 ± 20 yrBP(炭化材FB-HDD-04)の間にある。曆年較正年代(1σ)は、最も古いFB-HDD-03が $622 \sim 655$ cal ADの範囲、最も新しいFB-HDD-04が $1271 \sim 1289$ cal ADの範囲で示される。炭化材FB-HDD-02、角材FB-HDD-10、11は推定に一致し、炭化材FB-HDD-01は確率の低い範囲を含めて 2σ 曆年代範囲で見ると推定と重なる部分があ

る。FB-HDD-03は推定より明らかに古く、FB-HDD-04は新しい結果となっている。

中世とされる柱材FB-HDD-06～09の¹⁴C年代は、 960 ± 20 yrBP(FB-HDD-09)から 890 ± 20 yrBP(FB-HDD-06)の間にまとまる。曆年較正年代(1σ)は、最も古いFB-HDD-09が $1027 \sim 1149$ cal ADの間に3つの範囲、最も新しいFB-HDD-06が $1050 \sim 1188$ cal ADの間に3つの範囲で示される。推定におおむね近いか、やや古い年代値を見られる。FB-HDD-06～08は同じ建物跡に属し、年代値もおおむねまとまっている。

これら11点の試料はいずれも木材であるため、年代値の評価に当たっては次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、これらの木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は48%(柱材FB-HDD-06)～72%(炭化材FB-HDD-01)のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文 献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), 337–360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55(4), 1869–1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19(3), 355–363

表2 放射性炭素年代測定結果(1) ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-171929	FB-HDD-01	S X 01	ℓ 1	炭化材	AAA	-25.06 ± 0.22	1250 ± 20	85.62 ± 0.23
IAAA-171930	FB-HDD-02	S X 02	ℓ 1	炭化材	AAA	-27.87 ± 0.20	1220 ± 20	85.90 ± 0.24
IAAA-171931	FB-HDD-03	S X 03	ℓ 2	杭	AaA	-25.97 ± 0.19	1410 ± 20	83.92 ± 0.24
IAAA-171932	FB-HDD-04	F 2 P 3	ℓ 1	炭化材	AAA	-28.32 ± 0.23	710 ± 20	91.50 ± 0.26
IAAA-171933	FB-HDD-05	S K 12	底面	木材	AAA	-29.75 ± 0.21	1680 ± 20	81.12 ± 0.24
IAAA-171934	FB-HDD-06	S B 1 - P 1	ℓ 1	柱材	AAA	-23.78 ± 0.23	890 ± 20	89.47 ± 0.25
IAAA-171935	FB-HDD-07	S B 1 - P 2	ℓ 1	柱材	AAA	-25.57 ± 0.21	940 ± 20	88.93 ± 0.24
IAAA-171936	FB-HDD-08	S B 1 - P 3	ℓ 1	柱材	AAA	-26.51 ± 0.20	910 ± 20	89.33 ± 0.25
IAAA-171937	FB-HDD-09	G 1 P 21	ℓ 1	柱材	AAA	-26.25 ± 0.19	960 ± 20	88.77 ± 0.26
IAAA-171938	FB-HDD-10	波路路	杭列 No.1	角材	AAA	-24.93 ± 0.23	1120 ± 20	86.97 ± 0.24
IAAA-171939	FB-HDD-11	波路路	杭列 No.2	角材	AAA	-27.45 ± 0.26	1160 ± 20	86.57 ± 0.24

[IAA 登録番号 : #8965]

表3 放射性炭素年代測定結果(2) ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171929	1,250 ± 20	85.61 ± 0.23	1,247 ± 21	694 cal AD - 746 cal AD (57.2%) 763 cal AD - 773 cal AD (11.0%)	681 cal AD - 779 cal AD (83.1%) 791 cal AD - 830 cal AD (7.1%) 837 cal AD - 865 cal AD (5.2%)
IAAA-171930	1,270 ± 20	85.39 ± 0.24	1,220 ± 22	728 cal AD - 737 cal AD (6.4%) 769 cal AD - 779 cal AD (9.2%) 790 cal AD - 829 cal AD (30.5%) 838 cal AD - 866 cal AD (22.1%)	711 cal AD - 745 cal AD (15.3%) 764 cal AD - 886 cal AD (80.1%)
IAAA-171931	1,420 ± 20	83.75 ± 0.24	1,407 ± 23	622 cal AD - 655 cal AD (68.2%)	605 cal AD - 661 cal AD (95.4%)
IAAA-171932	770 ± 20	90.87 ± 0.26	713 ± 23	1,271 cal AD - 1,289 cal AD (68.2%)	1,261 cal AD - 1,299 cal AD (93.2%) 1,371 cal AD - 1,379 cal AD (2.2%)
IAAA-171933	1,760 ± 20	80.33 ± 0.23	1,680 ± 23	345calAD - 396calAD (68.2%)	263 cal AD - 276 cal AD (4.3%) 329 cal AD - 415 cal AD (91.1%)
IAAA-171934	870 ± 20	89.69 ± 0.25	893 ± 22	1,050 cal AD - 1,083 cal AD (29.9%) 1,126 cal AD - 1,136 cal AD (5.9%) 1,151 cal AD - 1,188 cal AD (32.3%)	1,044 cal AD - 1,100 cal AD (38.2%) 1,118 cal AD - 1,213 cal AD (57.2%)
IAAA-171935	950 ± 20	88.82 ± 0.24	942 ± 22	1,035 cal AD - 1,050 cal AD (13.9%) 1,083 cal AD - 1,126 cal AD (40.4%) 1,136 cal AD - 1,151 cal AD (13.8%)	1,029 cal AD - 1,155 cal AD (95.4%)
IAAA-171936	930 ± 20	89.05 ± 0.24	906 ± 22	1,046 cal AD - 1,091 cal AD (40.5%) 1,121 cal AD - 1,140 cal AD (13.9%) 1,148 cal AD - 1,164 cal AD (13.8%)	1,039 cal AD - 1,188 cal AD (95.4%)
IAAA-171937	980 ± 20	88.54 ± 0.26	956 ± 23	1,027 cal AD - 1,048 cal AD (21.5%) 1,087 cal AD - 1,123 cal AD (36.3%) 1,138 cal AD - 1,149 cal AD (10.4%)	1,022calAD - 1,059calAD (29.0%) 1,065calAD - 1,155calAD (66.4%)
IAAA-171938	1,120 ± 20	86.98 ± 0.24	1,121 ± 22	894 cal AD - 906 cal AD (14.0%) 915 cal AD - 931 cal AD (18.1%) 938 cal AD - 968 cal AD (36.0%)	885 cal AD - 985 cal AD (95.4%)
IAAA-171939	1,200 ± 20	86.14 ± 0.23	1,158 ± 22	778 cal AD - 791 cal AD (9.8%) 809 cal AD - 813 cal AD (2.2%) 835 cal AD - 841 cal AD (8.0%) 863 cal AD - 899 cal AD (30.7%) 924 cal AD - 946 cal AD (17.5%)	776 cal AD - 904 cal AD (70.8%) 918 cal AD - 965 cal AD (24.6%)

[参考値]

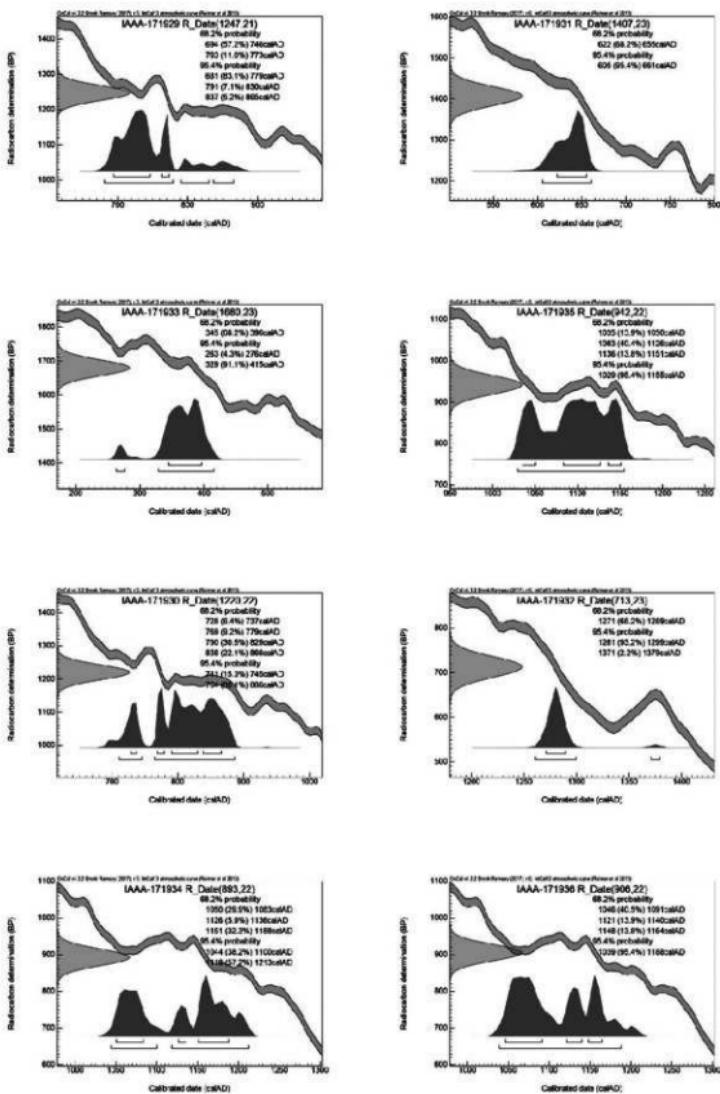


図5 暦年較正年代グラフ(1)

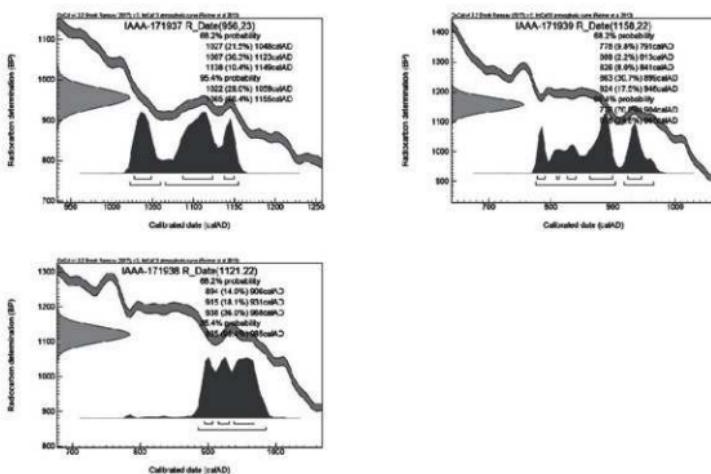


図6 暴年較正年代グラフ(2)

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

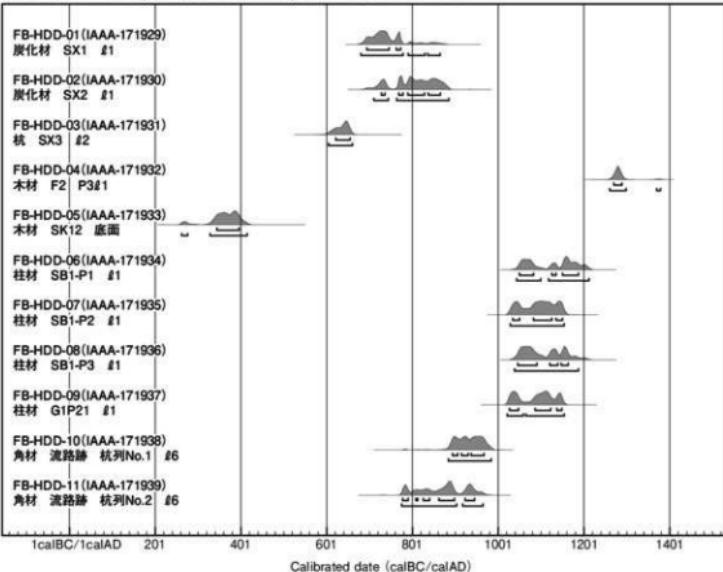


図7 暴年較正年代グラフ(マルチプロット図、参考)

第2章 館ノ前遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社 加速器分析研究所

第1節 樹種同定

1 試 料

館ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字館ノ前に所在する。本分析では平安時代とされる遺構から出土した木材FB-TNM-01の同定を行った。

なお、この同一試料を含む2点の試料について放射性炭素年代測定が実施され、FB-TNM-01はおおむね推定に近いか、若干新しい年代値が示されている（別稿年代測定報告参照）。

2 分析方法

本片からステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、ガムクロラールにてプレパラートを作成、生物顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づいて同定を行った。

3 結 果

同定結果を表1に示す。試料はクリまたはコナラ属コナラ節に同定された。以下に同定の根拠を示す。

- ・クリまたはコナラ属コナラ節 (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. or *Quercus sect. Prinns*)

出土材は年輪はじめにやや大きな道管が数列配列し、徐々に径を減じて、やや角ばった小さい管孔が波状に配列する環孔材。放射細胞は単列で同性である。横断面においてクリもしくはコナラ属コナラ節の特徴を示す。しかし、試料の本片がかなり小さく、年輪界に直交する幅が狭いため、両者を識別する際に着目する放射組織の特徴を確認できないことから、クリまたはコナラ節と同定した。

4 考 察

クリやコナラ属コナラ節は、東北地方の古代においては建築土木用材として優先的に利用されているため出土例が多い（伊東ほか2012）。本遺跡の出土例もこの傾向に調和的であると言える。

文 献

伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社.

※)本分析は古代の森研究室の協力を得て行った。

表4 館ノ前遺跡出土木材の樹種

試料番号	遺構	層位	種類	樹種
FB-TNM-01	SK 03	⑥ 1	木材	クリまたはコナラ属コナラ節

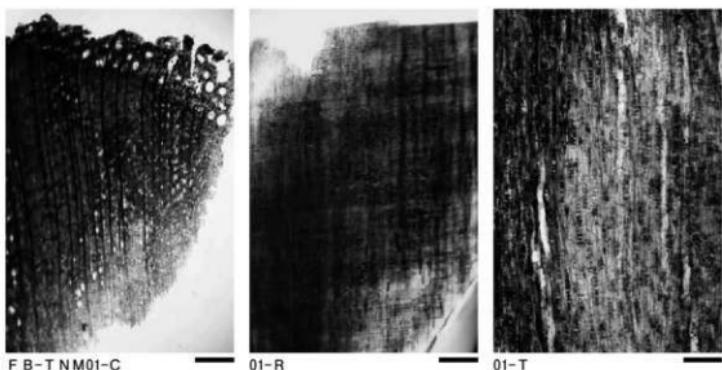


図8 館ノ前遺跡出土木材の顕微鏡写真

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接縫断面 スケール: 0.1mm

第2節 放射性炭素年代(AMS測定)

1 測定対象試料

館ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字館ノ前に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した木材と炭化材(枝)の合計2点である(表1)。なお、木材FB-TNM-01については樹種同定が行われている(別稿樹種同定報告参照)。

木材FB-TNM-01の時期は平安時代とされる。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l(1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、

1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種

類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、木材 FB-TNM-01が 830 ± 20 yrBP、炭化材 FB-TNM-02が 850 ± 20 yrBPである。历年較正年代(1σ)は、FB-TNM-01が $1293 \sim 1255$ cal AD、FB-TNM-02が $1170 \sim 1217$ cal AD の間に各々2つの範囲で示される。FB-TNM-01は推定におおむね近いか、若干新しい値となっている。

試料の炭素含有率は、FB-TNM-01が59%、FB-TNM-02が71%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文 献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表5 放射性炭素年代測定結果(1) ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-171940	FB-TNM-01	SK 03 #1	木材	AAA	-26.88 ± 0.24	830 ± 20	90.23 ± 0.25
IAAA-171941	FB-TNM-02	SK 04 #1	炭化材(枝)	AAA	-25.00 ± 0.25	850 ± 20	89.95 ± 0.24

[IAA登録番号:#8866]

表6 放射性炭素年代測定結果(2) ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年年代範囲		2 σ 曆年年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-171940	860 ± 20	89.87 ± 0.25	826 ± 22	1193 cal AD - 1197 cal AD (4.0%) 1205 cal AD - 1255 cal AD (64.2%)		1169 cal AD - 1259 cal AD (95.4%)	
IAAA-171941	850 ± 20	89.94 ± 0.23	850 ± 21	1170 cal AD - 1176 cal AD (9.6%) 1182 cal AD - 1217 cal AD (58.6%)		1158 cal AD - 1249 cal AD (95.4%)	

[参考値]

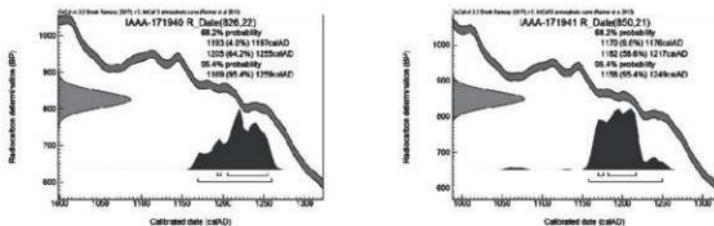


図9 曆年較正年代グラフ(参考)

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

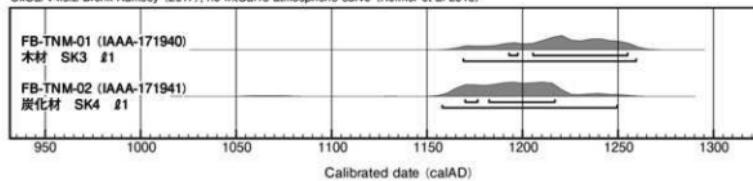


図10 曆年較正年代グラフ(マルチプロット図、参考)